# 京都府遺跡調査報告書

## 第 31 冊

佐山尼垣外遺跡

2001

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

# 巻頭図版

(1)遺跡遠景(南南西から)

(2)調査地A地区全景(南から)

# 序

久世郡久御山町大字佐山小字尼垣外に所在する、佐山尼垣外遺跡に関する報告書を『京都府遺跡調査報告書』第31冊として、ここに刊行いたします。

佐山尼垣外遺跡は、国土交通省近畿地方整備局(旧建設省近畿地方建設局)が建設を進めている第二京阪道路および京都南道路に係わり、同局の依頼により(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施したものであります。

当該道路の建設に伴っては、佐山尼垣外遺跡のほか、市田斉当坊遺跡・佐山遺跡の3遺跡の発掘調査を実施いたしました。これらの遺跡の調査概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』に掲載してきたところであります。

本書は、現地調査後の整理作業が完了した佐山尼垣外遺跡について、概要報告書で果たせなかった詳細な事実の報告を行ったものであり、これをもって記録保存の責務を果たしたものと考えます。

刊行にあたりましては、国土交通省および日本道路公団には現地での発掘調査の実施から本書の刊行に至るまで、多大のご理解とご協力を賜わりました。また、京都府教育委員会・久御山町教育委員会をはじめ、関係各方面から、有益なご指導ならびに助言を頂くことができました。この場を借りまして厚く御礼申し上げる次第であります。

最後に、この仕事にかかわった担当職員諸君の労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の考古学研究の進展に寄与することを、心から願ってやみません。

平成13年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　樋　口　隆　康

# 例　　言

1．本書は、久世郡久御山町佐山尼垣外に所在する佐山尼垣外遺跡の報告書である。

2．本報告書は、国土交通省と日本道路公団が進めている国道１号京都南道路および第二京阪道路建設に先立ち、国土交通省の依頼を受けて実施した。調査は、平成11年６月21日から平成12年３月３日まで行った。

3．現地調査および本報告にかかる諸経費は、全額国土交通省が負担した。

4．本書に掲載した遺構図は、第６座標系を用い、方位は全て座標北をさす。

5．写真撮影は、遺構を調査担当者が、遺物を調査第１課資料係主任調査員田中彰が行った。

6．本書の執筆分担は、次のとおりである。

辻本和美----------第１章

中村周平----------第２章、第３章第１節（２）、第４章第１節

柴　暁彦----------第３章第１節（１）・（３）、第３章第２～４節、第４章第２節

竹原一彦----------第４章第１節

7．本報告書の作成は、各現地担当者の協力のもとに、調査第２課第３係長辻本和美、同主任調査員竹原一彦、同調査員中村周平が行い、編集は調査第１課資料係調査員森島康雄が行った。

8．本書に掲載した遺物・写真・図面などは当分の間、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが保管している。

# 本 文 目 次

第１章　調査の経緯----------1
第１節　調査の経過----------1
第２節　調査体制----------3
第３節　遺跡の環境----------3
第２章　検出遺構----------6
第１節　層位と遺構----------6
第２節　縄文時代----------7
第３節　弥生時代----------8
(1)竪穴式住居跡----------8
(2)方形周溝墓----------9
(3)溝----------13
(4)土坑----------14
第４節　平安時代----------16
(1)溝----------16
(2)土坑----------17
第５節　鎌倉・室町時代----------17
(1)東西溝群----------17
(2)南北溝群----------19
(3)畝溝----------20
(4)道路状遺構----------20
(5)池状遺構----------21
第３章　出土遺物----------24
第１節　土器----------24
(1)縄文時代----------24
(2)弥生時代----------29
(3)奈良～室町時代----------33
第２節　土製品----------34
第３節　石器・石製品----------35
第４節　包含層出土の遺物----------35
第４章　まとめ----------38
第１節　遺構の変遷----------38

第２節　縄文時代晩期中葉の土器をめぐって----------40
付編　自然科学的方法による分析結果----------57

# 挿図目次

第１図　調査地位置図----------1
第２図　周辺主要遺跡分布図----------4
第３図　縄文土器分類図----------25
第４図　絵画土器拓影----------31
第５図　土器実測図----------32
第６図　土製品実測図----------34
第７図　瓦類実測図----------36
第８図　層位別器種構成図----------41
第９図　波状口縁方形浅鉢成立模式図----------44
第10図　近畿地方突帯文浅鉢の時期細分図----------44

# 付表目次

付表１　調査体制一覧表----------3
付表２　器種別比率表----------40
付表３　縄文土器深鉢分類別比率表----------42
付表４　出土遺物観察表１（縄文土器）----------48
付表５　出土遺物観察表２（弥生土器）----------53
付表６　出土遺物観察表３（奈良～室町時代）----------55

# 図版目次


巻頭図版　(1)遺跡遠景(南南西から)　(2)調査地A地区全景(南から)

図版第1　縄文～古墳時代遺構平面図

図版第2　平安～室町時代遺構平面図

図版第3　溝ＳＤ229実測図

図版第4　溝ＳＤ229縄文土器出土状況図(1)

図版第5　溝ＳＤ229縄文土器出土状況図(2)

図版第6　竪穴式住居跡ＳＨ094・096実測図

図版第7　竪穴式住居跡ＳＨ095・113実測図

図版第8　方形周溝墓ＳＴ101実測図

図版第9　方形周溝墓ＳＴ102・114実測図

図版第10　方形周溝墓ＳＴ119・溝ＳＤ098実測図

図版第11　方形周溝墓ＳＴ119北溝遺物出土状況図

図版第12　方形周溝墓ＳＴ119東溝遺物出土状況図

図版第13　方形周溝墓ＳＴ119西溝遺物出土状況図

図版第14　方形周溝墓ＳＴ227実測図

図版第15　方形周溝墓ＳＴ227西溝遺物出土状況図

図版第16　方形周溝墓ＳＴ228実測図

図版第17　方形周溝墓ＳＴ236実測図

図版第18　方形周溝墓ＳＴ237実測図

図版第19　方形周溝墓ＳＴ238実測図

図版第20　溝ＳＤ099・115実測図

図版第21　土坑ＳＫ100・107・109・241実測図

図版第22　土坑ＳＫ239実測図

図版第23　調査地中央溝群実測図

図版第24　調査地北部溝群・坪境道実測図

図版第25　調査地西部坪境道平面図・同調査地西壁断面図

図版第26　道路状遺構・木組み遺構実測図

図版第27　池状遺構ＳＸ226実測図

図版第28　土器実測図(1)

図版第29　土器実測図(2)

図版第30　土器実測図(3)

図版第31　土器実測図(4)
図版第32　土器実測図(5)
図版第33　土器実測図(6)
図版第34　土器実測図(7)
図版第35　土器実測図(8)
図版第36　土器実測図(9)
図版第37　土器実測図(10)
図版第38　土器実測図(11)
図版第39　土器実測図(12)
図版第40　土器実測図(13)
図版第41　土器実測図(14)
図版第42　土器実測図(15)
図版第43　土器実測図(16)
図版第44　土器実測図(17)
図版第45　土器実測図(18)
図版第46　土器実測図(19)
図版第47　石器・石製品実測図
図版第48　出土遺物実測図
図版第49　(1)遺跡遠景(南から)　(2)遺跡遠景(北から)
(3)調査地調査前全景(北から)
図版第50　(1)A地区弥生～古墳時代遺構面(東から)
(2)B地区縄文時代晩期～弥生時代遺構面(西から)
(3)B地区南側縄文時代晩期～弥生時代遺構面(北から)
図版第51　A地区弥生～古墳時代遺構面(上が北)
図版第52　B地区縄文時代晩期～弥生時代遺構面(下が北)
図版第53　(1)溝SD229調査風景(西北から)　(2)溝SD229(東南から)
(3)溝SD229東南部(東北から)
図版第54　(1)溝SD229東南部土器出土状況1(東南から)
(2)溝SD229東南部土器出土状況2(西北から)
(3)溝SD229南部土層断面(北から)
図版第55　(1)溝SD229東南部土器出土状況1(東から)
(2)溝SD229東南部土器出土状況2(西から)
(3)溝SD229東南部土器出土状況3(東から)
図版第56　(1)溝SD229東端拡張部土器出土状況1(東から)
(2)溝SD229東端拡張部土器出土状況2(東北から)

(3)溝ＳＤ229東端拡張部土器出土状況３(東から)
図版第57　(1)竪穴式住居跡ＳＨ094～096(東北から)
(2)竪穴式住居跡ＳＨ094・095(西から)
(3)竪穴式住居跡ＳＨ095(東南から)
図版第58　(1)竪穴式住居跡ＳＨ095(西南から)　(2)竪穴式住居跡ＳＨ113(南から)
(3)竪穴式住居跡ＳＨ094土器出土状況(西から)
図版第59　(1)方形周溝墓ＳＴ119(東南から)
(2)方形周溝墓ＳＴ119北辺溝内絵画土器出土状況(南から)
(3)方形周溝墓ＳＴ119西辺溝内土器出土状況(西から)
図版第60　(1)方形周溝墓ＳＴ119東辺溝内土器出土状況１(北から)
(2)方形周溝墓ＳＴ119東辺溝内土器出土状況２(東から)
(3)方形周溝墓ＳＴ119東辺溝内土器出土状況３(東から)
図版第61　(1)方形周溝墓ＳＴ228(東南から)
(2)方形周溝墓ＳＴ228西辺溝埋土断面(西北から)
(3)方形周溝墓ＳＴ228東角拡張部溝内土器出土状況(西から)
図版第62　(1)方形周溝墓ＳＴ101(東から)　(2)方形周溝墓ＳＴ101(東南から)
(3)方形周溝墓ＳＴ101東北辺溝内土器出土状況１(東南から)
図版第63　(1)方形周溝墓ＳＴ101東北辺溝内土器出土状況２(東北から)
(2)方形周溝墓ＳＴ101東北辺溝内土器出土状況３(東北から)
(3)方形周溝墓ＳＴ101東北辺溝内土器出土状況４(東北から)
図版第64　(1)方形周溝墓ＳＴ114(東北から)
(2)方形周溝墓ＳＴ114東北辺溝内土坑ＳＫ01・02(北から)
(3)方形周溝墓ＳＴ114南辺溝埋土断面(d－d′)(西から)
図版第65　(1)方形周溝墓ＳＴ227(東から)
(2)方形周溝墓ＳＴ227西辺溝内土器出土状況１(北から)
(3)方形周溝墓ＳＴ227西辺溝内土器出土状況２(東から)
図版第66　(1)方形周溝墓ＳＴ227西辺溝内土器出土状況３(北から)
(2)方形周溝墓ＳＴ227南辺溝内土器出土状況１(西から)
(3)方形周溝墓ＳＴ227南辺溝内土器出土状況２(南から)
図版第67　(1)方形周溝墓ＳＴ227・土坑ＳＫ239(西から)
(2)土坑ＳＫ239(東北から)
(3)土坑ＳＫ239土器出土状況(東から)
図版第68　(1)方形周溝墓ＳＴ238(東北から)　(2)方形周溝墓ＳＴ238(西から)
(3)方形周溝墓ＳＴ238南辺溝埋土断面(西から)
図版第69　(1)溝ＳＤ099(東南から)

(2)溝ＳＤ099埋土断面(e－e′)(西北から)
(3)溝ＳＤ099埋土断面(f－f′)(東南から)
図版第70　(1)土坑ＳＫ100(南から)　(2)土坑ＳＫ100埋土断面(東から)
(3)土坑ＳＫ100土器出土状況(南から)
図版第71　(1)土坑ＳＫ107(東北から)　(2)土坑ＳＫ107(西北から)
(3)土坑ＳＫ109(北から)
図版第72　(1)Ａ地区中世遺構面調査風景(南から)
(2)同中世遺構面耕作溝群(南から)
(3)同中世遺構面鋤耕作痕跡(東から)
図版第73　(1)Ｂ地区中世遺構面(北から)　(2)同地割溝・道路状遺構(北から)
(3)同条里地割坪境道(西から)
図版第74　(1)Ｂ地区中世遺構面(南から)
(2)同南部地割溝・道路状遺構(西北から)
(3)同西壁面土層断面(東から)
図版第75　(1)溝ＳＤ078・085～087(西北から)　(2)溝ＳＤ078・085～087(東南から)
(3)溝ＳＤ078土器出土状況
図版第76　(1)ＳＸ226(西から)　(2)ＳＸ226獣骨出土状況１(東から)
(3)ＳＸ226獣骨出土状況２(南から)
図版第77　出土遺物(1)
図版第78　出土遺物(2)
図版第79　出土遺物(3)
図版第80　出土遺物(4)
図版第81　出土遺物(5)
図版第82　出土遺物(6)
図版第83　出土遺物(7)
図版第84　出土遺物(8)
図版第85　出土遺物(9)
図版第86　出土遺物(10)
図版第87　出土遺物(11)
図版第88　出土遺物(12)
図版第89　出土遺物(13)
図版第90　出土遺物(14)

# 第1章　調査の経緯

## 第1節　調査の経過

京都と大阪を結ぶ主要な道路には、一般国道1号・同171号・名神高速道路などがあるが、道路需要は増大する一方である。このため、国土交通省(旧建設省)で、京都～大阪間の渋滞緩和と都市機能の円滑化を目的に第二京阪道路の建設が計画された。(注1)

昭和60(1985)年4月に京都府域について路線の都市計画決定が成されたのをうけ、近畿地方整備局(旧近畿地方建設局)京都国道工事事務所では、このうち久世郡久御山町森から八幡市上津屋間(事業名：京都南道路)の工事施工を担当することになった。

路線選定にあたっては、土地の利用状況や文化財の保護・環境対策を考慮し行われたが、このうち埋蔵文化財については、久御山町内ではこれまで唯一の土師器などの遺物散布地である佐山遺跡の一部が路線計画上にかかることが判明した。

当地域は、京都盆地南部の低地部にあたり、佐山遺跡の北方には、昭和10年代に干拓事業により消滅するまで巨椋池が広がる広範囲な低湿地地形を呈していた。そのため、原始・古代に遡る遺跡の存在に関しては、疑問視する考え方もあった。さらに一帯は、昭和初期に飛行場が建設され、その後、工業団地が造成されるなど地形の改変が著しく、佐山遺跡の範囲や実態については不明な点が多くあり、発掘など調査の計画を立てる上に支障となっていた。

このため佐山遺跡の調査の取扱について、原因者である国土交通省および日本道路公団、京都府教育委員会などの関係機関で協議が重ねられた結果、遺跡の内容や範囲を把握するために事前に試掘調査を実施することになった。

この試掘調査は、平成9年度事業として当調査研究センターが実施することになった。試掘調査は、2次に分けて実施し、1次調査では、弥生時代から平安時代にわたる各時期の遺構・遺物が検出され、佐山遺跡がこれまで考えられていたよりも広範囲に広がり、遺構面が明確に遺存することが明らかになった。

第1図　調査地位置図

このように１次調査により佐山遺跡が予想以上に広がることが判明したため、さらに遺跡範囲の確認と周辺地での遺跡の有無を明確にすることを目的に第２次の試掘調査を実施した。第２次試掘調査は、道路予定地の延長約1.4kmに13か所の試掘トレンチを設定し実施した。この試掘調査の結果、佐山遺跡の北側約700mの地点で弥生時代中期から平安・中世にかけての遺構・遺物が検出され、同時期の集落跡の分布が明らかになった。また、佐山遺跡の南側約400mでも弥生・古墳時代から中世にかけての遺跡の存在が確認されたため、京都府教育委員会と久御山町教育委員会の協議により、佐山遺跡とは別の遺跡と捉え、前者を市田斉当坊遺跡、後者を佐山尼垣外遺跡と呼称することになった。

試掘調査によって確認されたこれらの３遺跡の発掘調査の実施方法と今後の工事計画などについて前述の関係機関と協議を重ねた結果、平成10年度に、まず、市田斉当坊遺跡（Ａ・Ｂ・Ｃ－１地区）の発掘調査から着手することになった。翌11年度は、引き続き市田斉当坊遺跡（Ｃ－２・Ｄ地区）の発掘調査を行うとともに、佐山遺跡（Ａ－１地区上層）および、佐山尼垣外遺跡の発掘調査を実施した。12年度は、佐山遺跡（Ａ－１地区下層・Ａ－２・Ｂ－１地区上層）と市田斉当坊遺跡Ａ地区の一部調査を実施した。各年度の発掘調査の概要については、『京都府遺跡調査概報』[注2]および『京都府埋蔵文化財情報』[注3]などで逐次報告しているところである。

本報告書は、このうち11年度に現地調査が終了した佐山尼垣外遺跡の発掘調査の報告である。市田斉当坊遺跡と佐山遺跡についても現地調査終了後の出土遺物の整理が完了次第、報告書を順次刊行していく予定である。

今回報告する佐山尼垣外遺跡は、久世郡久御山町佐山小字尼垣外に所在する。調査地の現状は水田で、木津川右岸に形成された自然堤防上の微高地に立地する。標高は約12～12.5mを測る。調査面積は、約5,000m²である。調査は、試掘調査の結果を基に、現地表下1.9～2.2mまでを重機で掘削し、その後、人力による掘削ならびに遺構の検出を行った。なお、調査にあたっては、現地の土置き場の便宜上、調査地を東西に２分し、西側調査区（Ａ地区）の終了後、掘削土を反転し引き続き東側調査区（Ｂ地区）の調査を実施した（第１図）。現地の調査期間は、平成11年６月21日～平成12年３月３日である。

現地調査および整理作業にあたっては今回の佐山尼垣外遺跡の他、佐山遺跡・市田斉当坊遺跡などの調査全般について京都府教育委員会・久御山町教育委員会のご指導・ご協力をを賜ったほか、以下の方々からご協力および有益なご助言をいただいた。感謝申し上げます。

宇野隆夫・石野博信・広瀬和雄・松井章・中澤圭二・藤田三郎・川端和弘・杉原和雄・安藤信策・光谷拓実・秋山浩三・森岡秀人・冨山正明・赤澤徳明・國分政子・伊庭功・濱野俊一・濱田延充・深澤芳樹・塚本敏夫・小野映介・秋淵植・李弘鐘・家根祥多・河角龍典（順不同・敬称略）。

文末になりましたが、現地調査の期間中から整理作業および本報告書の刊行まで暖かく見守っていただいた国土交通省ならびに多くの関係者の皆様に深く感謝申し上げます。[注4]

## 第2節　調査体制

今回報告する佐山尼垣外遺跡を含む、第二京阪道路および京都南道路関係遺跡の発掘調査体制(平成9～12年度)は、付表1の通りである。

付表1　調査体制一覧表

| 年度 | 遺跡・地区 | 調査主体者<br>(理事長) | 調査責任者<br>(事務局長) | 事務局<br>(総務課長) | 調査担当責任者<br>(調査第2課長) | 調査担当 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成9<br>(1997)年 | 佐山遺跡<br>(第1次試掘) | 樋口隆康 | 木村英男 | 福島利範 | 安藤信策 | 調査第3係長 奥村清一郎<br>調査員 森下　衛 |
| | (第2次試掘) | | | | | 調査第4係長 平良泰久<br>調査員 岩松　保 |
| 平成10<br>(1998)年 | 市田斉当坊遺跡<br>A－1・B・C－1地区 | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 調査第3係長 平良泰久<br>主任調査員 竹原一彦<br>岩松　保<br>調査員 森島康雄<br>柴　暁彦 |
| 平成11<br>(1999)年 | 市田斉当坊遺跡<br>C－2・D地区 | 同上 | 同上 | 同上 | 平良泰久 | 調査第3係長 辻本和美<br>主任調査員 岩松　保<br>調査員 森島康雄<br>野々口(高野)陽子 |
| | 佐山遺跡<br>A－1地区 | | | | | 主任調査員 竹原一彦<br>調査員 森島康雄<br>野々口(高野)陽子 |
| | 佐山尼垣外遺跡 | | | | | 主任調査員 竹原一彦<br>調査員 中村周平<br>柴　暁彦 |
| 平成12<br>(2000)年 | 佐山遺跡<br>A－1・A－2地区<br>B－1地区<br>B－2(試掘) | 同上 | 同上 | 同上 | 同上 | 調査第3係長 辻本和美<br>主任調査員 竹原一彦<br>調査員 森島康雄<br>中村周平<br>野々口(高野)陽子 |
| | 市田斉当坊遺跡<br>A－2地区 | | | | | 主任調査員 竹原一彦<br>調査員 野々口(高野)陽子 |

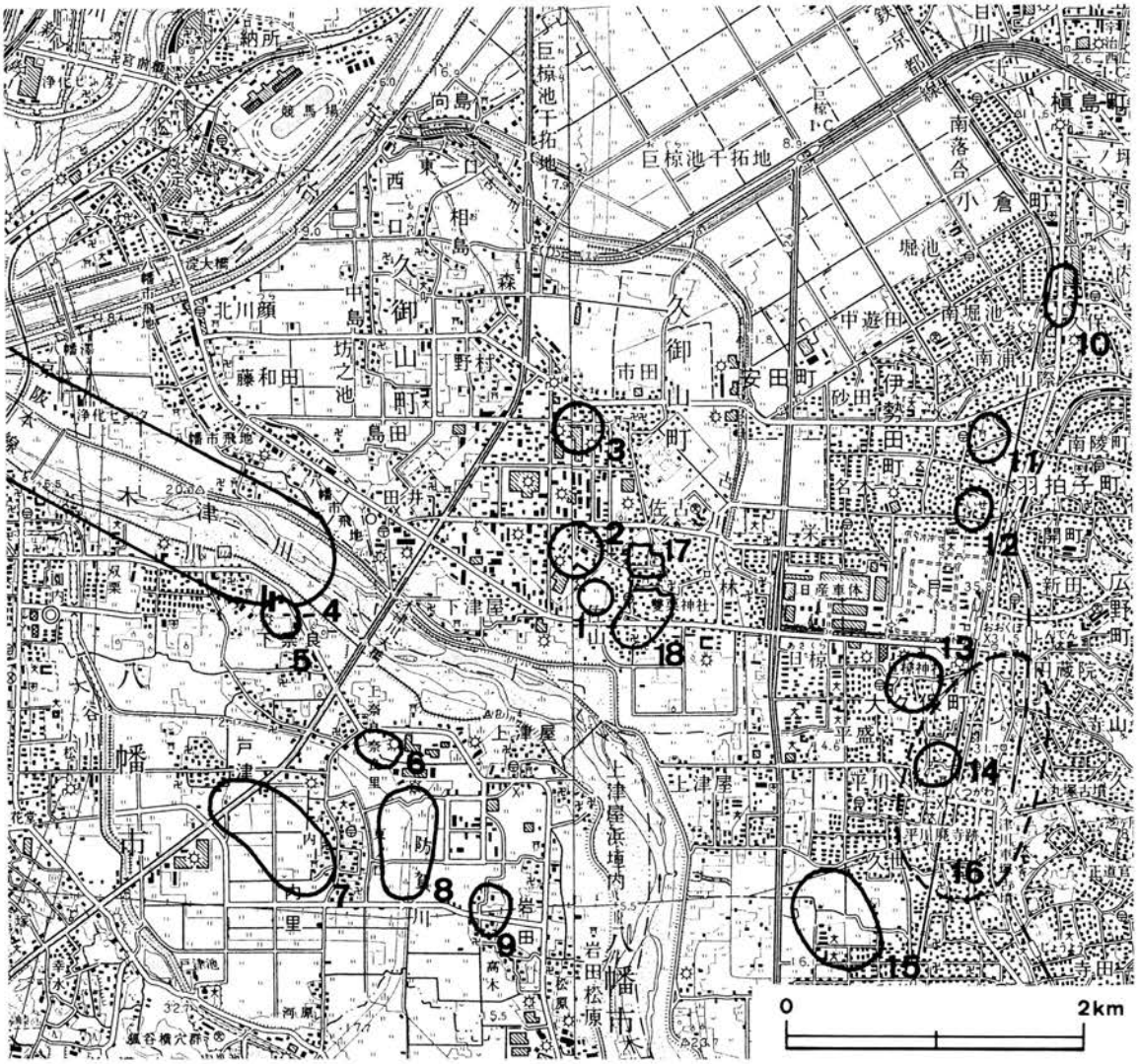
## 第3節　遺跡の環境

佐山尼垣外遺跡の所在する久御山町は、山城盆地の南西部に位置し北西部を宇治川が西流、南側を木津川が北西に流れる。町域のほとんどは、木津川が形成した沖積地に立地しており、標高約10～12m前後の山城盆地では、最も低い地域に位置する。町域の北側には、昭和16年に干拓により消滅するまで、宇治川の遊水池の機能を果たしていた巨椋池が存在した。巨椋池は、「万葉集」にもみえ、現在の京都市伏見区・宇治市・久御山町域にまたがる周囲約16km、面積794haに及ぶ広大な淡水湖である(注5)。岸辺には、古来から淀・宇治・岡屋などの津が設けられ、各地に通じる水上交通の要衝であった。また、旧湖岸線に及ぶ条里地割が遺存しており、周辺は早くから耕

地化された様子がうかがわれる。

周辺での原始・古代の遺跡については、これまで低湿地という地形的要因のために希薄であると考えられてきた。巨椋池東岸の宇治市域では、湖畔の微高地や台地縁辺部にかけて、神楽田遺跡(弥生後期)・井尻遺跡(古墳後期)・若林遺跡(弥生～飛鳥)などが、また木津川東岸の城陽市域では、弥生末～庄内期にかけての土器を多量に出土した塚本東遺跡などが分布する。(注6) 塚本東遺跡では、丹後・丹波系の土器の出土比率が高いことが注目される。木津川西岸の八幡市域では、旧木津川の自然堤防上に、木津川河床遺跡(弥生後期～古墳前期)や内里八丁遺跡などが分布する。内里八丁遺跡(注7)は、第二京阪道路の建設に伴い広範囲の発掘調査が実施され、弥生・古墳～中世にかけて連綿と営まれた集落遺跡であることが明らかになってきている(第2図)。

久御山町内での遺跡としては、今回の道路建設に伴う発掘調査の契機となった佐山遺跡(注8)がある。




第2図　周辺主要遺跡分布図

1.佐山尼垣外遺跡　2.佐山遺跡　3.市田斉当坊遺跡　4.木津川河床遺跡　5.下奈良遺跡
6.上奈良遺跡　7.内里五丁遺跡　8.内里八丁遺跡　9.西岩田遺跡　10.神楽田遺跡
11.若林遺跡　12.中山遺跡　13.大久保環濠集落　14.室木遺跡　15.塚本東遺跡
16.久津川古墳群　17.佐古環濠集落　18.佐山環濠集落

この遺跡については、これまで須恵器や土師器などの散布地として知られるのみであったが、調査によって50基以上にのぼる多数の竪穴式住居跡が検出され、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする大規模な集落遺跡であることが明らかになった。

同じく市田斉当坊遺跡においても弥生時代中期の竪穴式住居跡や方形周溝墓が広範囲に検出され、縁辺部では集落をめぐる環壕と思われる数条の大溝が確認されている。特筆すべきものとしては、木枠を有するものとしては最古級に属する弥生時代中期前葉の井戸２基が出土している。本遺跡からは、石剣や玉作り関連遺物も多数出土しており、南山城最大級の弥生時代中期の集落跡と考えられる。

佐山尼垣外遺跡では、本報告書で詳述するように縄文時代晩期の土器が多量に出土しており、巨椋池縁辺の沖積地での人々の活動が早くから行われてきたことが明らかになった。

このほか、佐山尼垣外遺跡の周辺には、佐山・佐古を典型とする環濠集落がみられる。これらの環濠集落は、応仁の乱以後、住民が自衛のために村の周囲に濠や土塁をめぐらしたもので防御・軍事の拠点として機能を果たして来たものである。

（辻本和美）

# 第2章　検出遺構

## 第1節　層位と遺構

調査区内における堆積土は主に、砂質土・粘砂質土・粘細砂・粘質土・細砂などから構成される。ほぼ水平に堆積する安定土層であり、耕作土・後背湿地における堆積土層と考える。

堆積土層は、現地表下から約0.6mまでは主に、粗砂・細砂を多く含んだ砂質土で構成される(図版第25)。標高は、約11.9～12.4mである。上層(第1層)暗茶褐色砂質土層・中層(第2層)茶褐色砂質土層・下層(第3層)暗青灰褐色砂質土層に分層することができる。上層は、現代の造成土、中・下層については近代～現代の耕作土・盛土である。

それ以下、約0.9mまでは、細砂・微砂を大量に含んだ灰色系の粘細砂ないし粘砂質土で構成される。標高は、約11.0～11.9mを測る。この層は、さらに5層に細分される。上層から灰褐色粘細砂層(第4層)・灰色粘細砂層(第5層)・灰色粘砂質土層(第6層)・灰褐色粘細砂(第7層)・青灰褐色粘細砂(第8層)である。うち第4～7層は各々が厚さ約20～30cmを測る水平堆積を成す。第4～7層中からは染付の小片が出土している。第8層は幅約40cmと厚く、調査区西半域では青灰褐色粘質土が、同東半域では橙灰色粘粗砂が、いずれもほぼ標高11m付近に堆積しており、以西の木津川流域からの氾濫堆積土と考えられる。なお、調査区北壁では、この層に貫入し途中で止まる下層から噴き上がる橙灰褐色粗砂を認めており、地震に伴う噴砂の痕跡と判断される。同様の噴砂は、周辺の市田斉当坊・佐山両遺跡からも検出されており、文禄5(1596)年の両地震によるものと推測されている。噴砂は主に調査区北東部付近で検出し、室町時代の遺構を切る。第8層以下は、青緑灰色～緑灰色を帯びた粘細砂、微砂混じりの粘質土、粘質土の構成となる。2層に細分され、上層(第9層)は青灰緑色粘細砂～粘微砂層、下層(第10層)は緑灰色粘質土層である。第9層は厚さ約0.2～0.5mを成し、調査区内にわたって広範囲に堆積するが、中央部でほぼ水平な堆積の様相を示すのに比べ、周辺に向かうにつれゆるやかに降下している。また、調査区北東部ではこの層はみられない。この層からは、平安～中世の土器片が出土しており、当該期の遺物包含層と判断する。第10層は、厚さ約0.2～0.5mで、調査区内に広範囲に堆積する。標高は10.3～10.6mを測る。この層は概して調査区北半で厚く堆積するのに対し、南側に向かって徐々に薄くなり、層位上面のレベルも南にむかって下降する。弥生・平安・鎌倉・室町時代の各時期の遺構は、おおむねこの層の上面で検出し、下位では縄文時代の遺構を検出した。すなわち、各遺構群は、ほぼ同一面において重複して検出されたが、これらは中世に、周辺において大規模な開発が行われたことにより、先行する時期の遺構面が削平された結果によるものと判断される。第10層以下では、厚さ0.7m以上の層を成して、緑灰色～黄灰褐色の細砂・微砂が調査区内に広範に堆積する。さらに北壁付近ではこの下位で灰白色の細砂・粗砂の堆積を確認した。第11層お

よび下層の砂層については、河川氾濫などによる堆積土である。

今回の調査で検出した遺構は、縄文時代に属するもの、弥生時代に属するもの、平安～室町時代に属するものに大別される。次節以下では、各時代・遺構の種類ごとに概観しておきたい。(注9)

## 第2節　縄文時代

ＳＤ229(図版第１・３～５・53～56)　調査区中央部から中央部東域にかけて検出した溝である。北西端部は室町時代の溝に切られ、北西半部も方形周溝墓ＳＴ236北東辺周溝およびＳＴ237北東コーナー部に切られている。また、南東半部はＳＴ227およびＳＫ239に切られ、南東端部も一部ＳＴ238北東コーナー部に切られる。溝は北西～南東方向に斜行し、さらに南進すると考えられる。北西で幅狭く、南東に進むにつれ裾広がりの形状を呈する。総検出長約28mを測り、幅は北西端の最も狭いところで約4.5m、南東端の最も広いところで約13mを測る。深さは北西部で約0.45m、中央部と南東部で約0.55mを測る。溝底部は南東から北西にむけてやや上昇し、また幅・深さともに規模が小さくなる。溝の方位はN50°Wである。溝の断面は、北西部から中央部にかけてはゆるやかな皿状を呈し、中央部から南東に進むにつれコーナー部が丸みを持つ逆台形に近づく。南東部では溝の南肩部は、手前で一旦落ち込んでおり、弧を描いて立ち上がったのち再び最深部へとゆるやかに傾斜している。溝埋土は、おおむね上層はわずかに微砂混じりの青灰色粘質土、中層は微砂混じりの青灰色粘質土、下層は中層より微砂が多く混じる青灰色粘質土である。ただ、その堆積様相は北西部・中央部・南東部でやや異なっている。北西部は溝の残りが悪く、埋土は中層・下層のみ検出し得た。これに比して溝の残りの良かった中央部・南東部では上・中・下層埋土を確認した。中央部の埋土の上層は青灰色粘質土を中心とし、その下位に炭化物が混じり、ほぼ水平に堆積する。中層では微砂混じりの青灰色粘質土を中心とし、下位に炭化物を伴った青灰色粘土ブロックの混入が認められる。下層は北西部で認めたのものと同様な堆積様相を示す。南東部の埋土のうち、上層のそれは、中央部同様、下位に炭化物を伴う青灰色粘質土であり、堆積様相も中央部のそれと似る。一方、中層では微砂混じりの青灰色粘質土ではなく、中央部の中層下位で認めたと同様の青灰色粘土となり、その下位でも炭化物の混入が認められた。ただその痕跡は南肩付近で集中的に認められた。特に、この周辺での炭化物の量は多く、集積といった様相を呈している。それらは、溝肩斜面に沿って、カーブを描いて最深部へと分布している。

溝の埋土は、多くは微砂を包含する粘質土で構成され、地山である周囲の灰色微砂をとりこんだ水成堆積土と判断する。この溝については、人為的な掘削とするよりは自然流路と考えられる。

溝内から出土した土器は、溝の北西部でもわずかにみられるが、中央部南肩部・南東部南肩部付近からの出土の占める割合が高い。多くは破片で溝の肩部から最深部にかけての出土である(図版第４・５－54～56)。土器は縄文時代晩期中葉から後葉に帰属するもので、深鉢・浅鉢を中心に構成される。溝内の埋土は既述のように多量の炭化物を包含しており、土器の多くがこの炭化物に伴って出土した。

## 第３節　弥生時代(図版第１)

### (1)竪穴式住居跡

ＳＨ094(図版第６・57－(1)(2)・58－(3))　調査区南西部で検出した竪穴式住居跡である。東半の一部を検出したのみである。検出した東辺長は6.6mであり東辺の南北にそれぞれコーナー部を有することから、平面形は約７m四方の方形を呈するものと思われる。主軸はN12°Wである。中央部分は２条の中世の南北溝に切られ、南辺部分はＳＨ095に切られる。検出面から床面までの深さは最大４cm程度と残りは極めて悪く、大部分は後世の削平により失われてしまっている。床面は中央部付近で標高10.38mを測り、おおむね平坦であるが、北東隅と南東隅でこれに比して５cm程度低くなる。床面からピットを８基検出した。いずれも円形掘形をもち規模は大きいもので直径約35cm、深さ約17cm、小さいもので直径約14cm、深さ約14cmとさまざまである。これらから対となる位置関係のピットを検出し得ず、いずれが主柱穴に相当するかは不明である。周壁溝は幅16cm、深さ約３cmを測り、約11mにわたって遺存する。住居跡南東部の周壁溝付近から壺・甕の破片など数点がまとまって出土した。出土土器には、広口壺(127)・甕底部(128)・体部にタタキを施す庄内式併行期の尖底の甕(129)などがある。127は中期の様相をもつが、この住居跡の周辺には、中期の方形周溝墓が存在しており、混入の可能性が高い。方形の平面をもつ弥生中期の住居跡は、周辺の遺跡でも確認されておらず、ここでは、住居跡の時期を庄内式併行期に属するものとしておきたい。

ＳＨ095(図版第７・57－(3)・58－(1))　調査区南西部で検出した竪穴式住居跡である。ＳＨ094の南隣に位置する。中央部や南東隅部は中世の南北溝に切られ、北辺部はＳＨ094を切る。北西部分は調査区外のため未検出であるが、平面形は長辺約6.3m、短辺約5.7mの方形を呈する。主軸はN34°Wである。検出面から床面までの深さは約10cmで、埋土は、暗灰色粘質土・灰褐色粘砂質土・茶灰色粘質土である。住居跡床面は南西部でやや高く比較的平坦な面を成すのに対し、東北部では東に向かって徐々に落ち込むすり鉢状を呈し、比高差は約16cmを測る。床面から周壁溝と４基の主柱穴および土坑を検出した。住居の周壁溝は、北東辺では住居壁面からやや離れて約50～70cm内側を併走する。周壁溝は北半部分では幅約35cm、深さ約７～12cm、南半部分で幅約12cm、深さ約2.2～６cmを測る。溝の断面は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色粘砂質土である。住居跡床面の南西部で、幅約15cm、深さ約３cmの溝を約２mにわたって検出した。この溝は、途中で途切れ、また、深さも浅く、周壁溝と判断するにはやや確証を欠く。床面で検出した主柱穴の掘形はいずれも円形で、直径約34cm、深さは北東部のもので約16cm、北西部で約20cm、南東部で約14cm、南西部で約18cmをそれぞれ測る。南東隅の周壁溝付近からピットを１か所検出した。このピットは直径約34cm、深さ約20cmと規模の上で上記の柱穴と近似しており、建て替えに伴う柱穴の可能性がある。床面で検出した土坑は、歪な楕円形を呈しており長径約80cm、短径約64cmを測る。土坑の断面形は逆台形を呈しており、最深部で24cmを測る。埋土は主に灰褐色ないし黄灰褐色の粘砂質土である。この土坑については、南東辺壁際付近に位置することから、貯蔵穴の可能性がある。住居跡埋土からは外面にタタキを施す甕底部片が出土しており、住居跡の時期につ

いてはＳＨ094同様、庄内式併行期と考えておきたい。

**ＳＨ096**(図版第６・57－(1))　調査区南西部で検出した竪穴式住居跡である。住居跡ＳＨ094の北隣に位置し、この住居跡と縁辺を接する。北東辺と南東辺の一部のみを検出した。西半は調査区外のため未検出であり、東端は中世の南北溝に切られる。検出した部分で北東辺約75cm、南東辺約２m、深さは約18cmを測る。床面からは柱穴、周壁溝を検出しておらず、あるいは土坑の可能性も否定できない。中期と思われる高杯口縁部(130)、および、器台脚部(131)が出土している。

**ＳＨ113**(図版第７・58－(2))　調査区南東部で検出した竪穴式住居跡である。東半は中世の溝に切られる。北西および南西コーナー部を含む西半部を検出した。検出長は西辺で約3.6m、北辺約1.8m、南辺約3.2mである。検出した部分から平面形は一辺約4.5mの方形に復原できる。主軸はN23°Wである。残存する床面の深さは約12～14cmで、埋土は灰黄色粘質土・緑灰色粘質土・灰緑粘砂質土・灰緑色粘質土である。床面は西辺付近で約４cm程高く、他はおおむね平坦である。床面からは南西部と北東部で計２基の主柱穴および中央部で土坑を検出した。柱穴はいずれも掘形円形を呈し、幅約30cm、深さは南西部で約20cm、北東部で約33cmを測り、柱心々間で約２mを測る。土坑は主柱穴の間の北東寄りに位置しており、平面形は楕円形を呈する。長軸の方向はほぼ住居跡の主軸に一致する。長径約1.2m、短径約0.6m、深さは25～30cmを測る。遺物は埋土・柱穴・土坑いずれからも出土しておらず、時期の確定はできないが、ＳＨ095と同様に平面プランが方形を呈することから庄内式併行期の可能性がある。住居跡の埋土には焼土塊や炭化物が混入しており、住居廃絶後、埋土上面で火を焚く何らかの行為があったものと考えられる。

**(2)方形周溝墓**

**ＳＴ101**(図版第８・62・63)　調査区中央部で検出した方形周溝墓である。北東部および東部はＳＴ236と周溝を共有し、南西端でＳＤ099に切られる。また、南東部でＳＴ237とコーナーを接する。北西部は調査地外になる。平面は歪な隅丸長方形を呈し、規模は台状部で約11×７mを測る。主軸はN32°Wである。主体部は検出されなかった。周溝は幅約２～３m、深さ約0.3～0.6mを測る。断面はおおむねゆるやかな「U」字形を呈するが、掘形は西辺・南辺周溝では両肩部がゆるやかに落ち込んでいるのに対し、東辺周溝では西肩がゆるやかに、東肩はやや急に落ち込んでいる。埋土は南辺周溝で上層が緑灰色粘質土、中層が灰褐色粘質土、下層が微砂混じりの黄灰褐色粘質土である。周溝の深さは西辺と南辺ではほぼ同じであるが、東辺では北でやや浅く、南に向かって深くなる。東辺周溝内から広口壺(132・135)細頸壺(133)・鉢(136)・甕(137・138)・高杯(140)が出土した。また、周溝の南西コーナー部付近から壺の口縁部(134)と底部(139)が出土した。東辺周溝内の土器は、出土位置から３つのグループに分かれる。第１グループの132・133は周溝北部のものである。133は周溝中心部から口縁部を北に向け横位で出土。132はこの南隣から口縁部を南に向けた状態で出土した。第２グループの136～138・140は、第１グループから約1.5m南に離れた周溝中央部からのものである。第３グループの135は第２グループから約２m離れた周溝南部からのものである。口縁を北に向けた状態で出土した。133を除き、いずれも周溝の底部直上からの出土である。これらの土器は遺存率がよく、周溝内に転落した供

献土器と思われる。土器の所属時期はいずれも、中期前半と考えられる。

ＳＴ102(図版第９)　調査区中央部北部で検出した方形周溝墓である。中央部は坪境道側溝ＳＤ090・091に、北東部分は中世の溝に切られる。検出した３辺の周溝からみて台状部は一辺約７ｍの方形を呈するものと察せられる。主軸はＮ40°Ｗである。主体部は削平のため検出できなかった。周溝の幅、深さともに、残りの良いところで約20～60cmを測る。断面形は逆台形で、埋土は暗青灰褐色粘質土である。この周溝は西半で深く、東半で浅く掘削されており、底部の比高差は北西辺と南西辺とで約20cmを測る。周溝からは滑石製紡錘車(247)が１点出土している。

ＳＴ114(図版第９・64)　調査区北西で検出した方形周溝墓である。南西部は調査区外のため未検出であり、南部は一部ＳＸ106に切られる。東南辺周溝は一部方形周溝墓ＳＴ236の北西辺周溝と共有する。周溝墓は台状部で約６×10m、周溝外周で約10×15mの長方形を呈し、主軸はＮ50°Ｗである。周溝は幅約３～1.5m、深さは約0.6～0.8mを測る。溝断面はゆるやかな「Ｕ」字形を呈する。周溝埋土は上層が黄褐色～黄灰褐色細砂、中層が灰褐色～灰茶褐色細砂、下層が茶灰色～暗灰色粘細砂と主に細砂であり、南東辺以南では砂質土を中心とする。ＳＴ236との周溝共有部の埋土は砂質土を中心としており、ＳＴ114が後出する可能性が大きい。なお、ＳＸ106は、ＳＴ114の周溝南辺を切る溝状の遺構で、ＳＴ101と溝を共有する方形周溝墓の一部である可能性がある。

ＳＴ114の周溝の底部から３基の土坑を検出した。ＳＫ01は北東辺周溝の中央付近で検出した不整形の土坑で、長径約2.5m、短径約0.5～１m、深さは約20cmを測る。ＳＫ02はその東隣で検出した楕円形を呈する土坑で、長径約1.2m、短径約0.75m、深さは約20cmを測る。いずれも断面は逆台形を呈し、埋土は上層が暗灰色砂、下層が暗灰色粘砂質土である。ＳＫ03は南東辺周溝の南端で検出した楕円形を呈する土坑で、長径1.8m、短径0.8m、深さ30cmを測る。断面はゆるやかな「Ｕ」字状を呈し、埋土は上層が灰褐色細砂、下層が暗灰色粘砂～粘質土である。これらの埋土中には炭化物の混入が認められた。これらの土坑については、周溝底部に設けられた埋葬施設の可能性も考えられるが遺物は出土していない。

ＳＴ119(図版第10～13・59・60)　調査区南部で検出した方形周溝墓である。中央部は中世の溝に、その他の部分も中世の畝溝に寸断され、残りはきわめて悪い。検出部分の台状部は、約７×９ｍを測り周溝外周は、約12×13mのやや歪な長方形を呈する。北部および東辺部の一部は後出の溝ＳＤ098に切られ、南辺の一部は調査区外のため未検出である。主軸はＮ20°Ｗである。主体部は検出されなかった。周溝は、幅約1.5～４ｍ、深さは約15～20cmを測る。埋土は灰褐色～黄灰褐色の粘質土・微砂混じりの黄灰褐色粘質土である。溝の形状は底部でほぼ水平に、肩部付近でゆるやかに立ち上がっており、浅い逆台形を呈する。周溝は、西辺が東辺に比して幅広となる。西辺周溝は、残りが悪く、埋土は、黄灰褐色粘質土・微砂混じりの黄灰褐色粘質土である。東辺の方位は、Ｎ10°Ｗで、やや北に傾むく。周溝内からは計11点の土器が出土した。うち５点は北辺～東辺周溝内から、６点は西辺周溝内からの出土である。北辺～東辺周溝内の５点の内訳は、肩部にシカの線刻絵画を施す広口壺(151)・大型細頸壺(142)・水差し形土器(144)・頸部に

穿孔をもつ小型壺(145)・壺下半部(146)である。西辺周溝内では、細頸壺(141)・水差し形土器の口縁部(143)・壺口縁部(147)・広口壺(148)・口縁を欠損する壺(149)・脚部片(150)である。これらの出土土器の内、北辺～東辺周溝内のものは、4つのグループにわかれて出土した。北から順に土器出土状況をみると、151は北辺周溝内の東部付近から出土した。底部および胴部の一部を欠くが、土器片の一部は出土地点から東に1.5m離れた周溝南肩部付近からと東に4m離れた地点からも他の土器の破片に混じって出土している。146は東辺周溝内北部、北東コーナー部付近からまとまって出土した。また142は、東辺周溝内中央部の東肩から溝底部付近にかけて出土した。144・145は、東辺周溝内南部のほぼ底部付近から出土した。以上の4つのグループの出土地点の間隔は、それぞれ直線距離で約4m、3m、2.5mを測る。これらの土器は、周溝の形状に沿って出土していることがうかがえる。

西辺周溝内の6点は2つのグループに分かれて出土した。北から順にみると、148・149は、西辺周溝内の北部の東肩部～底部にかけて出土した。148の口縁部は底部付近から、149はその約1m南から出土した。さらにその約1.5m東側では、前述の口縁部を除く148の体部が東肩部付近で出土した。141・143・147・150は西辺周溝内南部の西肩部から底部にかけて出土した。これらの土器は、いずれも溝底部から約10～20cm上位の灰褐色～黄灰褐色粘質土層中からまとまって出土しており、残存率が高いものが多いことから供献土器の可能性が高いと判断される。

**ＳＴ227**(図版第14・15・65・66・67－(1))　調査区中央部東部で検出した方形周溝墓である。北辺はＳＴ228の南コーナー部を切り、西辺はＳＴ236北東辺周溝の南半から、この周溝に重複し、南東コーナー部付近までを切る。西辺南端はＳＴ237北東コーナー部周辺を切る。また台状部北西はＳＫ239と重複し、さらに周溝墓南西半分はＳＤ229南東部を切る。東辺の一部は調査区外のため不明である。平面は隅丸方形を呈し、規模は台状部で約11×11mの方形、周溝外周で一辺約15mを測る。周溝は南西部で途切れ、この部分は陸橋部に相当すると考えられる。主軸はN17°Eを示す。主体部は検出されなかった。周溝は幅約0.5～2.5m、深さは約40～60cmを測る。溝の断面は、おおむねゆるやかな「U」字形を呈する。埋土は上層が暗黒褐色粘土、中層が淡黒褐色粘土、下層が微砂混じりの暗青灰色粘質土である。周溝は北辺・南辺でほぼ同様の深度で掘削されているが、北西コーナー部で一旦浅くなり、西辺では南に行くにつれ深くなる。この西辺中央部分は、周囲より1段深くなり幅0.8m、深さ10～20cmのゆるやかな「U」字形を呈し、淡黒灰色粘土で埋もれている。この位置はＳＴ236周溝と重複する部分であり、これらに関連するものかとも考えられるが、その性格については不明である。なお、この落ち込みから南に向かっては溝の底が再び浅くなり陸橋部に至る。周溝の北辺で3点、西辺で6点、南辺で5点の計14点の土器が出土した。内訳は北辺では、広口壺の口縁部(156)、広口壺(159)、把手付鉢(162)、西辺では小型広口壺(157)、広口壺(158)、広口壺の口縁部(160)、細頸壺(163)、短頸壺(165)、底部片(169)、南辺は台付鉢(161)、二重口縁の壺(164)、短頸壺(166)、細頸壺口頸部片(167)、脚部片(168)である。これらの土器は、さらに小グループごとにまとまって出土した。

北辺の土器は、156・162と159の2つの小グループにまとめられる。156・162は北辺東部、調

査区東壁付近の出土である。両土器は、周溝北肩部から底部にかけて落ち込んだ状態で出土した。159は、北辺中央やや西寄りで出土した。西辺の土器は、３グループにまとまる。第１グループは169で、単独で溝西辺中央部から出土した。第２グループは157・158・160で周溝西辺南部の中心部からやや西寄りの位置にかけ、まとまって出土した。土器はいずれも溝底部付近の黒灰色粘土層からの出土である。第３グループは163・165で、西辺南端部、周溝中心部付近から出土した。164・166は、溝南辺の西部から出土した。161は、南辺中央部、南肩部付近で出土した。以上の周溝内出土土器はその多くが溝底部付近からの出土であり、残存率も高いことから供献土器と考えられる。これらの土器群は、おおむね後期中葉から後葉にかけての時期に所属するものと考えられるが、158は中期前半の様相を呈しており周溝の一部が重複するＳＴ236あるいはＳＴ237に帰属する可能性もある。

**ＳＴ228**(図版第16・61)　調査区北部で検出した方形周溝墓である。北西辺は鎌倉時代の池状遺構ＳＸ226に、北東辺および南西辺の一部は東西坪境道両側溝に、南東辺の一部はＳＴ227に切られる。平面は長方形を呈し、台状部で約18×13m、周溝外周で約22×20mの規模を測る。主軸はN40°Wを測る。主体部は検出されなかった。規模は、南西に隔てて対置するＳＴ236とともに今回検出した周溝墓では大型のものである。周溝は残りの良いところで幅約４m、深さ約70cmを測る。断面はゆるやかな「U」字形である。埋土は上層が暗緑灰褐色粘質土、中層が緑灰色～緑灰褐色粘質土、下層が緑灰褐色粘土か微砂混じりの緑灰褐色粘質土である。ＳＴ236同様、北東辺が南西辺に比して深く掘り込まれており、北東に向け、徐々に深度が増している。この傾向は他の北西に主軸を振る方形周溝墓においても認められる。周溝からは、縄文土器や石鏃(242)が出土しているが、縄文土器については、南に位置する縄文時代の溝ＳＤ229からの混入と判断する。本周溝墓の時期は、他の北西に主軸を振る周溝墓と同様、弥生時代中期と考えられる。

**ＳＴ236**(図版第17)　調査区中央部で検出した方形周溝墓である。北西部はＳＴ114と、南西部はＳＴ101とそれぞれ周溝を共有する。北東部はＳＴ227およびＳＤ229と重複し、中央部は室町時代の南北坪境道側溝に切られる。平面は歪な長方形を呈し、規模は台状部で約19×14m、周溝外周で約24×19mを測る。主軸はN40°Wである。主体部は検出されなかった。台状部を四周する周溝は、北西辺で一部は分岐する。南東部分ではＳＴ237の北西辺周溝にむかって延びており、この部分では周溝を共有していたものと考えられる。周溝は幅約２m、深さは残りの良いところで約50cmを測り、断面はゆるやかな「U」字形である。埋土は上層が緑灰褐色粘質土、下層が微砂混じりの緑灰～灰色粘質土である。周溝の深さは、北東辺と南西辺では異なり、北東辺が南西辺に比して深く掘りこまれており、比高差は約20cmを測る。ＳＴ114との先後関係については、前述のように、この周溝墓が先行すると判断する。また、ＳＴ101との関係については、周溝共有部での土層観察では相互の切り合い関係は認めらないが、埋土の状況から、この周溝墓がＳＴ101に先行する可能性がある。また、ＳＴ237との先後関係については南東辺周溝の土層の状況からみてこの周溝墓がＳＴ237に先行するものと判断される。

**ＳＴ237**(図版第18)　両調査区中央部にありＳＴ236の南側に接する。周溝は北西辺ではＳＴ

236と、南辺ではＳＴ238とそれぞれ周溝を共有する。北東部では溝ＳＤ229やＳＴ227と重複し、中央付近は室町時代の南北坪境道側溝に切られる。平面は台形状を呈し、規模は台状部で約14×11m、周溝外周で約19×15mを測る。南東コーナー付近の周溝が途切れる部分は、周囲の周溝の残りが悪いため陸橋部に相当するかどうかは確定できない。主軸はN15°Wである。主体部は検出されなかった。周溝は残りの良いところで幅約４m、深さ約50cm、その他は幅約1.2m、深さ約30cmを測る。溝の埋土は、上層が淡緑灰褐色粘質土、中層が緑灰褐色粘質土、下層が微砂混じりの緑灰褐色粘質土である。溝の掘形はゆるやかな皿状を呈する。周溝の深さは南西・北東・南辺でほぼ同様であるのに対し、北西コーナー部では浅くなる。北西辺周溝は西で浅く、東に向かって徐々に深く掘り込まれている。隣接する周溝墓との先後関係は周溝の切り合い関係から、ＳＴ236に後出し、ＳＴ238に先行する。ＳＴ238の周溝は共有部分ではＳＴ237周溝よりやや軸を北に寄せて掘り込まれている。南西周溝の中央部付近から頸部が一部欠損する広口壺(153)が出土した。出土状況から、台状部から周溝内に転落した供献土器と思われ、所属時期は中期前半と考える。なお、周溝内からはこのほか縄文時代晩期の土偶(221)が出土している。

**ＳＴ238**(図版第19・68)　ＳＴ237に南接する方形周溝墓である。北辺でＳＴ237南辺周溝と共有し合う。北西部および西辺周溝は室町時代の南北坪境道側溝に切られ、残りはきわめて悪い。西辺周溝は中心付近の約４mを検出したが、この部分においても周溝埋土は底付近の厚さ約30cmを残すのみであり、その上層や西肩は南北道路側溝に破壊されている。南東半は調査区外のため未検出である。推定平面は方形を呈し、規模は台状部で一辺約14m、周溝外周で一辺約16mを測ると考える。主軸はＮ７°Ｗである。主体部は検出できなかった。周溝は残りの良いところで幅約３m、深さ約40cmを測り、埋土は上層が暗緑灰褐色粘土、中層が緑灰色粘質土、下層が緑灰白色粘質土である。この埋土は強い粘性を示しており周溝はこの付近まで常時滞水していた可能性がある。北辺周溝は東端で深度が浅く、中央付近でやや深くなるが、それ以外では、ほぼ同様の深さを保つ。

**ＳＸ106**(図版第17)　調査区中央部のＳＴ101北西部で検出した溝状遺構である。ＳＴ101とＳＴ114との間に挟まれ、両周溝をつなぐかのように半円環状を呈する。西半は調査区外のため未検出である。溝は幅約３～４m、深さ約40～60cmを測り、全周約16mを検出した。溝の深度は南で浅く、北に向かって深くなる。当初、円形を呈する周溝墓の一部とも考えたが、主体部や遺物が認められず性格については不明である。

**(3)溝**

**ＳＤ098**　調査区南部で検出した溝である。「コ」字に柄が取り付いたような平面形状を呈し、主軸は「コ」字部でN60°W、柄状の部分でＮ８°Ｗを示す。南半部は先行のＳＴ119と重複する。「コ」字北西延長部分は中世の溝に切られるが、本来はこの部分を越えて延伸していた可能性がある。規模は「コ」字部で幅約１～３m、深さは約20～30cmを測る。溝の外周部分で約８×８mを測る。また、柄の部分では幅約2.5～１m、深さは約30cmを測り、全長約11mを検出した。断面はゆるやかな皿状を呈し、埋土は、おおむね黒灰褐色粘質土～粘微砂である。この溝について

は、当初ＳＴ119に後出する方形周溝墓を想定したが、出土遺物がなく、平面プランの形状も方形を呈しないことからここでは溝としておく。

ＳＤ099(図版第20・69)　調査区中央南部で検出した溝である。北北西～南南東方向に斜行し、総検出長約52mを測る。その北端、南端はそれぞれ調査地を越えて延伸する。南端は一部中世の溝に切られ、北端は一部弥生中期の方形周溝墓ＳＴ101を切る。幅は北西端部と中央部で約２m、南東端部で約１m、深さは約0.7mを測る。断面は「U」字形を呈し、埋土は暗灰色の粘質土および粘砂質土である。溝の北部や中央部では、これらの埋土が溝の両肩から最深部にかけて交互に折り重なるようにブロック状に堆積する。また北部、中央部の下層や中層位には炭化物を混入する暗灰色の粘質土層が認められる。溝内の南部からは、弥生時代後期後半の体部に粗いタタキを施す甕(119)が口縁部を南西に向け横位でほぼ完形の状態で出土した。出土層は溝上層である。なお、同溝からは中期に属する甕(120)が出土しており、溝の時期については当該期に属する可能性もある。溝の性格については規模、形状から集落の区画溝の可能性も考えられる。

ＳＤ115(図版第20)　調査区中央南部で検出した溝である。北北西～南南東方向に斜行し、ＳＤ099西側を併走する。北西端は調査地外を越えて延伸し、南東端は途絶する。検出長約44m、幅約0.8～1.4m、深さ約20～25cmを測り、断面はコーナーが丸く立ち上がる逆台形状を呈する。埋土は明灰褐色粘質土、淡灰褐色粘質土である。出土遺物はないが、方形周溝墓と同じく方向が北西に斜行することや、その方向がＳＤ099と類似する点から、時期については弥生時代の範疇に含めておきたい。

ＳＤ121(図版第９)　調査区中央北部で検出した、北西～南東方向に斜行する溝である。南端部は室町時代の坪境道側溝ＳＤ090・091に切られ、北端部は調査区外のため未検出である。西壁断面にはこの溝の痕跡が認められ、溝はさらに調査区外に延伸する。検出長は約３m、幅約0.4m、深さ約13～20cmを測り、断面はゆるやかな「U」字形を呈する。埋土は暗青灰褐色粘質土である。溝の主軸はN45°Wである。遺物は出土していない。溝の主軸は、中世のものと異なりこれらに比してやや方位を南西に振る。南東に隣接する方形周溝墓ＳＴ102は、主軸がN40°Wでありこの溝と近似する。両遺構は溝内埋土も近似しており、ほぼ同時期の遺構と思われる。

ＳＤ235　調査区北東部で検出した溝である。北東～南西方向に斜行し、南側は室町時代の溝ＳＤ202・203に切られ、北側は調査区外になる。検出長約４m、幅約１～２m、深さは約30cmを測る。断面はゆるやかな「U」字形を呈し、埋土は上層が暗緑灰褐色粘質土、下層が緑灰褐色粘質土である。南端部分では下層の埋土に地山の黄灰褐色微砂が混じり込んだ様相を呈す。当初、埋土の様相や溝の方向性から方形周溝墓の周溝とも考えたが、南部や西部に周溝を検出し得ず、単独の溝とした。遺物は出土しておらず、時期は確定できないが、埋土が方形周溝墓ＳＴ228と共通することから、弥生時代に所属するものと考えておく。

(4)土坑

ＳＫ100(図版第21・70－(1)・(2))　調査区南部で検出した土坑である。直径約2.2mの楕円形を呈し、深さは約0.6mを測る。東半部分はＳＫ107を切る。断面は逆台形状を呈し、埋土は上か

ら順に暗黒褐色粘質土(第１層)、暗灰褐色粘質土(第２層)、緑灰褐色粘土(第３層)、暗灰褐色粘土(第４層)、暗灰褐色粘質土(第５層)である。埋土は第１・２層がほぼ水平な堆積面を成すのに対して、第３～５層はやや弓なりに下方に落ち込む。土坑の最底部付近から広口壺１個体(124)の破片が出土した。この土坑については、土器の出土状況などから墓壙の可能性も考えられる。出土した広口壺は、弥生中期でもやや古い様相をもち中期前半の時期が考えられる。

ＳＫ107(図版第21・71－(1)・(2))　調査区南部で検出した土坑である。長径約3.4m、短径2.8mを測る隅丸長方形を呈し、長軸の方位は、N62°Eを示す。土坑の北西コーナー周辺部は土坑ＳＫ100に切られる。土坑掘形は２段掘りである。底部は北東半部が平坦面を成すのに対し、南西半部は、すり鉢状の落ち込みを呈する。深さは１段目平坦面までが約10～20cm、２段目平坦面まで約60cm、中央最深部で約70cmである。埋土は上から順に暗黒褐色粘質土(第１層)、黒褐色粘質土(第２層)、暗緑灰色粘土(第３層)、緑灰色粘土(第４層)、暗灰褐色粘土(第５層)、灰褐色粘土(第６層)、茶灰褐色粘砂土(第７層)である。第５・６層からは黒色の炭化物を検出した。内部からの出土遺物はない。土坑の性格については、その埋土堆積や形状からみて墓壙の可能性が考えられる。

ＳＫ109(図版第21・71－(3))　調査区南東部で検出した土坑である。長径約1.5m、短径約0.8mの歪な隅丸長方形を呈し、長軸方向の断面での掘形は、東肩で２段掘り、西方はゆるやかな傾斜を描いて落ち込む。中央部分はピット状を呈する。埋土は下層のピット部分が灰褐色粘微砂土、中層が暗灰色粘質土・暗緑灰色粘土、上層が淡灰褐色粘質土・暗灰色粘質土である。内部から粗いタタキを施す甕の体部片と壺の口縁部が出土した。いずれも細片である。これらは、上層の暗灰褐色粘質土層から出土し肩部から埋土とともに流れ込んだ状況である。時期は弥生時代後期後半に所属するものと考えられる。

ＳＫ239(図版第14・22・67)　調査区北東部で検出した土坑である。長径2.6m、短径1.1mを測る隅丸長方形を呈する。土坑掘形は２段掘りである。主軸は長軸でN70°Eである。深さは１段目テラス下端までで約14cm、底部平坦面で約40cm、最深部で44cmを測る。１段目テラス部は緩斜面を成し、北東部ではそのまま急勾配を描いて底部に落ち込むのに対し、南東部では途中もう１段テラス部を形成し底部へと落ち込む。土坑底部は南西部が北東部に比べて低く、比高差約４cmを測り緩斜面を成す。主な埋土は上から順に暗黒灰褐色粘質土(第１層)、微砂混じり暗青灰褐色粘質土(第２層)、微砂混じり暗青灰緑褐色粘質土(第３層)である。土坑中央部付近の第２層から、広口壺(125)が口縁部を南東に向け横位で、ほぼ完形に近い状態で出土した。この土器を含む周辺部分では明瞭な落ちが観察された。さらに短軸方向の土層断面では第３層が外方に弧を描いて立ち上がるとともに第１～３層と地山との間に微砂混じり暗青灰褐色粘質土(第４・５層)、微砂混じり青灰色粘質土(第６層)、黄灰褐色微砂(第７層)の堆積が観察された。この土坑については、土層堆積が中央部付近で下方に落ち込むこと、底部付近で外方に立ち上がること、土器の出土状況などから墓壙の可能性も考えられる。この場合、第２・３層が棺の痕跡を示すものと思われる。時期は出土した土器からみて中期前半に属するものと考えられる。

**ＳＫ240**　調査地北東部、溝ＳＤ235の西隣で検出した土坑である。長径約２ｍ、短径約80cmの歪な隅丸長方形を呈する。土坑中央部の短軸の断面はゆるやかな「Ｕ」字形を呈し、最深部までは約12cmを測る。埋土は淡青灰褐色粘質土の単一層である。遺物は出土していない。土坑は後世の削平を受け、残存は良好ではないが、削平をうける以前は東西走する溝の一部であった可能性も考えられる。

**ＳＫ241**(図版第21)　調査地北部で検出した土坑である。やや歪な円形を呈し、長径約75cm、短径約65cmを測る。深さ約６cmと浅い。埋土は暗緑色粘質土の単一層である。検出地点付近は中世の溝が縦横に走るなど後世の削平が著しい。土坑底部付近からは広口の壺形土器１個体(126)が出土した。時期は、中期前半と考えられる。

## 第４節　平安時代(図版第２)

### (1)溝

ＳＤ078・085～087・117・244～246(図版第23・75)は、調査区中央部・南部でそれぞれ検出した溝群で、北西～南東方向に斜行し、一部溝端部が「Ｌ」字形に屈曲する。

**ＳＤ078**　検出長約13m、幅約0.8m、深さ約10～30cmを測る。主軸はＮ57°Ｗである。溝は南東でやや浅く、北西に進むに従い深度を増している。断面はゆるやかな「Ｕ」字形を呈し、暗青灰褐色粘質土である。溝の北西部では底部で土坑ＳＫ083を検出した。

**ＳＤ085**　ＳＤ078の南辺で検出した溝である。北西半でＳＤ078と併走し、途中やや北折れに屈曲しＳＤ078に接近する。検出長約14m、幅約50～80cm、深さ約10～20cmを測る。主軸はＳＤ078と併走する北半部分でＮ57°Ｗ、南端部でＮ53°Ｗである。ＳＤ078同様南東でやや浅く、北西に進むに従い深度を増す。断面は逆台形を呈し、埋土は暗青灰褐色粘質土である。

**ＳＤ086**　ＳＤ085・087にまたがって検出した「Ｓ」字形に屈曲する溝である。ＳＤ085・087両遺構に後出する。溝は北西～南東方向に「Ｓ」字を傾けた形状を呈するが、南北両屈曲部は「Ｌ」字形に屈曲し、両端部はそれぞれＳＤ085・087を切る。検出全長約14m、幅約30～50cm、深さ約10cmを測る。溝中央部分の主軸はＮ56°Ｗである。全長にわたってほぼ同様の深度を保つ。断面はゆるやかな「Ｕ」字形を呈し、埋土は、暗青灰褐色粘質土である。

**ＳＤ087**　ＳＤ085の南辺で検出した溝である。ＳＤ085とは溝心々で約5.5mの間隔を保って併走関係にある。検出長約15m、幅約50～70cm、深さ約10～20cmを測る。溝底は、北西隅でやや深くなる。主軸はＮ57°Ｗである。断面は「Ｕ」字形を呈し暗茶褐色粘質土である。

**ＳＤ117**　ＳＤ085の南東辺で検出した溝である。溝は途中までＳＤ085と併走するが、南東半部でやや南に折れて斜行する。検出長約９ｍ、幅約40cm、深さ約10～30cmを測る。溝はほぼ10cmの深さを保つが、南東端部・中央部でこれよりやや深くなる。断面は「Ｕ」字形を呈し、埋土は、暗青灰茶褐色粘質土である。

**ＳＤ244**　ＳＤ245を切って南北～南東方向に「Ｌ」字形に屈曲する溝である。北端部付近でＳＤ246を切り、中央部でＳＤ250に切られる。検出全長約13m、幅約0.3～１ｍ、深さ約10～20cm

を測る。主軸はN58°Wである。断面は中央部がやや突出した逆台形を呈し、埋土は微砂混じりの淡灰褐色粘質土である。

**ＳＤ245**　北西～南東方向に斜行する溝である。中央部でＳＤ250に、北端部でＳＤ244・246に切られる。検出長約７ｍ、幅約50～80cm、深さ約20cmを測り、主軸はN60°Wである。断面は「U」字形を呈し、埋土は淡灰褐色粘質土である。

**ＳＤ246**　ＳＤ244以北で検出した北東～南西方向に斜行する溝である。その南端部はＳＤ244に切られる。幅約50～80cm、深さ約10～20cmを測る。ＳＤ244重複部付近でやや深く、他はほぼ同様の深さを保つ。断面はゆるやかな「U」字形で埋土は灰色粘質土である。この溝はＳＤ244と幅・深さともに近似し、ＳＤ244重複部以南では検出し得ないため、ＳＤ244に先行し、これとほぼ同様の「L」字形に屈曲する溝であった可能性もある。

その他の溝群として調査区東壁付近で北西～南東方向に斜行するＳＤ247～249と北北東方向に方位を振るＳＤ250・251がある(図版第23)。ＳＤ247～249は、いずれも、検出長約６～７ｍ、幅約20～50cmを測る。主軸はN60°Wである。ＳＤ250は検出長約13ｍ、幅約30～50cmを測る。南半部分の主軸はN12°Eである。ＳＤ078を除き、遺物は出土しておらず溝の時期は確定できないが、ほぼ方位を合わせて掘削されており、ＳＤ078とさほど時期は隔たらないと考えられる。周辺の後出する南北溝の主軸が、ほぼ真南北に方位をもつのに対し、これらの溝の方位はN56～60°Wを測り、先行する縄文・弥生時代の遺構の在り方と共通する。

以上のＳＤ085・087、ＳＤ245・247は溝心々間でそれぞれ約5.5ｍ、６ｍを測って併走する。これらの溝は、各組で単独で見れば、斜行する直線道路の南北両側溝の様相を呈する。しかし、ＳＤ085・087やＳＤ245・247の延長線上に乗る溝は周辺になく、直線状の道路を想定することは困難である。これらの溝については久世郡での条里型地割が施工される以前の地割りに関係した溝の可能性も考えられる。

**(2)土坑**

**ＳＫ083**(図版第23)　ＳＤ078の溝北西部の底部で検出した土坑である。不整形な楕円形を呈し、長軸で約1.5ｍ、短軸で約70cm、検出面からの深さ約20cmを測る。短軸で見る断面は「U」字形を呈し、上から順に暗青灰褐色粘質土、灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土がレンズ状を成して堆積する。この土坑については、上層埋土が溝ＳＤ078の埋土と同様の暗青灰褐色粘質土であることや、滞水を推察させる堆積様相などから、この溝と別の遺構とは見なしがたく、溝底部に掘り込まれた土坑または落ち込みと判断する。溝内からは須恵器壺・杯が出土した。出土土器はその特徴から見て、いずれも平安時代前期の９世紀初頭～前半に比定しうるものであり、この溝の肩部から底部に入り込んだものと思われる。

## 第５節　鎌倉・室町時代(図版第２)

**(1)東西溝群**(図版第24・73)

調査区北部で検出した素掘りの東西溝群である。いずれも溝中軸線はほぼ真東西の方位をもち、

溝同士切り合いつつあるいはほぼ一定の間隔を保ち併走する。

**ＳＤ090・091**　両溝は、重複し、調査区西端から中央部西寄りに至る。その東端ではＳＤ213およびＳＤ210に切られ、この部分で止まる。検出長は約12mを測る。先後関係はＳＤ090がＳＤ091に後出する。ＳＤ091埋没後に、その上位からＳＤ090を掘削しており、再掘削されたものとわかる。先行するＳＤ091は残存部で幅約1.4～2.5m、深さ約20cmを測り、断面はゆるやかな皿状を呈する。埋土は青灰色粘質土である。ＳＤ090は、幅約3.2～3.4m、深さは約20cmを測り、断面はコーナー部に丸みを帯びた逆台形を呈する。埋土は暗青灰色粘質土、淡青灰色粘質土である。ＳＤ091からは、土師器皿が出土している。

**ＳＤ202・203**　両溝は、重複しつつ調査区東端から中央部西寄りに至る。ともに検出長約32mを測り、掘形断面はコーナーの丸みを帯びた逆台形を呈する。先後関係では、ＳＤ202が203に先行する。ＳＤ202が埋まった後、ＳＤ203が中軸を揃えて掘削されたため掘形は幅狭くなっている。ＳＤ202は、幅約2.5～４mを測り、埋土は、暗灰色粘質土である。溝西端部で分岐している。溝は本来２条で東西に併走し、掘形の幅も狭く掘られていたと思われる。ＳＤ203は、幅約1.2mを測り、埋土は暗灰色粘細砂である。ＳＤ202に中軸、方位を揃えて掘削されており、先行の溝を踏襲し再掘削したものと考える。遺物はＳＤ202から土師器皿、須恵器壺底部が、ＳＤ203から瓦器椀などが出土した。

**ＳＤ204・208**　溝心々で約１mの距離を保って併走し、ＳＤ202・203同様、調査区東端から中央部西寄りに至り、調査区以東に延伸する。ＳＤ204は検出長で約24m、幅約1.2m、深さ約２mを測り、断面はゆるやかな皿状を呈する。ＳＤ208は検出長約24m、幅約1.4m、深さ20～30cmを測る。断面はゆるやかな皿状である。埋土は灰色・暗灰色の粗砂・細砂・粘細砂で、これらが交互に折り重なった堆積の様相を示す。また、ＳＤ208は中央部西寄りで南北走するＳＤ212とつながっており、両溝は後述するように一連の溝と考える。ＳＤ204から土師器皿、ＳＤ208から土師器皿や信楽焼片口鉢、ウリなどの植物種子、元豊通寶１点が出土している。

以上の東西溝群の位置は、久世郡条里復原案による八条八里十六坪・二十一坪の坪境にほぼ相当する。また、ＳＤ090・091の西壁面には、先述のごとく、現代に至るまで幾度となく掘削が繰り返されたと推定される坪境施設の痕跡が認められた。溝群については、坪境道を構成する南北側溝と判断する。溝には上記のごとく先後の２時期があり、先行、後出の両グループ内で両側溝はそれぞれセット関係をもつものと判断できる。その場合、先行時期では、ＳＤ202とＳＤ204・091が、後出時期ではＳＤ203とＳＤ208・090がそれぞれ北側溝、南側溝として対応する。また、調査区西寄りでは北側溝と見なされる遺構の痕跡は検出し得ず、中央部西寄り付近では側溝は中断あるいは南北溝に合流する。両側溝に区画された坪境道の路面幅は、先行時期で側溝心々間で約５mを、後出時期で約6.5mを測る。ただ、ＳＤ202が２条の溝で構成されたと考えた場合、先行時期の路面幅には側溝心々間で約４mを測る時期があったと推定される。また、南側溝ＳＤ204・208は２条の併走する溝として検出したが、以西に展開するＳＤ090・091と関連して掘削された溝と想定した場合、ＳＤ208の溝幅は本来、ＳＤ204北肩部付近まで広がっていた可能性があ

る。いずれにせよ側溝は時期を違えて繰り返しほぼ同位置に再掘削された様相は窺える。なお、この坪境道は佐山遺跡の調査で検出された里境道ＳＦ125から南にほぼ３坪の位置に相当する。

**(2)南北溝群**(図版第24・73・74－(1))

調査区の北部～南部で検出した素掘溝群である。いずれも溝中軸線は南北の方位をもち、溝同士切り合いつつあるいはほぼ一定の間隔を保ち併走する。調査区の北部では上述の東西溝に直角に交わり、重複あるいは連接する。いずれの溝も東西溝との交点付近をその北端としており、これを越えて北に延伸する痕跡は認められない。

**ＳＤ211・212**　両溝は重複し、調査区北部から南部に至る。南部付近では方形周溝墓ＳＴ238の西辺周溝を切り、東西の道路状遺構に切られる。先後関係はＳＤ211がＳＤ212に先行する。ＳＤ211は、調査区北部から南部にかけて、途中、同方向の溝や土坑に切られながらも約60mにわたって検出した。溝はさらに調査区南壁以南にも延伸する。溝幅は約１m、深さは約40cmを測り、断面は「U」字形で、埋土は暗灰色粘質土および暗緑灰色粘質土である。この溝は、道路状遺構周辺では後代の遺構による削平が著しい。道路状遺構を隔てて南部では幅が広くなり、南部周辺では深さはほぼ40cmを保つものの、幅は約２～３mに広がり、断面は逆台形状を呈し溝底部は暗灰色細砂で埋もれている。溝内からは須恵器杯・壺、信楽焼甕、土師器羽釜、白磁椀のほか土師器皿などが出土した。ＳＤ212は、調査区北部から中央部にかけて約30mにわたって検出した。溝の北端部はＳＤ208の西端部と連接する。溝幅は約２～３m、深さは約20cmを測り、南に行くに従って幅、深さを減ずる。埋土は灰色・暗灰色の粗砂・細砂・粘細砂である。この溝とＳＤ211は、既述のＳＤ090・091に酷似しており、ＳＤ090・091同様、先に掘削された溝の埋没後、この位置を踏襲して掘削された様相が窺える。また、埋土はＳＤ208と同様であり、両溝は一連の溝として掘削され、機能したと考える。溝内の出土遺物としては、須恵器の甕・杯・壺、瓦質土器羽釜、土師器皿、瓦器椀などがある。

**ＳＤ213・214**　調査区北部から南部に至る溝で溝心々で約1.5～３mの距離を保って併走する。ＳＤ214は方位を真南北近くにとり調査区南壁に至る。ＳＤ213は南進するにつれて幅広となり東西方向の道状遺構付近で止まる。ＳＤ213は検出長約40m以上、幅約２～４m、深さ約20cmを測る。断面はゆるやかな皿状を呈し、埋土は暗灰色粘細砂・灰色粘質土である。約40m程検出したが、以南は後世の削平により消失している。また、溝西肩は北端から17m付近で西に張り出しており、溝幅もそれに伴い広くなる。溝底のレベルは、北で低く、南に進むつれ高くなっている。溝内から瓦器片、土師器皿などのほか、溝中央部付近の東肩部から馬の大腿骨と思われる獣骨や円筒埴輪片などが出土した。獣骨は後述するＳＸ226や周辺の市田斉当坊、佐山両遺跡からも出土しており、何らかの目的で埋納されたものと考える。ＳＤ214は、途中で道路状遺構に切られながら、約55mにわたって検出した。幅約１m、深さ約20～30cmを測り、断面は「U」字形を呈する。埋土は、暗灰色粘質土および暗灰色粘砂質土である。溝底のレベルは南北を通してほぼ一定である。溝内からは、瓦器や土師器皿片などが出土した。

以上の南北溝群の検出位置は、久世郡条里復原では八条九里十六坪を東西に２分する位置にほ

ぼ相当する。またこの位置は、佐山遺跡の発掘調査で検出したＳＦ126の推定延長ラインから西に半坪隔てた位置とも合致する。南北溝群については十六坪内を東西に折半する区画溝あるいは坪中央を南北に縦貫する道路両側溝と判断できる。溝には少なくとも２時期の変遷が窺われる。ＳＤ212に先行するＳＤ211は、溝の規模・埋土などの様相がＳＤ214と共通し、両溝は側溝としてセット関係をなすと考えられる。同様にＳＤ212は、規模や南進するにつれて浅くなる点などＳＤ213と共通し、両溝もまた同様なセット関係をもつと考える。道路の路面幅は両側溝心々で先行時期では約４ｍ、後出時期では約５～6.5ｍを測る。

先の坪境道両側溝との関係で見ると、坪境道および南北道路の両側溝が交差する周辺は、幾重にも溝や土坑に切られているが、坪境道北側溝はそれよりやや西に伸びて途絶しており、また南側溝は途中で止まる。また、南北道路両側溝については、坪境道南側溝を越えて北進する兆候は認められなかった。ＳＤ208・212は一連の溝と目され、両道路の側溝機能を有していたと考えられる。すなわち、この周辺が逆「Ｌ」字形をなす両道路の交差点として機能していたと判断する。なお、この交差点以西については坪境道北側溝が検出されなかったが、道路としての機能を考慮すれば「Ｔ」字形の道路交差も想定できる。各道路側溝には先後の２時期があったことはすでに指摘した。坪境道と南北道路の側溝が同時期に機能したとすれば、坪境道北―同南―南北道路東―同西の側溝のセット関係は先行時期でＳＤ202―204―091―211―214、後出時期でＳＤ203―208―090―212―213が指摘できる。ただこれら側溝中ＳＤ208・212は一連の溝と見なしうるものの、ＳＤ213はＳＤ090に後出するなど、一連の掘削と認めがたいものもあり、側溝の掘削には一定の時期幅があったと考えておきたい。また、坪境道と南北道路の路面幅はともに先行時期で約４～５ｍ、後出時期で約５～6.5ｍを測る。先行時期に比して後出時期では、路面幅は若干拡張されているが、各時期での坪境、南北両道路はほぼ同様な規格で敷設された様相が窺われる。

**(3)畝溝**(図版第72)

調査区中央部から南部にかけて、真南北の方位をもつ、畝溝と見られる素掘り溝を多数検出した。これらの溝は、互いに切り合い、間隔を密に南北に縦走する。溝群中には途中途絶するものや南北に縦走するものがあり、複数にまたがり一連の溝と見なし得るものも存在する。溝は併せて約90条を数える。検出長は、短いもので約1.5ｍ、長いもので約62ｍを測る。幅は約10～50cmを測るが、中でも50cm内外の規模のものが最も多い。深さは約10～20cmを測る。溝の断面はゆるやかな「Ｕ」字形を呈するものが多い。これら溝内には灰褐色粘質土、灰黄褐色粘質土、灰色粘質土のいずれかの埋土がほぼ単一で堆積する。埋土の差異は、溝掘削時の時期差を反映するものと考える。溝内出土の遺物は僅少で、明確な時期決定に欠ける。以上の溝については、南北方位をもつことや、形状や規模の点などから久世郡条里型地割りに規制された畝溝と思われる。畝溝はほぼ場所を同じく繰り返し再掘削されており、その検出状況からも連綿と畑地として利用された様相が窺える。出土遺物は、瓦器片、土師器皿片などで、12世紀後半(平安時代後期)から15世紀(室町時代)にかけてのものが混じり、なかには弥生時代中期の土器の破片もある。

**(4)道路状遺構**(図版第26・74－(2))

調査区南部では道路面と認識した東西に連なる盛土を検出した。道路は検出長約12m、路面幅約1.5～２m、高さ約20cmを測る。東西方向から見る道路の断面は台形を呈し、基底部幅で約3.5mを測る。道路は調査区東壁を越えて東に伸びると考えられる。その西寄りで南北走する溝ＳＤ211・214・221のいずれにも後出し、これらの溝検出面より上位に路面は形成される。道路の盛土は主に青灰褐色の粘質土で構成される。道路以南ではこの道路に併走する東西溝ＳＤ222を検出した。溝は検出長で約７m、幅１m、深さ約30cmを測り、西端から東に向かうにつれて、やや幅広となる。断面は逆台形を呈し、微砂混じりの暗灰色・暗青灰色の粘質土で埋まる。溝は西端で、ＳＤ211・214・221に切られるが、この部分は削平により遺構が消失してしまっており、本来はこれらの溝を切って掘り込まれた可能性がある。この溝については、道路の南側溝と断定するには、相対する北側溝を検出し得ないため確証を欠く。この道路とＳＤ211が交差する付近の路面下約20～60cm地点で木組み遺構を検出した。

木組み遺構(図版第26)は、約２m四方の範囲に、北北東に向かって東西に縦２列に木材を集積した状況で検出した。この遺構については溝との配置関係からみて水を南北方向に貫流させるための導水施設と考える。東西の木材集積のうち西列の木材部は、長さ約0.2～1.2m、直径約２～６cmの幹材や枝材数本を、縦または斜めに組み束ねたものである。それらの隙間には長さ約80cm、幅約20cm、厚さ約５cmの板材が縦位に組み込まれており、上位から直径約２～６cmの丸太材数本を杭として、この板材の中央や南端に打ち込み堅固に地面に固定する。また、東列の木材部は、横板を敷き並べた上に縦板１枚を重ね、その周囲に幹、枝材を集め丸太材を打ち込んでいる。板材のうち縦板に利用されているものには上下１対または中央部に、横板に利用されているものには左右１対または片側１方に、直径約６cmの孔があらかじめ穿たれており、この位置にほぼ同径の杭が貫通する。

以上の木材残存部から推察する構造は、直径約６cm、長さ20～60cmの幹材をあらかじめ井桁に組み敷き、その左右の縦材の中央周辺部それぞれに、左右に穿孔した長方形横板材３枚を上から間隔を空けて並べ配し、孔に杭を打ち込み固定する。次にその上から上下に穿孔した長方形縦板材を、先ほどの固定した横板中心付近、上下の穿孔が横板外方に位置するように重ね、孔に杭を打ち込んで固定、さらに縦位にした枝材、幹材数本を周辺に配し、両脇から杭を列に打ち込んで地面に固定するというものである。これらは、溝内にあって土圧、水圧に耐えられるように壁材を補強するためのものと判断する。この木組み遺構は、ＳＤ211と東西道路の交差点付近の路面直下で検出した。既述のＳＤ222との関係で考えると、道路に敷設された暗渠であった可能性も考えられる。

**(5)池状遺構**

**ＳＸ226**(図版第27・76)　調査区北部で検出した池状の落ち込みである。北端は調査区外へ延伸し、南半部は、東西坪境道側溝に切られ、南端は弥生時代の方形周溝墓ＳＴ228北東コーナー部を切る。検出部分の平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西約16m、南北約８mを、深さは最深部で約1.8mを測る。掘形はすり鉢状を呈し、肩部から最深部にかけて下方に弧を描いてゆ

るやかに落ち込む。東西方向の断面形は「U」字形である。埋土は上から暗灰色粘質土(第１層)、暗緑灰色粘質土(第２層)、暗灰～暗灰緑色粘質土～粘細砂(第３層)、暗灰粘細砂～粘粗砂(第４層)、暗緑灰色粘質土(第５層)である。これらの埋土は肩～傾斜部では、ほぼ池底の掘形ラインに沿って弓なりに、その他ではほぼ水平に堆積する。第２・５層の粘質土はいずれも強い粘性を示し、第２層においては、ところどころに粘土や砂質土がブロック状に混入する。第４層の細砂・粗砂は肩部から粘質土の間隙を縫って混じり込み、傾斜変換点付近に至る。特に肩部付近は複雑な混じり込みの様相を呈し、埋没過程において頻繁に崩落を伴ったことが窺われる。この遺構は長期にわたって滞水していたと推察される。遺構の最底部は地山直下の細砂層にまで達しており、この層はこの遺構が掘削された当時には地下水が伏流する滞水層であった可能性が考えられる。[注10] この遺構に関しては、灌漑などのため地下水を得ることを目的とした溜め井と想定しておく。埋土から瓦器椀、土師器皿、獣骨などが出土した。出土遺物の占める割合は、第５層が圧倒的に多い。遺物の所属時期は、おおむね13世紀前半である。これら土器、獣骨の多くは各層の傾斜が変わる付近にまとまって出土する傾向がある。獣骨は馬・犬などであるが馬の占める割合が圧倒的に多い。獣骨の多くは東寄りから散乱した状態で出土した。東半の北壁付近では、東西約2.4m、南北約３mの範囲内に比較的まとまって出土しており、約30cmの厚みで集積した状況を呈している。また、ほぼ池底ラインにそって傾斜面から底部にかけて落ち込むような状況を呈しており、池底より約30～40cm上で出土した。これらの獣骨は、この遺構がある程度埋まった後、肩部から一括して投棄された可能性が高い。これらの獣骨は、多くは散乱し、各骨片部が混じり合う状況を呈している。集積部分においても馬の下顎骨２点が、１点は臼歯を北東に、２点は東に向け、相互に約1.6mを隔て、大腿骨・胸骨・肋骨片などの骨片がそれらに被さるように出土している。獣体の全容をとどめるものはなく、まるごと投棄したとするより、骨片と化したものを投棄した可能性が高い。獣骨は馬を主体とするものであるが下顎骨・大腿骨が多く上顎骨は認められない。下顎骨だけで見れば３頭分に相当する。いずれも中型の老齢馬と推定されるものである。[注11] 取り上げた獣骨片には明瞭な解体痕跡は認められず、この馬が死んだのち、投棄された可能性が窺われる。この遺構が坪境道の交差点付近にあり、さらにその周辺の同時期の坪境道側溝内からも獣骨が出土していることは、池状遺構を掘削後、何らかの理由で獣骨を用いた祭祀を行ったと推察される。近隣の佐山遺跡、市田斉当坊遺跡の調査においても、坪境道やその側溝付近から獣骨や獣骨を埋納する土坑が見つかっている。[注12] また、大阪府池島・福万寺遺跡では、平安時代末期の条里水田跡の坪境区画水路内から、牛の下顎骨や頭骨を埋納した土坑を検出したことが報告されており、[注13] 牛馬の頭骨を用いた古代農耕祭祀との関係が推察されている。[注14] 遺構の時代や規模、獣骨の出土状況や解体痕の有無など池島・福万寺例と本遺構例とでは相違があり、遺構の性格に直結すべきではないが、当該時期の農耕祭祀を考える上で検証材料となるものと思われる。

当時期における検出遺構の状況については以上であるが、ここで再度、調査地西壁の土層堆積状況をみながら坪境道の形成時期と土層との関連について概観しておきたい(図版第74)。各土層の土色の呼名は、図版第25に掲げた番号に準ずる。調査地点の西壁の土層観察では、第２・４層

で２回の土盛りと２回の溝掘削、第６層で１回の土盛り、第７層で１回の土盛り、第８層で１回の溝掘削、第９層で３回の土盛りと２回の溝掘削、第10層で１回の溝掘削が行われている。最も新しい土盛りは第４層上に盛られた１－ｂを基盤とするものでアスファルトを用いる。それに先行する第４層を基盤とするものでは、(１)～(６)が盛土、１－ｂ～ｄが溝埋土である。次の段階では、溝掘削の基盤層は先に同じであるが、溝の掘削は第７層にまで達している。１－ｆ～ｉが、溝の埋土である。第６層では、(７)～(10)が盛土である。第７層では、基盤となる７－ｂ層土を採掘して南裾部から重ね盛ったか、周囲を１段掘り下げて土盛りを成形したと推察する。第８層では、先行する土盛りの南北にそれぞれ溝掘削を行っている。当時期の溝埋土は、７－ｃ～ｅである。また、両溝に挟まれた土盛りは、第９層を基盤に盛られたもので、壁面の土層断面からは、南溝は、幅60cm程度の「Ｕ」字形の断面形を呈する。第９層での土盛りは３回ある。うち、新しいものは(11)～(14)である。次の段階では第９層・(15)・８－ｃを基盤として、土盛り北裾部に溝の痕跡が残る。溝埋土は８－ｇである。さらに次の段階では、(15)を盛土として、南裾部から土盛りが行われている。この段階では、周辺の基盤は土盛り以北でやや低いが、水平に近く成形されている。これに続く段階では(16)を盛土として、北裾部分で土盛りが行われており、以北では、この盛土の輪郭と肩部を連ねた落ち込みの様相が観察される。また、土盛り以南でもやや隔てて、底の浅い溝の痕跡が確認される。以北の落ち込み埋土には８－ｆ、南の溝埋土には８－ｅがそれぞれ比定できる。第10層では、９－ｂを埋土とする溝痕跡、９－ａを埋土とする落ち込み痕跡、９－ｃを埋土とする溝痕跡がある。９－ｂは、室町時代の溝ＳＤ091であり、条里の坪境道の南側溝に比定できる。９－ｃは、弥生時代の溝ＳＤ121である。上述の層序との関係から見て、おおむね第２・４層を基盤とするものは近代以降、第６～８層を基盤とするものは、近世以降、第９・10層を基盤とするものは中世にそれぞれ遡る可能性が考えられる。各期の土盛りは、ほぼ坪境と推定される位置を外れず、土を盛り固めただけの簡便な造作で、高さ約0.1～0.5mを測って繰り返し造成されている。明治22(1889)年測量の地形図[注15]では、この位置は、旧佐山村の果樹園内で南北を画する坪境の破線で表示されており、道路に該当する施設は見いだせないので、これらは畝かあるいは畦道などの簡便な農耕用施設と考える。

（中村周平）

# 第3章　出土遺物

出土遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器などの土器類のほか、土製品、石器、石製品、埴輪、瓦類、漆器、金属製品、銭貨など、各時代にわたる多種のものがある。

## 第1節　土器

### (1)縄文時代(図版第28～39・77～84)

溝ＳＤ229から出土した縄文土器は大きく深鉢形土器と浅鉢形土器に分類できる(第３図)。報告の便宜上、深鉢についてはＡからＨ、浅鉢についてはＡからＤの分類を行った。なお、個体の細部については土器観察表を参照されたい。

**深鉢形土器**

Ａ類：無突帯のもの。個体数は９点と少ない。

Ａ１(１・２)は、口唇部に刻みを持ち、口縁部から胴部の屈曲が「Ｓ」字状をなすもの。口唇部を不規則に刻む。１はユビオサエにより反時計回りに「Ｏ」字形に刻んでいる。胴部に粘土紐輪積み痕を残す。粘土紐の幅は1.5cm前後である。２は口唇部を工具により、反時計回りに「Ｄ」字形に刻んでいる。

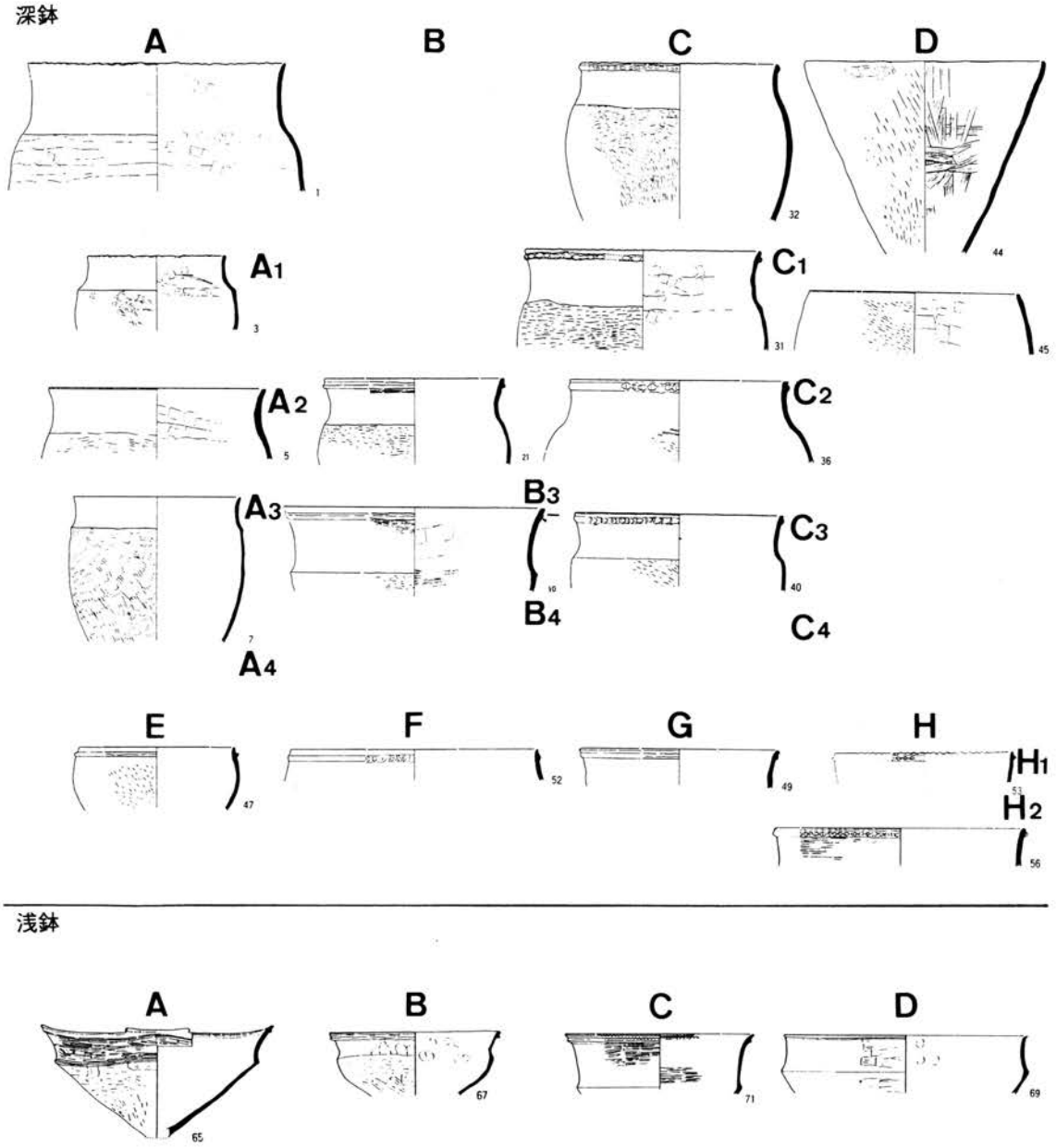
Ａ２(３)は、口唇部に刻みを持ち、胴部の屈曲の明確なもの。口唇部を不規則に刻む。

Ａ３(５・６)は、口唇部に刻みを持たず、口縁部から胴部の屈曲が「Ｓ」字状をなすもの。器壁が比較的厚いもの(５)と薄いもの(６)の２種がある。６は胴部の張り出しは弱い。色調は暗茶褐色を呈している。薄手のものは、外面の頸部以下に密なケズリを施している傾向が窺える。

Ａ４(４・７・８)は、口唇部に刻みを持たず、胴部の屈曲の明確なもの。４は口縁端部を尖り気味におさめている。肩部から体部の屈曲が非常に顕著で、屈曲部内面には条痕状の痕跡を明確に残している。Ａ類の中でも特徴が際だっている。８の胴部の張りはゆるやかである。７・８は体部外面のケズリ調整が密に施されている。ケズリの方向は底部から口縁部へタテあるいは斜め方向に調整したのち、肩部を向かって左から右の横方向を基調に削っている。

Ｂ類：口縁端部外面に貼り付け突帯を持つもの。今回の分類でＢ１およびＢ２の器種は出土していない。

Ｂ３(12・21・22・24～26)は、口唇部に刻みを持たず、口縁部から胴部の屈曲が「Ｓ」字状をなすもの。断面「Ｓ」字状の器形をなし、口縁部外面に無刻み突帯の貼り付くものである。口径は25cm前後のやや小振りなものが多い。21は胴部に丸みを持つ。25・26は磨研土器である。25・26はいずれも内外面にヘラミガキを密に施している。26は頸部と胴部の間にヘラ描き沈線を施している。この２点は小形品で、暗茶褐色の色調をなす。他の個体と異なる様相を示している。




第３図　縄文土器分類図

Ｂ４(10・11・13～16・18・27・101・102)は、口唇部に刻みを持たず、胴部の屈曲の明確なもの。胴部の屈曲が顕著で、口径30cmを越える大型品が多い。10は肩部の屈曲が明確である。内面の屈曲部付近に二枚貝条痕が見られる。口縁部外面に起伏の少ない突帯が貼り付く。11は口径42.2cmを測り、出土した深鉢のなかで最大径である。頸部には二枚貝条痕が見られる。13の肩部はやや不明瞭で、ナデとケズリの調整技法により区分している。胴部のケズリ調整が顕著であり、器壁が薄い。14は屈曲部の内外面に二枚貝条痕調整が見られる。15は肩部の張り出しが顕著である。16は突帯上面の貼り付け部をていねいにナデている。下面は貼り付け痕跡が残り、突帯と器面との境界部に爪圧痕が顕著である。突帯下部に両面穿孔による穿孔がある。口唇部は平坦に仕上げている。18は頸部と肩部との屈曲が顕著である。27は内面に無刻み突帯が貼り付き、更に胴部の屈曲部にも「Ｄ」字形刻みの貼り付け突帯が付く。胴部に突帯を持っているが、内面にも突

帯が貼り付くという古い時期に存在する様相を示しており、特にこの個体が新しいとする根拠はない。内外面に二枚貝条痕が見られる。101・102は方形周溝墓溝内出土である。101の胴部屈曲部は大きく張り出す。102は口径14.6cmを測る小形品である。胴部の張り出しは控えめであるが、頸部はナデ、以下はケズリを施す。内面は二枚貝条痕が屈曲部を中心に残存する。他の個体と胎土、色調とも異なる。

C類：口縁端部外面に貼り付け刻み突帯を持つもの。A類と同様に4類の土器が存在する。

C1(28・29・32・34・35・89)は、口唇部に刻みを持ち、口縁部から胴部の屈曲が「S」字状をなすもの。28は波状口縁であるが、この類に含めた。外面の突帯はヘラ状工具で上下から押出し浮き出させているようである。頸部は沈線ではなく、ヘラ状工具の押し引きによるヨコナデで段を作り出している。兵庫県伊丹市の口酒井遺跡第6・15次調査に類例がある。なお、口酒井例は肩部が1条の沈線である点は異なる。29は口縁部から肩部にかけてゆるやかな「S」字状の丸みを持つ。口縁部外面に横方向の二枚貝条痕ののち、突帯を貼り付けている。突帯上部は工具により端面を持たせナデているが、下部は貼り付け後は未調整である。32は突帯が口縁部に近接している。胎土は砂粒を多く含み、突帯の刻みは磨耗している。肩部から口縁部にかけての立ち上がり幅が狭く、胴部の丸みが強調される器形である。34は貼り付け突帯に比較的かたちの整った「D」字形刻みが反時計方向で刻まれている。35は口縁部のみの破片で、分類のHに含まれる可能性もあるが、この中に含めた。口縁部に近接し突帯が貼り付く。突帯上の刻みは不均衡に「D」字形に刻まれている。頸部には二枚貝条痕が見られる。内面には粘土紐の輪積み痕を残す。89は口縁部を欠損しているが、口縁部外面に「D」字形刻みの突帯を貼り付けている。外面は二枚貝条痕ののち、胴部に二枚貝の先端刺突による連続文を施し、以下横方向を基本としたケズリ調整をしている。

C2(30・31・33)は、口唇部に刻みを持ち、胴部の屈曲の明確なもの。30は突帯が口縁部からやや下がった場所に貼り付き、突帯幅は狭く断面方形をなす。「D」字形刻みは尾を引くように長く、反時計方向に施される。器壁は比較的薄い。31は30と同様に突帯が口縁部からやや下がった場所に貼り付く。突帯の幅が狭く、断面方形をなしている。「D」字形刻みはユビにより刻まれている。胴部のケズリは顕著で、左から右への砂粒の移動が明確に認められる。内面は粘土紐輪積み痕が残る。33は成形された突帯上に尾を引くような長めの「D」字形刻みが施される。刻みの長さは約1.6cmを測る。

C3(36～39・41・42)は、口唇部に刻みを持たず、口縁部から胴部の屈曲が「S」字状をなすもの。36は口縁端部からやや下がった場所に突帯が貼り付き、大振りな「D」字形刻みが施される。胴部の張り出しは顕著であり、丸みを持つ。37は断面台形の貼り付け突帯上に二枚貝の先端による「D」字形刻みが施される。頸部は二枚貝条痕によるナデののち、肩部に半截竹管状工具による「C」字形の連続先端刺突が施される。胎土は精良で色調は黄褐色をなし、河内の土器の可能性がある。38は、胴部からほぼまっすぐに口縁が立ち上がる。頸部にはヘラ状工具の先端により、斜格子文が施される。そののち、口縁部から下がった場所に下垂して斜め方向に貼り付く

突帯が貼り付けられ、突帯上に二枚貝の先端による「C」字形の連続する刺突が施される。なお、図示はしていないが、突帯上を同様のモチーフを施し、頸部に斜格子文を持たない破片も見られる。39は全体に寸詰まりな器形である。頸部および内面に二枚貝条痕が見られる。突帯は口縁部に接するように貼り付き、密に「D」字形刻みが施される。胴部下半はケズリ調整が施されていると思われるが、器表が磨耗しており調整が不明である。41は頸部に二枚貝条痕が見られる。突帯は口縁部に接して貼り付き、密に「D」字形刻みが施される。肩部と胴部との境界はケズリ調整による。42は突帯が磨耗している。

C 4 (40・43)は、口唇部に刻みを持たず、胴部の屈曲の明確なもの。40は突帯が口縁端部やや下がった場所に貼り付き、突帯上を比較的明確に「D」字形刻みが施される。43は口縁端部を尖り気味におさめている。頸部が長く、胴部の屈曲も「く」字状に明確である。突帯は口縁部やや下がった場所に貼り付き、「V」字形刻みが施される。内面には粘土紐巻き上げ痕が残り、屈曲部を中心に二枚貝条痕が見られる。

D類：粗製深鉢で器形が砲弾形または椀形のもの(44・45)。44は1個体のみであるが砲弾形の器形のものである。口縁部から直線的に底部へとすぼまる器形をなす。口縁部外面を横方向にナデ、以下斜めおよび縦方向のケズリを施す。内面は板状工具により、縦・横・斜め方向のナデを施している。45はボール形の器形をなすものである。口縁端部外面に横方向のナデ調整を施し、以下を斜め方向のケズリ調整をしている。内面は板状工具により、ナデ調整を施している。

E類：D類の椀形の器形に無刻み突帯の貼り付くもの。胴部の直線的になるものと丸みを持つものに分けられる(46・47)。46はボール形の器形になるものである。口縁端部外面の下がった部分に紐状の突帯が貼り付く。47は口径20cmの小さなものである。口縁端部は丸くおさめ、端部外面の下がった位置に紐状の突帯が貼り付く。

F類：D類の椀形の器形に、貼り付け刻み突帯を持つもの(52)。1点のみの出土で、一般的なものではないようである。口径は口縁端部外面に「D」字形の刻みを施した突帯を貼り付ける。器表面は磨耗している。

G類：D類の砲弾形の器形に無刻み突帯の貼り付くもの(48～51)。48は口縁端部を外面に折り返したような突帯が貼り付く。外面は横方向のミガキが施される。49は端部外面のやや下がった場所に突帯が貼り付く。内外面ともナデ調整を施す。50は端部外面の下がった場所に断面三角形の突帯が貼り付く。51は口縁端部外面に突帯が貼り付く。この突帯と口縁端部内面にかかるように突起が貼り付く。

H類：D類の砲弾形の器形に、貼り付け刻み突帯を持つもの。口唇部に刻みを施すものと平口縁のものがある。

H 1 (53～55)は、口唇部に刻みを持つもの。53は口縁端部の下がった場所に突帯が貼り付く。54は口縁端部外面に突帯を貼り付け、「D」字形刻みを施す。55は端部外面の下がった場所に突帯を貼り付ける。突帯上は不規則な「D」字形刻みが施される。外面の調整は横方向のケズリが左から右の反時計回りに施されている。

Ｈ２(56)は、口唇部に刻みを持たないもの。外面には二枚貝条痕が施される。外面の突帯は端部のやや下がった場所に貼り付く。突帯上を「Ｄ」字形刻みが施される。

この他、57～63・115～118は深鉢形土器の胴部下半および底部である。57は胴部径21.6cmを測る。胴部の膨らみが見られず、底部に続くことから、Ｇ・Ｈ類の胴部下半になるものと思われる。外面は縦および斜め方向のケズリが施される。58は底径3.5cmを測る上げ底気味の底部である。大半の底部が尖底であるのに対し平底である点は古い要素が含まれているが、比較的小さいことから、浅鉢の底部の可能性も考えられる。胎土に角閃石を含む。59～63は尖底の底部である。深鉢Ａ～Ｃ類の底部になるものと考えられる。60は内外面に粘土紐巻き上げ痕を顕著に残している。115～118は方形周溝墓周溝埋土出土のものである。116は尖底である。比較的底部から急角度で立ち上がり、小形品の可能性がある。胎土中に砂粒を多量に含み、色調は淡黄茶褐色をなす。117は丸底底部である。底部からゆるやかに丸みを持って立ち上がる。外面はケズリを施す。118の底部は粘土板充塡であり、底部に痕跡を留める。

**浅鉢形土器**

Ａ～Ｄの４類に分類した。今回出土した土器のなかには、単純な鉢形を呈する粗製浅鉢は含まれない。

Ａ類：波状口縁で平面形が方形のもの。口唇部にリボン状の突起が付くものがある。突帯は口縁部内外面に貼り付くものと、外面のみのものがある(64・65・67)。64は波状口縁の方形浅鉢である。対角線の長さは30cmを測る。図上復原ではあるが、波頂部にリボン状の突起が付く。突起自体は平板である。口縁部外面に断面三角形の工具で押し出したような突帯を持つ。内面は１条の沈線がめぐる。65は同じく波状口縁の方形浅鉢である。対角線の長さは29.6cmを測る。全体の1/4程度が残存する。口唇部にはやや厚みを持ったリボン状の突起を持ち、左右対象形になるものと思われる。口縁部の突帯は断面三角形で、内外面に貼り付く。外面の調整は口縁部から屈曲部までに横位を主体としたミガキを施し、下半部は横および縦方向のケズリ調整である。Ａ類のなかでも古いタイプである。66は波状口縁の方形浅鉢であるが、波頂部を欠損している。対角線上の長さは26.4cmを測る。口唇部に１条の沈線がめぐる。口縁部外面の調整は横方向のミガキが施される。

Ｂ類：平口縁で口縁部外面に突帯の貼り付くもの。口縁端部から胴部屈曲部までの立ち上がりの短いもの。突帯は外面に貼り付く。67の１点のみである。屈曲部から口縁部の立ち上がりは短く、やや外反する。口縁部外面に断面三角形の突帯を貼り付けている。下半部はＡ類が直線的に底部に繋がるのに対し、丸みを持ち底部に繋がる。外面の調整は上半部が指頭圧痕を残すナデ調整を施し、下半部は板状工具によるケズリ調整を行っている。胎土中に混和材として角閃石を含んでいる。

Ｃ類：平口縁で口縁部外面に無刻み突帯が貼り付き、屈曲の明確なもの。口縁部から胴部屈曲部までの立ち上がりの高さが８cm程度のもの(70～72)。製作技法上、深鉢形土器のＢ類に共通する部分が見られる。70の口縁端部はやや尖り気味におさめる。口縁部外面には断面三角形の貼り

付け突帯が付く。突帯から屈曲部の間に黒色の有機質皮膜が部分的に付着する。内面の屈曲部を中心に二枚貝条痕が残存する。71は口縁端部外面に断面三角形の突帯が付く。口縁部内外面に赤色顔料が残存している。外面は突帯の稜部まで見られ、突帯以下は黒色の顔料状のものが付着する。72は口縁部外面に突帯を持つ。外面の調整はナデ、内面は二枚貝条痕が施される。

D類：平口縁で無突帯、屈曲の明確なもの。口縁部から屈曲部までの立ち上がりが6cm以下のもの(68・69)。

この他、73は、壺形土器と思われる。残存部の最大径は19.1cmを測る。90は体部の破片であるが、口縁部の状況は不明である。調整技法により肩部との境界を作り出す。頸部は横方向の二枚貝条痕が見られ、連続する爪形文が刺突されている。以下は板状工具により、下から上に向かってケズリ調整を行っている。95・96は深鉢形土器の肩部に突帯を持つ資料である。95は突帯稜部が下垂するもので、突帯以下は横方向のケズリを施す。96は突帯上を二枚貝で刻むものである。どちらも口縁部との2条突帯を有する資料と思われる。98は黒色磨研土器である。内外面ともいぶし、ヘラミガキを施している。内外面ともわずかに赤彩が残存している。明確に黒色磨研土器はこの破片のみである。99～118は、方形周溝墓周溝埋土から出土したものである。103・104・107は、突帯上を二枚貝で刻むものである。104は頸部に穿孔を持つ。107は口唇部に「D」字形刻みを施している。105は今回出土した刻目突帯のなかで、「D」字形刻みの長さが約2cm前後と特に長いものである。口縁部のみで、胴部の形態は不明であるが、2条突帯の船橋式土器と併行関係にある可能性を持つ。

(柴　暁彦)

**(2)弥生時代**(図版第40～45・85～88)

弥生土器は、破片も含めコンテナ約30箱出土した。ここでは主に遺構に伴って出土した残存状態の良いものを中心に述べておきたい。

119～123は、SD099から出土した。119は「く」字状に外反する口縁部をもつ小型の甕である。口縁部端部は丸くおさめる。体部は球形の無花果状を呈するが、ややいびつである。底部は平底であるが安定性を欠く。外面調整は右上がりのタタキを施す。胴部外面下半には、粘土を継ぎ足したと思われる横方向の強い指ナデの痕跡が認められる。外面は磨滅が著しい。弥生時代後期後半に属するものである。120も「く」字状に屈曲する口縁部をもつ甕である。口縁端部に刻み目を施す。121～123は、壺または甕の底部である。以上の各土器は、119を除き、おおむね中期に属するものである。

124はSK100から出土した。「く」字状にゆるやかに外反する口縁部をもつ広口壺である。口縁端部は上下方にわずかに肥厚させる。強く張る胴部に、ややすぼまり気味の頸部を付し、胴部下半から底部にかけては、ゆるやかに移行する。口縁端部外面に3～5条からなる櫛描波状文、肩部上半と下半にそれぞれ直線文、波状文を施す。

125はSK239から出土した。口縁部が大きく外反する広口壺である。口縁端部は下方に拡張させる。口縁部下半から胴部上半にかけて5～6条からなる計6帯の櫛描直線文を施す。底部には

木の葉圧痕をもつ。

126はＳＫ241から出土した。口頸部が欠損する壺である。肩部は、ややなで肩で、胴部が強く張る。体部最大径が胴部下半にあり安定感をもつ。底部は突出する平底である。肩部から胴部上半にかけて10条からなる２帯の櫛描直線文を施す。中期の前半に属するものと思われる。

127～129は、ＳＨ094から出土した。127は口縁部が外反気味に直線的にのびた後、口縁部で屈曲し外反する広口壺である。口縁端部は上下方に拡張する。口縁部内面には２個１対の突起を相対する２か所に貼り付け、それらの上位に櫛描扇状文を、また口縁端部外面に扇状文をめぐらせる。肩から胴部上半部にかけて上から簾状文・斜格子文・直線文の順に密に配し、やや間隔を空けたのち直線文と波状文を施す。128は壺または甕の底部である。外方に突出する平底で、厚手に作られる。底部内面には粘土の接合痕や成形時の爪痕がみられる。129は口縁部が「く」字状に強く外反する小形の甕である。球体に近い体部に尖り底の底部をもつ。体部外面は、右上がりのタタキを施す。庄内期に属するものである。

130・131はＳＨ096から出土した。130は、口縁部外端面が下方に垂下する高杯である。杯部内端の突帯は上向きに突出する。外端部には刻み目をめぐらせる。131は器台の脚部である。柱状部に３～４条から成る３帯の櫛描直線文を間隔を空けて配す。

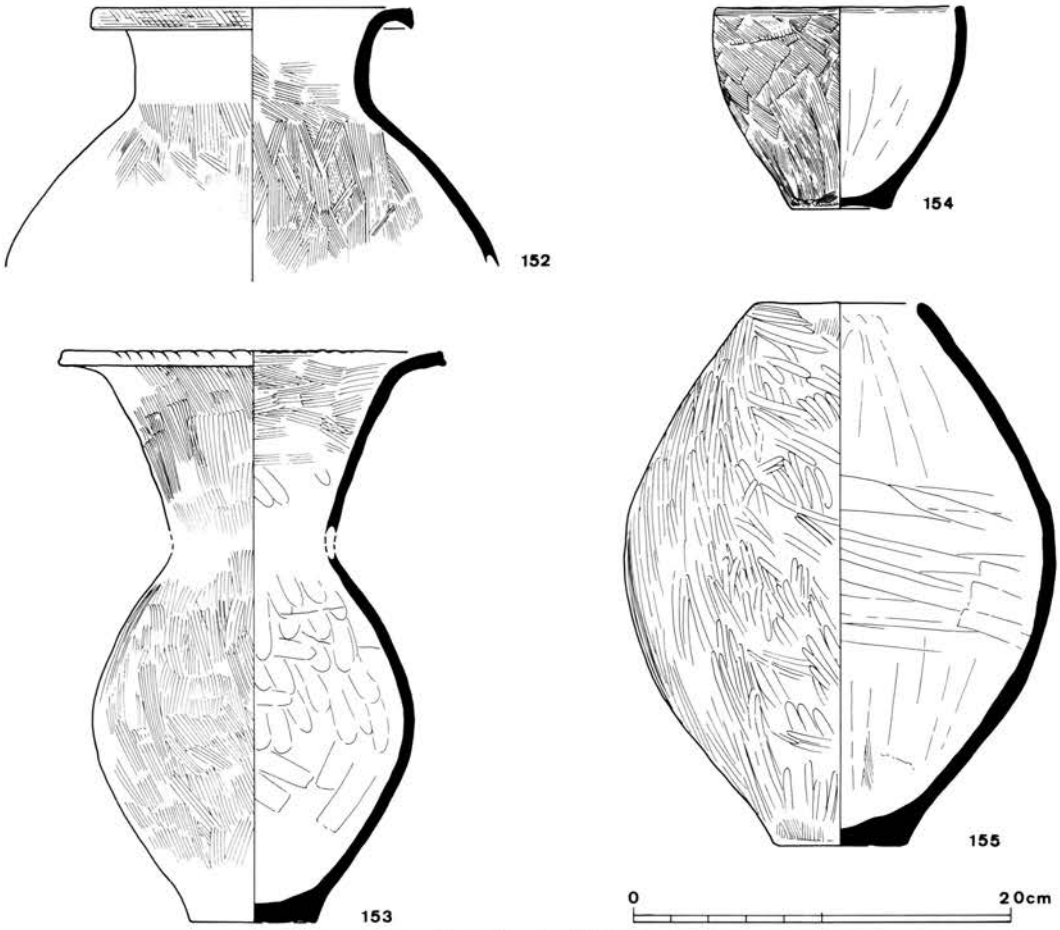
132～140はＳＴ101から出土した。132は、体部から漏斗状に外反する口頸部をもつ大形の広口壺である。底部は外方に突出し、厚底である。底部底面には木の葉圧痕が認められる。133は、算盤玉状に胴の張る体部から外反気味に長く立ち上がる口頸部をもつ細頸壺である。口縁端部は丸くおさめる。近江系土器である。134は細頸壺の口頸部である。口縁部は上端に向かってこころもち内湾し、端部は水平な面を成す。135は大形の広口壺である。口縁部は欠損するが132と同タイプであろう。最大径は体部中央にあり、体部から底部への移行はなだらかである。平底の底部は突出せずに薄くつくられている。136は、外反する口縁部をもつ鉢である。137は、口縁部が「く」字状に外反する甕である。波状口縁をもち、端部は受口状を呈する。口縁端面に沿って刻み目がめぐらされる。肩部外面には６条からなる櫛描直線文がめぐらされるが、途切れており全周する帯を成さない。近江型の甕である。138は、倒鐘形の体部に口縁部が短く開く甕である。口縁端部は丸くおさめる。大和型の甕である。139は壺または甕の底部である。140は、椀状の杯部から水平にのびる口縁部をもつ高杯である。口縁部の内側に１条の突帯を貼り付ける。口縁端部は外方にわずかに肥厚させている。

141～151はＳＴ119から出土した。141は算盤玉状に胴の張った器体に筒状の細い口頸部をもつ細頸壺。口縁部は上端に向かって内湾し、口縁端部は水平な面を成す。頸部外面には５条の凹線文をめぐらせる。肩部から体部上半には３帯の櫛描直線文をめぐらせるが、剝離が著しい。体部下半と底面にはそれぞれ１孔を穿つ。142は摂津型の大形水差し形土器。縦長の扁球状の体部に外開きの長大な口頸部を有するもので、頸部から底部への移行はなだらかである。片口の口縁部をもち口縁端部は水平な面を成す。口頸部上端には３条の凹線文をめぐらせ、片口部周囲の凹線文直下の凸部には刻み目を施す。143は水差し形土器の上半部である。肩の張った体部から短く

直立する口頸部をもつ。口縁端部は水平な面を成し、口縁部には片口をえぐる。口頸部上端には２条の凹線文をめぐらせるが、施文の痕跡は弱い。144も水差し形土器である。算盤玉状の器体に直立する口頸部をもつ。肩部に半環状の把手をもち、この側の口縁部に片口のえぐり部をもつ。145は「く」字状に外反する口縁部をもつ壺である。口縁端部は水平におさめる。口縁下の相対する位置に２孔ずつ計４孔を穿つ。146は壺の体部下半である。147は壺の上半部である。口縁部は「く」字形に近く外反し、端部はわずかに上下に肥厚する。148は「く」字状に外反する口縁部をもつ広口壺である。口縁端部は上下方に肥厚する。体部の最大径は下半にある。口縁部の内面には２列の扇形文をめぐらせ、さらに頸部に１条の櫛描直線文、体部上半から中央にかけて櫛描直線文３帯、波状文２帯をやや間隔を空け、交互にめぐらせる。149は壺である。口縁部は欠損するが広口壺と思われる。体部の成形は凹凸が目立つ。体部の肩から上半に計４帯の櫛描波状文が間隔を空けてめぐらされている。150は脚部の破片である。151は大形の受け口状口縁をもつ広口壺である。外反する頸部から、口縁部は外反したのち上方に短く立ち上がる。体部はやや肩の張った長胴形を呈し、最大径は体部上半にある。口縁の立ち上がりは内傾気味であり、端部は内方にわずかに肥厚する。口縁端部はナデで平滑に成形され、同じく下端も強くナデを施されており端部と下端には明確な稜がみられる。頸部下端部には貼り付けの刻みをもつ複突帯がめぐらされる。後述するように肩部に「シカ」を線刻する絵画土器である。内面の体部上半には指頭圧痕をもつ。このほか、片面の体部全面と反対側の肩部周辺に黒斑がみられる。線刻(第４図)は壺の肩部外面に先の細いヘラ状工具により刻されている。３頭の「シカ」が右向きに疾走する様子を描いたもので、下側中央に１頭、その左右上方に１頭ずつ逆三角形に配置する。３頭中、下部と右上の「シカ」は角部を有し、頸部～体部・四脚・蹄部を刻するが、左上の１頭は角・頸部を略し、四脚の表現も稚拙で、先の２頭とは性格の異なる存在であったと考えられる。「シカ」の体部や周辺にも刻線が見られるが、これらの意味については不明である。以上の土器は、おおむね中期に属するものであるが、口縁部周辺の凹線の有無などから、新しい要素をもつものと旧い要素をもつものに分けることができる。

152(第５図)は広口壺で、口縁部は短く水平に近く外反し、端部は下方に肥厚する。153(第５図)はＳＴ237から出土した。漏斗状の口頸部を有する広口壺である。

第４図　絵画土器拓影(実寸大)




第５図　土器実測図

口縁部は外反したのち屈曲する。口縁端部は上下方にわずかに肥厚する。体部に比し口頸部は太く長大である。最大径は体部下半にある。154(第５図)は鉢である。口縁部は上方に向かってわずかに内湾し端部は水平におさめる。底部はやや上げ底を成す。155(第５図)は無頸壺である。張りの強い体部に、内湾する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。最大径は体部下半にある。154・155の２点は包含層からの出土である。

156～169は、ＳＴ227から出土した。156は、広口壺の口頸部である。口縁部は短く直立したのち外反し、口縁端部は上方に肥厚させ、下方に拡張する。口縁端部に４条の擬凹線文をめぐらせ、その上から円形浮文を貼り付け、さらに内端面に竹管文をめぐらせる。また口縁端部上下にも刻み目を不均等にめぐらせる。頸部下端には段状の突帯を付す。胎土に角閃石のほか小石・砂粒を大量に含む生駒西麓産の土器である。157は広口壺である。頸部は短く直立し、そこから屈曲し水平近く伸びる口縁部をもつ。体部は、扁球状で、突出する底部は上げ底を成す。口縁端部下端に刻み目をめぐらせる。158は広口壺である。口縁部を欠損するが、132・153と類似する器形をもつものと思われる。体部から底部への移行はゆるやかで体部下半に最大径をもつ。底部は突出し厚底につくられる。頸部から体部上半にかけて９帯の櫛描直線文をめぐらせる。159は短頸壺である。やや胴長の体部に、「く」字状に外反し外上方に直線的に開く口縁部をもつ。底部は欠損するが突出した平底と思われる。160は広口壺の口頸部である。口縁部は漏斗状を呈しゆるや

かに外反する。口縁端部は上下に肥厚する。口縁端部に3条の擬凹線文をめぐらせ、その上から円形浮文を等間隔に貼り付ける。161は受け口状の口縁をもつ台付鉢である。扁球状の体部から「く」字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部はやや内傾しながら短く立ち上がる。体部下半には、明確な稜を有する。口縁端部に3条の凹線文、肩部に櫛描直線文、体部中央に波状文をめぐらせ、体部下半の稜には2条の凹線文をめぐらせる。162は把手付き鉢である。扁球状の体部から「く」字状に屈曲し、外上方にのびる口縁部をもつ。体部上半には左右に半環状の把手を貼り付ける。163は横長の扁球状の体部をもつ細頸壺である。口頸部は、体部から直立し、わずかに外方に開く。底部は突出し、わずかに上げ底を成す。口頸部下端では段状の突帯を貼り付け、その上に刻み目をめぐらせる。突帯の外周には、櫛描直線文2帯と波状文を間隔を空けてめぐらせ、さらに直線文の間に円形浮文を飾り、その間に櫛歯列点文をめぐらせる。164は二重口縁をもつ壺である。やや肩の張った扁球状の体部に、内湾したのち屈曲し、さらに外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。165は短頸壺である。球体に近く張った体部に、短く内湾して立ち上がったのち屈曲し外反する口縁部をもつ。口縁端部はやや内湾し、丸くおさめる。口縁部外面に櫛歯列点文、口頸部下端に櫛描直線文をめぐらせ、さらに直線文下位にも櫛歯列点文をめぐらせる。166は短頸壺である。長胴の球体に、頸部で内湾したのち屈曲し、外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。167は細頸壺と思われる壺の口頸部である。口縁端部は丸くおさめるが外方にわずかに肥厚する。頸部上端に擬凹線文、頸部中央に突帯をめぐらせ、突帯の下に6条の直線文を施す。168は脚部片である。裾広がりの筒状を呈し、脚端部は平滑な面に仕上げる。施文は工具による刺突文・櫛描直線文・波状文・直線文を上から順に繰り返し行い、最後に外端部に刺突文を施す。169は甕の底部である。外面に右上がりのタタキを施す。ＳＴ227から出土した土器は、おおむね後期中葉の時期に属するものであるが、158は中期に所属するもので他の遺構からの混入品と思われる。

（中村周平）

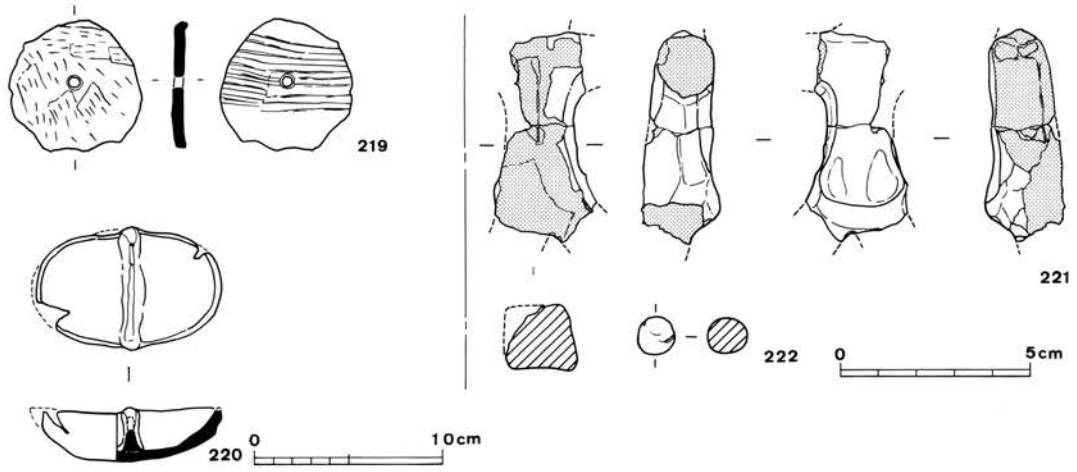
**(3)奈良～室町時代**（図版第46・89）

170・171はＳＤ078から出土した。170は須恵器壺である。171は須恵器壺下半部である。172は「て」字状口縁の高台付土師器皿である。172～182はＳＸ226から出土したものである。173～175は瓦器椀である。173・175は断面三角形の高台が貼り付く。174は断面逆台形の高台が貼り付く。3個体とも内面にやや粗いヘラミガキが口縁端部付近まで施され、見込み部分には簡略化された螺旋状暗文が施されている。176～178は土師器皿である。176・178は口縁端部をやや外反させている。177は斜め上方に立ち上がる。179は瓦器皿である。180は白磁椀である。口縁端部は玉縁である。181・182は灰釉陶器である。181は削り出し高台、182は貼り付け高台である。183は瓦器椀で、ＳＤ203から出土した。184は土師器皿である。185は土師器皿でＳＤ091出土である。186～200はＳＤ211から出土した。186は須恵器杯である。187は須恵器壺底部である。188は緑釉陶器底部である。189～191は土師器羽釜である。口縁端部直下に鍔が付く。192・193は信楽焼甕である。194は瓦質すり鉢である。195・196は白磁椀である。195の口縁端部は玉縁である。196

は底部である。197は白磁皿である。高台内面に墨書がある。198は天目茶椀である。199は須恵器壺底部である。200は土師器皿である。201・202はＳＤ208から出土した。201は土師器皿である。色調は内外面とも暗褐色をなす。202は信楽焼すり鉢である。色調は淡茶灰色である。203～218はＳＤ212出土である。203～207は須恵器である。203は杯である。205・206は壺底部である。207は壺である。焼成がやや甘く、色調は外面が赤灰色、内面は暗赤灰色をなす。208は瓦質羽釜である。209は土師器羽釜である。色調は外面は淡褐色、内面は暗褐色である。210は緑釉陶器で釉の色調は暗緑色である。211は青磁皿である。内面にヘラで文様が施される。212・213は土師器皿である。灯明皿に使用され内外面に煤が付着する。色調は淡褐色である。器壁外面には指頭圧痕に混じって、叉状の工具で押さえた痕跡が見られる。214は瓦器皿である。215・216は瓦器椀である。いずれの個体も内面にヘラミガキが見られる。217・218は青磁椀である。外面に蓮弁文を施す。

## 第２節　土製品(第６図、図版第90)

土製品(219～222)には、土偶・舟形土製品・土錘・土製丸玉がある。219は土器片錘である。直径は約6.9cmを測る。深鉢形土器の転用であり、外面にナデおよびケズリ、内面に二枚貝条痕の調整が見られる。色調は黄灰色を呈する。体部片の中央部に直径約0.5cmの穿孔がある。舟形土製品(220)は平面形が長楕円形をなし、短軸中央部に間仕切り状の桟がある。長軸9.6cm、短軸６cm、高さ2.9cmを測る。時期的にやや先行する可能性はあるが、大阪府東大阪市馬場川遺跡に同様の製品が見られる。土偶(221)は頭部および四肢を欠損している。現存長は5.5cm、幅2.1cm、厚さ２cmを測る。頭部と腕は別作りである。中実であるが、全体に華奢なつくりである反面、臀部は出尻表現でやや写実的である。胴部の欠損部から製作技法が読み取れ、体部は棒状粘土を芯として、全体に粘土を補強して、細部の表現を行っている。胴部の断面形は隅丸方形をなす。色調は黄褐色をなし、胎土に砂粒を含む。222は丸玉である。直径1.1cm程度の球形を呈する。穿孔はない。221以外、溝ＳＤ229の出土で、いずれも縄文時代晩期に属するのもである。




第６図　土製品実測図

## 第3節　石器・石製品(図版第47・90)

石鏃、砥石、黒耀石剥片、結晶片岩の剥片がある。縄文時代晩期中葉には定形的な打製石鏃が見られるが、当遺跡では典型的な石器は出土しておらず、点数も少ない。

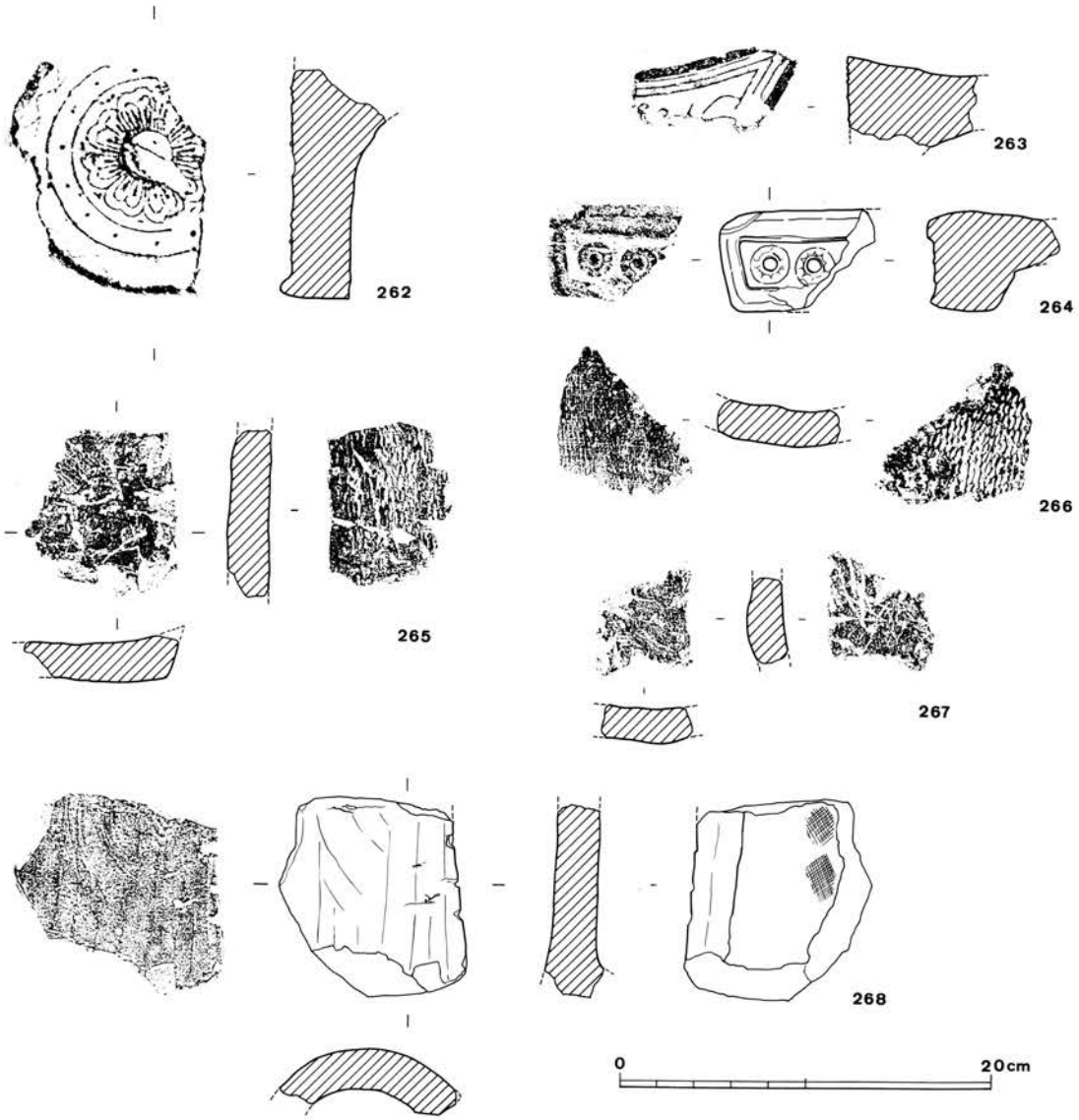
223・224は石鏃である。223は長さ3.8cm、幅1.8cm、厚さ0.6cmを測る。有茎鏃と思われる。側縁部分を剥離調整している。224は長さ2.8cm、幅2.3cm、厚さ0.7cmを測る。両面を剥離調整しているが、厚さがあり、未製品の可能性がある。225は剥片石器であり、石鏃の可能性もある。長さ2cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測る。側縁に剥離調整を行っている。226はスクレイパーである。長さ5.8cm、幅2.4cm、厚さ1cmを測る。刃部は表面を大きく剥離調整し、裏面は小剥離を施している。227・228は楔形石器である。227は縦4cm、横4.3cm、厚さ0.6cmを測る。228は縦2.8cm、横2.2cm、厚さ0.8cmを測る。223～228の石材はサヌカイトである。黒耀石の剥片(229)は使用痕跡は確認できないが、交易品と考えられる。230・231は砥石である。折損品であるが、230は長さ、幅、厚さとも8cmを測る。擦痕のほか、敲打痕が見られる。石材は砂岩である。231は長さ9.2cm、幅10.4cm、厚さ6cmを測る。石材は砂岩である。232は磨石である。長さ1.6cm、幅7.2cm、厚さ2.4cmを測る。被熱赤変している。233は敲石である。長さ5.4cm、幅6.4cm、厚さ5.6cmを測る。残存部の3か所に痘痕状の敲打痕がある。石材は安山岩である。234は石皿である。長さ27.6cm、幅16cm、厚さ6.8cmを測る。表裏面に使用痕としての凹みが残存する。石材は砂岩である。方形周溝墓ＳＴ114の埋土から出土した。

また、図示はしていないが、結晶片岩の破片が数点ある。石材の色調は黄褐色を呈する。結晶片岩の剥片は弥生時代の玉素材の擦り切り施溝具である石鋸の素材剥片状に薄く剥離しているが、縄文時代の遺物として捉えると石棒の破片である可能性もある。このほか、「下呂石」と見られる剥片が1点見られる。

## 第4節　包含層出土の遺物(第7図、図版第48)

包含層からの出土遺物として、円筒埴輪片、石器、石製品、漆器椀、金属製品、軒瓦・丸瓦・平瓦などがあり、ここで一括して述べる。円筒埴輪(235～241)はいずれも外面にタテハケの粗い器面調整を施す。235は胴部径約21cm、残存高8cmを測る。236は胴部径約21cm、残存高5.3cmを測る。237は胴部径18.4cm、残存高4.2cmを測る。238は底径19.8cm、残存高8.2cmを測る。239は底径約10.2cm、残存高4.2cmを測る。6世紀後半に比定できる。242・243は石鏃である。242は長さ6.6cm、幅1.8cm、厚さ0.6cmを測る。形状は柳葉形をなす。先端部と基部を欠損する。243は長さ4.8cm、幅1.8cm、厚さ0.4cmを測る、木葉形である。244は剥片の側縁を剥離調整した剥片石器である。長さ2.6cm、幅1.2cm、厚さ0.2cmを測る。242～244の石材はサヌカイトである。245は石包丁である。長さ7cm、幅3.8cm、厚さ0.6cmを測る。石材は粘板岩である。246は石鋸である。長さ3.4cm、幅1.6cm、厚さ0.2cmを測る。石材は紅簾片岩である。247は紡錘車である。直径4.3cm、厚さ1.2cmを測る。石材は蛇紋岩である。表面全体に成形時の擦痕が残存する。248は長さ、幅とも3.2cm、厚さ0.6cmを測る方形石製品である。側縁3か所に擦り切り施溝の痕跡が残る。

石帯の未製品の可能性もある。249～253は砥石である。249は長さ８cm、幅4.4cm、厚さ3.2cmを測る。側縁３面を使用している。石材は凝灰岩である。250は長さ6.8cm、幅６cm、厚さ２cmを測る。251は長さ5.2cm、幅3.6cm、厚さ1.6cmを測る。252は長さ6.4cm、幅4.6cm、厚さ1.6cmを測る。253は長さ6.8cm、幅６cm、厚さ2.6cmを測る。254・255は漆器椀である。254は口径12.9cm、高さ5.4cm、厚さ0.4cm、底径6.2cmを測る。内面は、くすんだ茶色に近い赤色、外面と口縁端部内側は黒色の漆が塗布されている。255は底径６cm、残存高2.8cmを測る。内外面とも黒漆が塗布されている。剝離が激しく判然としないが、内面の見込み部分には草木が朱漆で描かれている。256は箸である。長さ6.8cm、厚さ0.4cmを測る。257～261は金属製品および銭貨である。257は長さ18.6cm、幅は上部で1.6cm、下部で1.2cm、厚さは上部で1.2cm、下部で0.8cmを測る。タガネ状の製品である。258は火箸である。長さは20.9cm、厚さ0.45cmを測る。現状では「６」字状に折れ曲がっている。259はヤス状製品である。長さ5.8cm、幅3.6cm、厚さ0.8cmを測る。260は不明銅製品である。長さ４cmを測る。261は銭貨である。直径2.34cmを測る。元豊通寶(北宋：1078年初




第７図　瓦類実測図

鋳)である。

**瓦類**(第7図)　軒丸瓦(262)は、直径約15.2cmを測る。瓦当の下側部分が残存する。外区の鋸歯文に沿って圏線が見られる。平城宮式の6291系[注16]と思われるものである。軒平瓦(263)は顎部の脇区と上外区・内区の上半が残存する。同じく、平城宮式6663系と思われる。軒平瓦(264)は有芯円形花文状文様を連続して配する。段顎である。長さ6.8cm、残存高は4.7cmを測る。全体に磨耗が激しく、色調は淡灰色をなす。平安後期に位置付けられると思われる。宇治市平等院境内出土瓦に類似する[注17]。265・266は凸面に縄目タタキを施す平瓦片である。図示はしなかったが、他に斜格子タタキの平瓦片も出土している。268は丸瓦片である。凹面に布目痕をもつ。

(柴　暁彦)

# 第4章　まとめ

## 第1節　遺構の変遷

佐山尼垣外遺跡が所在する久御山町は、山城盆地最低所、旧巨椋池、厚い土砂の堆積といった地勢的要因などから、ほとんど遺跡の存在が知られていない地域であった。しかし、近年、道路建設などに伴い地表下２～３ｍ付近から、古代集落跡などの遺跡の存在が明らかになってきた。今回、発掘調査を実施した佐山尼垣外遺跡も、最近存在が明らかになった遺跡のひとつである。

佐山尼垣外遺跡の調査では、溝・方形周溝墓・竪穴式住居跡・土坑などを多数検出した。それらの遺構は、同時に出土した遺物の検討から、縄文時代・弥生時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代に属する遺構であることが明らかとなった。以下、検出遺構をもとに佐山尼垣外遺跡の時代別変遷を行ってみたい。

**縄文時代**　縄文時代に属する遺構は、調査区中央付近を北西から南東方向に延びる溝ＳＤ229のみである。時期は晩期に属する。溝から出土した土器の考察は別項に詳しいのでここでは省く。調査範囲内に同時期の遺構が他に存在せず、どのような性格の溝か判断が難しい。溝内出土の土器表面に磨滅がみられないことから、調査地近辺に同時期の集落が存在するとみられる。溝内の土器は溝西南斜面部に集中することから、西南側から投棄された状況が窺える。溝の西南側に集落が存在する可能性が高く、溝ＳＤ229は集落を取り巻く環濠の一部であるとも考えられる。

**弥生時代**　弥生時代に属する遺構としては竪穴式住居跡・方形周溝墓・溝・土坑がある。時期は中期～後期に属している。方形周溝墓は、後世の削平を強く受けていたことから、埋葬施設の多くはすでに失われていた。

中期の遺構には、方形周溝墓ＳＴ101・114・119・228・236・237・238と、土坑ＳＫ100・239がある。

方形周溝墓では、周溝を共有するものや単独で存在するものを含め、比較的短期間に連続して造営された様相が窺える。この時期の周溝墓は全体的に規模も大きく、主軸は北から西に振る傾向にある。なかでもＳＴ228・236は、規模・主軸がともに類似しており、造営も同時期性が高い。このＳＴ236の北西・南西・南東辺に、周溝を共有するＳＴ114・101・237が存在する。この３基の周溝墓とＳＴ236の先後関係は、ＳＴ237に関しては周溝埋土の断面観察から切り合いが判明し、ＳＴ237がＳＴ236より後出する。ＳＴ114・101については、周溝共有部の断面観察で明瞭な切り合い関係を認め得ず、切り合い関係の上では先後関係は不明である。しかし、共有関係にある周溝部埋土の断面観察では、ＳＴ236と114では主な埋土が砂質土であり、ＳＴ236と101では灰褐色・黄褐色の粘質土が埋土層を形成していた。これらの埋土層は、周辺で検出したＳＴ236よりも後出の周溝墓周溝埋土と同質であった。この点については、先行した周溝がその姿を残してい

る段階で後出の周溝墓が造営され、周溝の共有を行ったものと判断する。したがって、ＳＴ114・101についてはＳＴ236より後出する可能性が高いと判断する。ＳＴ237・238では周溝共有部断面に明瞭な切合い関係が認められ、ＳＴ238がＳＴ237より後出する。以上の調査結果から、中期段階の方形周溝墓群の主な先後関係は、ＳＴ228とＳＴ236が最も古い段階で造営され、次いでＳＴ101・114・237が造営され、最も新しい造営がＳＴ238であると判断する。ただし、ＳＴ101・114・237相互の先後関係は共有部を持たないことから不明である。なお、同様にＳＴ119はこれらの周溝墓群から西南にやや隔たって存在することから、直接先後関係を明らかにできない。このほか、中期の遺構としてＳＫ239が存在した。検出位置は後期の方形周溝墓ＳＴ227上にあるが、両遺構は時期差があることから直接関連するものでなく、中期前半とみるＳＫ239は単独で造られた土壙墓の可能性が考えられる。

後期段階では、方形周溝墓１基と竪穴式住居跡が不確定なものを含め３基存在する。周溝墓ＳＴ227は調査区中央付近にあって、単独で存在する。規模は中期の周溝墓に比べ小型化し、主軸方位は座標軸からやや東に振っている。竪穴式住居跡のうちＳＨ094とＳＨ095は庄内並行期である。出土遺物がないＳＨ113については時期を特定し得ない。

**平安時代**　佐山尼垣外遺跡では、弥生時代末頃以後しばらくの間、人々の生活活動の痕跡が確認できかったが、平安時代に入って活動が再開されている。しかし以前の古代集落のありようとは異なり、平安時代以降の内容は集落からやや離れた農耕などに伴う生産活動を中心とする土地利用が窺われる。

平安時代の遺構としては、調査区中央付近を南東から北西方向に、直線的に延びる溝群が存在する。同時期の遺構はこれ以外になく、調査区の北部および南部域は空白地帯である。溝群は、併走する状況にもあり、また頻繁な付け替え状況から見ても、道路側溝的な性格を帯びた遺構とみることが可能ではなかろうか。

**鎌倉・室町時代**　調査区内において検出した同時期の遺構はその大部分が溝であり、わずかに土坑や木組み遺構が存在した。溝はおおむね道路側溝と耕作溝に大別でき、このうち道路側溝については、久世郡に施行された条里型地割に関連するものである。また、耕作溝は耕作地である坪内の耕作痕跡である。

久世郡条里は、条は数詞で数え、里は数詞ではなく固有名詞で呼ばれていたようである。このことは『山城国禅定寺田畠流記帳』(注18)に「二条古家里十五坪、拝師郷六条楡田上里・六条上楡田里」の記述が残ることからわかる。久世郡では、条は宇治川左岸付近を起点に東から西に数えるが、現在では個々の里の名称を特定できない。ここでは、通例に従って久世郡の里については、郡境である現城陽市青谷川付近を起点に南から北に数詞で仮称した(注19)。また、里における坪付は、南東隅を一の坪の起点として西に向かい、六坪の後一旦北に上がり七坪から東に向かう千鳥式で数え、最後となる三十六坪は北東隅で終わる(注20)。

今回の調査地は、前述の久世郡条里復原によれば、八条八里十六坪と二十一坪に位置している。調査区北部を東西に走るＳＤ091・204は、十六坪と二十一坪を隔てる坪境道路の南側溝、これに

対する北側溝がＳＤ202に合致する。この道路側溝に接してＳＤ090・208、ＳＤ203が存在し、たびたび坪境が再整備されていたことが窺える。この坪境道には、調査区中央から南に延びる道路と側溝（ＳＤ211・214など）が取り付く。また、調査区南部ではこの南北道路から東方向に延びる道路と側溝が取り付く状況にある。このような坪境道に取り付く道路状遺構は、十六坪内を分割する状況にある。先の南北道路は坪を東西に２分割する位置、さらに坪の東半分を２分する道路と側溝ＳＤ222が存在する。このような坪内を分割する道路は、当初、坪内の地割であった溝や小規模な通路が、次第に坪境道の如く大規模化し、恒常的な道路に移り変わったものとみられる。道路部分に関しては、条里型地割に合致する坪境道が最初に造られ、次いで南北道路、最後に南部で東に延びる道路ができあがった状況が看取される。これらの道路遺構の多くは、その位置を踏襲して調査前まで地表にその姿を残していた。今回検出した坪境道の側溝は室町時代に埋没したものであるが、北に近接して存在する佐山遺跡の調査では、同様な条里型地割遺構から平安時代の遺物が出土していることから、周辺での条里型地割の施行は平安時代に遡る可能性も残る。

以上、簡単ながらも佐山尼垣外遺跡の変遷を概観してきた。今回の調査地点は、古代では弥生時代中期集落の東側縁辺部に位置すると推測される。また、中世では、当地を代表する佐山・佐古の両環濠集落の西に位置し、いずれかの集落に伴う耕作地であったみられる。

（竹原一彦・中村周平）

## 第２節　縄文時代晩期中葉の土器をめぐって

溝ＳＤ229からは、晩期中葉の土器を中心とした遺物が出土している。出土遺物の項で触れたように、いわゆる突帯文土器が主体を占める。また、これらの土器に伴って、突帯を持たない土器もわずかながら含んでいる。(注21)

溝ＳＤ229の埋土の層位は、間層を介して上下２層に分層できるようであるが、第８図からもわかるように、溝の埋土中の資料でもあり、新旧の土器が上層と下層で混在していることを示唆している。このため、ここでは器種別に整理し、土器の様相を探るこことしたい。

当遺跡から出土している土器の器種組成は、深鉢形土器が76.6％で大半を占め、Ｄ～Ｈ類とした深鉢形土器とも浅鉢形土器ともつかないボール状、あるいは砲弾形の器形のもの11.2％、浅鉢形土器10.3％、壺形土器と思われるものが、1.9％ある（付表２）。また、これらの他に、底部が11個体、器種不明が４個体あり、総個体数は122個体である。

深鉢形土器と浅鉢形土器・鉢類の比率は77.5：22.5となる。これを同時期の近畿地方の遺跡と比較してみると、深鉢形土器：浅鉢形土器の比率は、鬼塚遺跡第８次調査(注22)の縄文Ⅲ黒灰褐色粘土で、66.4：33.6、同溝35で72.6：29.4、口酒井遺跡第６次調査(注23)で70：29、京都大学北部構内ＢＤ33区(注24)（以下、京大北部校内とする）のＳＫ05で77.6：22.4となり、当遺跡とほぼ同程度の比率となる。この点については、当遺跡のなかでの傾向であるのか、山城地域に共通する要素であるのか、判断に慎重を要する。

付表２　器種別比率表

| | 個体数 | ％ |
|---|---|---|
| 深鉢 | 82 | 76.6 |
| 鉢形 | 12 | 11.2 |
| 浅鉢 | 11 | 10.3 |
| 壺形 | 2 | 1.9 |
| 合計 | 107 | 100.0 |

第8図　層位別器種構成図

以下、器種別に概観する。

深鉢形土器は水平口縁のものと波状口縁のものがあるが、ほとんどが水平口縁のものである。深鉢形土器の種別組成は付表３に示している。Ａ類は9.5％、Ｂ類35％、Ｃ類42％で、ＡからＣ類の深鉢形土器が76.5％を占め、なかでも、Ｃ類の刻目突帯文土器がわずかに突出していることがわかる。この比率が、Ａ→Ｂ→Ｃの順に古段階から新段階の変遷へと置き換えられるかは、現在のところ不明である。これは、Ａ類がＢ・Ｃ類に先行するか共伴するかによって、佐山尼垣外遺跡の晩期中葉の土器観にかかわり、また、層位的にも上下層で土器組成の明確な違いが認められないことから保留したい。

資料のなかでＡ類とした突帯を持たない深鉢形土器が、個体数として９点見られるが、これらの資料が単独で突帯文土器群に先行する可能性があれば、滋賀里Ⅲｂ式のなかで、近年、家根氏が提唱する篠原式[注25]の土器の範疇に含められる土器群とすることができるが、全体の器形および土器の調整技法を見ると、時期を遡らせる積極的な根拠はない。いずれにせよ、個体数も限定され、比較検討する資料に限界があるため、上記の土器と突帯文土器を含めて突帯文出現期の資料とし

付表３　縄文土器深鉢分類別比率表

| 深鉢 | 刻みの形状 | | 口唇部 | | | | | | 口縁部 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | O字 | | D字 | | なし | | D字 | | V字 | | C字 | | なし | |
| | 個体数 | % | 個体数 | % | 個体数 | % | 個体数 | % | 個体数 | % | 個体数 | % | 個体数 | % | 個体数 | % |
| A類 | 9 | 9.5 | 1 | 10 | 2 | 22 | 6 | 66 | | | | | | | | |
| A1 | 2 | 22 | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | |
| A2 | 1 | 11 | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| A3 | 2 | 22 | | | | | 2 | | | | | | | | | |
| A4 | 3 | 33 | | | | | 3 | | | | | | | | | |
| B類 | 33 | 35 | | | | | | | | | | | | | 33 | |
| B3 | 5 | 15 | | | | | 5 | | | | | | | | 5 | |
| B4 | 6 | 18 | | | | | 6 | | | | | | | | 6 | |
| C類 | 40 | 42 | 1 | 2.5 | 18 | 45 | 21 | 53 | 37 | 93 | 2 | 5 | 1 | 2.5 | | |
| C1 | 3 | 7.5 | | | 3 | | | | 3 | | | | | | | |
| C2 | 3 | 7.5 | | | 3 | | | | 3 | | | | | | | |
| C3 | 5 | 13 | | | | | | | 4 | | | | 1 | | | |
| C4 | 2 | 5 | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | |
| D類 | 2 | 2.1 | | | | | 2 | | | | | | | | 2 | |
| E類 | 2 | 2.1 | | | | | 2 | | | | | | | | 2 | |
| F類 | 1 | 1 | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | |
| G類 | 4 | 4.2 | | | | | 4 | | | | | | | | 4 | |
| H類 | 4 | 4.2 | | | 3 | 75 | 1 | 25 | 4 | | | | | | | |
| H1 | 3 | 75 | | | | | | | 3 | | | | | | | |
| H2 | 1 | 25 | | | | | | | 1 | | | | | | | |
| 合計 | 95 | | | | | | | | | | | | | | | |

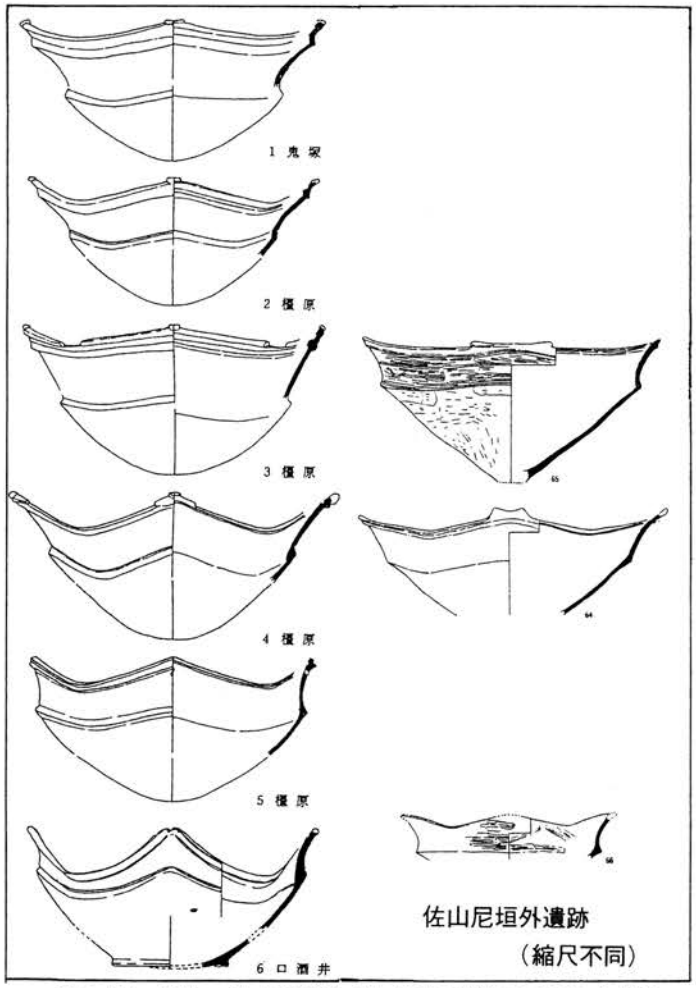
（備考）各分類中での細分個体数は、判別可能な部位が残存する点数を示す。

て把握しておきたい。今後、周辺地域での資料の増加を待って検討する余地を残しておきたい。突帯文土器は繊細な突帯であり、突帯上に刻みを持たないものである。全体に突帯の貼り付く位置は、口縁端部から5㎜程度下がった場所である。突帯の断面形は基本的に三角形である。貼り付けた突帯の上部はナデ付けして、貼り付け痕跡を消しているものが見られるが、下部については、貼り付け痕跡を顕著に留めているものが多く、中には半截竹管状工具の「C」字状刺突、あるいはユビ先端の爪形圧痕を貼り付け部と器面に残す個体も見られる。このB類には口縁端部を刻む資料は見られない。これは他の遺跡でも同様の傾向を示しているが、橿原遺跡には無刻み突帯の資料に口唇部を刻んでいるものがわずかながら見られるため、今回は出土しなかったと考えたい。B類とした無刻突帯文土器が34.7%の比率で出土しているが、京大北部構内の資料では見られないため、当遺跡での特徴と考えられる。また、C類の刻目突帯文土器の体部の球形の丸みは京大北部校内SK05出土土器を含めて、山城地域の特徴といえる。なお、B類のなかに、口縁部内外面に貼り付け突帯を有し、胴部屈曲部に刻目貼り付け突帯を持つもの(27)を含めた。この個体は屈曲部に突帯を持つことでは、後出する口酒井期や船橋式の資料に通じる要素があるが、口縁部内面に突帯を有する、口縁部の突帯が無刻みであることから、突帯文土器の古相と考える。C類は口縁部下に貼り付け突帯を有し突帯上を刻むものである。また、口唇部にも刻みを持つ個体が見られる。突帯の断面は台形状をなしており、突帯の刻目はヘラ状工具や二枚貝を使用している。特に、刻目に二枚貝を使用しているものは37・38・103・104・107がある。また、C類のなかには、土器の器表面の調整技法において、頸部外面に二枚貝条痕を顕著に残す資料(35・39・41・89・90)があり、瀬戸内地域との影響が考えられる土器が見られる[注26]。このC類にはA類同様、1～4に細分のできる資料が出土している。C1類は頸部から口縁部までの立ち上がりの幅が狭く、A1類に肩部から口縁部までの立ち上がり幅が比較的長いものが存在することと比較すると、A類の器形に突帯が貼り付いたのみの単純な変化とは考えにくく、A類とC類の成立は別系譜と思われる。

浅鉢形土器は個体数にして11点程度で、個体比率は9.5%であり、決して多いとは言えない。この器種には波状口縁方形浅鉢形土器と突帯文浅鉢形土器が見られるが、単純な鉢状を呈する粗製浅鉢形土器は出土していない。

**山城地域での突帯文土器期の様相**　山城地域における、突帯文土器期の資料は、当遺跡周辺では宇治市寺界道遺跡[注27]の資料があるが、この遺跡の土器のプロポーションは船橋式的な在地性の強い長原式の時期にあたる資料である[注28]。また、乙訓地域では、鶏冠井遺跡・石田遺跡・今里遺跡・開田城ノ内遺跡などから突帯文土器は出土しているが、鶏冠井遺跡の土器棺墓に使用されたものが、滋賀里Ⅲb式に比定できるほかは、寺界道遺跡同様、長原式に比定される土器である。その他、京都市内の高倉宮下層資料と、京大北部構内の比叡山西南麓の資料まで地域的な空間を埋める遺跡は現在のところ発見されていない[注29]。同時期の資料の出土となると、京都大学農学部の校地の北白川追分町遺跡・京大北部構内BD33区のSK05および包含層の資料となる[注30]。

**佐山尼垣外遺跡の土器の位置付け**　当遺跡の出土土器は大半が深鉢形土器であるが、地域間の

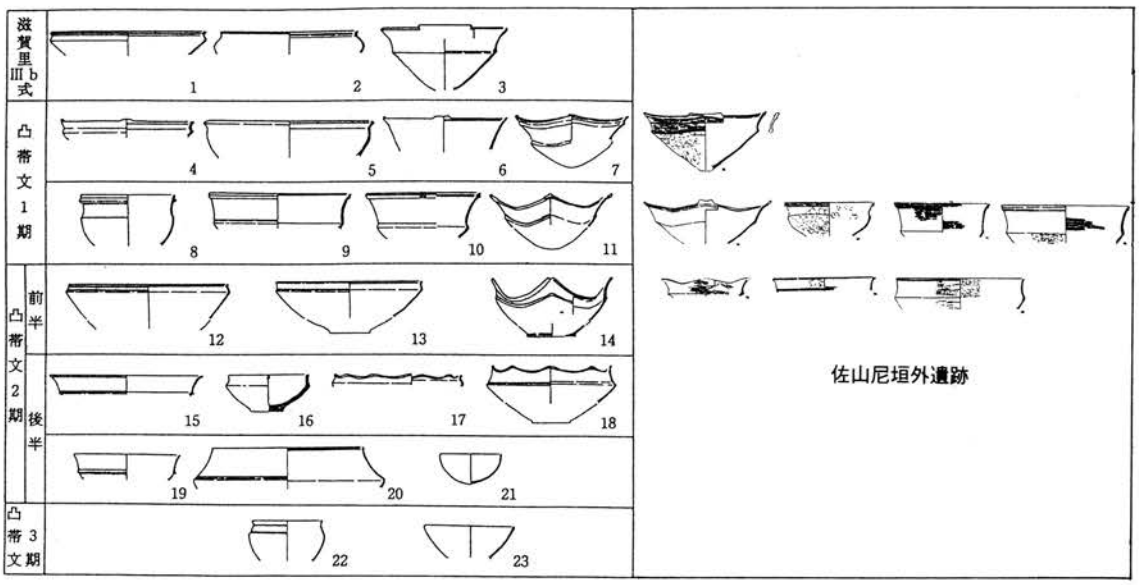



第９図　波状口縁方形浅鉢成立模式図（注31文献に加筆）

土器の併行関係を見るには器形の特徴が顕著になるため、比較的地域間格差が少なく、比較の可能な浅鉢形土器をもって検討したい。

浅鉢形土器には、平面形が方形となり波状口縁状を呈する方形浅鉢形土器と、水平口縁となる浅鉢形土器が見られる。これらは、器形のうえからＡ～Ｄの４つに分類しており、このなかで、時期的変遷をたどると、Ａ→Ｂの変化を遂げることが明確である。

この変遷を泉拓良氏の浅鉢形土器模式図[注31]と当遺跡でＡ類とした方形浅鉢形土器と照合してみると（第９図）、東大阪市の鬼塚遺跡で出土している最古段階と考えられている口縁部で「く」字形に外反する器形の鍵形口頸部浅鉢形土器は、当遺跡からは出土していない。佐山尼垣外遺跡からは、この模式図の第３および第４段階の土器（64・65）が出土しており、また、波状口縁成立期にあたる第５段階の土器には66がある。これらの波状口縁浅鉢形土器に突帯文浅鉢形土器の併行関係を合わせてみると[注32]（第10図）、第４段階の浅鉢形土器には67・70～72が該当する。以上の




第10図　近畿地方突帯文浅鉢の時期細分図（注32文献に加筆）

ように当遺跡の浅鉢形土器の組成が模式図に示した編年観と一致することが確認できる。浅鉢形土器の資料が少ないなかで、細部の検証は不可能であるが、巨視的に見れば、泉氏の浅鉢形土器成立模式図を裏打ちするものと考えられる。すなわち、当遺跡の土器の編年観は浅鉢形土器の器形をもって決定することができる。また、浅鉢形土器には、橿原式文様あるいは東北地方大洞式土器が確認されていない。これら深鉢形土器・浅鉢形土器を含めた土器組成の上から、佐山尼垣外遺跡の土器群が滋賀里Ⅲｂ式のなかで、家根氏の提唱する「篠原式」に遡る可能性は低い。近畿地方を見ても、この突帯文土器出現期前後の資料は少なく、主な遺跡として兵庫県の口酒井遺跡・篠原中町遺跡[注33]、大阪府の鬼塚遺跡Ｆ地点[注34]・恩智遺跡[注35]・森の宮遺跡[注36]、奈良県の橿原遺跡[注37]の終焉期の資料、奈良市秋篠・山陵遺跡[注38]と限定される。この中で、篠原中町遺跡、秋篠・山陵遺跡は滋賀里Ⅲａ式で先行し、口酒井遺跡の資料は時期幅を持っているが、この時期の資料のなかでやや後続する可能性がある。当遺跡の深鉢形土器の器形は、河内の土器と近江の土器との折衷形と捉えられ、深鉢形土器頸部と胴部の境界は稜を形成せず、「Ｓ」字状にゆるやかに移行する点、丸底底部が多数を占めることは、時期的な問題を含んでいるが、近江地域の滋賀里Ⅳ式[注39]の影響を受けていると考えたい。大きくは比叡山西南麓の土器に共通する。時期のうえで、具体的には鬼塚遺跡・恩智遺跡の新相の第４層出土土器と、口酒井遺跡で出土している資料の古相と併行関係があると考えられる。また、山城地域では京大北部構内ＳＫ05[注40]と同時期と思われる。ただ、先に述べたＢ類の無刻突帯文土器が相当数存在し、篠原式の系譜を引くと考えられるＡ類に続く土器群として位置付け、ＳＫ05出土資料のやや古相となると判断したい。以上を総括して、佐山尼垣外遺跡の土器群は、大枠の編年では滋賀里Ⅲｂ式期からⅣ式期、換言すれば突帯文土器出現期の資料として位置付けたい。あわせてこれらの土器群に方形周溝墓の溝埋土から出土した、船橋式様相のある土器が一部ではあるが含まれるといった評価をしておきたい。当遺跡の資料は溝ＳＤ229の一括資料であり、資料的価値は高い。しかし、土器の出土点数が限定されるため、多くを語ることはできないが、山城地域南部での晩期中葉の土器様相を明確に示唆していることに代わりはない。佐山尼垣外遺跡の立地する場所は現在木津川の右岸堤防から約８kmほど北側の標高約９～10m前後の場所である。そのさらに北側には巨椋池が存在していた場所であり、以前は遺跡の存在しない地域のように捉えられていたが、巨椋池の汀線にあたる場所では、市田斉当坊遺跡のような弥生時代中期の大規模集落が発見されており、佐山尼垣外遺跡周辺も微高地上にあたり、当遺跡周辺に晩期の集落が眠っている可能性は十分ある。いずれにせよ、沖積地における縄文遺跡の立地については認識を一新する必要がある。

（柴　暁彦）

注１　京都国道工事事務所『40年のあゆみ』　近畿地方建設局京都国道工事事務所　2000

注２　(A)「第二京阪自動車道関係遺跡平成９年度発掘調査概要(2)佐山遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第84冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998、(B)「国道１号京都南道路関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第90冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999、(C)「国道１号京都南道路関係遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第95冊　(財)京都府埋蔵文

化財調査研究センター）　2000

注３　(a)竹原一彦「市田斉当坊遺跡の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第72号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999、(b)「市田斉当坊遺跡第２次Ｃ２地区」（『京都府埋蔵文化財情報』第75号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000、(c)「佐山尼垣外遺跡」（『京都府埋蔵文化財情報』第75号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000、(d)「佐山遺跡」（『京都府埋蔵文化財情報』第75号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000、(e)「市田斉当坊遺跡Ｄ地区」（『京都府埋蔵文化財情報』第76号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000、(f)竹原一彦・野々口陽子「佐山遺跡の発掘調査」（『京都府埋蔵文化財情報』第77号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000

注４　平成11年度国道１号京都南道路関係遺跡調査参加者(順不同・敬称略)

**調査補助員**　福嶋美保・川嶋聰子・永田優子・庄司友明・木下亮・殿井恵・佐伯光祥・村山和幸・近藤奈央・澤井亮佑・馬場順平・南部勝・田中由美・谷口梢・汐碇誠・渋田和昌・遠山昭登・李義之・鈴木香織・安達華孝・伊豆元みずえ・岡井宏文・堀大介・横井宏行

**整理員**　中島恵美子・西村香代子・松下道子・栃木道代・山中道代・与十田節子・福田玲子・森田千代子・奥平廣子・辻井和子・井上聡・川嶋聰子・山崎美智子・西島真由美・小西ひとみ・服部喜代子・竹内和子・梅本真理子・繁田真理・長井謙治・田中由美・盛本照代・江口美由紀・尾崎嘉

注５　京都府山城土地改良事務所『巨椋池干拓地のいま』　1997

注６　城陽市教育委員会『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第38集　2000

注７　『内里八丁遺跡Ⅰ』（『京都府遺跡調査報告書』第26冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999

注８　注２(B)・(C)に同じ

注９　遺構の状況については、中村周平「国道１号京都南道路関係遺跡(3)佐山尼垣外遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第95冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000で概略を報告しているところであるが、記述に異なる点があれば、本書をもって正式な報告としたい。

注10　立命館大学河角龍典氏のご教示による。

注11　出土獣骨については奈良文化財研究所松井章氏のご教授を得た。

注12　注２(C)参照

注13　(財)大阪文化財センター『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸＩ』　1995

注14　松井章「池島・福万寺遺跡の動物遺存体」（『池島・福万寺遺跡発掘調査概要ＸＩ』　(財)大阪文化財センター）　1995

注15　参謀本部陸軍部測量局・大日本測量(株)資料調査部複製『京阪地方仮製貳萬分壱地形図』

注16　奈良国立文化財研究所『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』　1996

注17　報文中では、軒平瓦Ｆ型式としている。杉本宏ほか「平等院旧境内遺跡発掘調査概報－主要地方道大津南郷宇治線新設改良工事に伴う発掘調査－」（『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第22集　宇治市教育委員会）　1993

注18　『平安遺文』２－408号

注19　条里の列びについては、坪数詞の列び方向に連動している。この場合、久世郡では条は東から西に、里は南から北に向かって数えることになる。

注20　坪付については、久御山町域では市田地区に「一ノ坪」と「五ノ坪」、野村地区で「井ノ坪」の小字名が現在に残る。市田地区の「五ノ坪」が本来の八条八里「三十五ノ坪」から、野村地区の「井ノ

坪」が十条九里「一ノ坪」から後世に小字名が転じたとみた場合、これらの坪名は千鳥式の坪付に合致する。

注21　以前の晩期の編年によると、滋賀里Ⅲから Ⅳ式に併行する段階である。資料については立命館大学家根祥多氏のご教示を得た。

注22　福永信雄ほか『鬼塚遺跡第８次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会　1997

注23　浅岡俊夫ほか『口酒井遺跡　第１次～第10次・第12次～第16次調査の概要』伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会　2000

注24　千葉豊ほか「京都大学北部構内ＢＤ33区の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』1987年度京都大学埋蔵文化財研究センター)　1987

注25　家根祥多「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討－」(『縄紋晩期前葉－中葉の広域編年　平成４年度科学研究費補助(総合Ａ)研究成果報告書』)　1994

注26　間壁忠彦ほか『広江・浜遺跡』(『倉敷考古館研究集報』第14号　倉敷考古館)　1979

注27　南博史ほか「縄文時代の遺物」pp.145～157(「寺界道遺跡」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集　宇治市教育委員会)　1987

注28　中川和哉ほか『下植野南遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第25冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1999

注29　中村健二「近畿地方における凸帯文土器資料の現状」pp.146～183(『突帯文土器から条痕文土器へ』突帯文土器研究会)　1993

注30　千葉豊ほか「北白川追分町遺跡の発掘調査」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和59年度　京都大学埋蔵文化財研究センター)　1984、泉拓良ほか『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ　京都大学埋蔵文化財研究センター　1985

注31　小林達雄ほか『縄文土器大観４　後期　晩期　続縄文』　小学館　1989

注32　泉拓良「西日本凸帯文土器の編年」(『文化財學報』第八集　奈良大学文学部文化財学科)　1990

注33　注25に同じ

注34　福永信雄ほか『鬼塚遺跡第８次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会　1997

注35　嶋村友子ほか『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ－恩智遺跡の調査－』(『八尾市文化財調査報告』14　八尾市教育委員会)　1987

注36　松尾信裕ほか『森の宮遺跡Ⅱ』　(財)大阪市文化財協会　1996

注37　末永雅雄『橿原』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第17冊)　奈良県教育委員会　1961

注38　角南聡一郎ほか『秋篠・山陵遺跡』　1998

注39　田辺昭三編『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会　1972

注40　泉拓良ほか「北白川追分町遺跡出土の縄文土器」(『京都大学埋蔵文化財調査報告』Ⅲ　京都大学埋蔵文化財研究センター)　1985

付表4　出土遺物観察表1（縄文土器）

| 番号 | 器種 | 分類 | 口径 | 口唇部刻み | 突帯の形態 | 外面の特徴 | 内面の特徴 | 色調（外面／内面） | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 深鉢 | A1 | 33.2 | O字 | | 上半　ヨコナデ 下半板ナデ | ナデ | 黄灰褐色／暗灰色 | 砂粒含む |
| 2 | 深鉢 | A1 | 34.8 | D字 | | 上半ヨコナデ 下半　横斜めケズリ | ヨコナデ | 黄茶褐色 | 砂粒含む |
| 3 | 深鉢 | A2 | 17.8 | D字 | | 上半ヨコナデ 下半横斜めケズリ | 屈曲部強い板ナデ下半ケズリ | 淡灰褐色／暗灰色 | |
| 4 | 深鉢 | A4 | 35.5 | | | 上半ヨコナデ | 屈曲部強い板ナデ下半ヨコナデ | 暗褐色 | |
| 5 | 深鉢 | A3 | 27.0 | | | 上半ヨコナデ 上半部に粘土巻き上げ痕下半ケズリ | 板ナデ | 淡褐色／暗褐色 | 外面煤付着 砂粒含む |
| 6 | 深鉢 | A3 | 23.0 | | | 上半ヨコナデ下半横斜めケズリ | ナデ | 内外面 | 外面煤付着 |
| 7 | 深鉢 | A4 | 21.8 | | | 上半ヨコナデ下半横斜めケズリ | 上半ヨコナデ下半斜めナデ | 茶褐色／暗黄褐色 | 外面煤付着 |
| 8 | 深鉢 | A4 | 25.0 | | | 上半ヨコナデ下半横斜めケズリ | 上半板ナデ下半ヨコナデ | 茶褐色／暗黄褐色 | |
| 9 | 深鉢 | | 20.8 | | | ヨコナデ | ヨコナデ | 淡褐色 | |
| 10 | 深鉢 | B4 | 33.8 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリ | 上半板ナデ下半屈曲部強い板ナデ | 淡褐色／内黒灰色 | |
| 11 | 深鉢 | B4 | 42.2 | | 貼付無刻 | 上半二枚貝条痕下半ケズリ | 上半板ナデ下半二枚貝条痕 | 暗褐色／黒灰色 | |
| 12 | 深鉢 | B3 | 32.3 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリ | 上半ナデ屈曲部二枚貝条痕下半ヨコナデ | 淡褐色 | |
| 13 | 深鉢 | B4 | 26.1 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリ | ナデ | 淡灰褐色 | |
| 14 | 深鉢 | B4 | 28.0 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリ | ヨコナデ | 突帯稜まで黒灰色以下淡褐色／黒灰色 | |
| 15 | 深鉢 | B4 | 27.2 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリ | ヨコナデ　屈曲部板ナデ | 褐色／淡灰褐色 | 外面煤付着、鍔状突帯 |
| 16 | 深鉢 | B4 | 28.6 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ口縁端部拡張、突帯下部連続爪形刺突 | 板ナデ | 淡灰褐色／淡黒灰色 | |
| 17 | 深鉢 | | 28.6 | | 貼付無刻 | ヨコナデ | ヨコナデ | 淡褐色／口縁淡褐色以下淡黒灰色 | |
| 18 | 深鉢 | B4 | 30.0 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリ | ヨコナデ | 突帯稜部黒灰色、以下淡褐色／淡黒灰色 | |
| 19 | 深鉢 | | 27.8 | | 貼付無刻 | ヨコナデ | ヨコナデ | 淡茶褐色／淡灰褐色 | |
| 20 | 深鉢 | | 27.6 | | 貼付無刻 | ヨコナデ突帯下部連続ユビオサエ | ヨコナデ | 淡茶灰色／黒灰色 | 端部強調 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 深鉢 | B3 | 23.0 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリ | ヨコナデ | 淡茶灰色、黒灰色 | 突帯貼り付け部棒状工具によるヨコナデ |
| 22 | 深鉢 | B3 | 21.6 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリか | 横・斜めナデ | 黒茶色／黒灰色 | 突帯部ヨコナデ |
| 23 | 深鉢 | | 18.4 | | 貼付無刻 | ヨコナデ | ヨコナデ | 淡褐色／淡灰褐色 | |
| 24 | 深鉢 | B3 | 18.2 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ下半ケズリ | 下半板ナデ器表磨滅 | 暗茶褐色／黒灰色 | 外面煤付着 |
| 25 | 深鉢 | B3 | 14.4 | | 貼付無刻 | ミガキ | ミガキ | 暗茶色／暗黄灰色 | |
| 26 | 深鉢 | B3 | 15.2 | | 貼付無刻 | ミガキ、屈曲部1条沈線 | ヨコナデ | 暗茶灰色／黄茶灰色 | |
| 27 | 深鉢 | B4 | 34.6 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ、下半ケズリ、胴部D字 | ヨコナデ、貼付無刻 | 黄茶灰色 | 胴部屈曲部刻目突帯 |
| 28 | 深鉢 | C1 | 31.4 | | D字 | 上半ナデ、屈曲部強いヨコナデ、下半ケズリ | ナデ | 暗茶褐色 | |
| 29 | 深鉢 | C1 | 31.0 | D字 | D字 | 上半ヨコナデ、下半横・斜めケズリ | ヨコナデ | 黄茶色 | |
| 30 | 深鉢 | C2 | 33.8 | D字 | D字 | 上半ヨコナデ、下半ケズリ | ヨコナデ | 明褐色／淡黒灰色 | |
| 31 | 深鉢 | C2 | 30.7 | 浅いD字 | D字 | 上半ヨコナデ、下半ケズリ | ヨコナデ | 上半明褐色、下半茶灰色／淡黒灰色 | |
| 32 | 深鉢 | C1 | 25.0 | 浅いD字 | D字 | 上半ヨコナデ、下半ケズリ | 上半ヨコナデ、下半タテナデ | 淡茶灰色／上半淡黄灰色、下半淡茶灰色 | 外面煤付着、突帯磨耗 |
| 33 | 深鉢 | C2 | 28.2 | 浅いD字 | D字 | 上半ヨコナデ、下半ケズリ | ヨコナデ | 明褐色／暗茶灰色 | 外面煤付着 |
| 34 | 深鉢 | C1 | 26.6 | D字 | D字 | 上半ヨコナデ、下半ケズリ | 上半ヨコナデ、下半板ナデ | 暗茶灰色 | |
| 35 | 深鉢 | C1 | 35.2 | D字 | D字 | 二枚貝条痕ヨコナデ | ヨコナデ器表磨耗 | 黄茶色／暗茶灰色 | |
| 36 | 深鉢 | C3 | 28.5 | D字 | D字 | ヨコナデ | ヨコナデ | 黄褐色／黄灰色 | |
| 37 | 深鉢 | C3 | 29.1 | | D字 | 上半二枚貝条痕、体部半截竹管刺突、下半ケズリ | ヨコナデ | 黄褐色／黄灰色 | 二枚貝刻み |
| 38 | 深鉢 | C3 | 24.8 | | C字 | ヨコナデ | ヨコナデ | 黄灰色／淡灰褐色 | 二枚貝先端刺突、頸部斜格子文 |
| 39 | 深鉢 | C3 | 28.4 | | D字 | 上半二枚貝条痕、下半ケズリか器表磨耗 | 上半板ナデ、屈曲部条痕、下半二枚貝条痕 | 暗黄灰色 | |
| 40 | 深鉢 | C4 | 27.0 | | D字 | 上半ヨコナデ、下半ケズリ | ヨコナデ | 茶灰色／暗茶灰色 | 外面煤付着 |
| 41 | 深鉢 | C3 | 36.0 | | D字 | 上半二枚貝条痕、下半ケズリ | 上半板ナデ、下半ケズリ | 黄灰色／暗黄灰色 | |
| 42 | 深鉢 | C3 | 30.8 | | D字 | ヨコナデか、器表磨耗 | 板ナデ | 黄灰色／黒黄灰色 | |
| 43 | 深鉢 | C4 | 26.6 | | V字 | 上半条痕のちナデ、下半ケズリ | 上半ヨコナデ、下半板ナデ | 黄灰色 | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44 | 深鉢 | D | 30.8 | | | 端部下ヨコナデ、ケズリ | 板ナデ | 茶灰色／黒灰色 | |
| 45 | 深鉢 | D | 27.4 | | | 端部下板ナデ、以下タテ・斜めケズリ | ヨコナデのち板ナデ | 暗茶灰／黄黒灰色 | |
| 46 | 深鉢 | E | 37.8 | | 貼付無刻 | 突帯上下ヨコナデ、以下ケズリ | ナデ | 茶灰色／暗灰褐色 | |
| 47 | 深鉢 | E | 20.0 | | 貼付無刻 | 突帯部ヨコナデ、以下ケズリ | ナデ器表磨耗 | 淡茶灰色／淡灰茶色 | 外面煤付着 |
| 48 | 深鉢 | G | 28.0 | | 貼付無刻 | ミガキ | ヨコナデ | 端部淡黒灰色、以下黄灰色 | |
| 49 | 深鉢 | G | 25.2 | | 貼付無刻 | ナデ、器表磨耗 | ヨコナデ | 黄灰色／淡黒灰色 | |
| 50 | 深鉢 | G | 22.6 | | 貼付無刻 | ヨコナデ | ヨコナデ | 茶灰色／淡灰褐色 | |
| 51 | 深鉢 | G | 22.6 | | 貼付無刻 | ヨコナデ | ヨコナデ | 暗黄灰色／黒灰色 | |
| 52 | 深鉢 | F | 32.0 | | D字 | ナデか、器表磨耗 | ナデか、器表磨耗 | 淡茶灰色 | |
| 53 | 深鉢 | H1 | 22.8 | | D字 | ヨコナデ | ナデ | 淡褐色／黄黒灰色 | |
| 54 | 深鉢 | H1 | 19.4 | D字 | D字 | 板ナデ、口唇部に黒斑あり | ヨコナデ | 暗黄灰色／黄灰色 | |
| 55 | 深鉢 | H1 | 25.6 | D字 | D字 | 突帯部ナデ、以下ケズリ | 板ナデ | 淡茶灰色／黄黒灰色 | 外面器表に葉脈痕あり |
| 56 | 深鉢 | H2 | 32.0 | 浅いD字 | D字 | 二枚貝条痕 | 板ナデ | 淡灰褐色／暗黄灰色 | |
| 57 | 深鉢 | | | | | ケズリ | 板ナデ | 黄灰色／茶灰色 | |
| 58 | 底部 | | | | | ケズリ | ナデ | 茶灰色／暗茶灰色 | |
| 59 | 底部 | | | | | ナデか | ナデか | 茶灰色／暗茶灰色 | 胎土に角閃石を含む |
| 60 | 底部 | | | | | | ナデ | 黄灰色／暗黄灰色 | |
| 61 | 底部 | | | | | | | 黄灰色 | |
| 62 | 底部 | | | | | | | 黄灰色／暗茶灰色 | |
| 63 | 底部 | | | | | | | 黄灰色 | |
| 64 | 浅鉢 | A | 30.0 | | 貼付無刻 | ナデか、器表磨耗 | 端部1条沈線、ナデか | 暗黄灰色／黄灰色 | 方形浅鉢 |
| 65 | 浅鉢 | A | 29.6 | | 貼付無刻 | 上半ヨコナデ、下半ケズリ斜めのち横 | ナデ | 暗黄灰色／黄黒灰色 | 突帯上部強いヨコナデ |
| 66 | 浅鉢 | A | 26.4 | | | 口唇部沈線、ミガキ | ミガキのちナデ | 黄茶色／暗黄灰色 | 外面に赤彩あり |
| 67 | 浅鉢 | B | 21.7 | | 貼付無刻 | 上半ミガキ、下半ケズリ | ナデ | 上半淡茶灰色、下半黄灰色／黄茶灰色 | |
| 68 | 浅鉢 | D | 25.0 | | | 屈曲部に1条沈線、ナデ | ナデ | 黄灰色 | |
| 69 | 浅鉢 | D | 31.4 | | | 上半ナデ、下半ケズリ | ナデ | 黄褐色／暗黄褐色 | 内外面屈曲部まで赤彩 |
| 70 | 浅鉢 | C | 32.0 | | 貼付無刻 | 上半ナデ、下半ケズリ | 二枚貝条痕 | 黄灰色／黒灰色 | 外面赤彩あり |
| 71 | 浅鉢 | C | 24.0 | | 貼付無刻 | 上半ミガキ、下半ケズリ | 端部ミガキ、以下板ナデ | 灰茶褐色／淡黄灰色 | 端部内外面赤彩、外面以下黒色皮膜付着 |
| 72 | 浅鉢 | C | 23.8 | | 貼付無刻 | 器表磨耗 | 二枚貝条痕 | 淡黄灰色 | |
| 73 | 壺 | | | | | 上半ナデ、下半ミガキ | 内面ヨコナデ | 黄茶褐色／茶灰色 | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 74 | 深鉢 | | | | | 器表磨耗 | 板ナデ | 黄灰色／暗灰褐色土 | |
| 75 | 深鉢 | | | | 貼付無刻 | ヨコナデ、突帯下部半截竹管状連続刺突あり | ナデ | 暗黄灰色／黄褐色 | |
| 76 | 深鉢 | | | | 貼付無刻 | ヨコナデ | ナデ | 茶灰色／暗茶灰色 | |
| 77 | 深鉢 | | | | 貼付無刻 | ヨコナデ | ヨコナデ | 茶灰色／黒灰色 | |
| 78 | 深鉢 | | | | 貼付無刻 | ナデ | ヨコナデ | 暗茶色／暗黄茶色 | |
| 79 | 深鉢 | | | D字（外面） | D字 | ヨコナデ | ナデ | 黄茶色／黄褐色 | |
| 80 | 深鉢 | | | | D字 | ヨコナデ | ナデ | 黒灰色 | |
| 81 | 深鉢 | | | O字 | 浅いD字か | ヨコナデ | ヨコナデ | 明褐色／淡黒灰色 | |
| 82 | 深鉢 | | | 波長長いD字 | D字 | 突帯上部強いヨコナデ | ナデ | 淡茶灰色／黄灰色 | |
| 83 | 深鉢 | | | D字 | D字 | ヨコナデ | ナデ | 淡灰黄色／淡黄灰色 | |
| 84 | 深鉢 | | | D字 | D字 | ナデか | ナデ | 黄灰色／淡黒灰色 | |
| 85 | 深鉢 | | | 浅いD字 | D字 | ヨコナデ | ナデ | 茶褐色／明褐色 | |
| 86 | 深鉢 | | | D字 | V字 | ヨコナデ | ナデ | 黄茶色／黄黒灰色 | |
| 87 | 深鉢 | | | 浅いD字 | D字 | ナデ | ナデ | 突帯まで黒灰色、以下黄灰色／上半淡黒灰色、以下黄灰色 | |
| 88 | 深鉢 | | | | D字 | 器表磨耗 | ナデか | 暗茶色／黄黒灰色 | |
| 89 | 深鉢 | | | | D字 | 上半二枚貝条痕、胴部貝殻先端刺突、下半条痕のちケズリ | ナデ | 黄茶褐色／黄茶褐色 | |
| 90 | 深鉢 | | | | D字 | 上半二枚貝条痕、胴部逆C字刺突 | ナデ | 茶褐色／黄黒灰色 | |
| 91 | 深鉢 | | | | | 上半ナデ、胴部２条沈線、以下ミガキ | ナデ | 茶褐色 | |
| 92 | 深鉢 | | | | | ミガキ | ミガキ | 黒色 | 内外面赤彩残存 |
| 93 | 深鉢 | | | | | ミガキ | ケズリ | | |
| 94 | 深鉢 | | | | | ミガキ | ケズリ | | |
| 95 | 深鉢 | | | | | 上半ナデ、胴部突帯貼り付け、以下ケズリ | ナデ | | |
| 96 | 深鉢 | | | | D字 | 胴部突帯上二枚貝先端刻み | | | |
| 97 | 深鉢 | | | | | 胴部２条突帯上加飾 | | | |
| 98 | 浅鉢 | | | | | ヘラミガキ | ヘラミガキ | | 黒色磨研土器赤彩 |
| 99 | 深鉢 | | 27.6 | | 貼付無刻 | ヨコナデ | ヨコナデ | 暗黄灰色／黒灰色 | |
| 100 | 深鉢 | | 12.5 | | | ナデ | ナデ | 淡茶色／黄茶色 | 角閃石を含む |
| 101 | 深鉢 | | 28.0 | | 貼付無刻 | | | | |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 102 | 深鉢 | | 14.6 | | 貼付無刻 | ナデ | ナデ | 黄褐色 | |
| 103 | 深鉢 | | 24.8 | D字 | D字（二枚貝） | 二枚貝条痕 | ナデ | | |
| 104 | 深鉢 | | 26.8 | | D字（二枚貝） | ナデ | ナデ | 黄灰色／淡黒灰色 | 頸部穿孔 |
| 105 | 深鉢 | | 28.7 | | D字 | 上半ナデ、下半ケズリ | ヨコナデ | 黄灰色／暗黄灰色 | |
| 106 | 深鉢 | | | | 貼付無刻 | 上半ナデ、下半ケズリ | ナデ、二枚貝条痕、板ナデ | 暗茶色／黒灰色 | 外面下部煤付着 |
| 107 | 深鉢 | | | | D字（二枚貝） | ナデ | ナデ | 突帯部黒灰色、以下黄褐色／黄褐色 | |
| 108 | 深鉢 | | | | D字 | ナデ | ナデ | 黄褐色 | |
| 109 | 深鉢 | | | | D字 | 板ナデ | 二枚貝条痕、ナデ | 黄褐色／端部黒灰色、以下黄灰色 | |
| 110 | 深鉢 | | | | 貼付無刻 | 突帯下部半截竹管状工具で押さえる | ナデ | 黄灰色／暗黄灰色 | |
| 111 | 深鉢 | | | D字 | D字 | ナデ | ナデ | 黄褐色／黒灰色 | |
| 112 | 深鉢 | | | D字 | D字 | ナデ | ナデ | 黄灰色／黒灰色 | |
| 113 | 深鉢 | | | | 逆D字 | ナデ | ナデ | 黄灰色 | |
| 114 | 深鉢 | | | | D字 | 器表磨耗 | ナデ | 黄灰色 | |
| 115 | 底部 | | 9.2 | | | ケズリ | ナデ | 黄褐色／黄灰色 | |
| 116 | 底部 | | | | | | | 黄灰色／淡黒灰色 | |
| 117 | 底部 | | | | | | | 黄褐色／暗灰色 | |
| 118 | 底部 | | 9.6 | | | | | 黄灰色 | 底部充填 |

付表５　出土遺物観察表２（弥生土器）

| 遺物番号 | 器種 | 口径（底径） | 器高（残存） | 調整 内面／外面 | 色調 内面／外面 | 胎土 | 焼成 | 備考 | 土器様式・時期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 119 | 甕 | 14.8 | (14.7) | ハケ→ナデ／タタキ | 淡褐色 | やや粗 | やや軟 | | Ⅴ |
| 120 | 甕 | 15.6 | (8.5) | ヘラナデ／ハケ | 淡茶褐色 | やや粗 | やや軟 | | |
| 121 | 底部 | (3.4) | (2.0) | ハケ／ハケ | 淡茶褐色 | やや密 | やや軟 | | |
| 122 | 底部 | (5.6) | (2.8) | ナデ／ナデ | 黒褐色／淡黄褐色 | 密 | やや軟 | | |
| 123 | 底部 | (6.0) | (4.6) | 磨滅により不明 | 黒色／淡橙色 | 良 | 良 | | |
| 124 | 広口壺 | 19.0 | 35.8 | ハケ／タテハケ | 淡褐色 | やや粗 | やや軟 | | Ⅲ |
| 125 | 広口壺 | 20.4(8.7) | 33.7 | 一部ハケ／一部ミガキ | 橙褐色 | やや粗 | やや軟 | | Ⅱ |
| 126 | 壺 | (5.2) | 13.7 | ナデ／ミガキ | 淡黄褐色 | やや粗 | 良 | | 〃 |
| 127 | 広口壺 | 13.2 | (12.3) | ハケ・ユビオサエ／タテハケ | 淡褐色 | やや粗 | やや軟 | 近江系土器 | Ⅲ新～Ⅳ |
| 128 | 底部 | (7.0) | (10.4) | ハケ→ナデ／タテハケ | 暗茶褐色／淡橙褐色 | 粗 | やや軟 | | |
| 129 | 甕 | 18.9 | 13.6 | ナデ・一部ハケ／タタキ | 赤茶褐色 | やや密 | やや良 | | 庄内 |
| 130 | 高杯 | 25.4 | (6.0) | ミガキ／ | 褐色 | やや密 | やや軟 | | Ⅲ新～Ⅳ |
| 131 | 脚部 | (15.2) | (13.8) | 杯部ミガキ・脚部ケズリ／タテミガキ | 褐色 | やや密 | やや軟 | | 〃 |
| 132 | 広口壺 | 22.4 | 37.3 | 不明／ハケ | 淡橙褐色 | 粗 | 良 | 底部木の葉痕 | Ⅲ |
| 133 | 細頸壺 | 5.7 | 31.2 | ナデ／タテハケ | 淡橙褐色 | やや粗 | やや軟 | 近江系土器 | 〃 |
| 134 | 細頸壺 | 9.2 | (11.7) | ／タテハケ | 淡橙褐色 | やや密 | やや軟 | | 〃 |
| 135 | 広口壺 | (7.0) | (38.5) | ナデ・ハケ→ナデ／ミガキ・ハケ・ケズリ→ミガキ | 黄茶褐色 | やや粗 | やや軟 | 体部に黒班 | 〃 |
| 136 | 鉢 | 13.6 | (6.0) | ヘラナデ／タテハケ | 淡黄褐色 | やや粗 | 良 | | 〃 |
| 137 | 甕 | 14.2 | 10.8 | ヨコハケ　／タテハケ | 茶褐色～淡橙茶褐色 | やや粗 | やや軟 | 近江系土器 | 〃 |
| 138 | 甕 | 19.0 | 22.0 | ハケ・ナデ／タテハケ | 淡褐色 | 密 | 堅 | 外面に黒班 | 〃 |
| 139 | 底部 | 7.6 | (5.1) | 磨滅により不明 | 灰褐色 | | | | 〃 |
| 140 | 高杯 | 26.8 | 19.0 | ／ハケ | 淡褐色 | やや粗 | やや軟 | | 〃 |
| 141 | 細頸壺 | 6.0 | 26.4 | ハケ／一部ミガキか | 淡白褐色 | 粗 | やや軟 | 腰・底部穿孔・完形 | Ⅲ新～Ⅳ |
| 142 | 水差し形土器 | 18.6 | 61.5 | 一部ハケ／ハケ・ヘラナデ→ミガキ | 淡黄褐色 | やや密 | やや軟 | 摂津型 | 〃 |
| 143 | 水差し形土器 | 11.0 | (8.7) | 指ナデ・ナデ／ | 淡橙褐色 | やや粗 | やや軟 | 頸部凹線文 | 〃 |
| 144 | 水差し形土器 | 9.2 | (21.3) | ハケ／タテハケ | 褐色 | やや粗 | やや軟 | | 〃 |
| 145 | 壺 | 11.6 | (8.4) | ミガキ・ナデ・ハケ／ヘラナデ | 淡褐色 | 密 | 堅 | | Ⅲ |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 146 | 壺 | (5.2) | (13.0) | タテハケ／タテハケ | 淡褐色 | やや密 | やや軟 | | Ⅲ |
| 147 | 壺 | 11.4 | (6.6) | ナデ・ユビオサエ／タテハケ | 淡黄褐色 | やや粗 | やや堅 | | 〃 |
| 148 | 広口壺 | 16.8 | 27.7 | ナデ→ハケ／ヘラナデ・タテハケ | 淡橙褐色 | やや粗 | やや軟 | | 〃 |
| 149 | 壺 | (5.6) | (30.0) | ハケ・ナデ／タテハケ・ナデ | 黄茶褐色 | やや粗 | 良 | | 〃 |
| 150 | 脚部 | (12.0) | (7.4) | ヨコナデ／ナデ | 淡橙褐色 | 粗 | やや軟 | | |
| 151 | 広口壺 | 37.1 | (66.6) | ナデ・ユビオサエ／ハケ・ミガキ・ヘラケズリ | 灰褐色 | 密 | 良 | 絵画土器 | |
| 152 | 広口壺 | 16.6 | (13.5) | ハケ／ハケか | 淡桃褐色 | | やや軟 | | Ⅲ新～Ⅳ |
| 153 | 広口壺 | 20.0 | (29.0) | ハケ・ナデ／タテハケ | 淡褐色 | 粗 | 軟 | 外面に黒斑 | Ⅲ |
| 154 | 鉢 | 13.0 | 10.6 | ナデ／ハケ | 淡黄褐色 | やや粗 | やや軟 | | Ⅱ |
| 155 | 無頸壺 | 8.4 | 28.5 | ヘラナデ／ミガキ | 暗黄茶褐色 | 良 | 良 | | 〃 |
| 156 | 広口壺 | 33.5 | (14.6) | ナデ／タテハケ→ミガキ | 橙茶褐色 | 粗 | やや軟 | 生駒西麓産 | Ⅴ |
| 157 | 広口壺 | 15.6 | 20.5 | ヘラナデ／ミガキ・タテハケ | 黄褐色 | やや粗 | 良 | | 〃 |
| 158 | 広口壺 | (7.2) | (35.6) | ケズリ→ナデ／ヘラナデ・ヨコナデ | 赤茶褐色 | 粗 | やや軟 | | Ⅲ |
| 159 | 短頸壺 | 13.6 | (25.3) | ナデ・ヘラナデ／ハケ・ナデ | 淡灰褐色／淡褐色 | 良 | 良 | | Ⅴ |
| 160 | 広口壺 | 28.9 | (7.0) | ミガキ／タテミガキ | 淡桃褐色 | やや密 | やや軟 | | 〃 |
| 161 | 台付鉢 | 24.4 | (18.2) | ナデ・ミガキ／ナデ・ミガキ | 淡黄褐色 | やや密 | 良 | | 〃 |
| 162 | 鉢 | 32.4 | (16.0) | ヘラナデ・一部ミガキ／ヨコミガキ | 黒色／黄茶褐色 | やや粗 | やや良 | | 〃 |
| 163 | 細頸壺 | (5.6) | (24.6) | ハケ／ミガキ | 褐色／橙茶褐色 | やや密 | やや堅 | | 〃 |
| 164 | 壺 | 14.2 | (26.6) | ハケ・ユビオサエ／ヘラナデ・ハケ→ミガキ | 褐色／橙褐色 | やや密 | やや堅 | 二重口縁 | 〃 |
| 165 | 短頸壺 | 13.4(5.4) | 31.4 | ハケ／ハケ | 褐色／淡橙褐色 | やや粗 | やや堅 | | 〃 |
| 166 | 短頸壺 | 11.8(4.8) | 28.0 | 磨滅により不明 | 黄茶褐色 | 粗 | やや軟 | | 〃 |
| 167 | 壺 | 4.8 | (4.2) | ナデ／ナデ | 橙茶褐色 | 良 | 堅 | | |
| 168 | 脚部 | | (10.0) | ヘラナデ／タテハケ | 黄茶褐色／赤茶褐色 | 良 | 堅 | | |
| 169 | 甕 | (4.0) | (5.2) | ハケ／タタキ | 暗黄茶褐色 | 良 | 良 | | Ⅴ |

付表6　出土遺物観察表3（奈良～室町時代）

| 番号 | 種類 | 器種 | 口径(底径) | 器高 | 外面調整 | 内面調整 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 170 | 須恵器 | 壺 | 4.5 | 9.9 | ケズリ後ナデ | ナデ | 淡灰色 | 密 | 良 | ほぼ完形 |
| 171 | 須恵器 | 壺 | (10.8) | 6.9 | ナデ | ナデ | 黒灰色 | 密 | 良 | |
| 172 | 土師器 | 皿 | 11.0 | 1.4 | ナデ | ナデ | 淡茶褐色 | 密 | 軟 | |
| 173 | 瓦器 | 椀 | 13.8 | 4.8 | ナデ・ユビオサエ | ヘラミガキ | 暗灰色 | 密 | やや良 | |
| 174 | 瓦器 | 椀 | 14.0 | 4.5 | ユビオサエのちナデ | ヘラミガキ | 暗灰色 | 密 | 軟 | |
| 175 | 瓦器 | 椀 | 13.4 | 4.6 | ユビオサエ・ナデ | ヘラミガキ | 暗灰色 | 密 | やや軟 | |
| 176 | 土師器 | 皿 | 21.2 | 5.6 | ナデ | ナデ | 橙褐色 | やや密 | やや良 | |
| 177 | 土師器 | 皿 | 13.6 | 2.3 | ユビオサエ・ナデ | ナデ | 淡褐色 | 密 | やや堅緻 | |
| 178 | 土師器 | 皿 | 11.8 | 1.7 | ナデ | ナデ | 淡灰色 | 密 | 良 | |
| 179 | 土師器 | 皿 | 10.8 | 1.2 | ユビオサエ | ナデ・ヘラミガキ | 暗灰色 | 密 | 良 | |
| 180 | 白磁 | 椀 | 16.4 | 2.8 | ナデ | ナデ | 乳白色 | 密 | 良 | |
| 181 | 灰釉陶器 | 椀 | 18.0 | 4.8 | ナデ | ナデ | 暗黄褐色 | 密 | 堅緻 | |
| 182 | 灰釉陶器 | 椀 | (6.4) | 2.2 | ナデ | ナデ | 淡灰色 | 密 | 良 | |
| 183 | 瓦器 | 椀 | 12.8 | 4.1 | ナデ | ヘラミガキ | 黒灰色 | 密 | 良 | |
| 184 | 土師器 | 皿 | 7.8 | 2.2 | ナデ | ナデ | 淡褐色 | 密 | やや軟 | |
| 185 | 土師器 | 皿 | 7.8 | 2.1 | ユビオサエ・ナデ | ナデ | 淡褐色 | 密 | やや軟 | |
| 186 | 須恵器 | 杯B | (13.2) | 2.8 | ヨコナデ | ヨコナデ | 暗青灰色 | 密 | 堅緻 | |
| 187 | 須恵器 | 壺 | (9.6) | 5.1 | ケズリのちナデ | ナデ | 淡灰白色 | 密 | 良 | |
| 188 | 緑釉陶器 | 椀 | (5.8) | 1.4 | ヨコナデ | ナデ | 暗緑色 | 密 | 堅緻 | |
| 189 | 土師器 | 羽釜 | 18.8 | 3.7 | ナデ | ナデ | 淡褐色 | やや粗 | やや軟 | |
| 190 | 土師器 | 羽釜 | 22.8 | 6.3 | ナデ | ナデ | 淡茶褐色 | 粗 | 軟 | |
| 191 | 土師器 | 羽釜 | 24.5 | 3.8 | ナデ | ナデ | 暗茶褐色 | 良 | 良 | 鍔欠損 |
| 192 | 信楽焼 | 甕 | 30.0 | 6.9 | ヨコナデ | ヨコナデ | 暗紫色 | 密 | 堅緻 | |
| 193 | 信楽焼 | 甕 | 35.8 | 5.2 | ヨコナデ | ヨコナデ | 赤茶色 | やや粗 | 良 | |
| 194 | 瓦質土器 | すり鉢 | (12.4) | 1.5 | ケズリのちナデ | ハケ目 | 暗灰色 | 密 | 良 | |
| 195 | 白磁 | 椀 | 14.8 | 2.8 | ナデ | ナデ | 淡灰白色 | 密 | 堅緻 | |
| 196 | 白磁 | 椀 | (7.0) | 1.8 | ナデ | ナデ | 淡黄灰白色 | 密 | 良 | |
| 197 | 白磁 | 皿 | 7.8 | 2.5 | ナデ | ナデ | 淡緑色 | 密 | 堅緻 | 底部に墨書あり |
| 198 | 鉄釉陶器 | 天目茶椀 | (4.0) | 2.7 | ヘラケズリ | ナデ | 暗茶色 | 密 | 堅緻 | |
| 199 | 須恵器 | 壺 | 13.8 | 3.2 | ナデ | ナデ | 灰色 | 密 | 堅緻 | |
| 200 | 土師器 | 皿 | 11.8 | 1.8 | ヨコナデ | ナデ | 淡褐色 | 密 | やや軟 | |
| 201 | 土師器 | 皿 | 8.4 | 2.0 | ヨコナデ | ナデ | 暗褐色 | やや密 | 良 | |
| 202 | 信楽焼 | すり鉢 | 22.4 | 6.9 | ナデ | ナデ・ハケ目 | 淡茶灰色 | 粗砂粒を含む | やや軟 | |
| 203 | 須恵器 | 皿 | 12.0 | 2.0 | ナデ | ナデ | 灰色 | 密 | 堅緻 | |
| 204 | 須恵器 | 杯 | (9.0) | 3.3 | ナデ | ナデ | 淡黄灰色 | やや密 | 良 | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 205 | 須恵器 | 壺 | (7.2) | 7.2 | ケズリのちナデ | ナデ | 灰色 | 密 | 堅緻 | |
| 206 | 須恵器 | 壺 | (10.6) | 3.8 | ナデ | ナデ | 淡灰色 | 密 | 堅緻 | |
| 207 | 須恵器 | 甕 | 28.3 | 5.3 | タタキ・ヨコナデ | タタキ・ヨコナデ | 赤灰色 | 密 | 堅緻 | |
| 208 | 瓦質土器 | 羽釜 | 14.8 | 5.1 | ヘラミガキ・ナデ | ナデ | 黒灰色 | やや密 | 良 | |
| 209 | 土師器 | 羽釜 | 21.2 | 5.6 | ハケ・ナデ | ナデ | 橙褐色 | やや密 | やや良 | |
| 210 | 緑釉陶器 | 椀 | 11.0 | 2.7 | ナデ | ナデ | 暗緑色 | 密 | 堅緻 | |
| 211 | 青磁 | 皿 | 5.6 | 1.1 | ナデ | ナデ | 淡緑色 | 密 | 堅緻 | |
| 212 | 土師器 | 皿 | 7.9 | 2.0 | ナデ | ナデ | 淡橙褐色 | 密 | 良 | 内外面スス付着 |
| 213 | 土師器 | 皿 | 16.3 | 2.2 | ナデ | ナデ | 淡褐色 | 密 | 良 | |
| 214 | 瓦器 | 皿 | 7.6 | 5.1 | ナデ | ナデ・ヘラミガキ | 淡灰白色 | 密 | 良 | |
| 215 | 瓦器 | 椀 | 11.6 | 3.1 | ヨコナデ | ヘラミガキ | 暗灰色 | 密 | 良 | |
| 216 | 瓦器 | 椀 | 16.4 | 2.7 | ヨコナデ | ヘラミガキ | 黒灰色 | 密 | 良 | |
| 217 | 青磁 | 椀 | 13.8 | 2.5 | ナデ | ナデ | 青灰色 | 密 | 堅緻 | |
| 218 | 青磁 | 椀 | 13.3 | 3.7 | ナデ | ナデ | 淡緑色 | 密 | 堅緻 | |

# 付　編　自然科学的方法による分析結果

株式会社 古環境研究所

## Ⅰ．佐山尼垣外遺跡における花粉分析

### 1．はじめに

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は、分解されにくく堆積物中に比較的良好に保存される。花粉は、風媒花植物であれば空中に飛散し、虫媒花植物ならば昆虫により運搬され、多くの場合、地表に落下後土壌中あるいは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。花粉分析では、堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から地層の対比を行ったり、植生や土地条件などの古環境や古気候の推定が行われる。一般には、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境の復原に用いられるが、考古遺跡では、堆積域の狭い遺構などの堆積物から、局地的な植生や環境の復原にも用いられている。

### 2．試料

試料は、佐山尼垣外遺跡の南部溝埋土(中世畝試料、灰色シルト～砂)１点である。

### 3．方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

1)５％水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。

2)水洗した後、0.5㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。

3)25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。

4)水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎)を施す。

5)再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6)沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離(1500rpm、２分間)の後、上澄みを捨てるという操作を３回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(－)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にして、

表Ⅰ－1　佐山尼垣外遺跡における花粉分析結果

| 分類群 | | 中世畝試料 |
|---|---|---|
| 学名 | 和名 | |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | |
| *Oryza type* | イネ属型 | 1 |
| Nonarboreal pollen | 草本花粉 | 1 |
| Total pollen | 花粉総数 | 1 |
| Unknown pollen | 未同定花粉 | 0 |
| Helminth eggs | 寄生虫卵 | |
| Ascaris | 回虫卵 | 1 |
| Total | 計 | 1 |
| | 明らかな消化残渣 | (-) |

現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

**4．結果**

(1)分類群

出現した分類群は草本花粉1である。この学名と和名および粒数を表Ⅰ－1に示す。以下に出現した分類群を記す。

〔草本花粉〕

イネ属型

(2)花粉群集の特徴

佐山尼垣外遺跡の南部溝埋土(中世畝試料)からは花粉はほとんど検出されず、イネ属型が検出されるのみである。

5．花粉分析から推定される植生と環境

佐山尼垣外遺跡の南部溝埋土(中世畝試料)は花粉がほとんど検出されない。これは、堆積速度が速いか淘汰によって花粉などの微遺体が集積しなかった、もしくは花粉などの有機質遺体が分解される乾燥ないし乾湿を繰り返す堆積環境であったことが推定される。

**参考文献**

中村純(1973)花粉分析．古今書院，pp.82-110

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，pp.248-262

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，p.60

中村純(1980)日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，p.91

中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として．第四紀研究，13，pp.187-193

中村純(1977)稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，pp.21-30

## Ⅱ．佐山尼垣外遺跡出土の種実

**1．はじめに**

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また、出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

## 2．試料

試料は、佐山尼垣外遺跡(平安時代～中世)の南部溝埋土(中世畝試料、灰色シルト～砂)より水洗選別されたものである。

## 3．方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

## 4．結果

(1)分類群

草本5が同定された。学名、和名および粒数を表Ⅱ－1、ウリ類種子の計測値(長さ、幅)を表Ⅱ－2に示し、主要な分類群を写真に示す。

以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

〔草本〕

イネ　Oryza sativa L.　穎　イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状の突起がある。

イネ科　Gramineae　穎

灰褐色～茶褐色で紡錘形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

カヤツリグサ属　Cyperus　果実　カヤツリグサ科

黒褐色で狭倒卵形を呈す。表面はやや粗い。断面は三角形である。

ナス　Solanum melongera L.　種子　ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

ウリ類　Cucumis melo L.　種子　ウリ科

淡褐色～黄褐色である。楕円形を呈し、

表Ⅱ－1　佐山尼垣外遺跡における種同定結果

| 分類群 学名 | 分類群 和名 | 部位 | 中世畝試料 |
|---|---|---|---|
| Herb | 草本 | | |
| *Oryza sativa L.* | イネ | 穎 | 17 |
| Gramineae | イネ科 | 穎 | 1 |
| *Cyperus* | カヤツリグサ属 | 果実 | 1 |
| *Solanum melongena L.* | ナス | 種子 | 15 |
| *Cucumis melo L.* | ウリ類 | 種子 | 227 |
| Total | 合計 | | 261 |
| Unknown | 不明 | | 3 |

表Ⅱ－2　佐山尼垣外遺跡出土のウリ類種子計測値

| 試料 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 試料 | 長さ(mm) | 幅(mm) |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 7.57 | 3.39 | 26 | 8.07 | 3.32 |
| 2 | 7.86 | 3.50 | 27 | 6.84 | 3.22 |
| 3 | 8.30 | 4.01 | 28 | 5.22 | 2.64 |
| 4 | 7.59 | 3.41 | 29 | 7.68 | 3.02 |
| 5 | 8.74 | 4.37 | 30 | 6.97 | 3.02 |
| 6 | 7.05 | 2.88 | 31 | 7.83 | 3.16 |
| 7 | 8.46 | 3.87 | 32 | 7.47 | 3.46 |
| 8 | 6.43 | 2.98 | 33 | 6.49 | 3.21 |
| 9 | 7.11 | 2.95 | 34 | 7.41 | 3.44 |
| 10 | 7.19 | 3.57 | 35 | 7.41 | 3.23 |
| 11 | 7.12 | 3.25 | 36 | 6.09 | 2.82 |
| 12 | 7.73 | 3.42 | 37 | 7.86 | 3.53 |
| 13 | 7.36 | 3.27 | 38 | 7.75 | 3.43 |
| 14 | 6.66 | 3.14 | 39 | 6.94 | 3.20 |
| 15 | 9.78 | 4.44 | 40 | 6.62 | 3.23 |
| 16 | 7.72 | 3.23 | 41 | 7.86 | 2.95 |
| 17 | 6.78 | 2.94 | 42 | 6.42 | 3.14 |
| 18 | 7.19 | 3.70 | 43 | 6.80 | 3.44 |
| 19 | 8.42 | 3.12 | 44 | 6.90 | 3.14 |
| 20 | 7.67 | 3.93 | 45 | 6.11 | 2.87 |
| 21 | 7.31 | 3.46 | 46 | 6.70 | 3.09 |
| 22 | 7.23 | 3.36 | 47 | 7.22 | 3.11 |
| 23 | 6.89 | 3.26 | 48 | 5.83 | 2.94 |
| 24 | 6.72 | 3.21 | 49 | 6.54 | 3.17 |
| 25 | 6.92 | 3.43 | 50 | 7.20 | 3.36 |

一端には「ハ」字状のへこみがある。

(2)種実群集の特徴

ウリ類種子が極めて多く、他はイネ穎、ナス種子、イネ科穎、カヤツリグサ科種子であった。イネ、ナス、ウリ類は栽培植物である。

**5．種実から推定される植生と農耕**

出土した種実類の中で、イネは水田の耕作物であり、ナスとウリ類は畑作物である。ナスは7世紀以降から各地の遺跡で出土し、ウリ類は縄文時代に伝来した栽培植物である。ウリ類は大きさを任意に50個計測し示したが、藤下(1992)が分類する長さ6.1mm～8.0mmの中粒種子(マクワ・シロウリ型)の範囲にほとんど入る。

以上、本遺跡では、イネ穎と畑作物のナス種子、ウリ類種子の栽培植物が同定され、農耕の様相も示唆される。

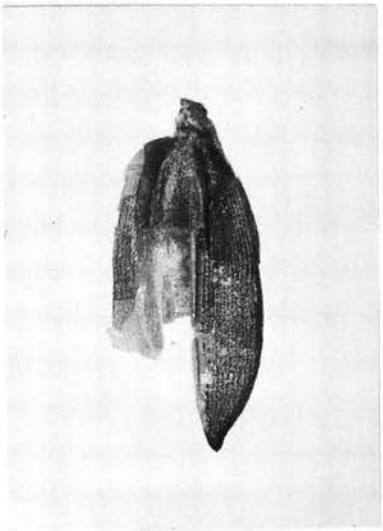
**参考文献**

笠原安夫(1985)日本雑草図説，養賢堂，p.494

南木睦彦(1993)葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，pp.276-283

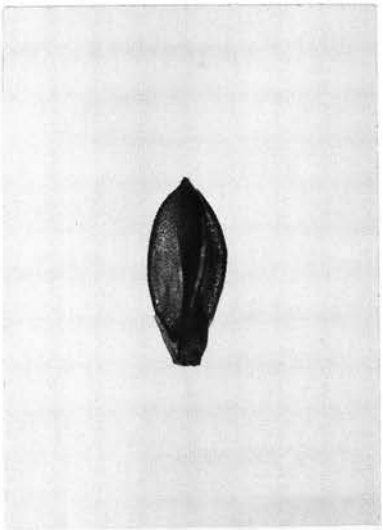
藤下典之(1982)菜畑遺跡から出土したメロン仲間Cucumis melo L.とヒョウタン仲間Lagenaria siceraria Standl.の種子について．唐津市文化財調査報告第5集菜畑遺跡，唐津市教育委員会，pp.455-463

藤下典之(1992)出土種子からみた古代日本のメロンの仲間、その種類、渡来、伝搬、利用について．考古学ジャーナル№354，ニュー・サイエンス社，pp.7-13

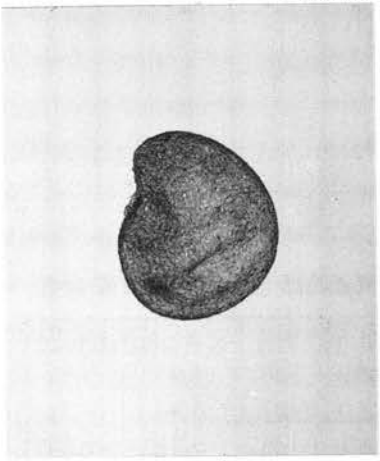


1　イネ穎　—— 1.0mm

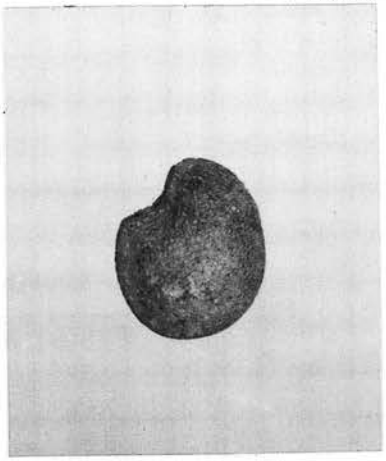
2　イネ科穎　—— 1.0mm



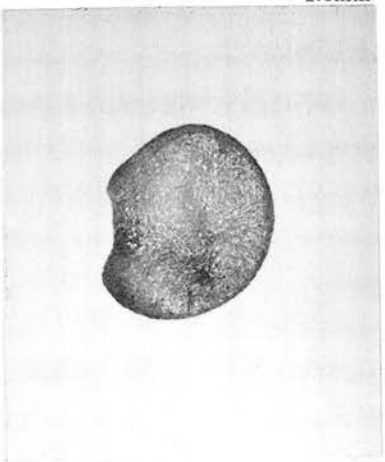
3　カヤツリグサ属果実　—— 1.0mm



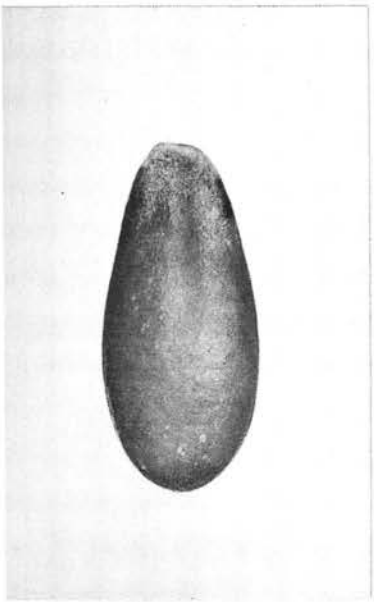
4　ナス種子　—— 1.0mm



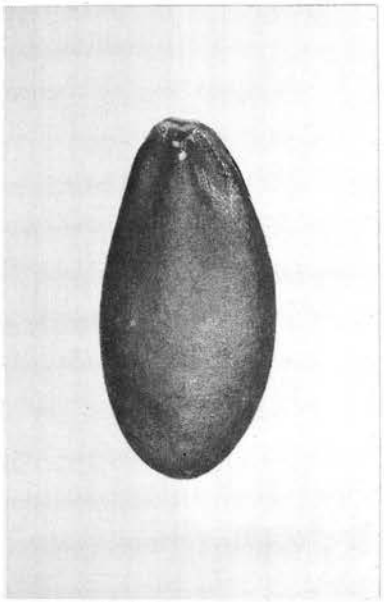
5　ナス種子　—— 1.0mm



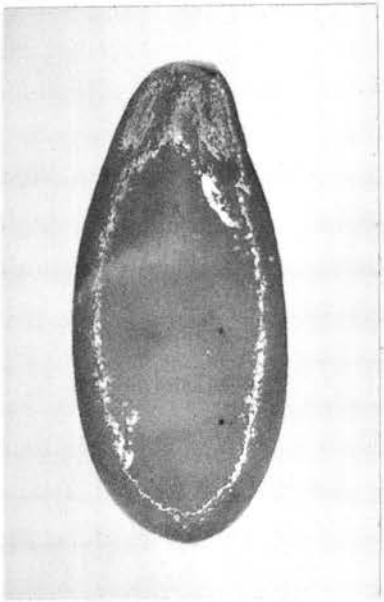
6　ナス種子　—— 1.0mm



7　ウリ類種子　—— 1.0mm



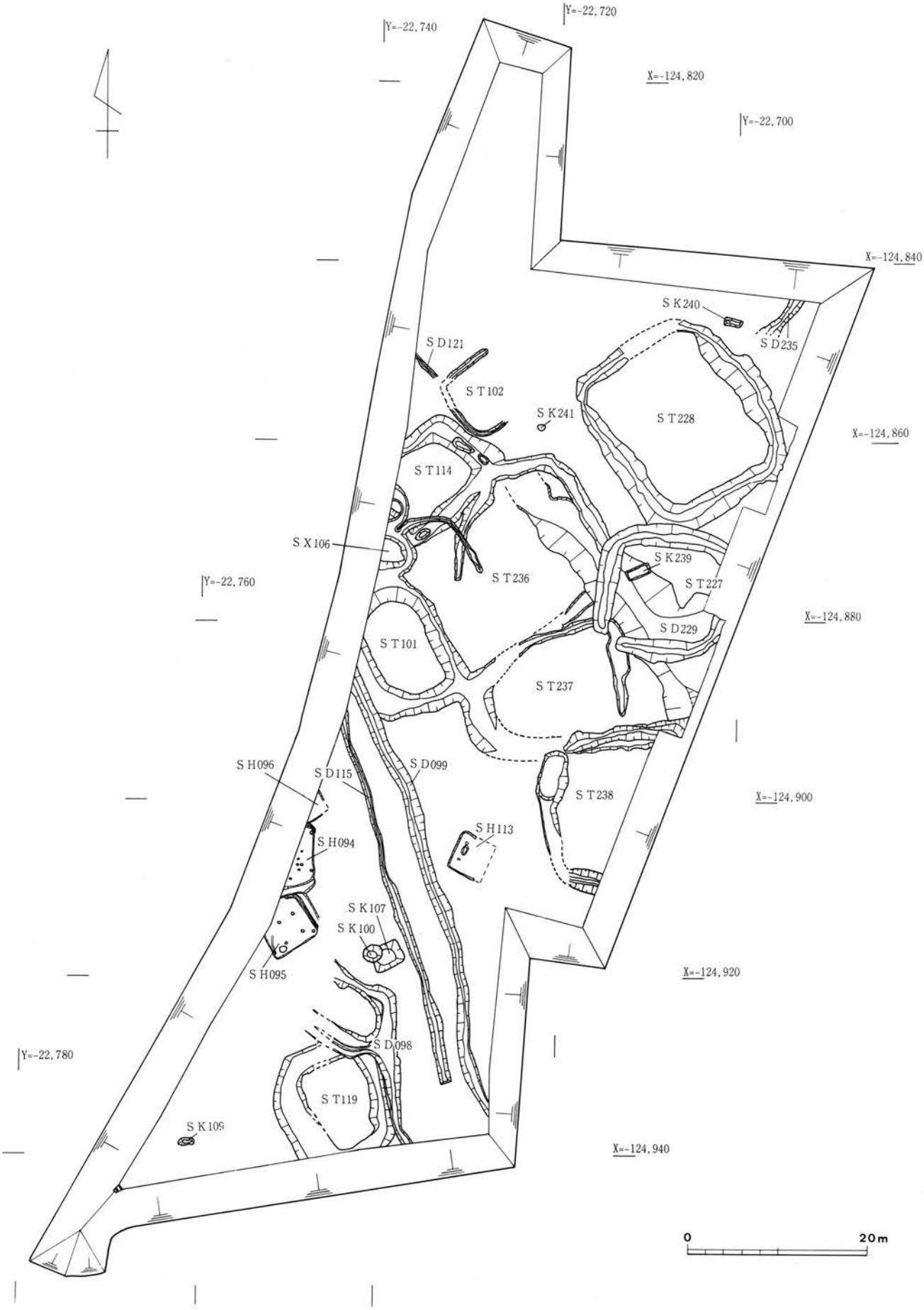
8　ウリ類種子　—— 1.0mm



9　ウリ類種子　—— 1.0mm

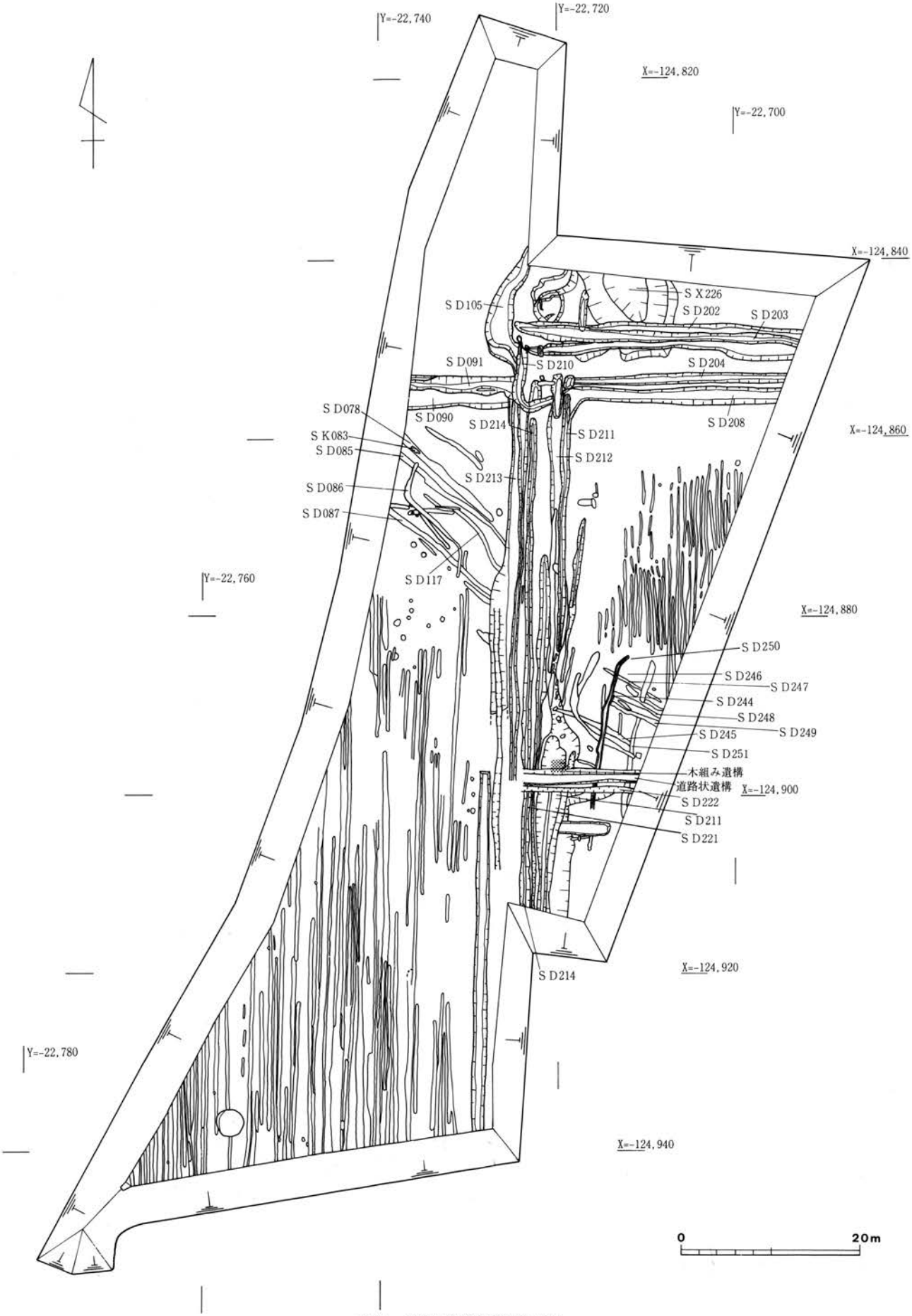
佐山尼垣外遺跡の種実

# 図　　版

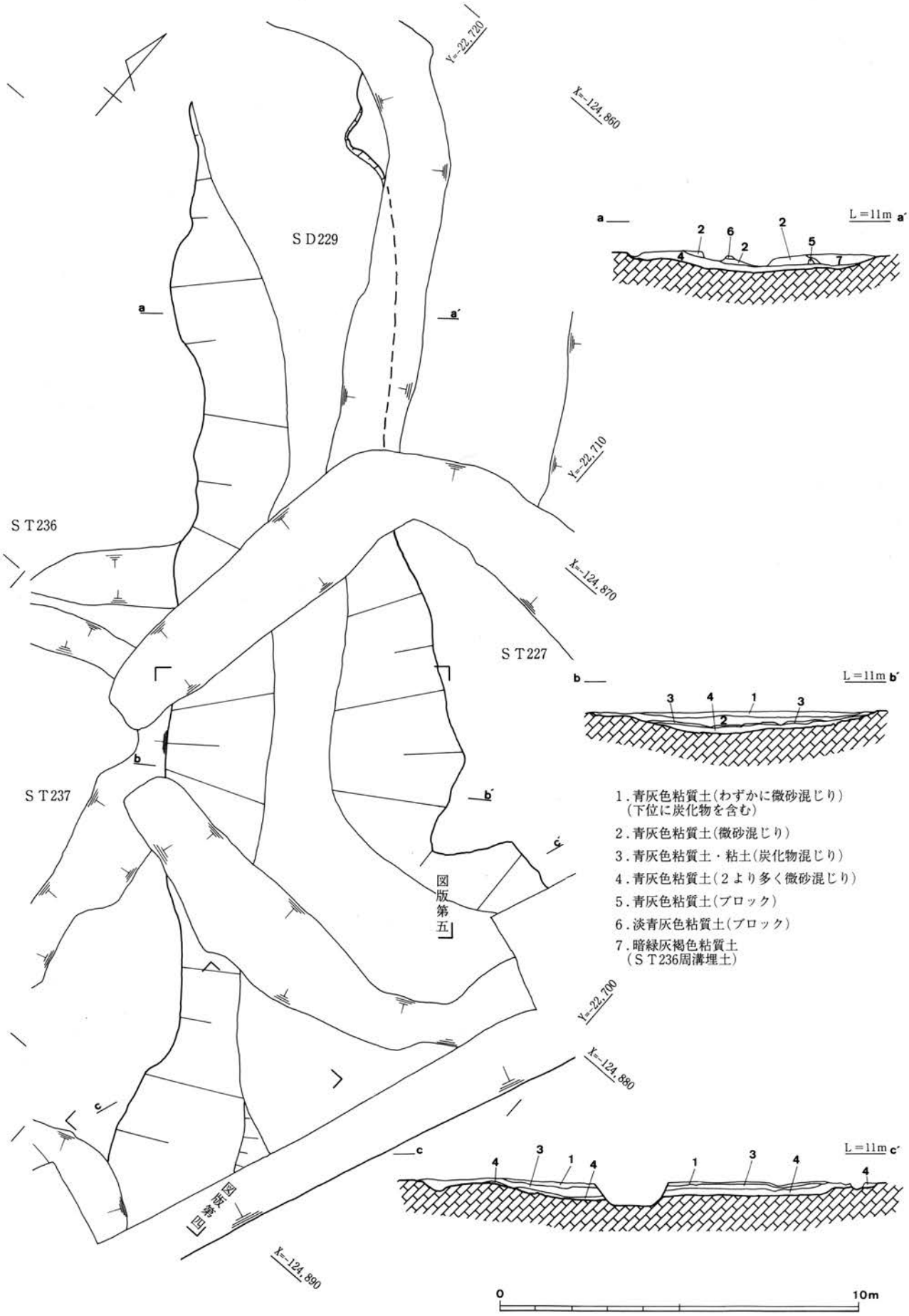



縄文～古墳時代遺構平面図

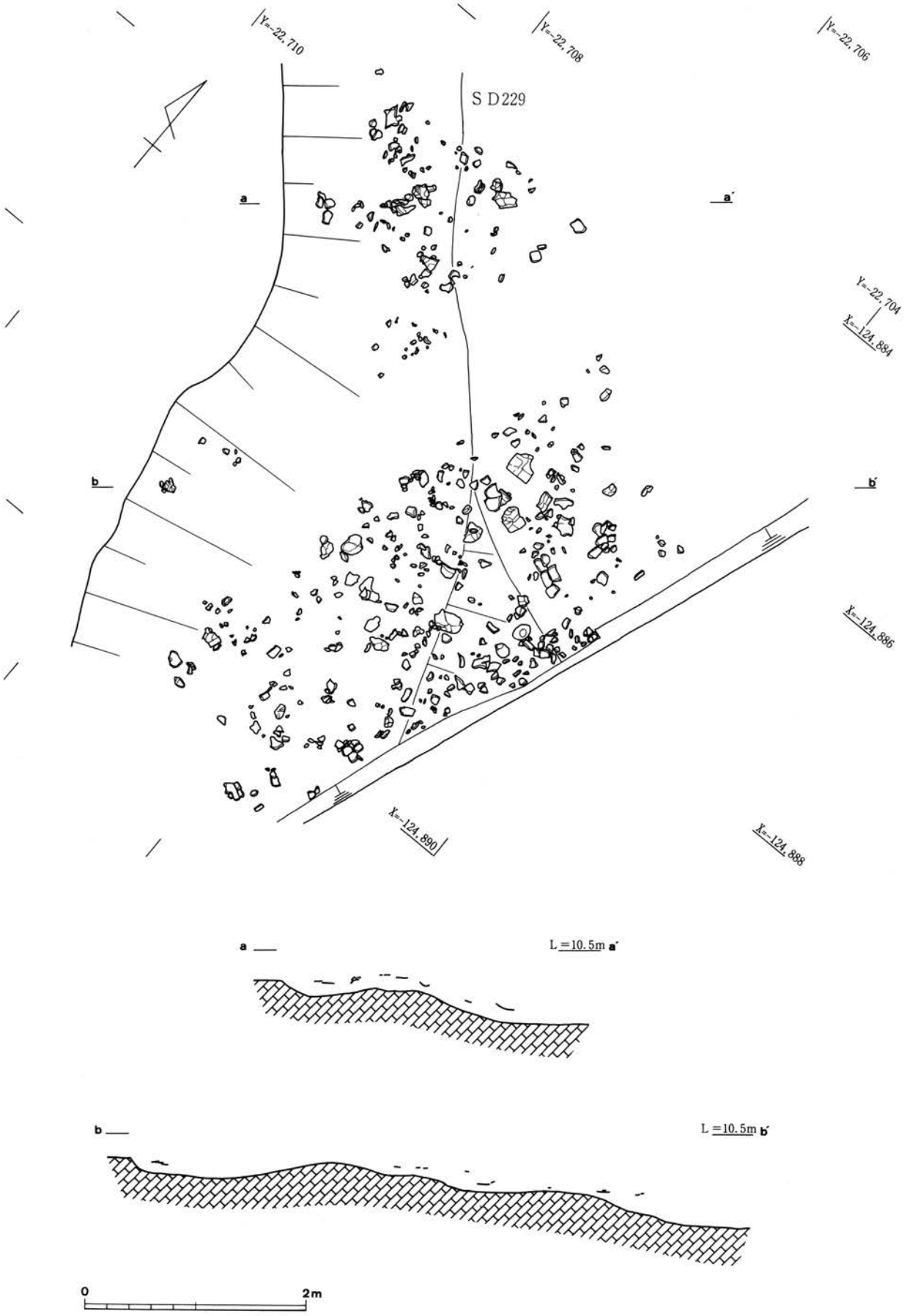
図版第二




平安～室町時代遺構平面図


Y=-22,720
X=-124,860
S D229
a
a′
Y=-22,710
S T236
X=-124,870
S T227
b
b′
S T237
c
c′
図版第五
Y=-22,700
X=-124,880
図版第四
X=-124,890
L=11m a′
L=11m b′
L=11m c′
1.青灰色粘質土(わずかに微砂混じり)
(下位に炭化物を含む)
2.青灰色粘質土(微砂混じり)
3.青灰色粘質土・粘土(炭化物混じり)
4.青灰色粘質土(2より多く微砂混じり)
5.青灰色粘質土(ブロック)
6.淡青灰色粘質土(ブロック)
7.暗緑灰褐色粘質土
(S T236周溝埋土)
0
10m

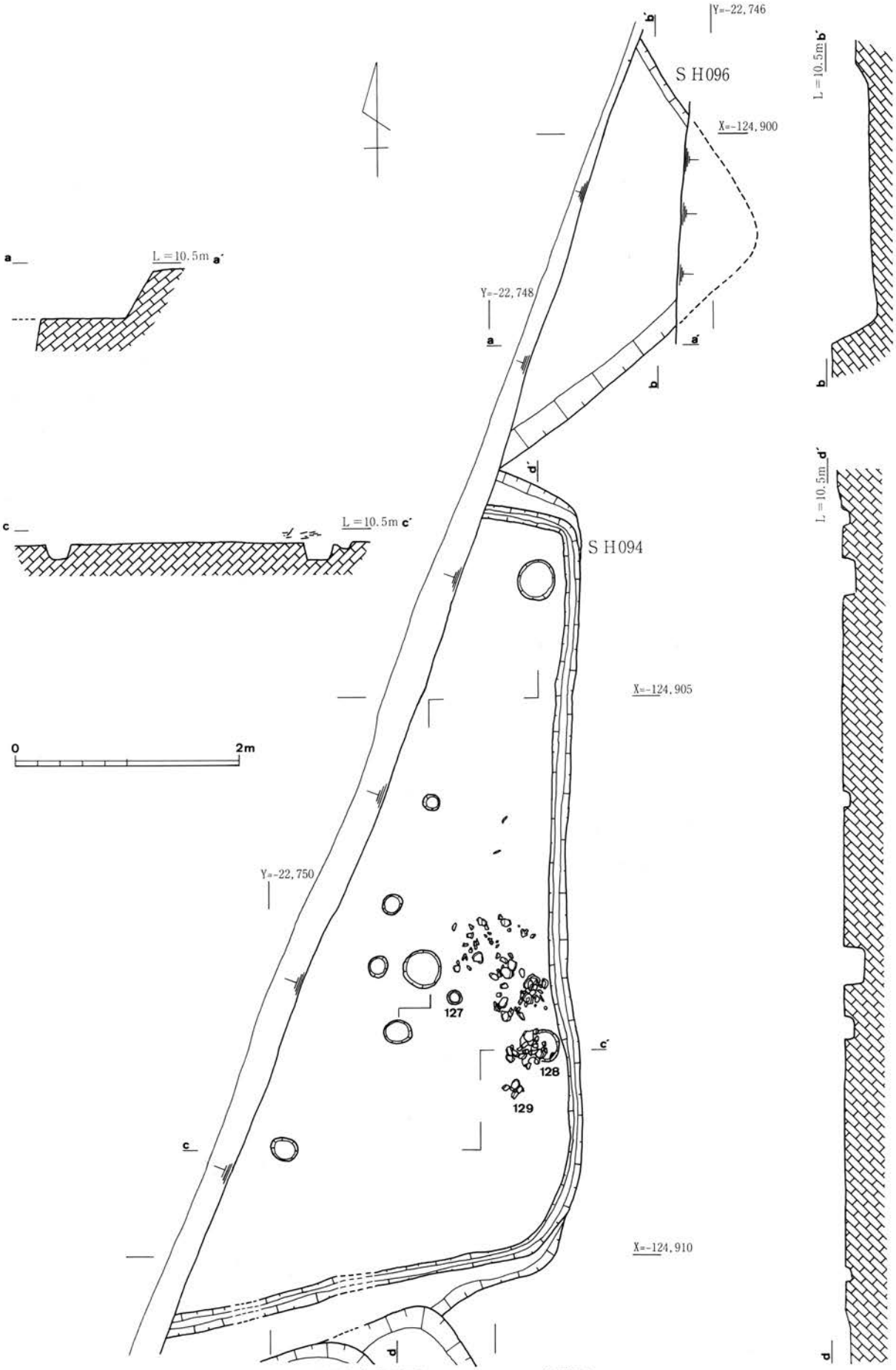
溝S D229実測図



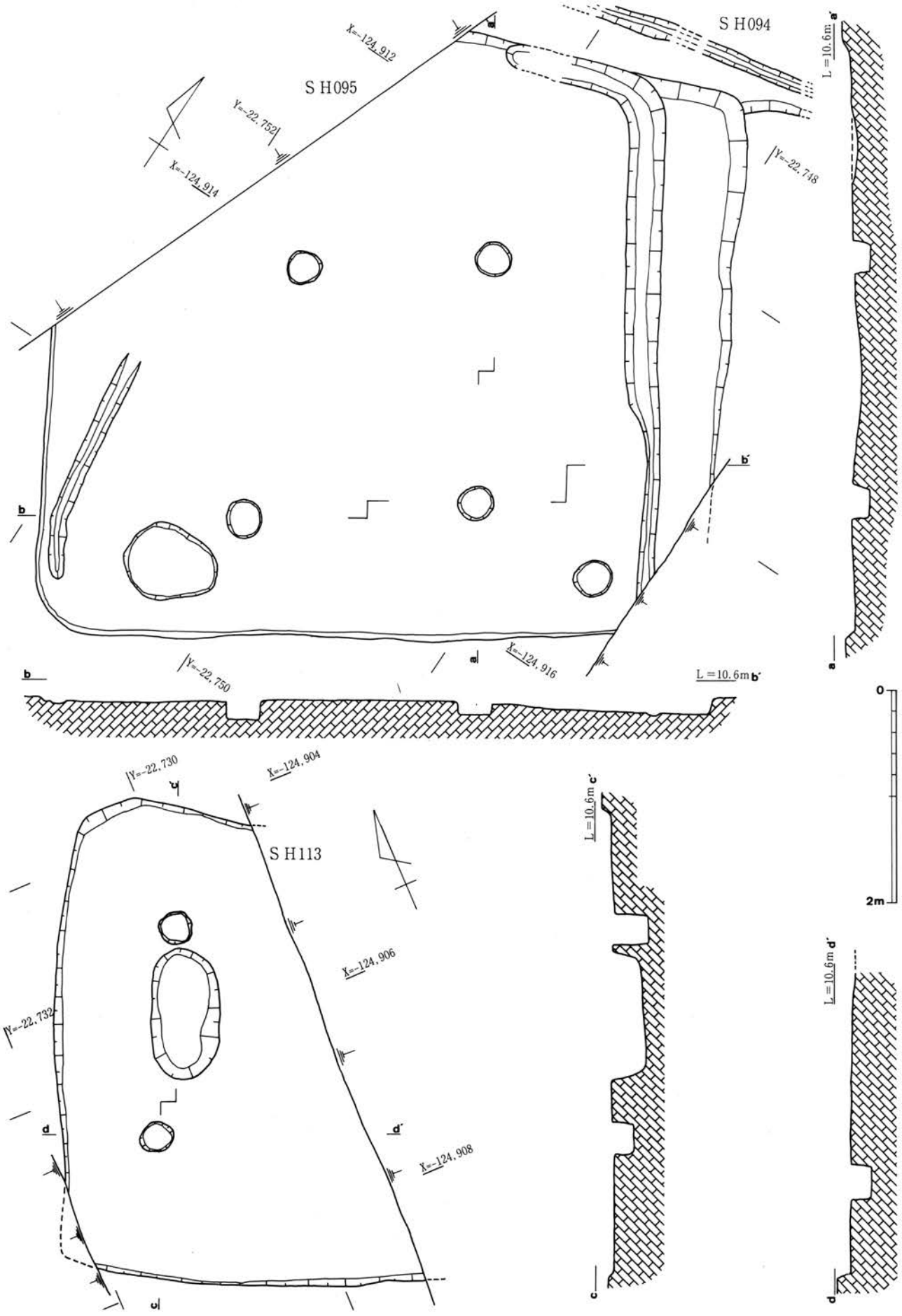

溝ＳＤ229縄文土器出土状況図(1)

溝ＳＤ229縄文土器出土状況図(2)

図版第六

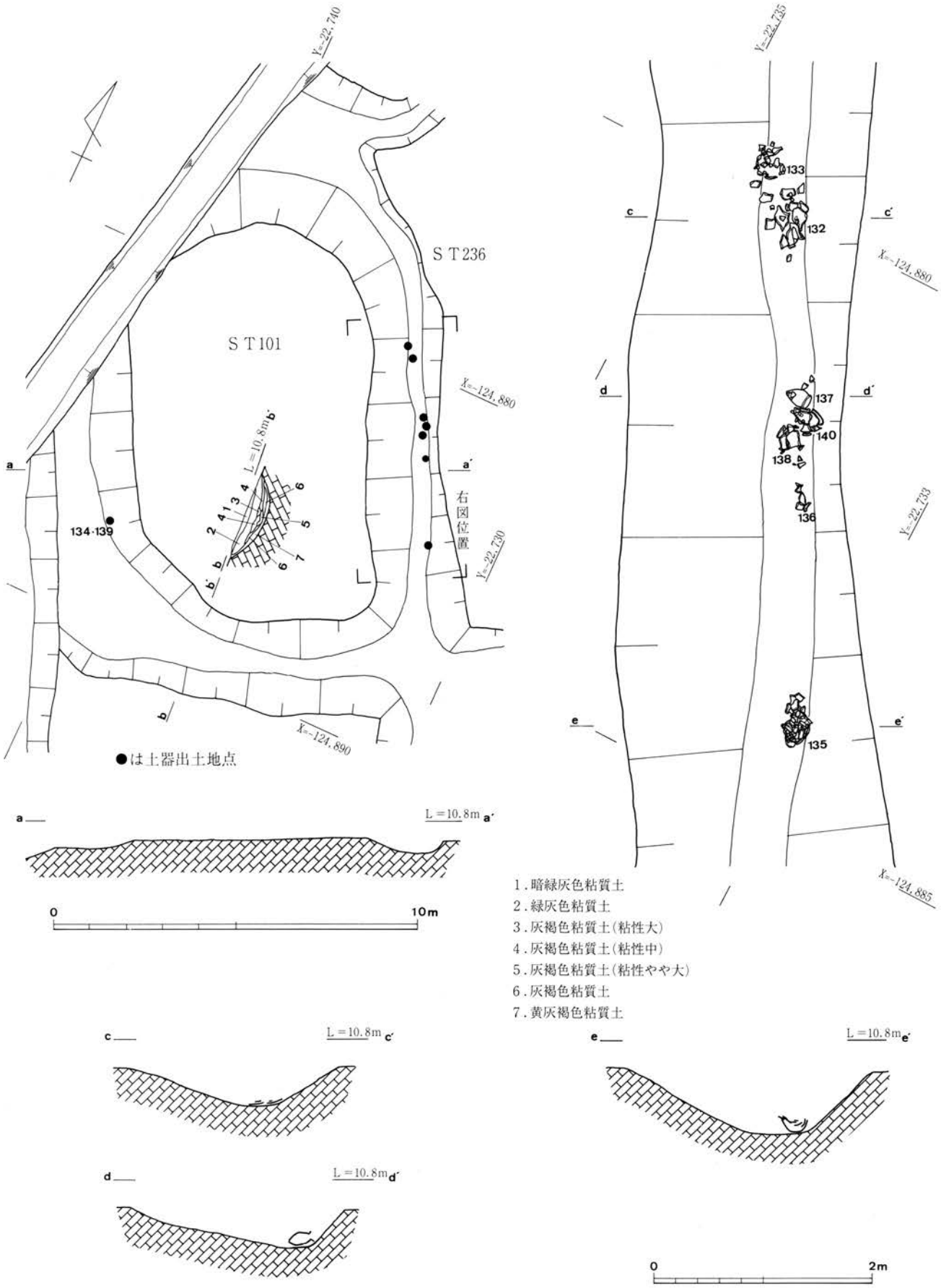



竪穴式住居跡ＳＨ094・096実測図

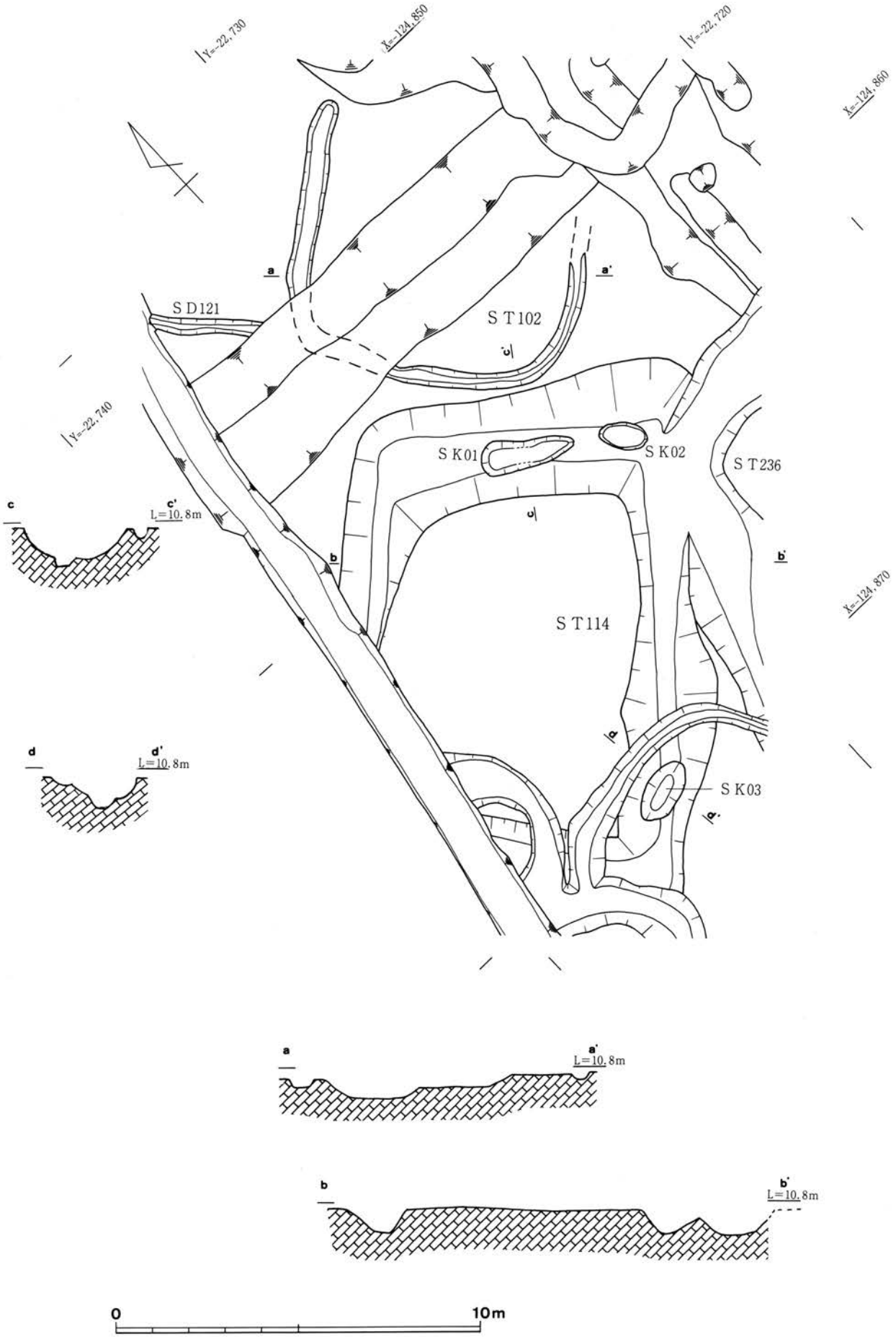



竪穴式住居跡ＳＨ095・113実測図

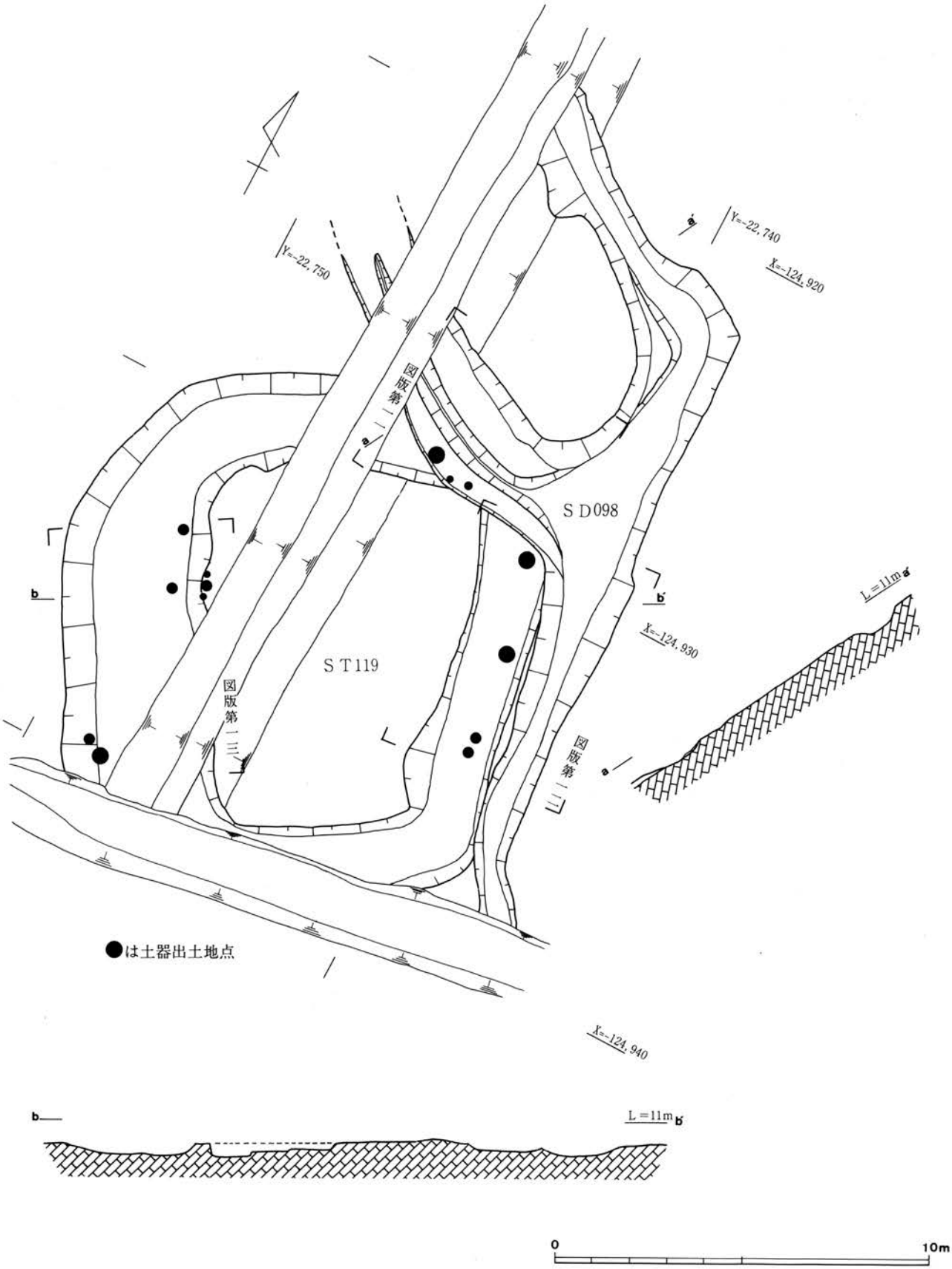
図版第八



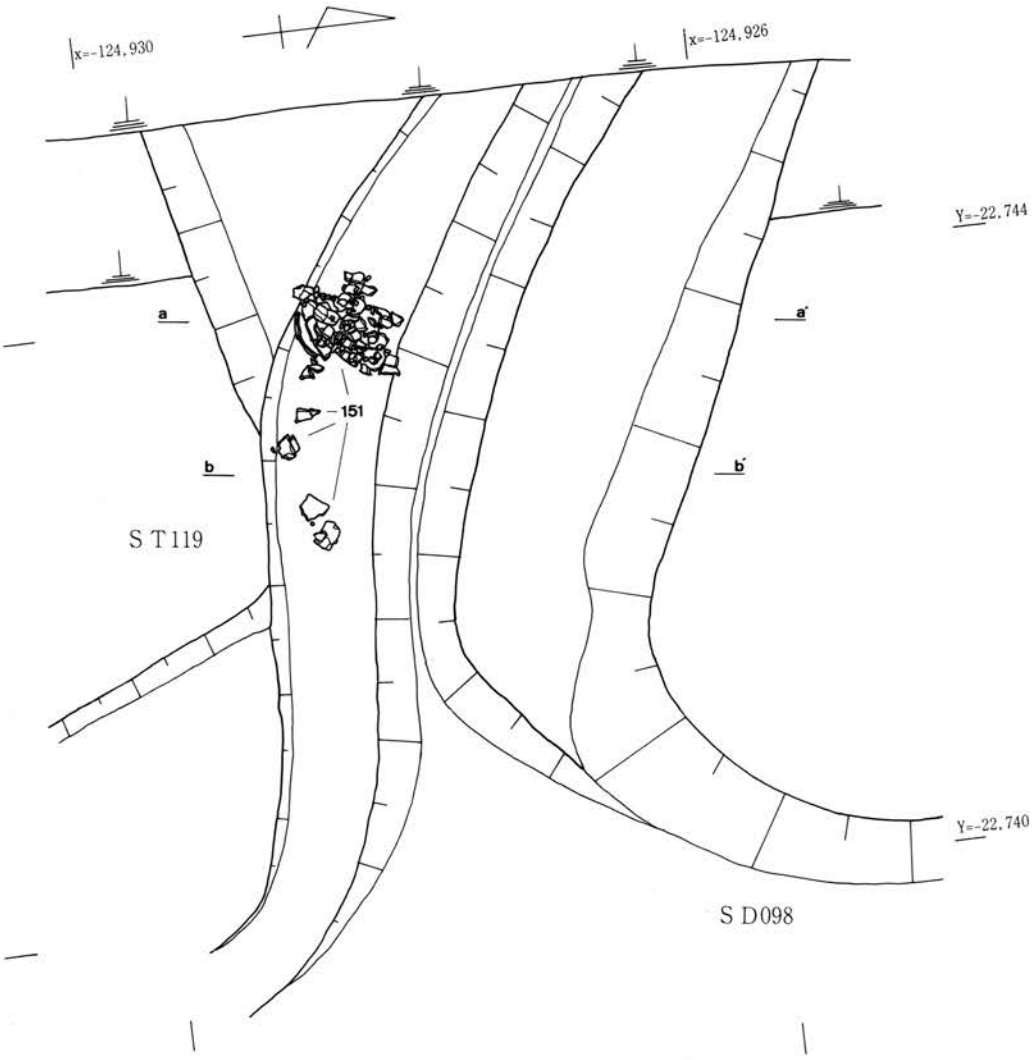

方形周溝墓ＳＴ101実測図

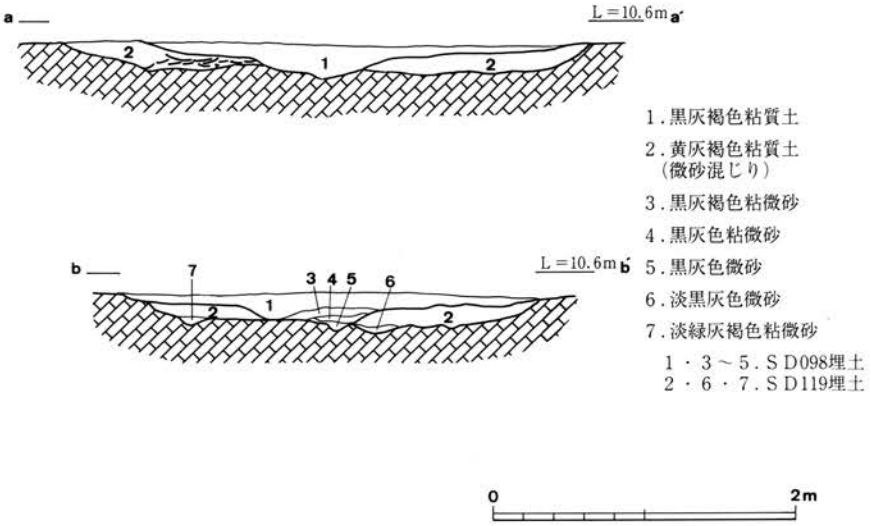



方形周溝墓ＳＴ102・114実測図

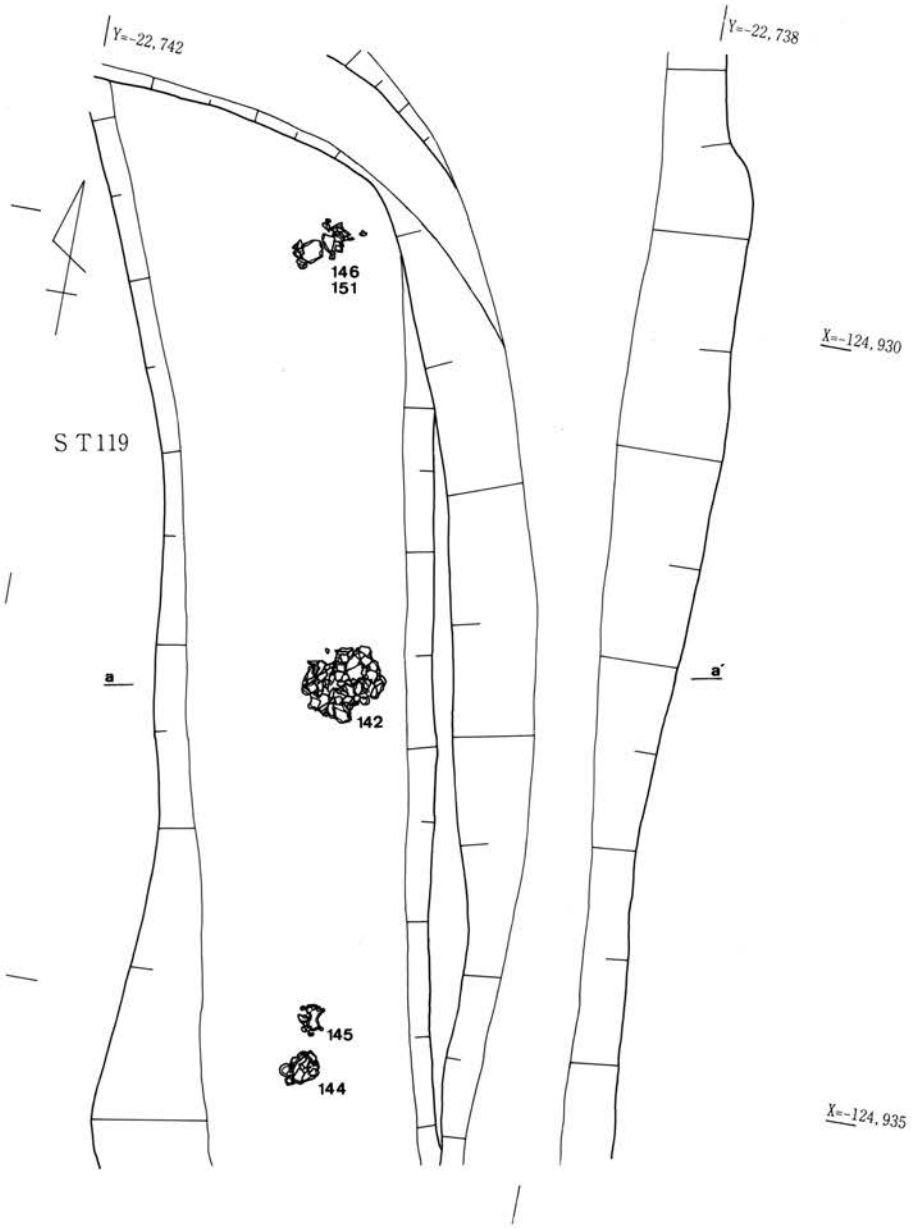


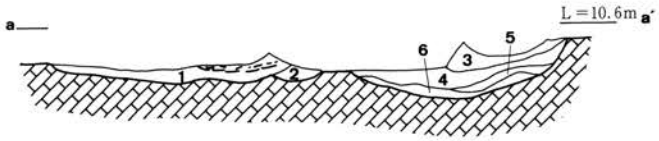

方形周溝墓ＳＴ119・溝ＳＤ098実測図




方形周溝墓ＳＴ119北溝遺物出土状況図

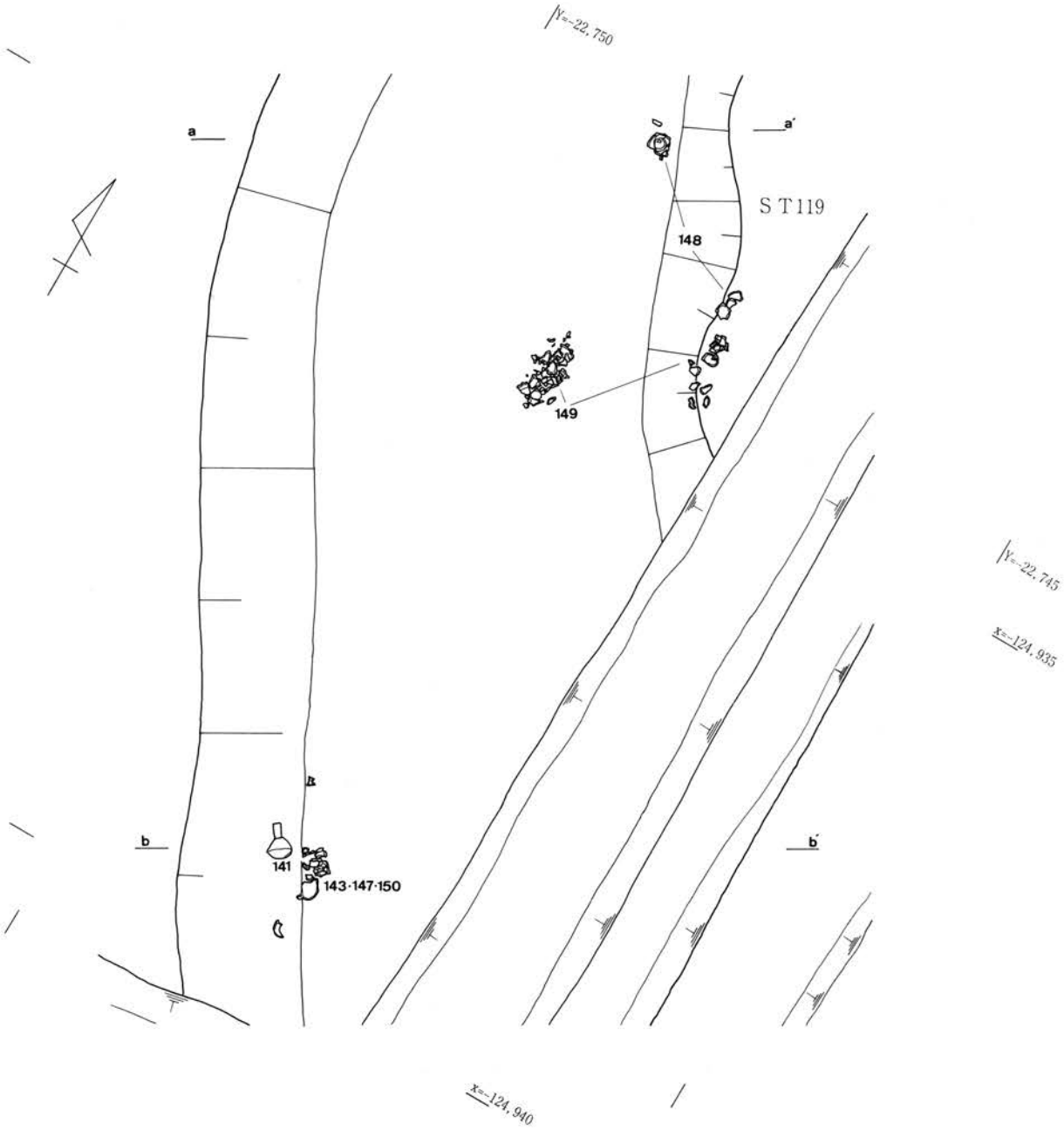


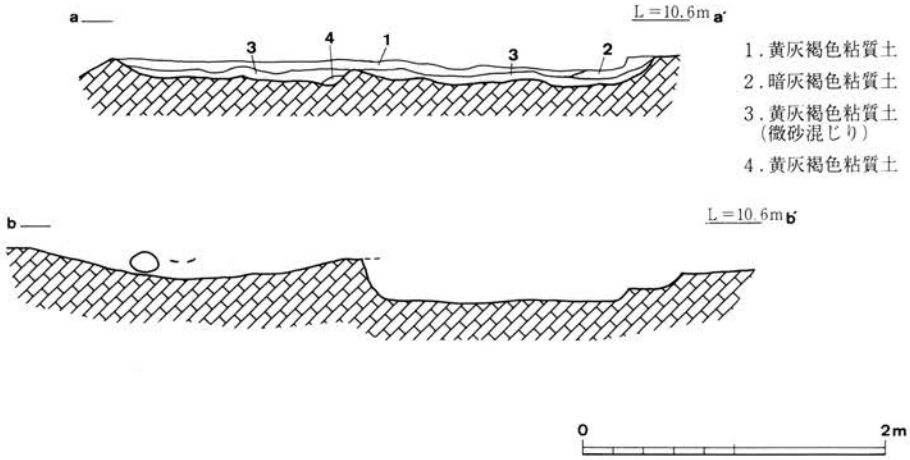




1.黄灰褐色粘質土　　4.灰茶褐色粘質土
2.灰褐色粘質土　　5.淡灰褐色粘土
3.黒灰褐色粘質土　　6.灰褐色粘質土
1・2.ST119周溝墓埋土　3～6.SD098埋土

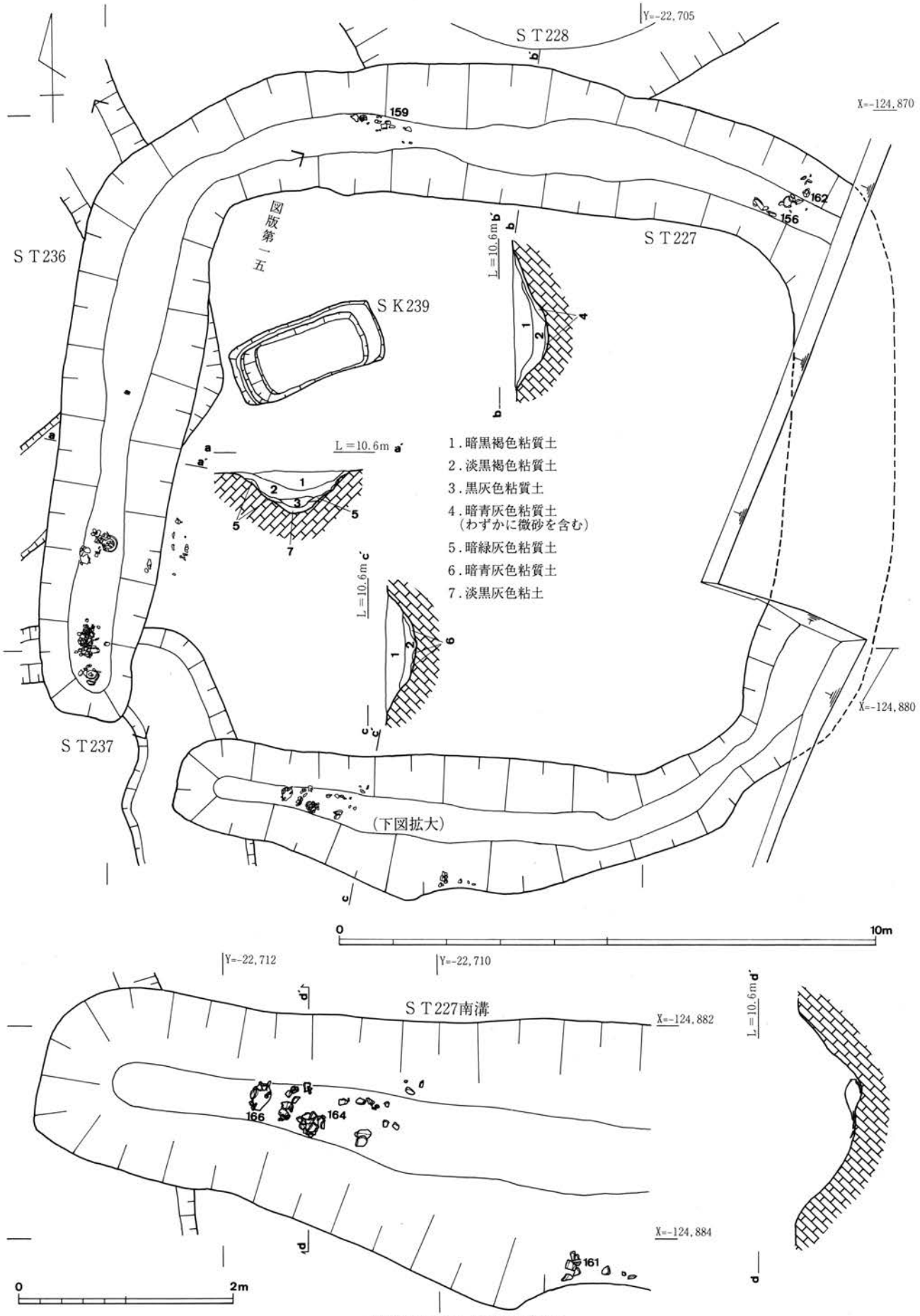
0　2m

方形周溝墓ST119東溝遺物出土状況図

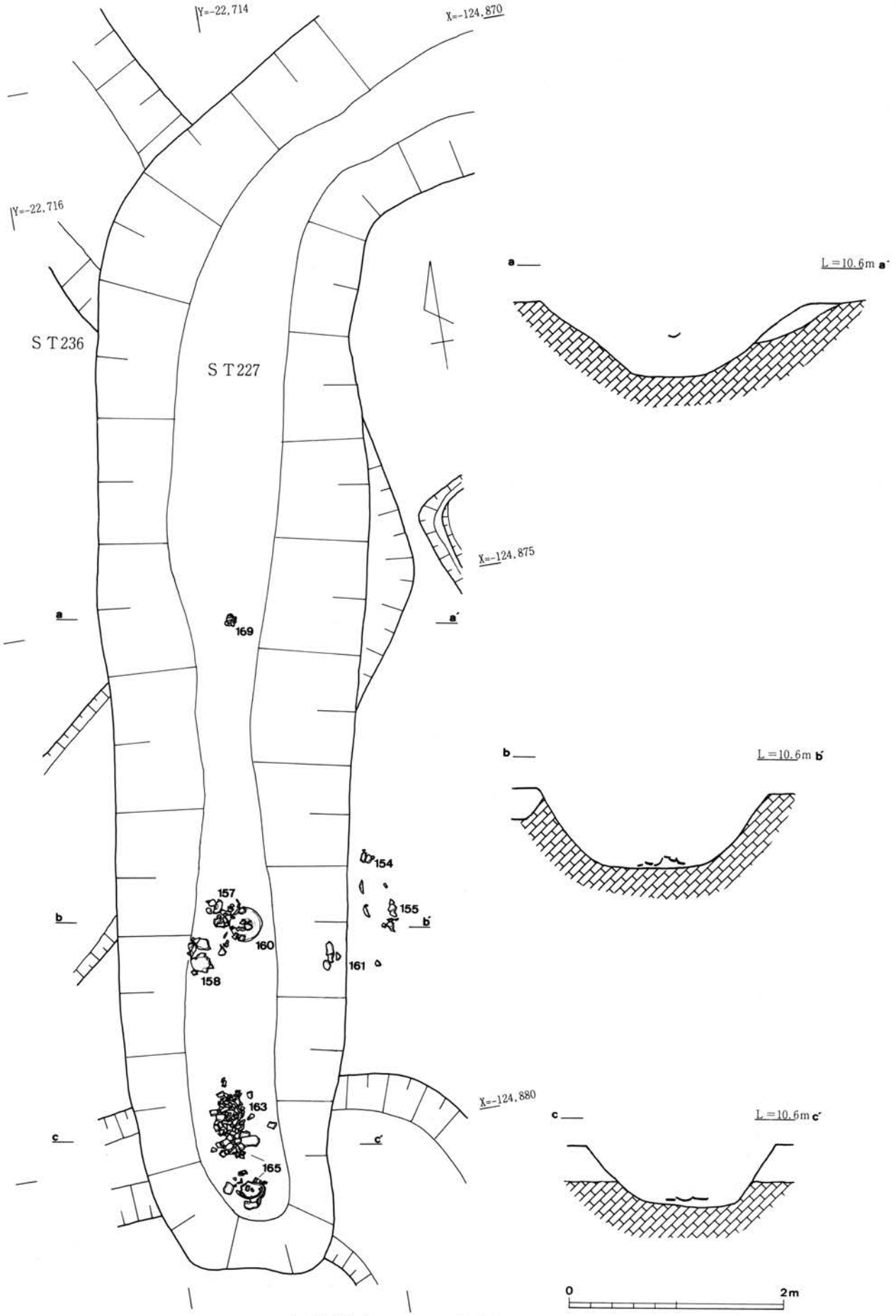


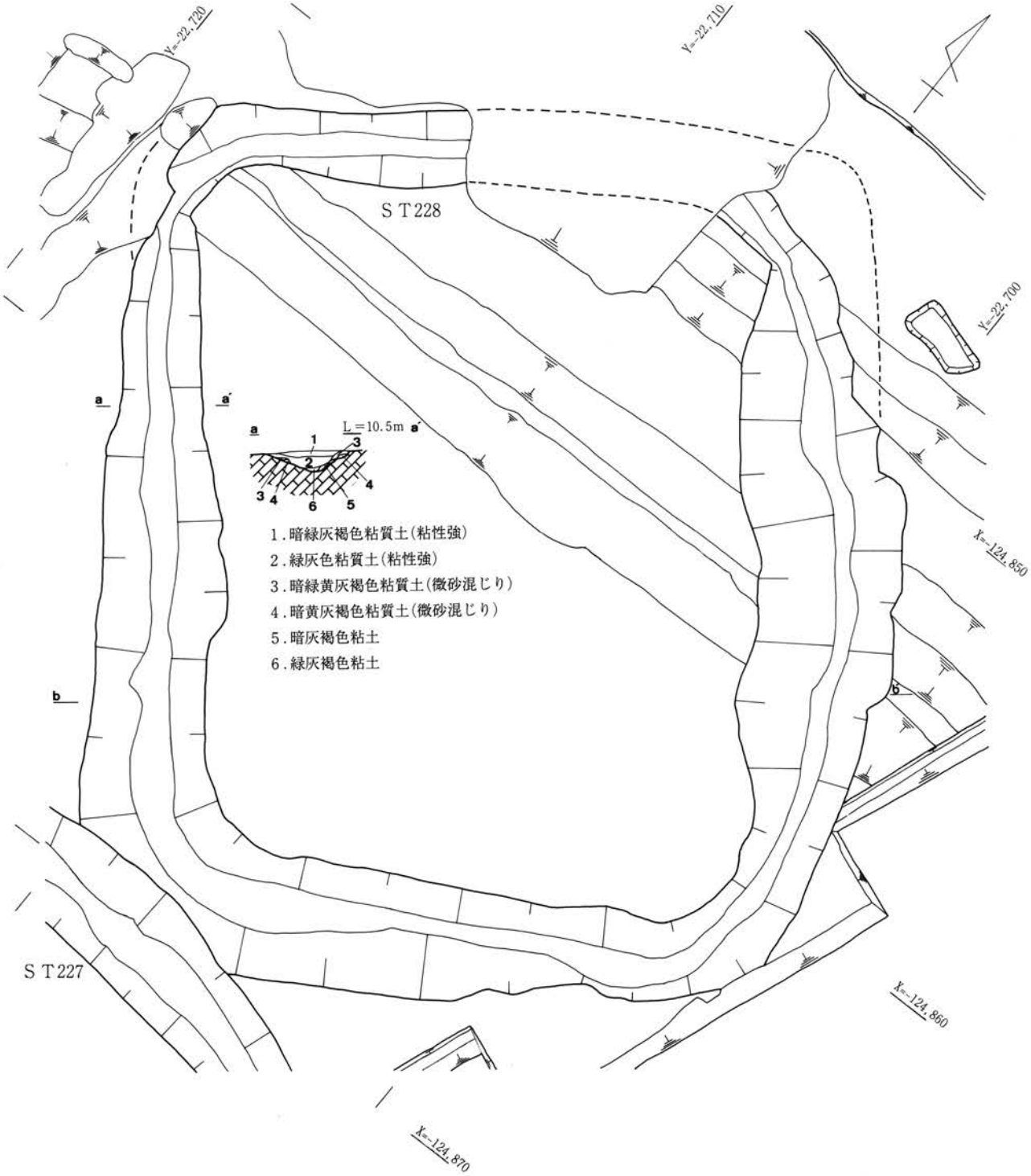

方形周溝墓ＳＴ119西溝遺物出土状況図

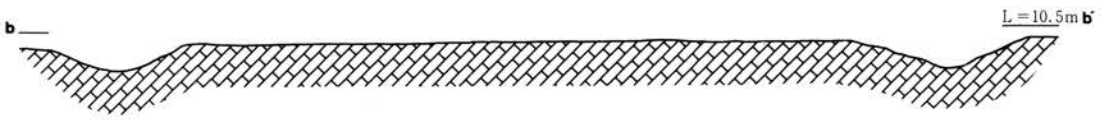



方形周溝墓ＳＴ227実測図

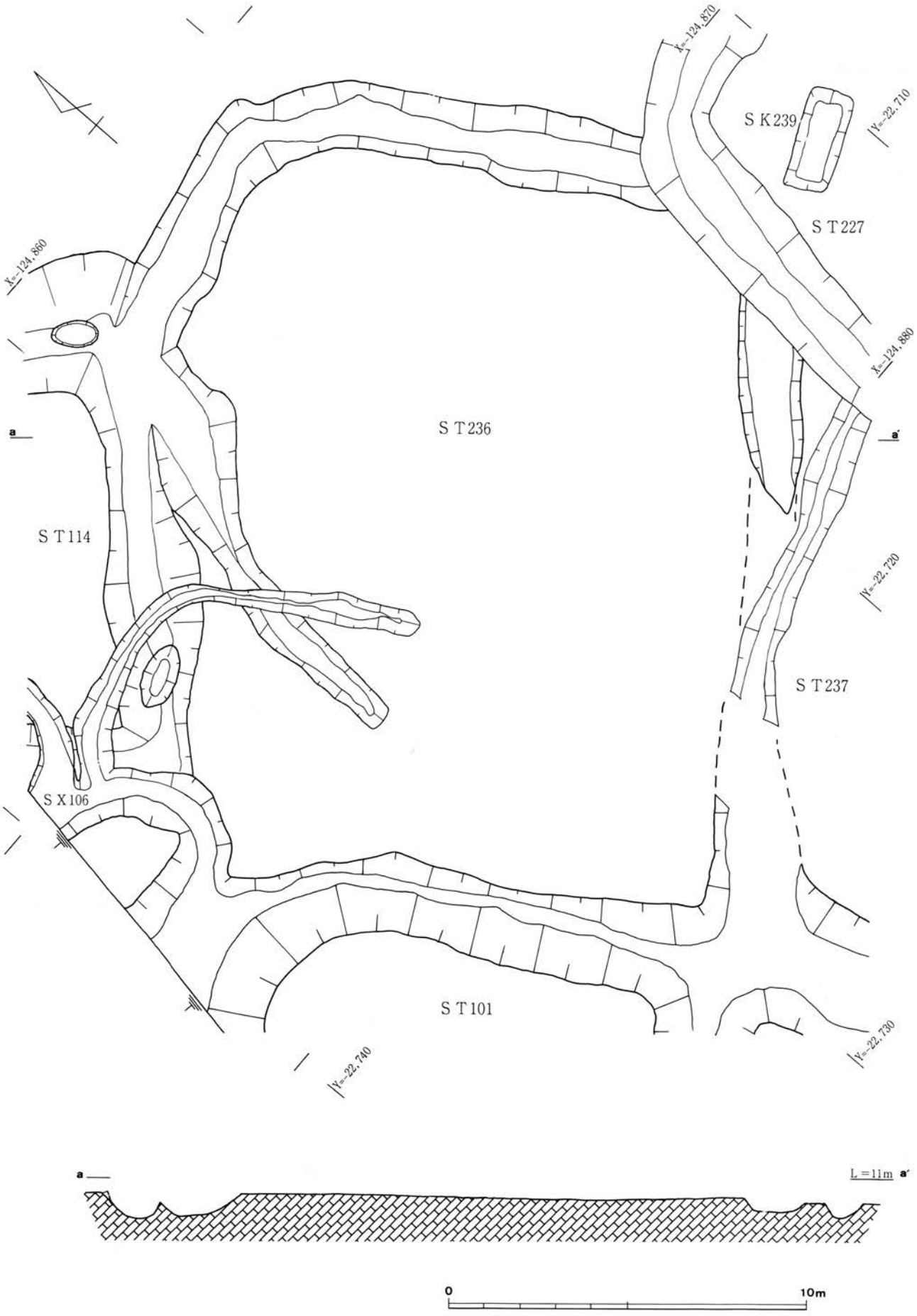



方形周溝墓ＳＴ227西溝遺物出土状況図

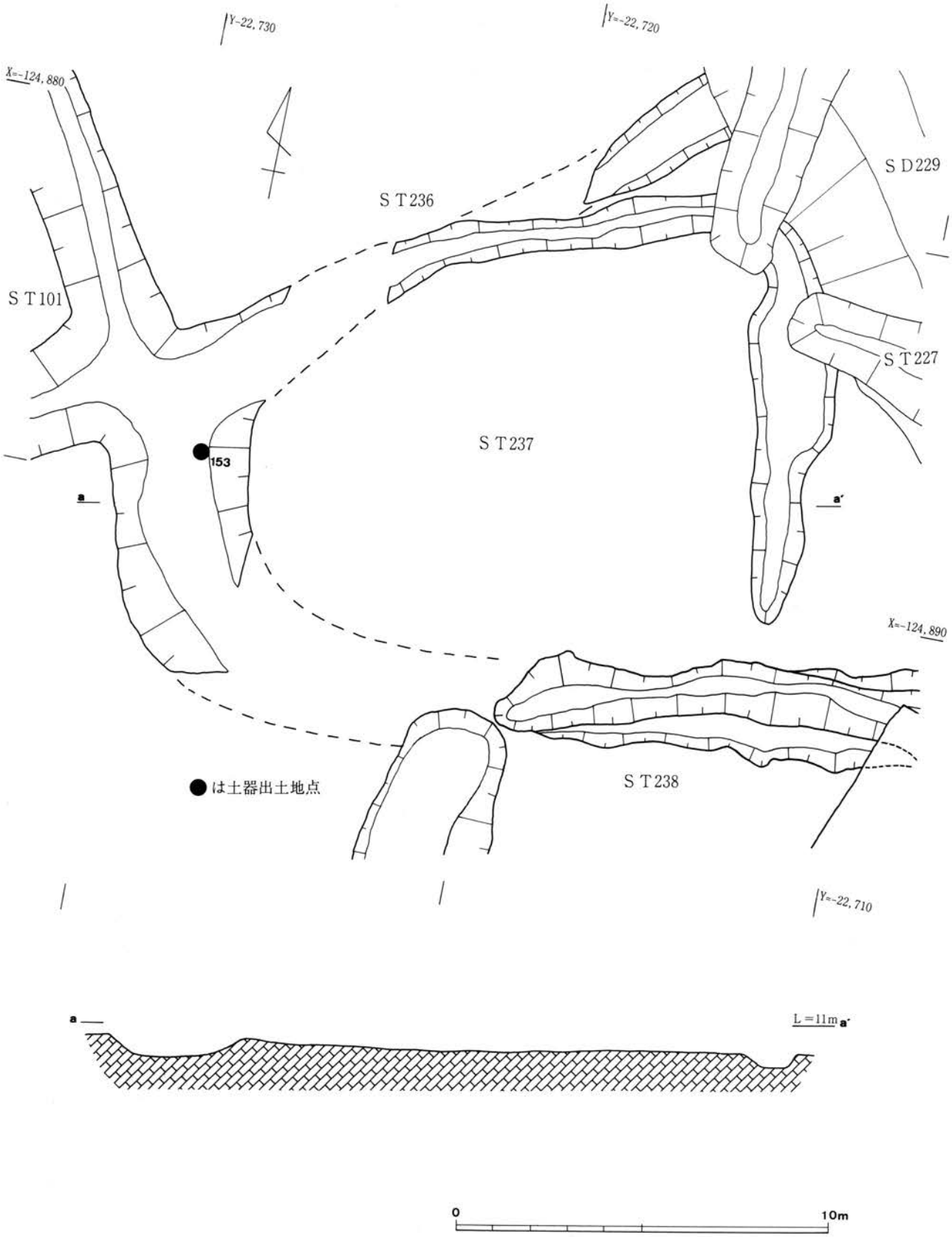


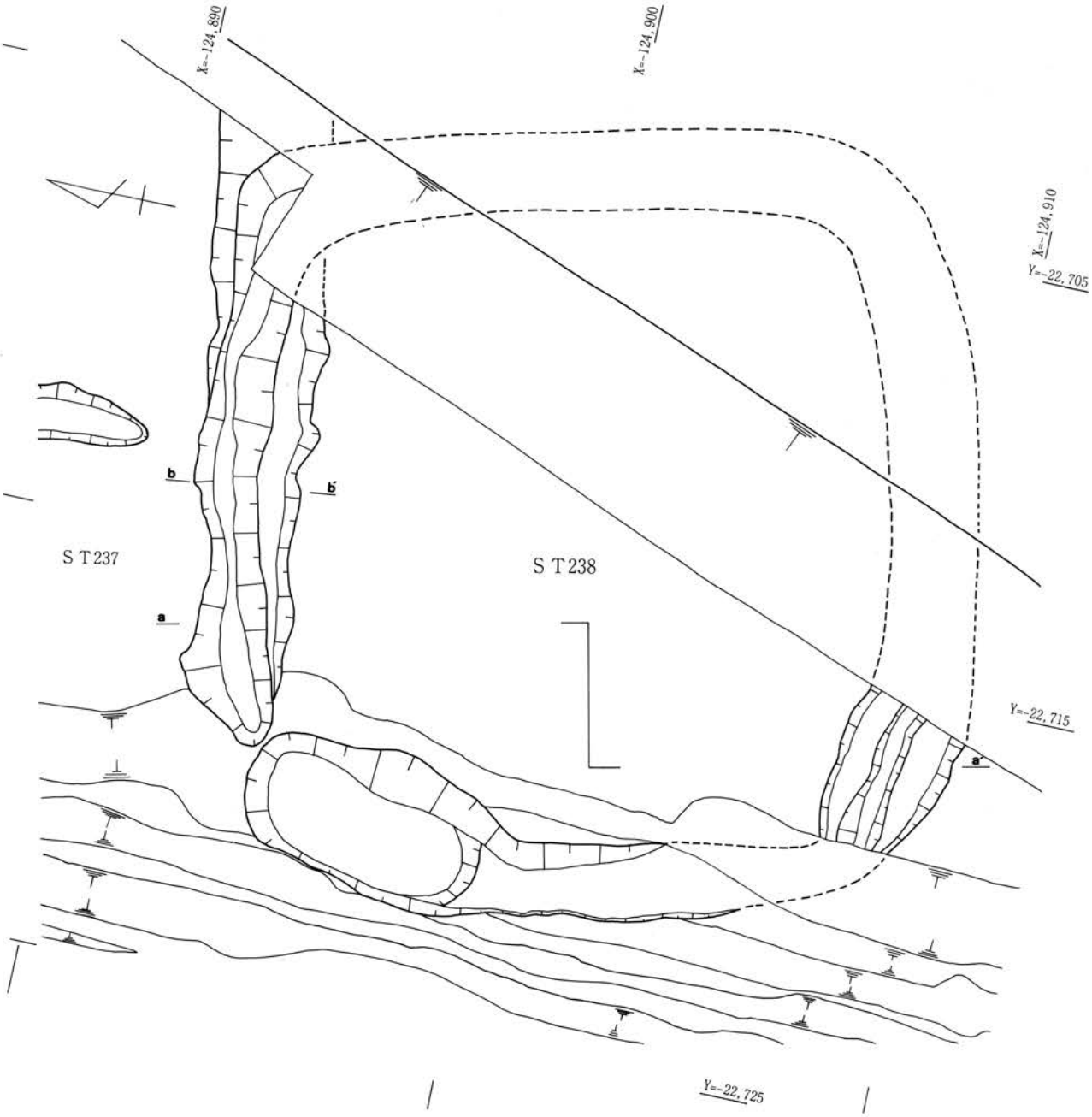
方形周溝墓ＳＴ228実測図

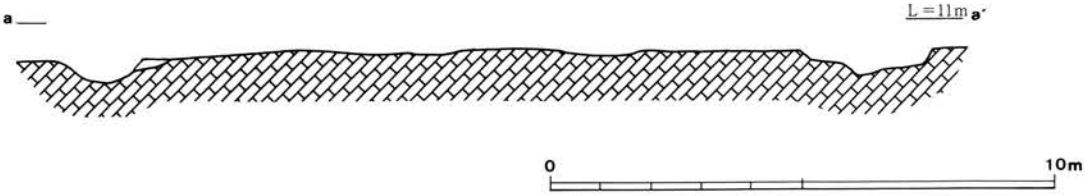


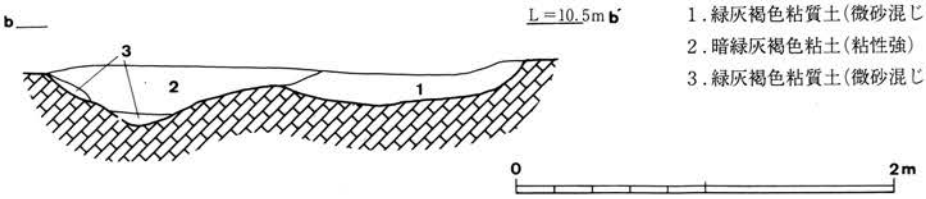

方形周溝墓ＳＴ236実測図




方形周溝墓ＳＴ237実測図

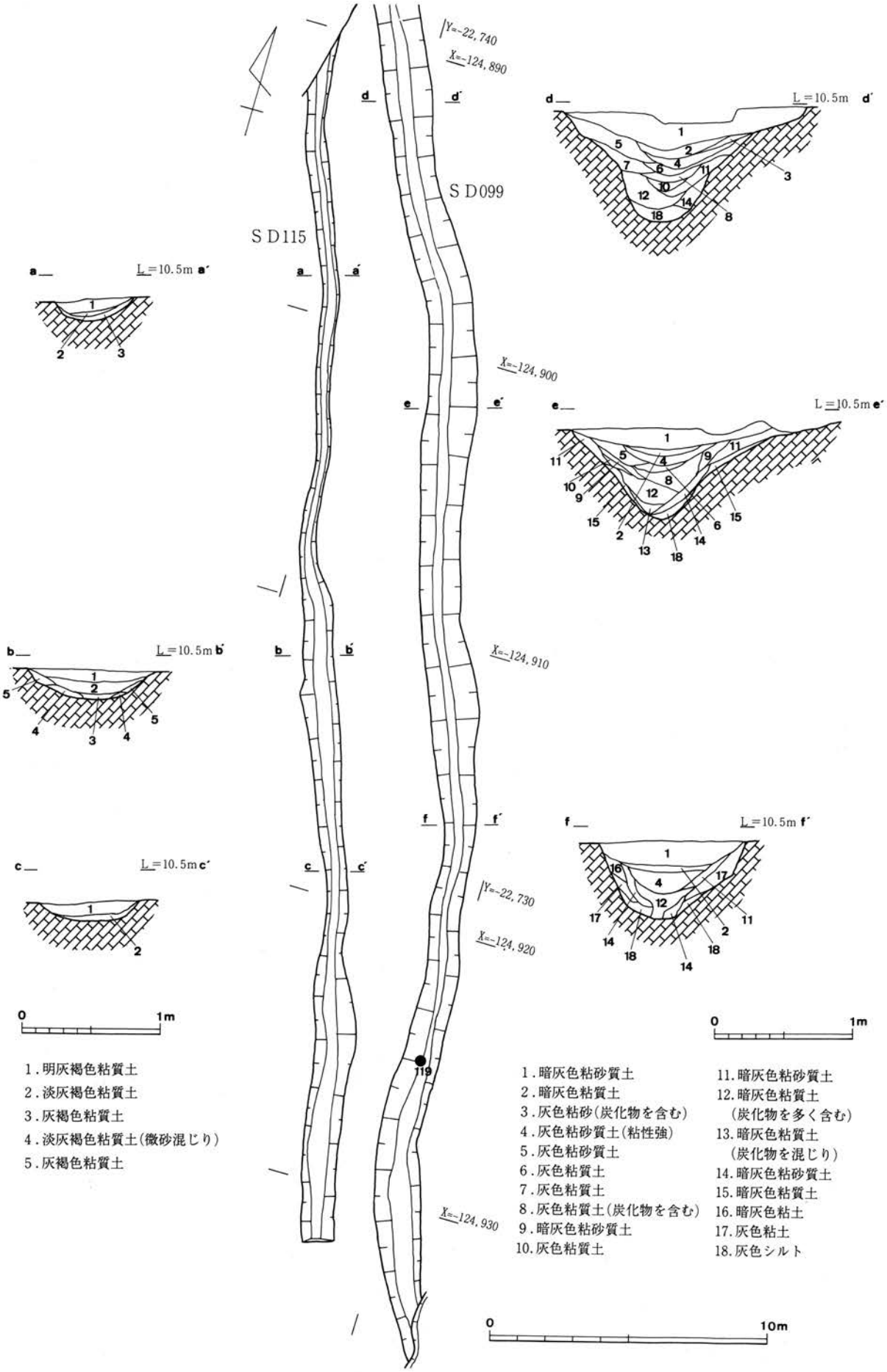


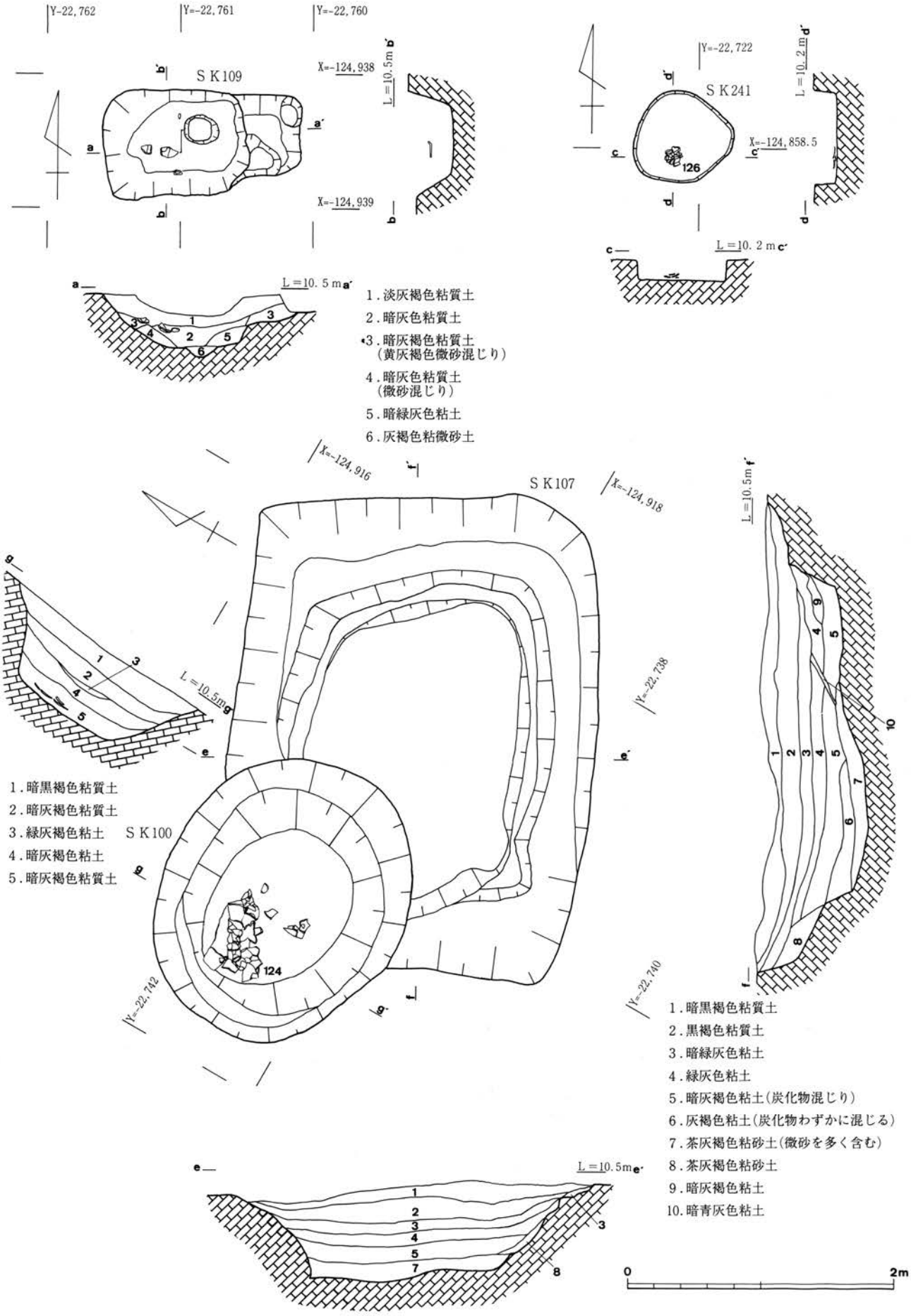




1．緑灰褐色粘質土（微砂混じり、ＳＴ237埋土）
2．暗緑灰褐色粘土（粘性強）
3．緑灰褐色粘質土（微砂混じり）

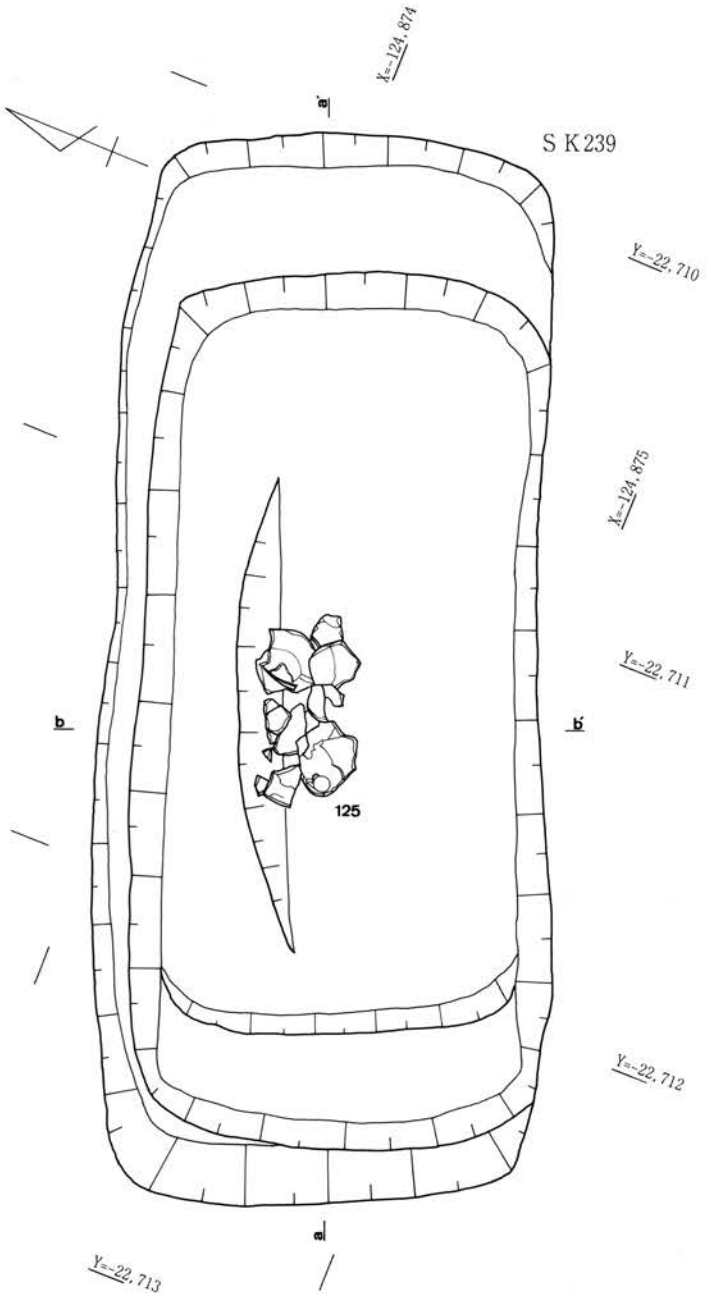
方形周溝墓ＳＴ238実測図

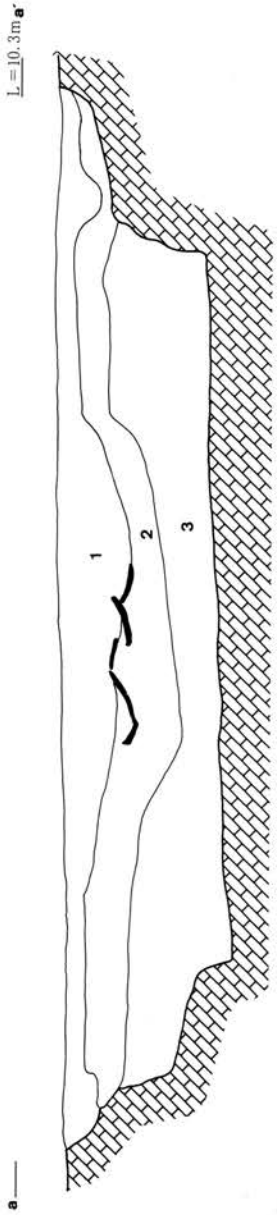


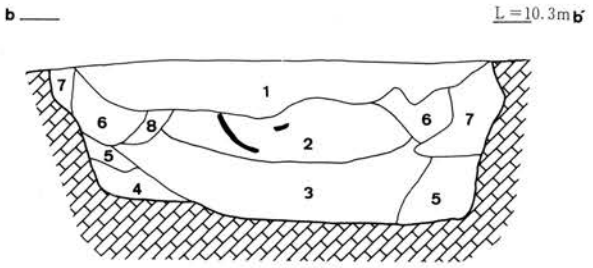

溝SD099・115実測図




土坑SK100・107・109・241実測図



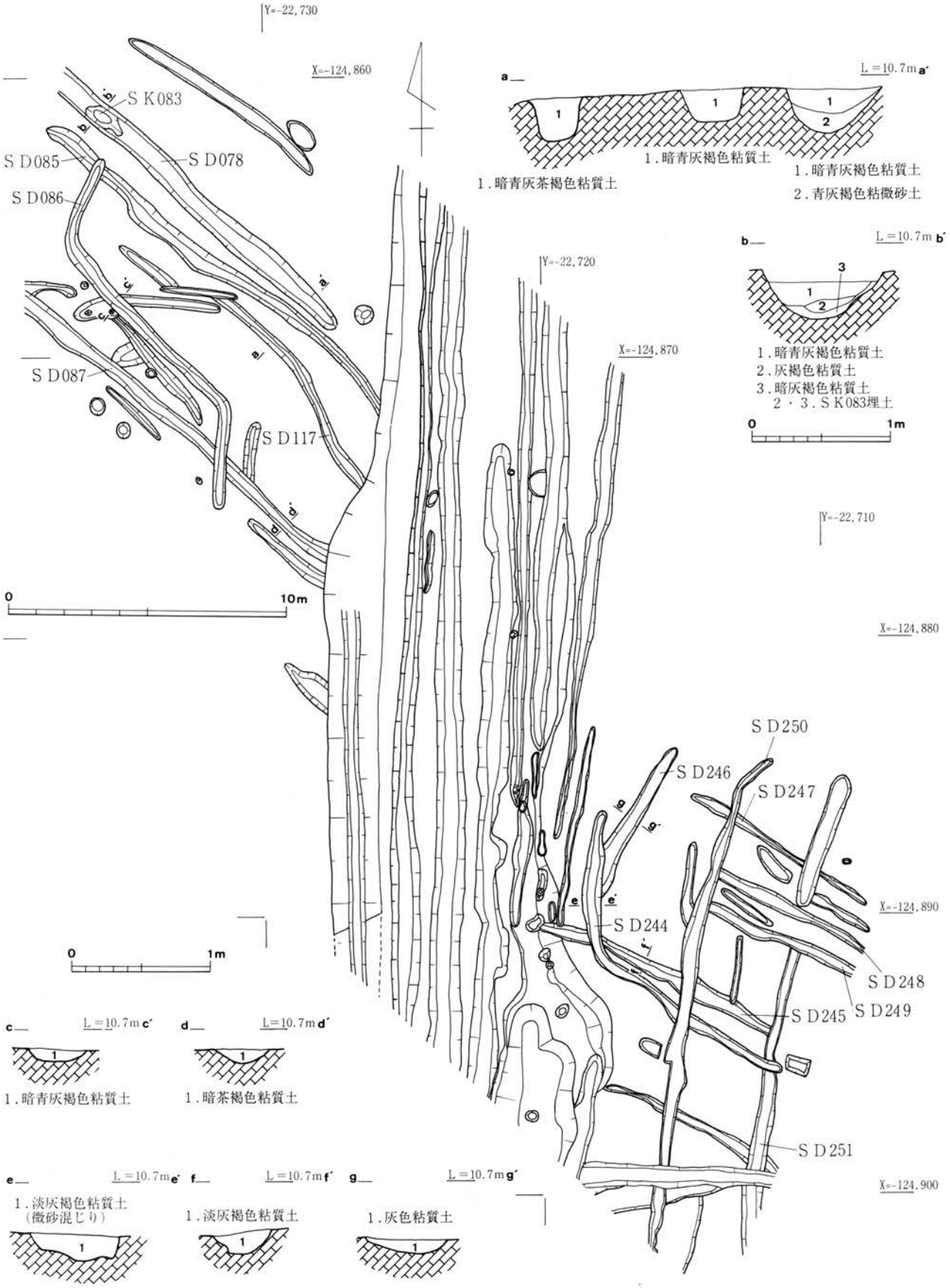



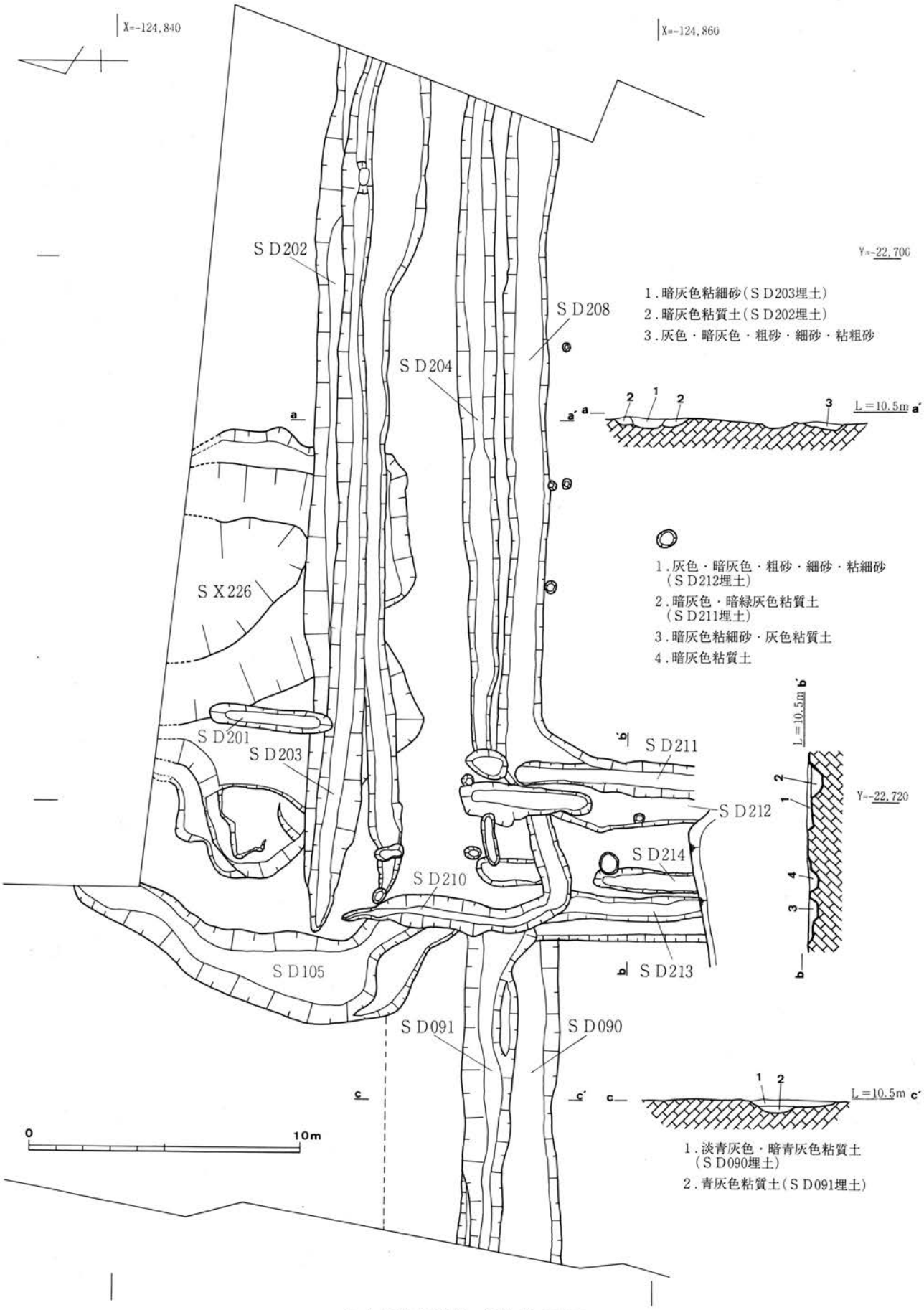

1. 暗黒灰褐色粘質土(粘性強)
2. 暗青灰褐色粘質土(微砂混じり)
3. 暗青灰緑褐色粘質土
（2より多く微砂が混じる）
4. 暗青灰褐色粘質土
（わずかに微砂混じり）
5. 暗青灰褐色粘質土(微砂混じり)
6. 暗青灰色粘質土(微砂混じり)
7. 黄灰褐色微砂
8. 淡灰褐色粘微砂

0 1m

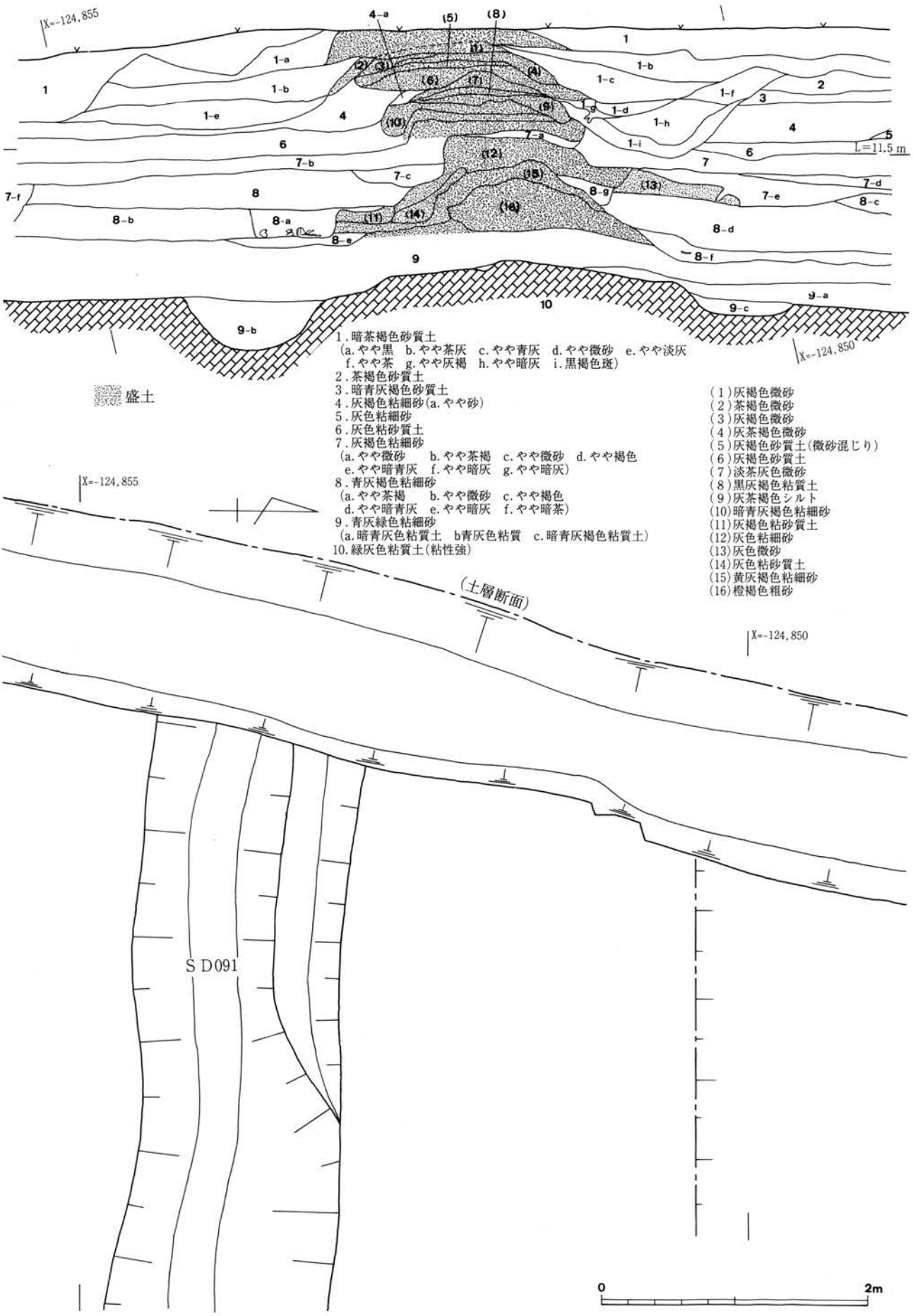
土坑SK239実測図



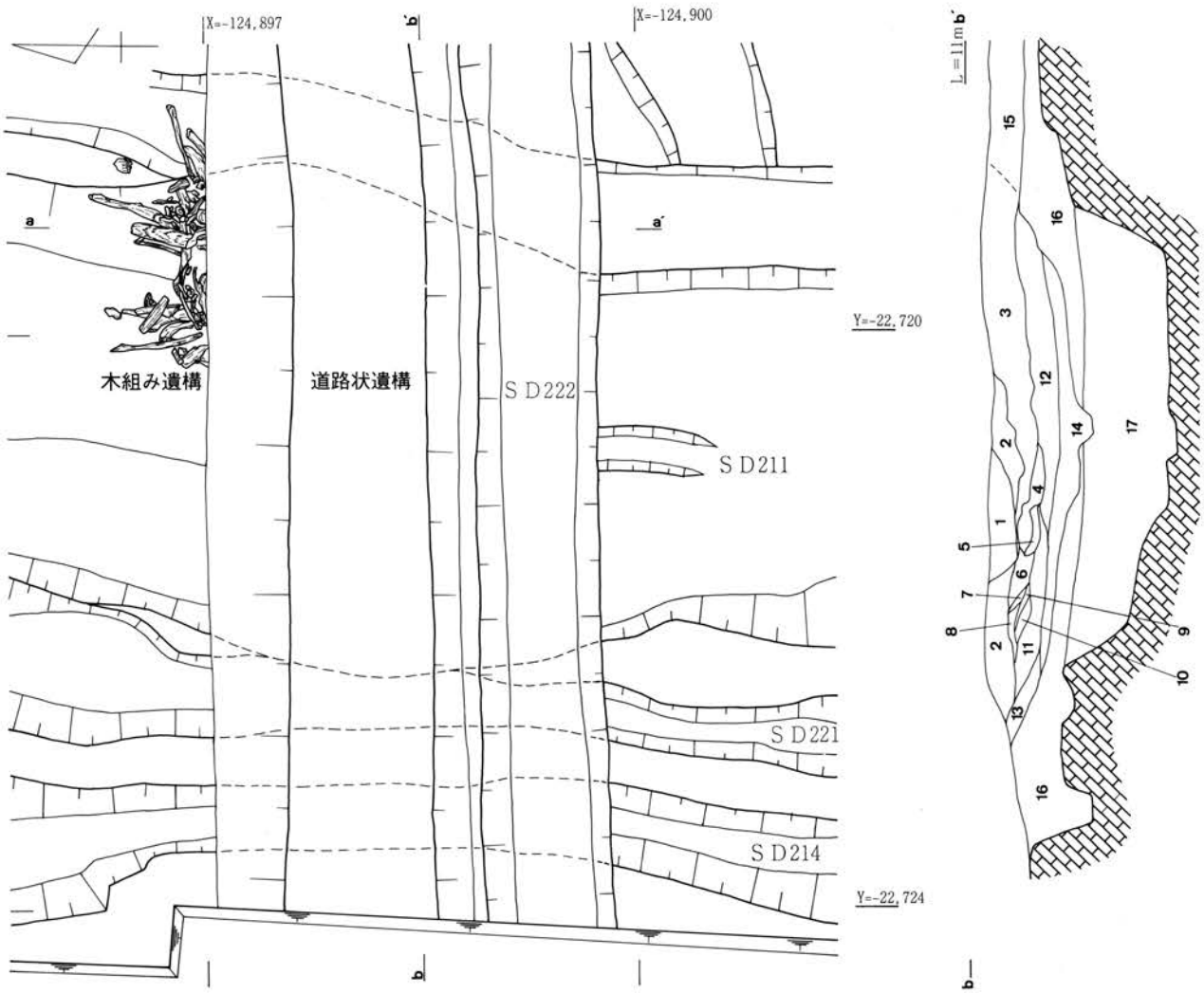

調査地中央溝群実測図(道路状遺構除去後)

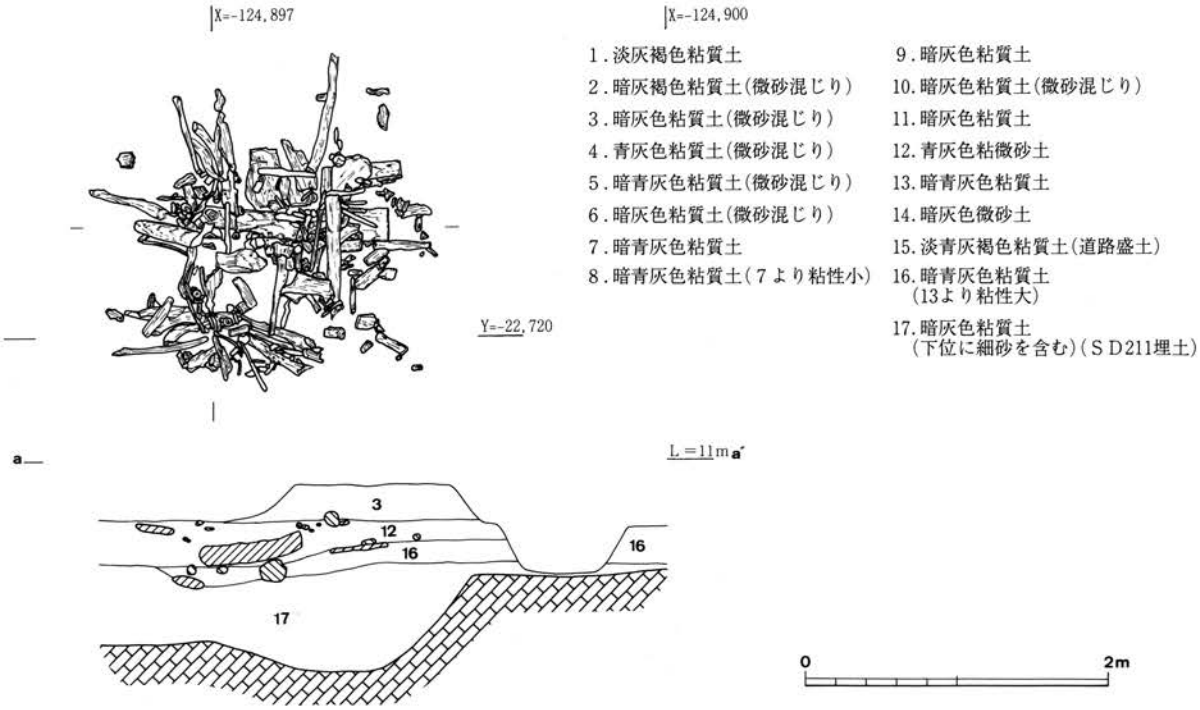



調査地北部溝群・坪境道実測図



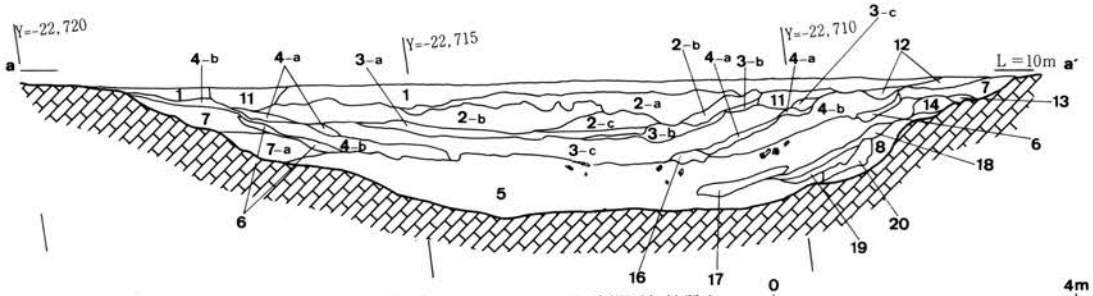

調査地西部坪境道平面図・同調査地西壁断面図



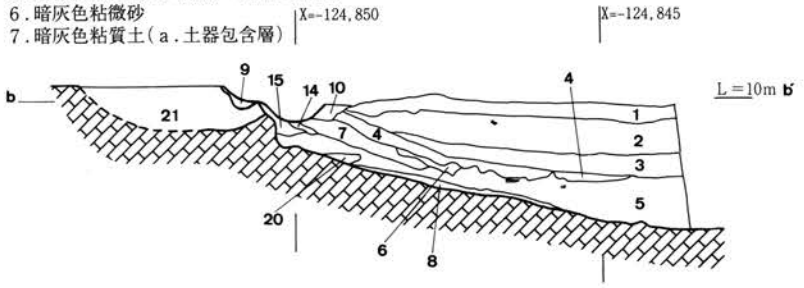




1. 淡灰褐色粘質土
2. 暗灰褐色粘質土(微砂混じり)
3. 暗灰色粘質土(微砂混じり)
4. 青灰色粘質土(微砂混じり)
5. 暗青灰色粘質土(微砂混じり)
6. 暗灰色粘質土(微砂混じり)
7. 暗青灰色粘質土
8. 暗青灰色粘質土(7より粘性小)
9. 暗灰色粘質土
10. 暗灰色粘質土(微砂混じり)
11. 暗灰色粘質土
12. 青灰色粘微砂土
13. 暗青灰色粘質土
14. 暗灰色微砂土
15. 淡青灰褐色粘質土(道路盛土)
16. 暗青灰色粘質土(13より粘性大)
17. 暗灰色粘質土(下位に細砂を含む)(S D211埋土)

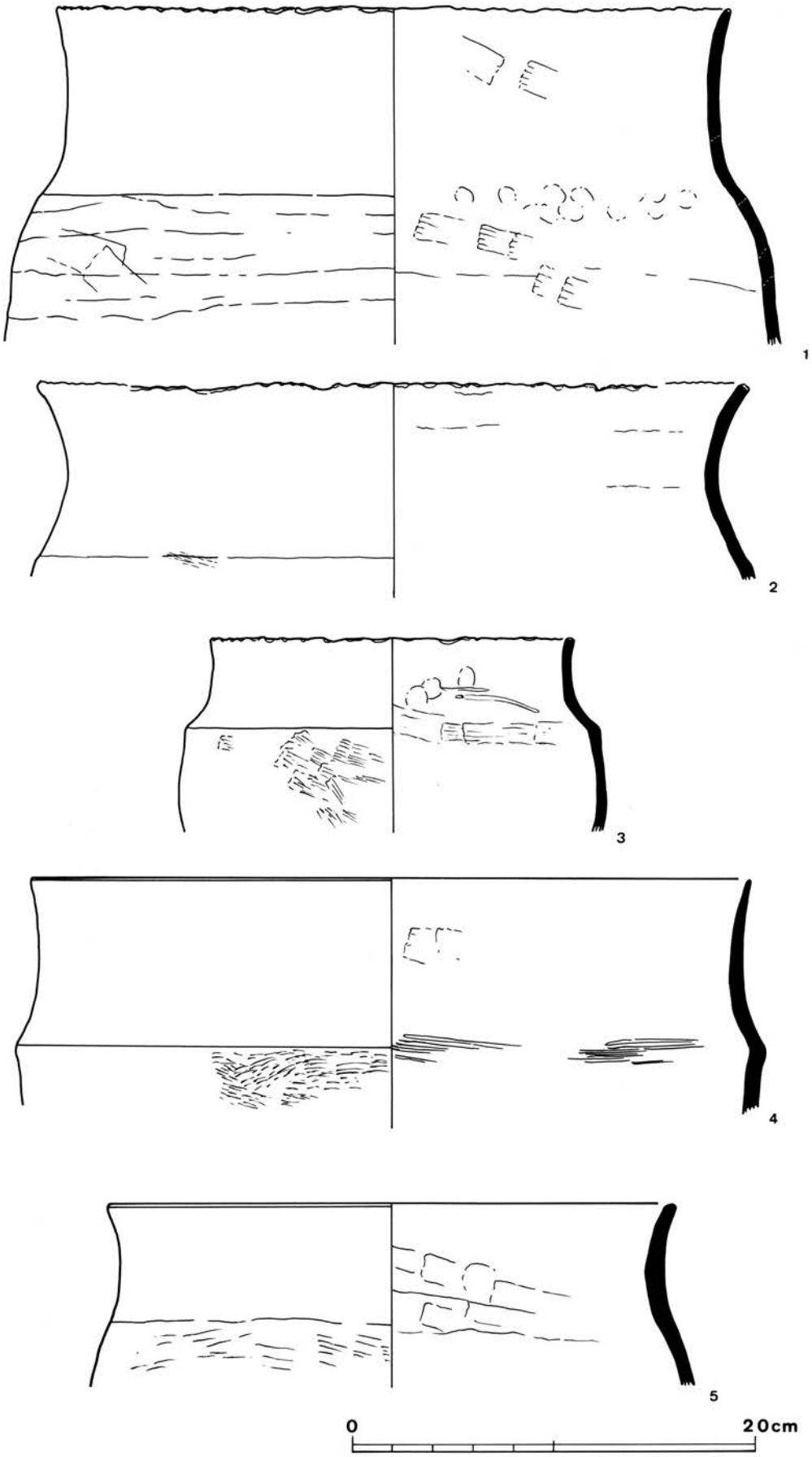
道路状遺構・木組み遺構実測図



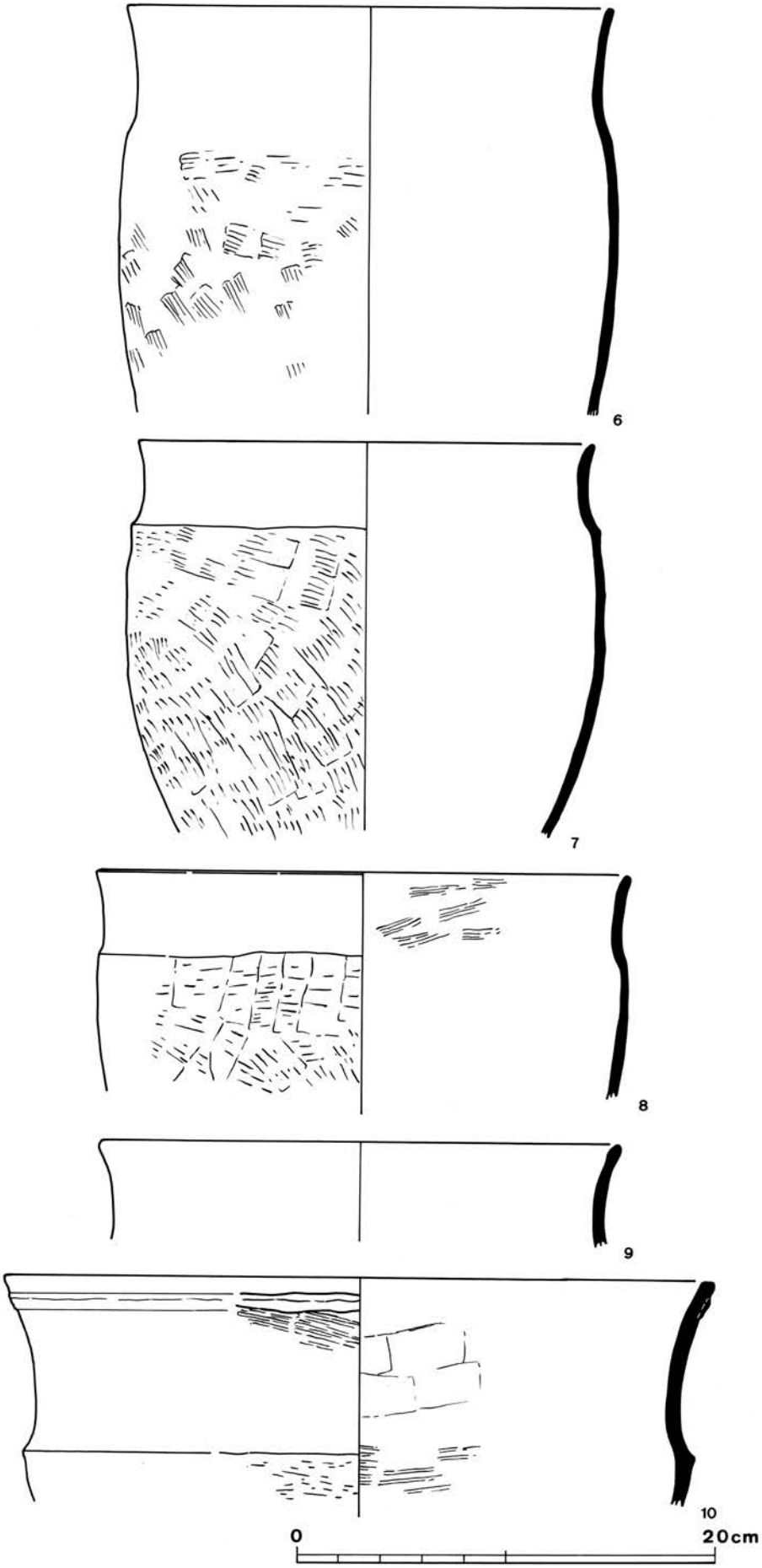

1. 暗灰色粘質土
2. 暗緑灰色粘質土
（a. やや細砂混じり　b. 砂混じり　c. 粘土ブロック）
3. 暗灰色粘質土
（a. やや緑色　b. やや砂混じり　c. やや粘質）
4. 暗灰色粘細砂
（a. やや緑色　b. やや砂混じり）
5. 暗緑灰色粘質土（獣骨・土器包含層）
6. 暗灰色粘微砂
7. 暗灰色粘質土（a. 土器包含層）
8. 暗緑灰色細砂
9. 暗黒灰色粘質土
10. 暗灰褐色粘質土
11. 暗緑灰色粘粗砂
12. 暗緑灰粘質土
13. 暗緑灰粘質土（ブロック）
14. 緑灰色粘質土
15. 暗緑灰色粘質土
16. 暗緑灰色粘質土（ブロック）
17. 暗灰色粘粗砂
18. 灰白色粗砂
19. 灰白色砂
20. 緑白色粘土
（17～20は5層にブロック状に入る）
21. 緑灰褐色粘質土（S T228埋土）



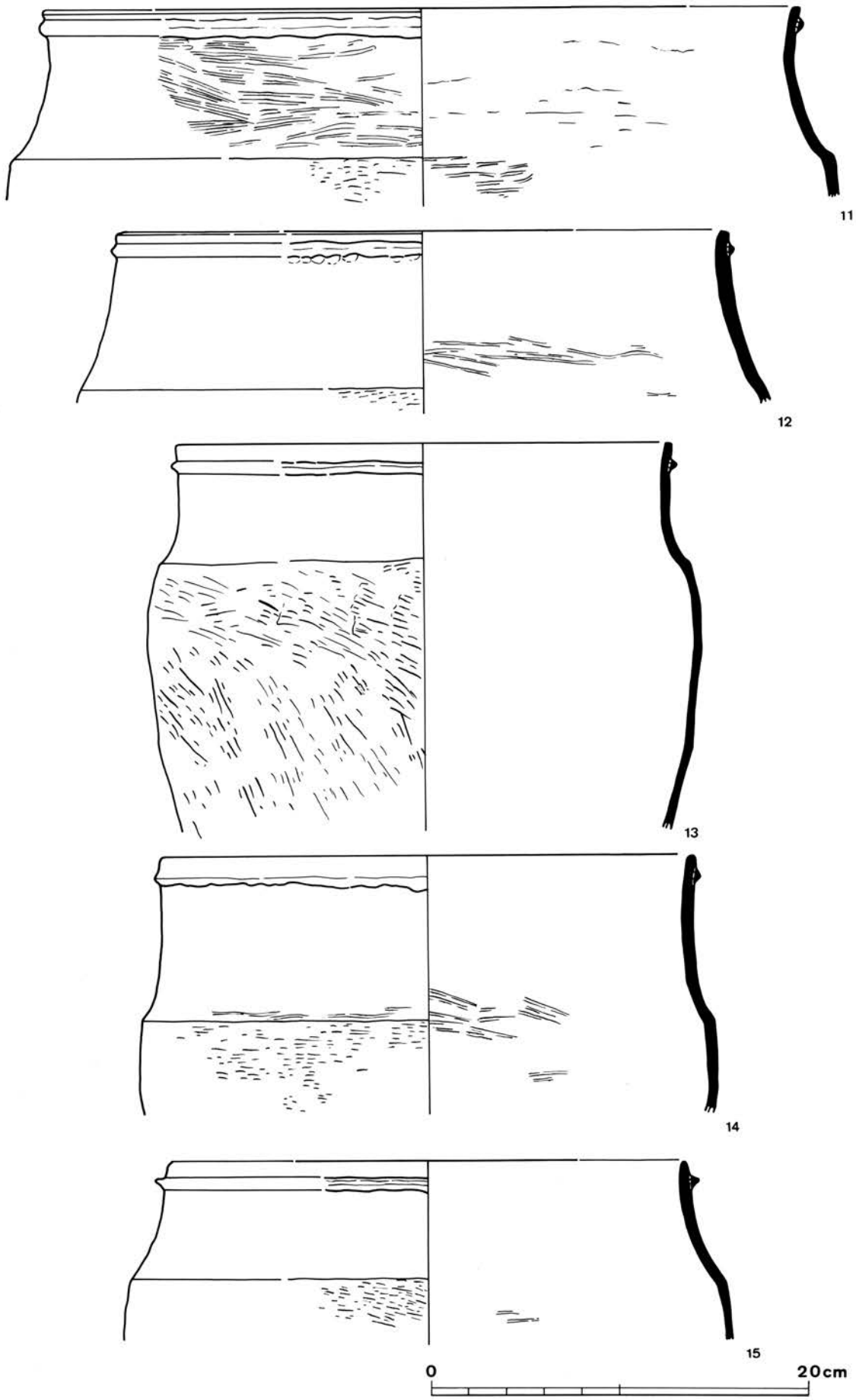

池状遺構S X226実測図



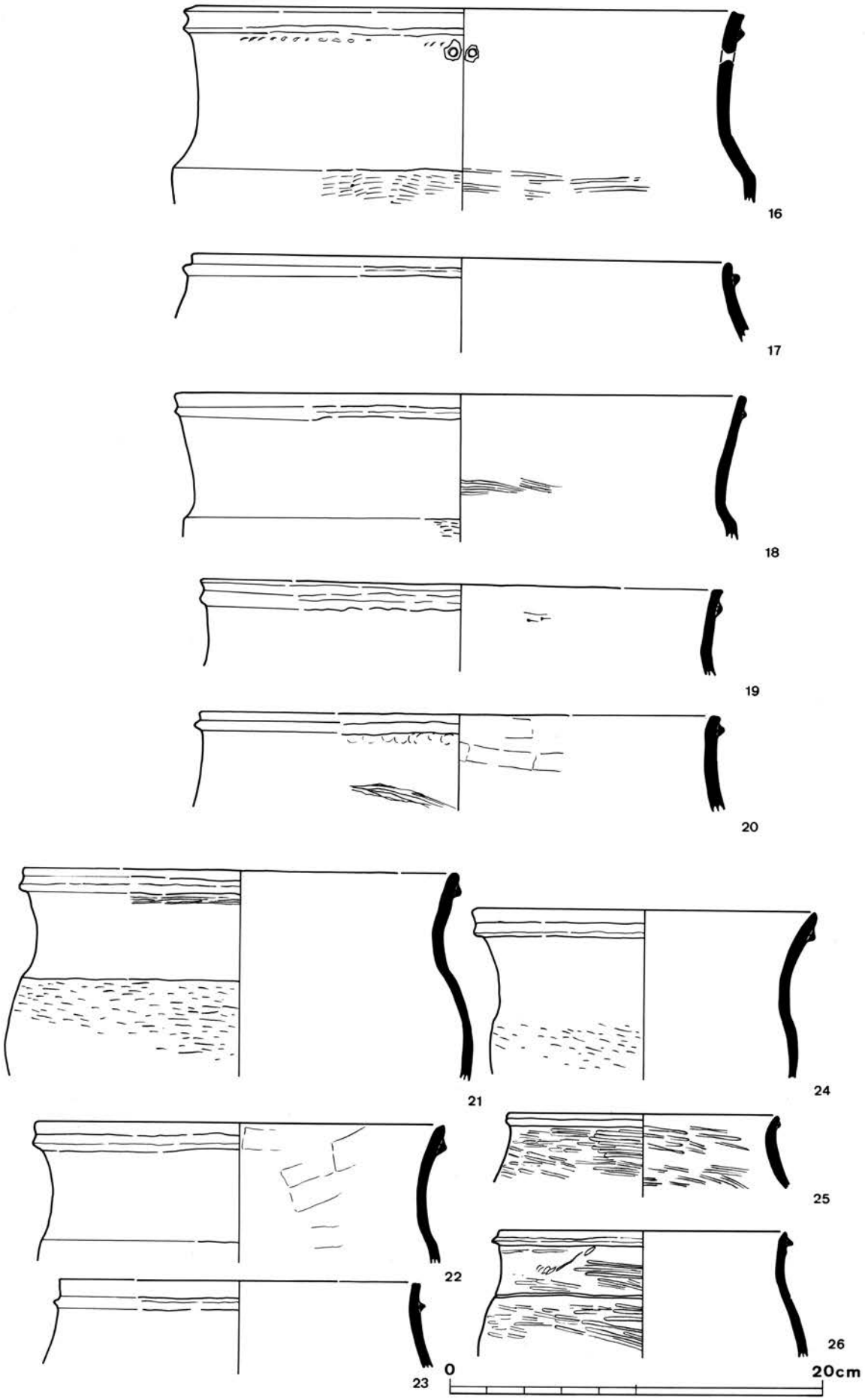

土器実測図(1)



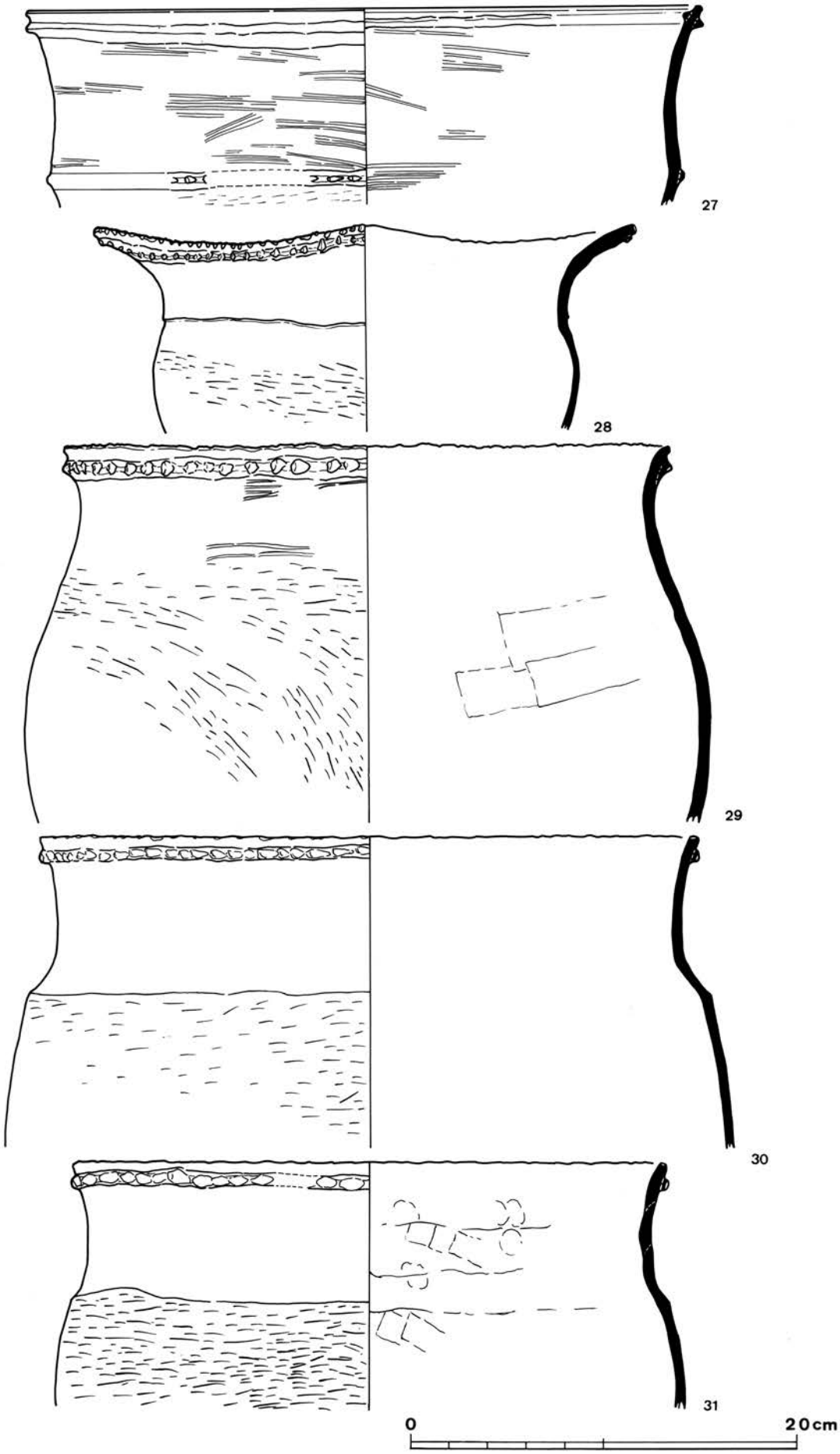

土器実測図(2)



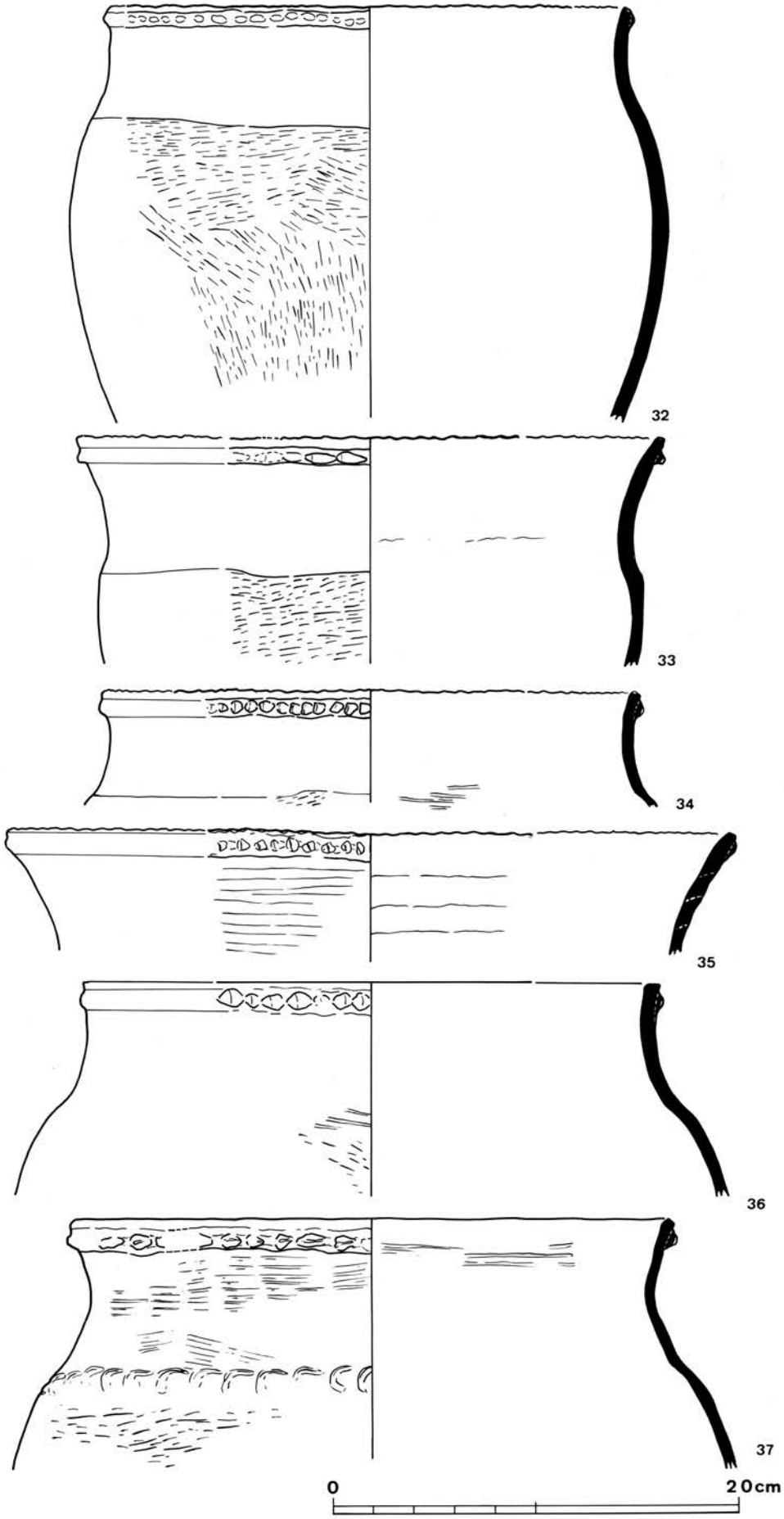

土器実測図(3)



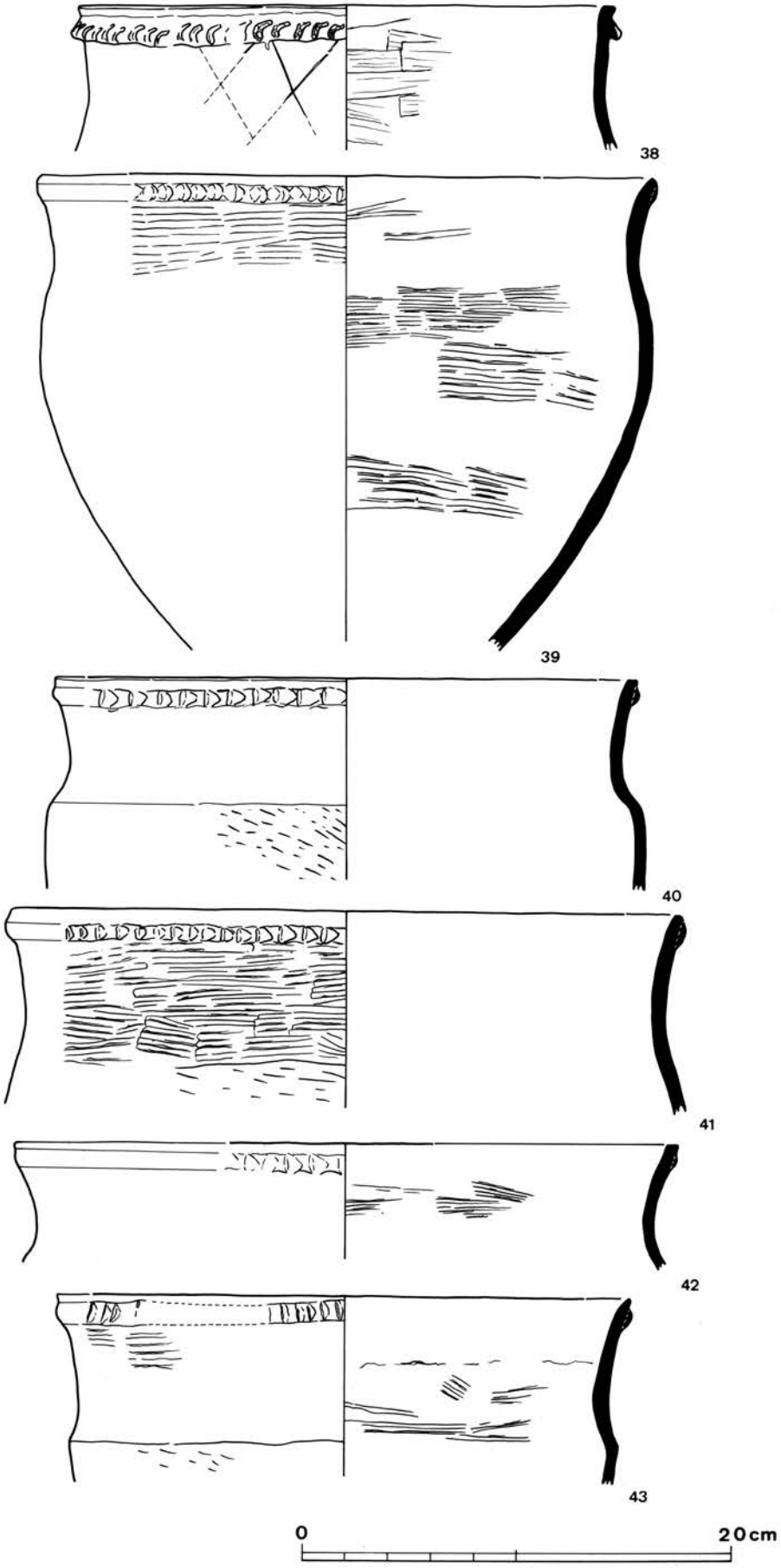

土器実測図(4)



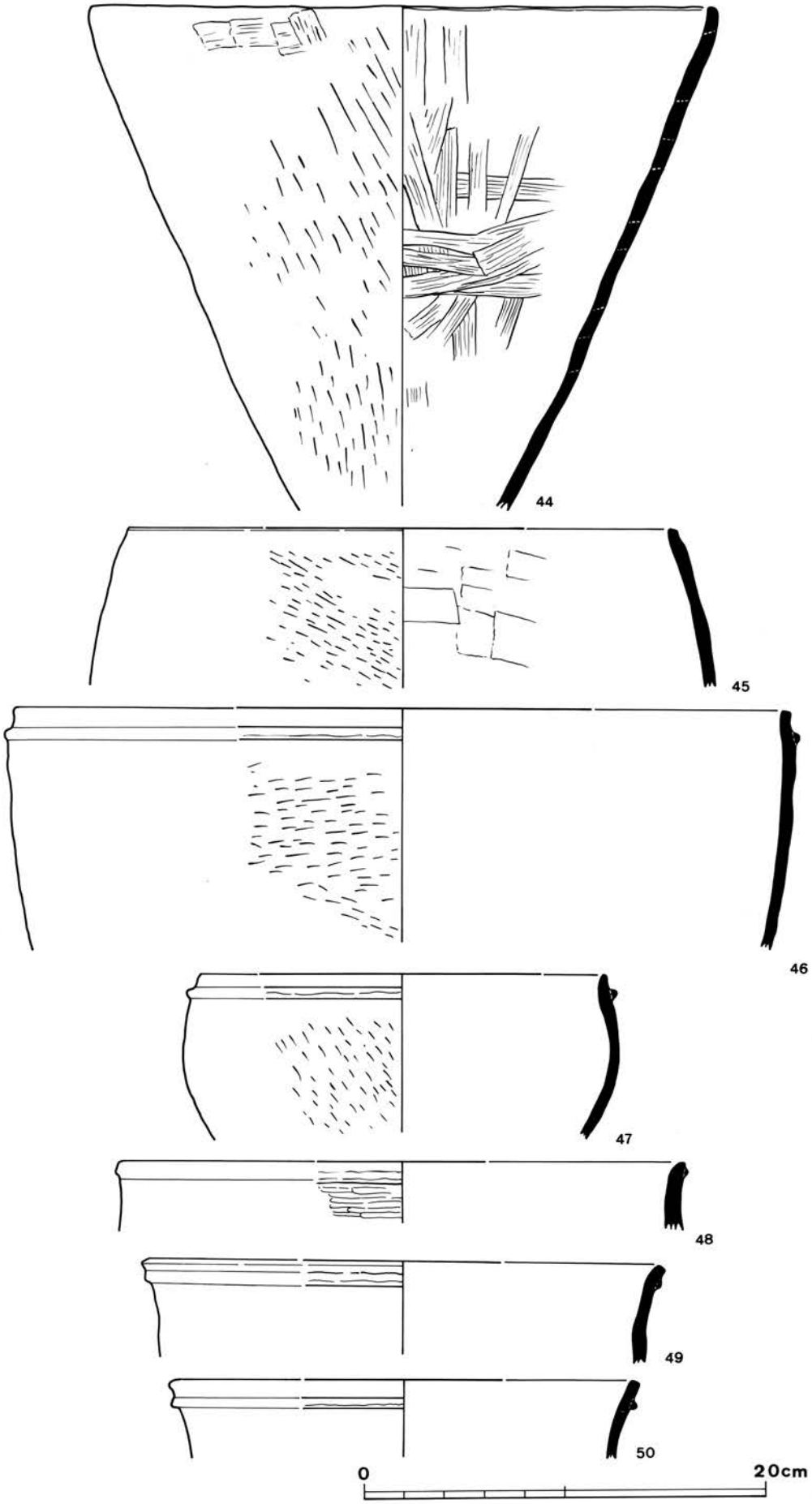

土器実測図(5)



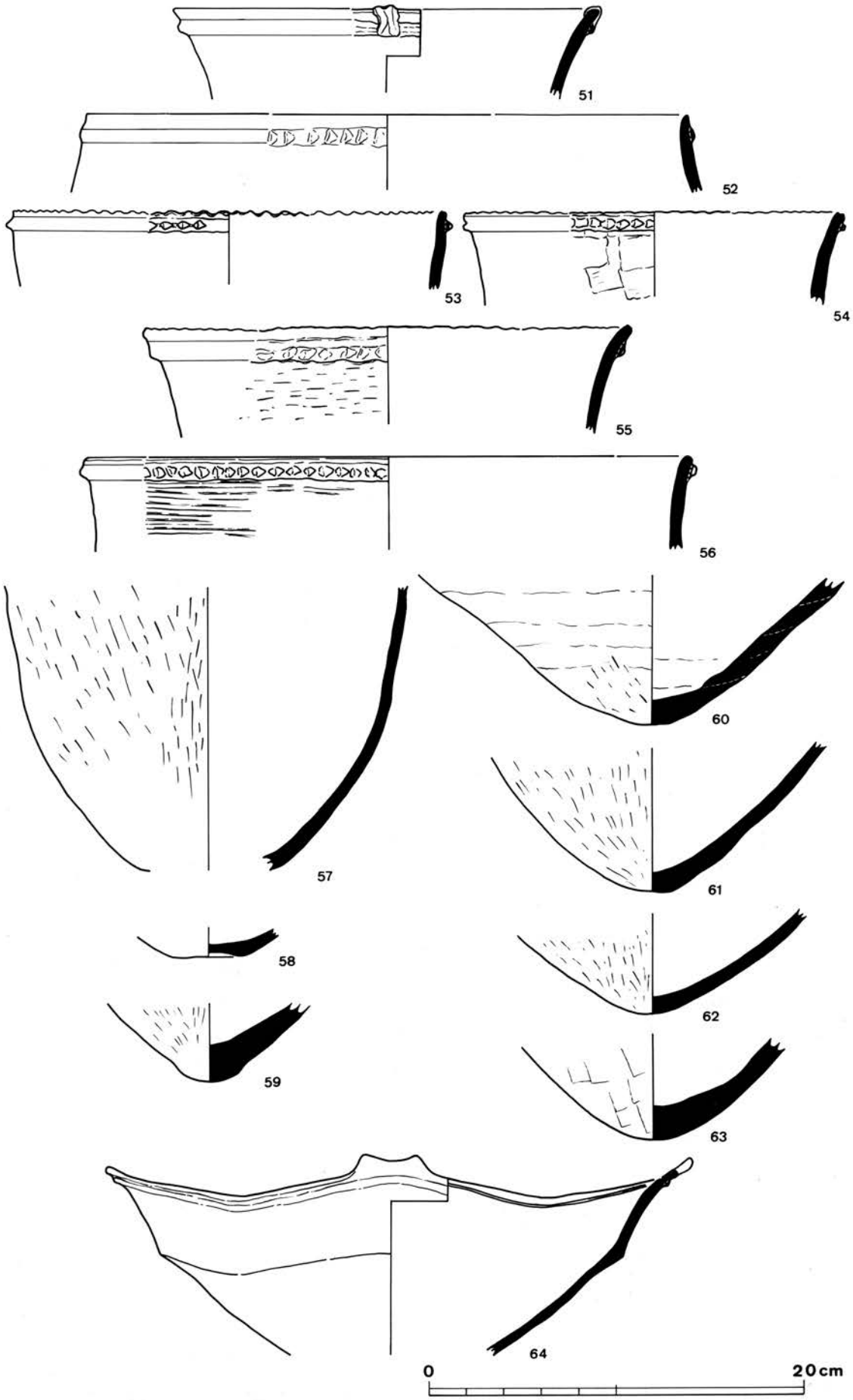

土器実測図(6)



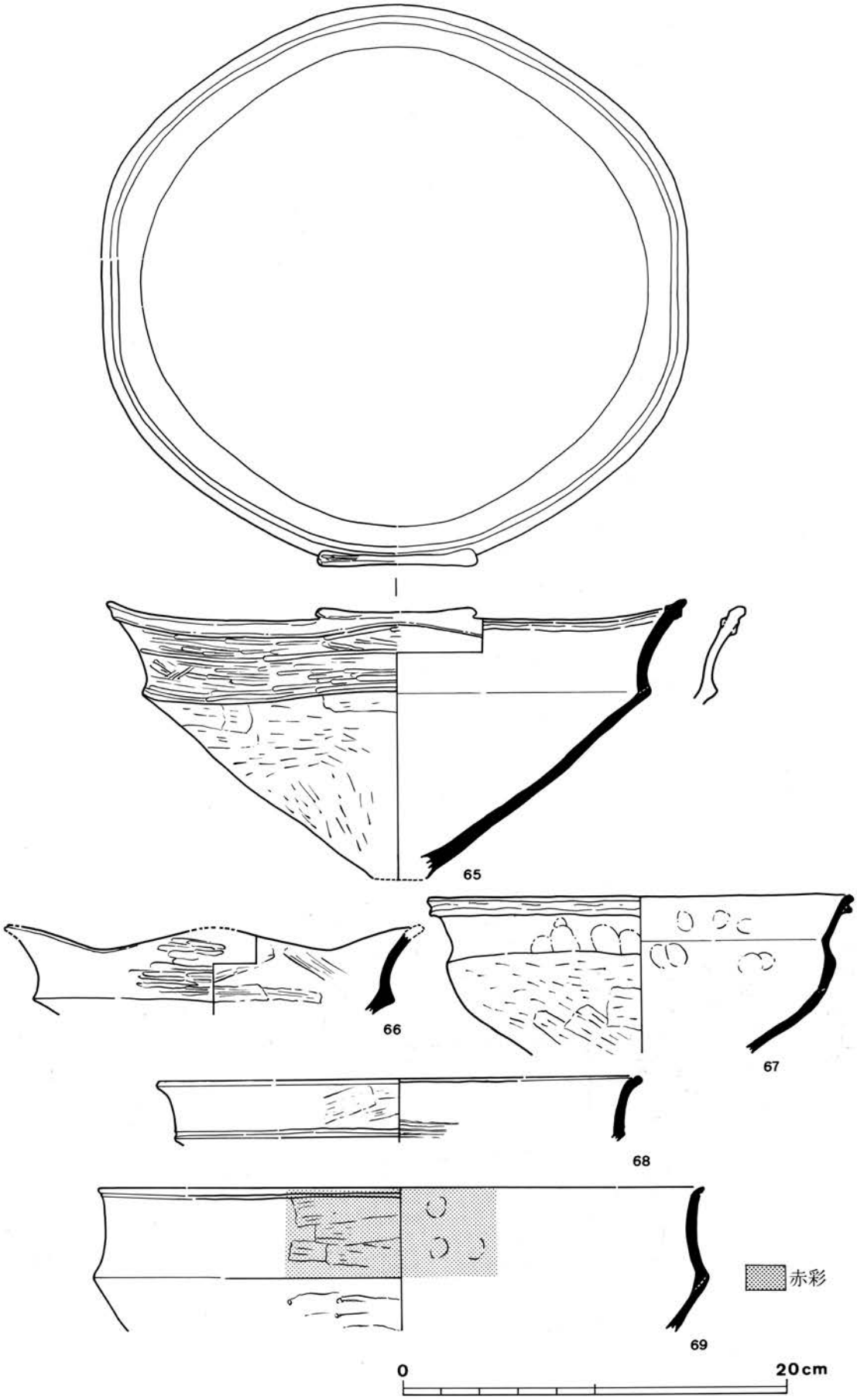

土器実測図(7)



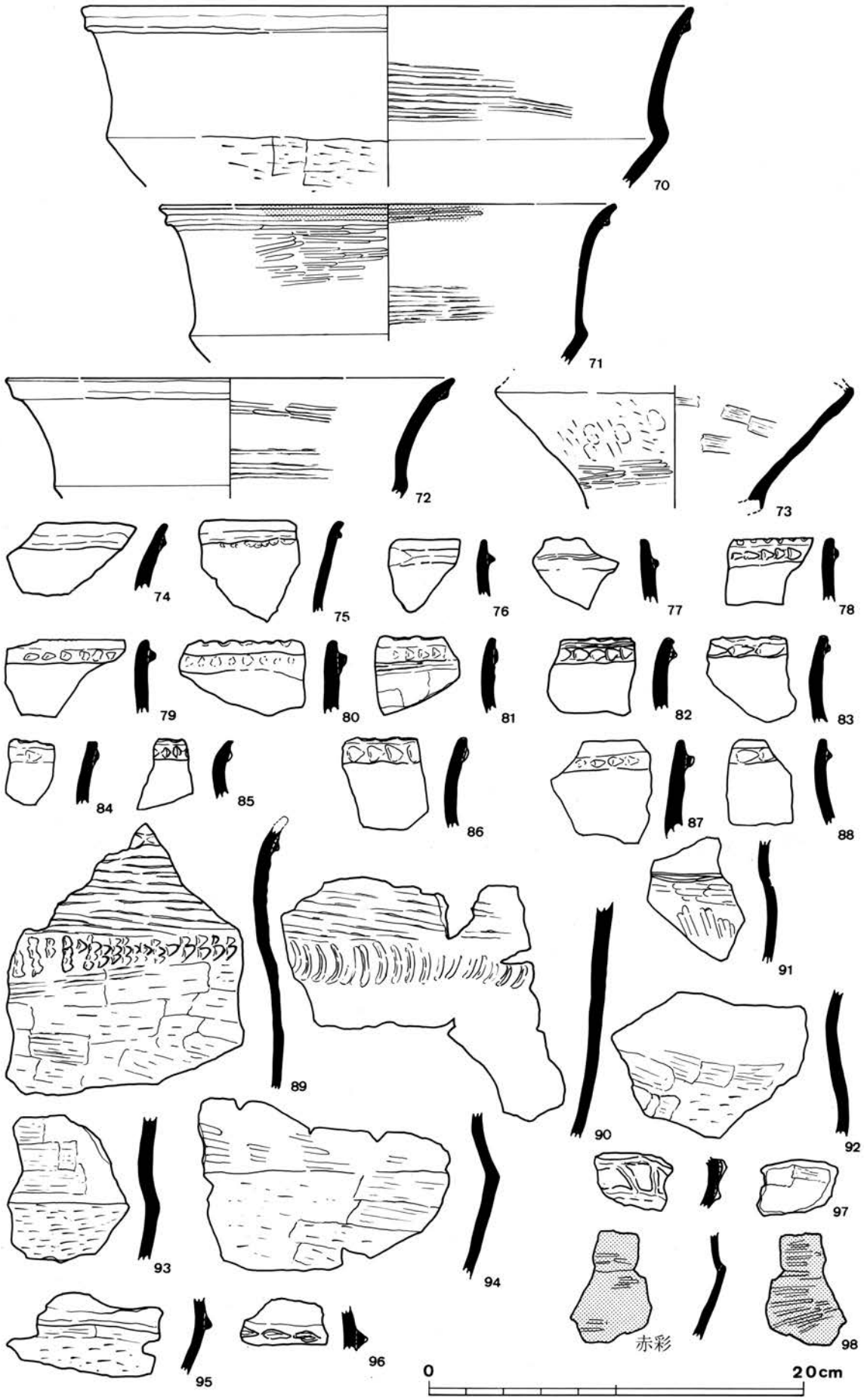

土器実測図(8)



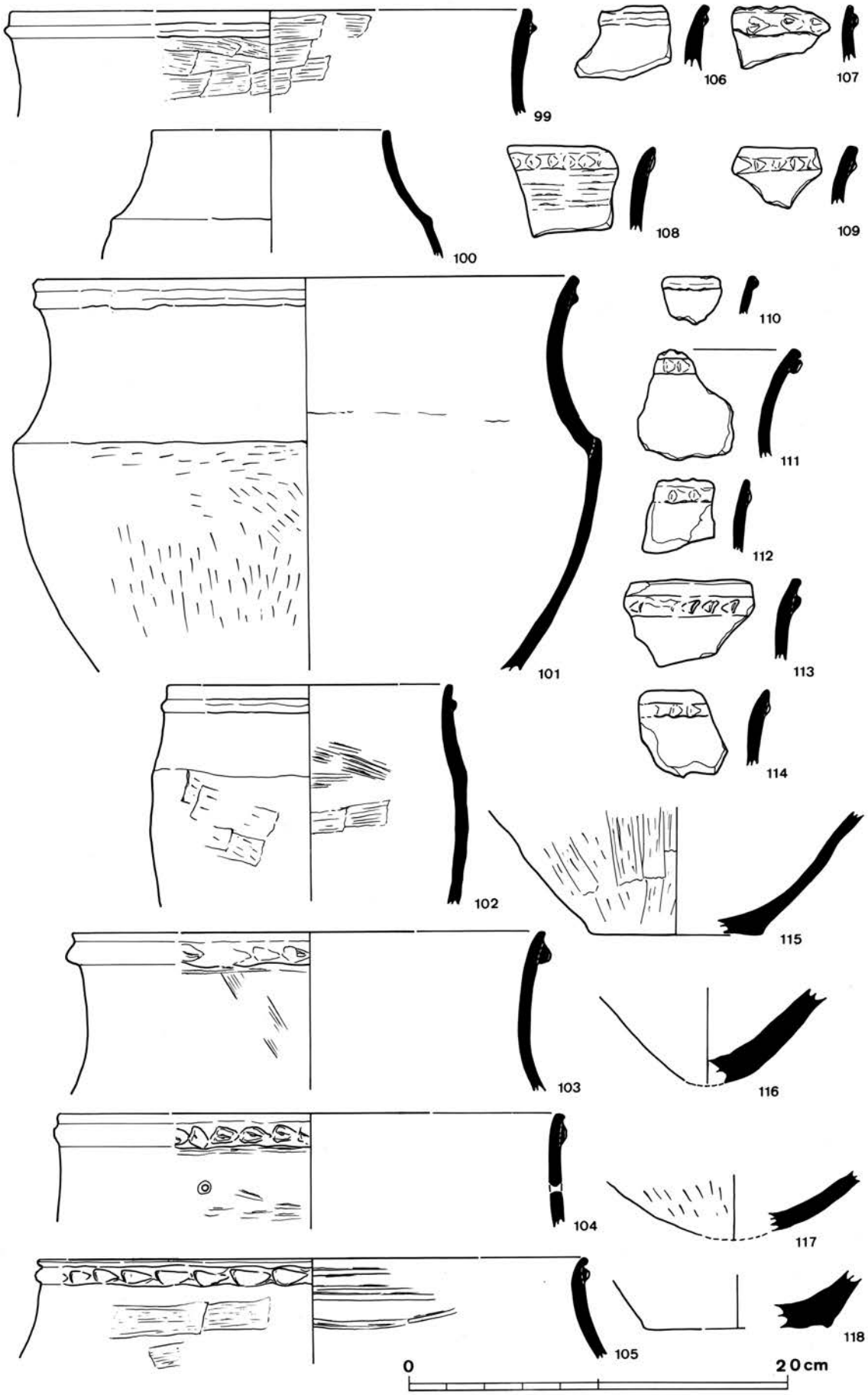

土器実測図(9)



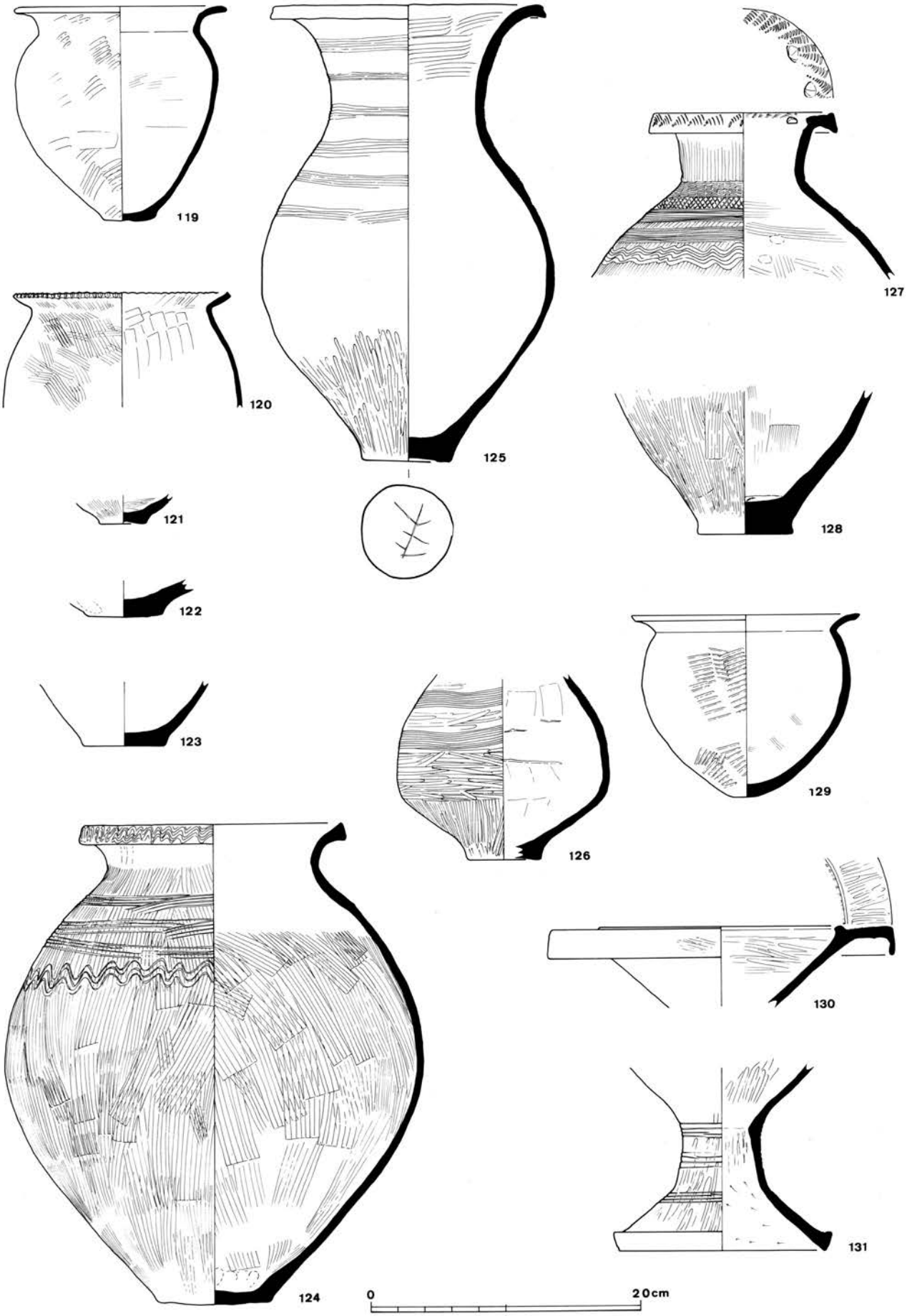

土器実測図(10)


70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
赤彩
0
20cm

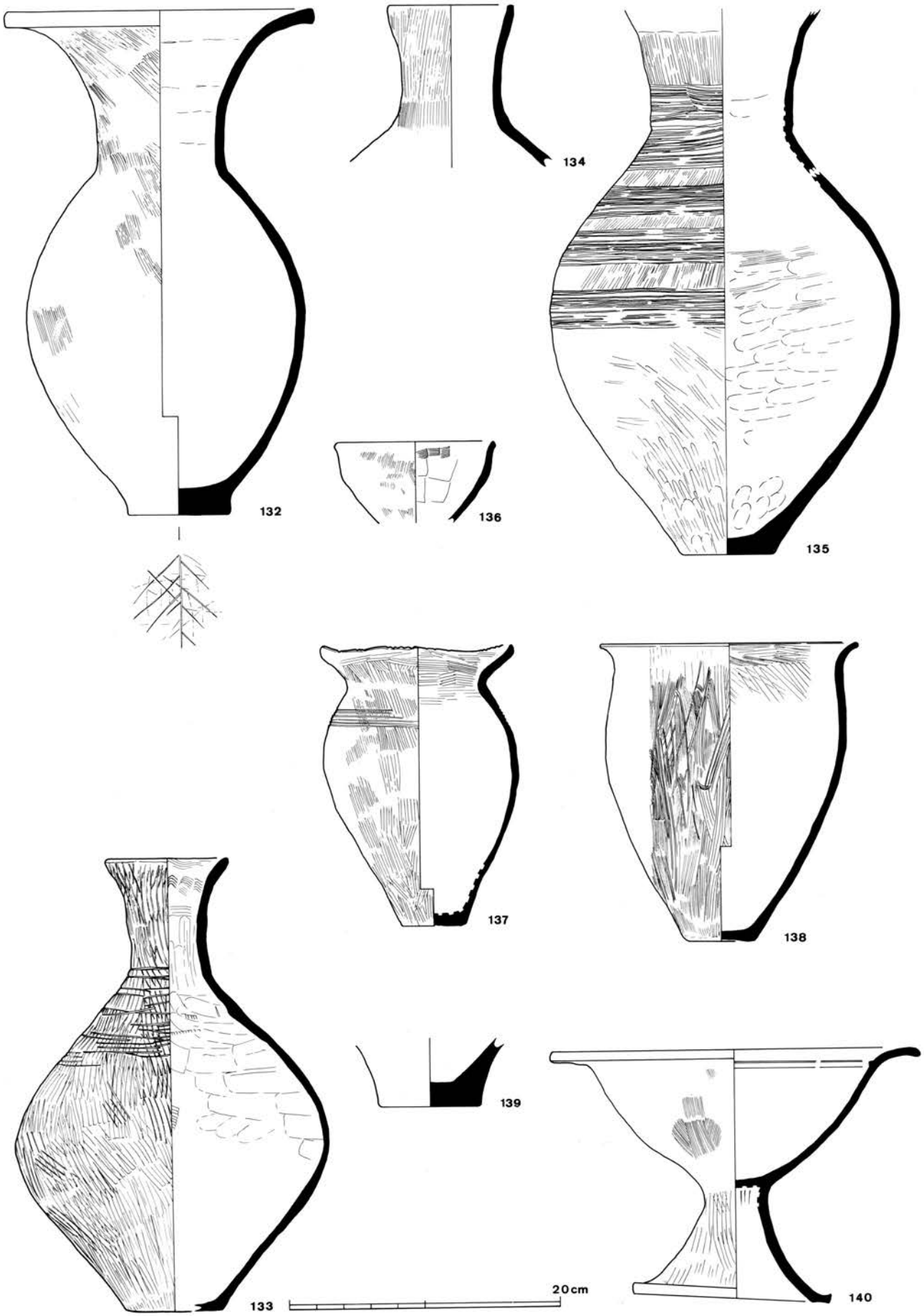
土器実測図(11)


99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
0
20cm

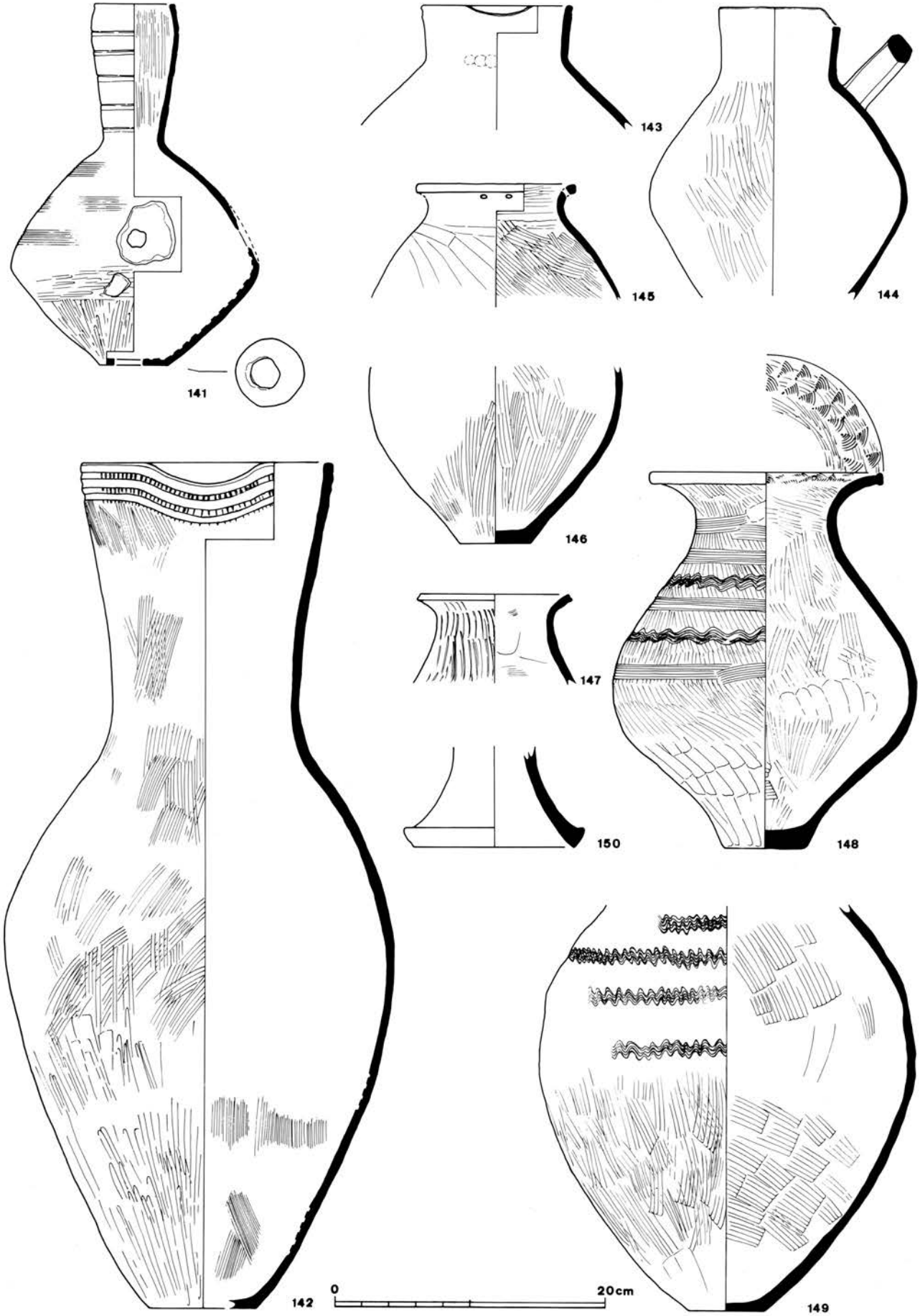
土器実測図(12)



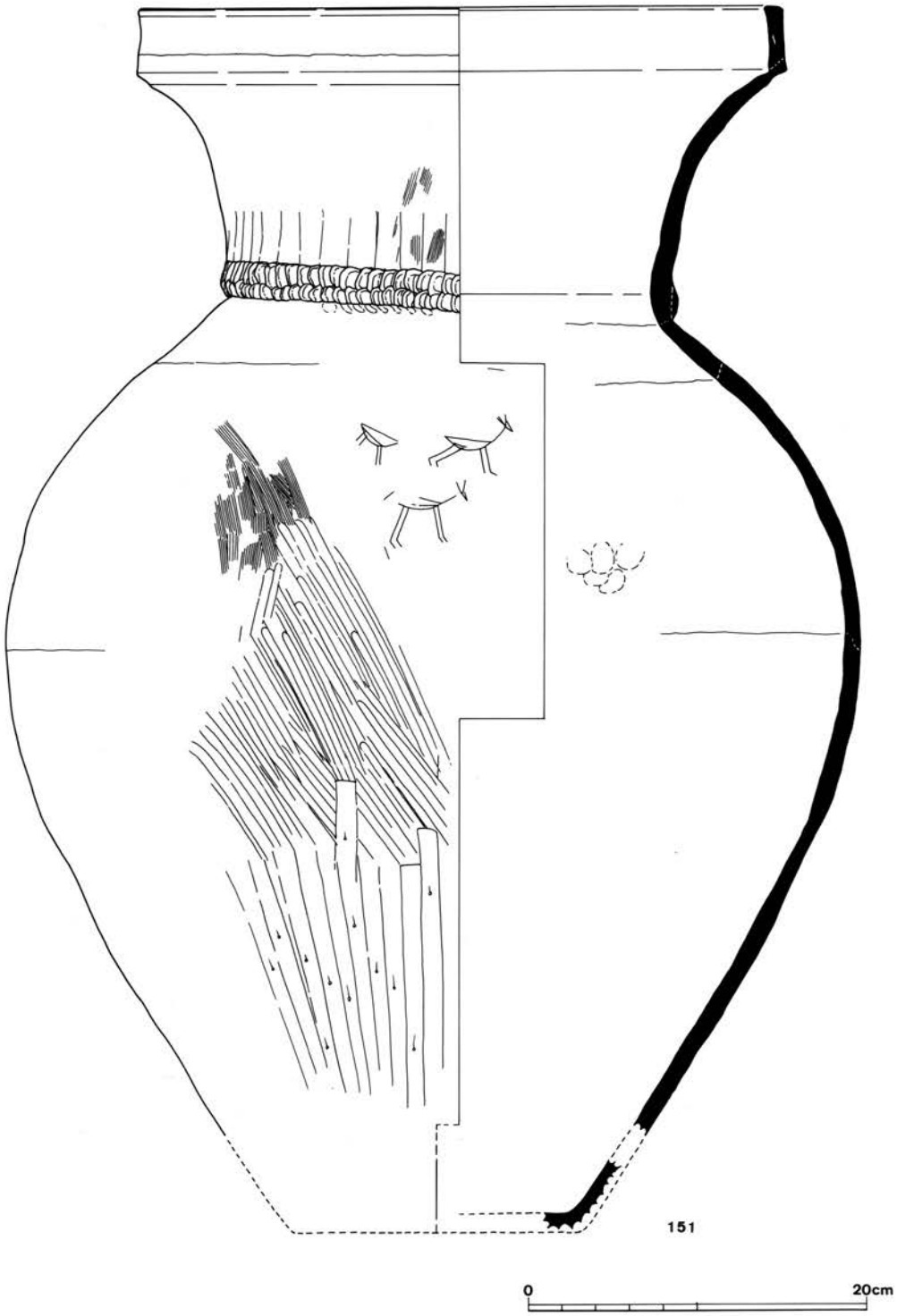

土器実測図(13)



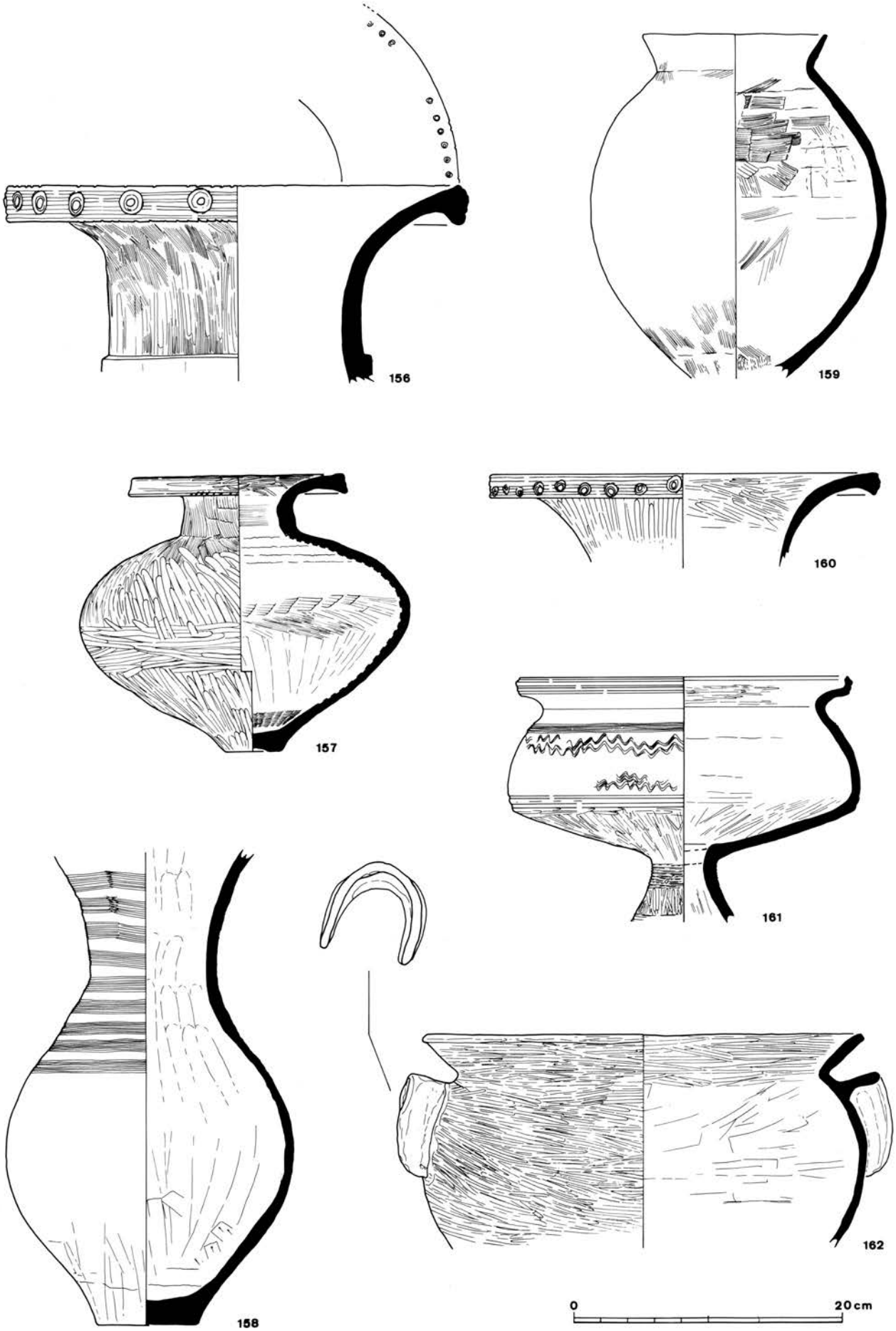

土器実測図(14)



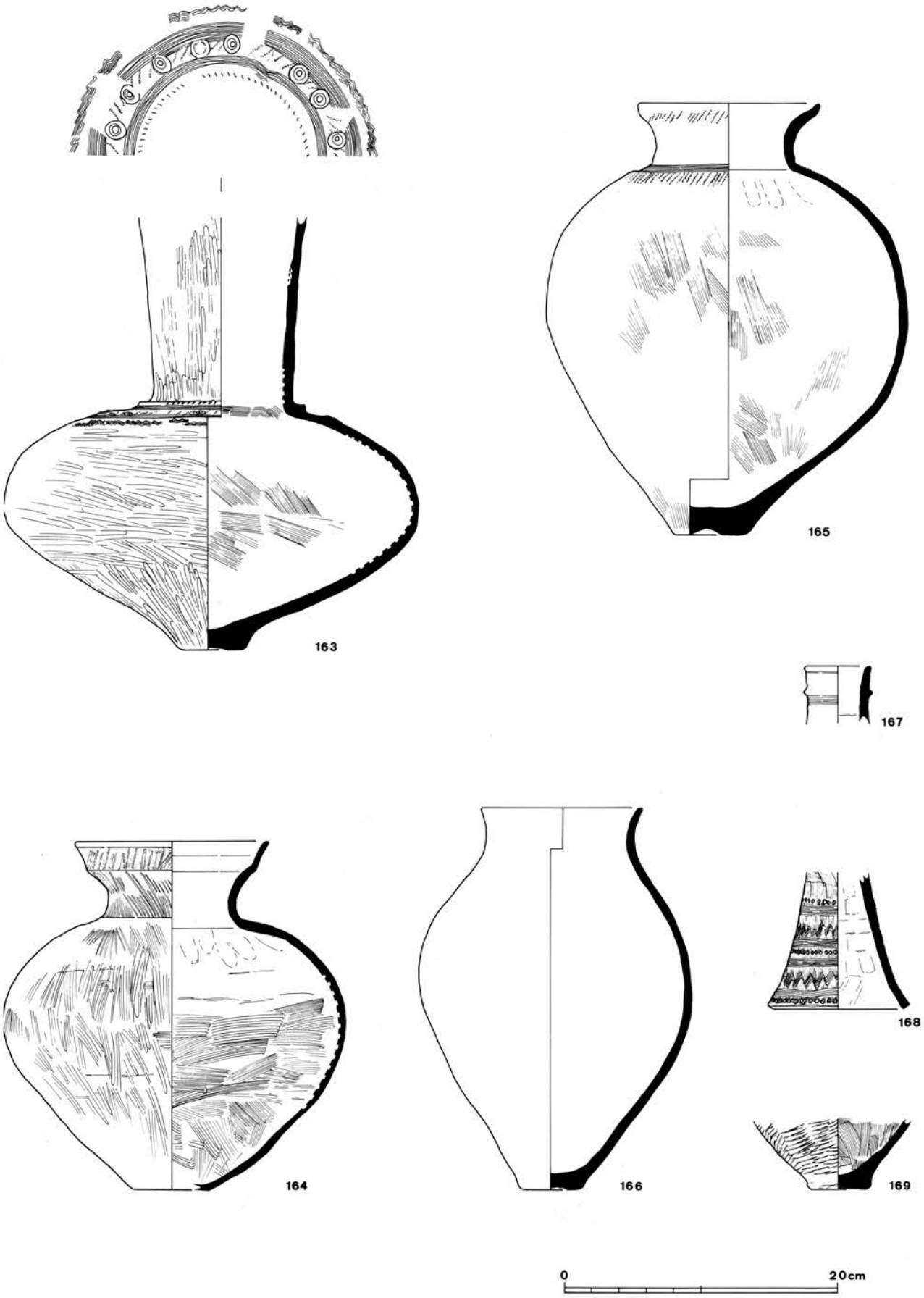

土器実測図(15)




土器実測図(16)

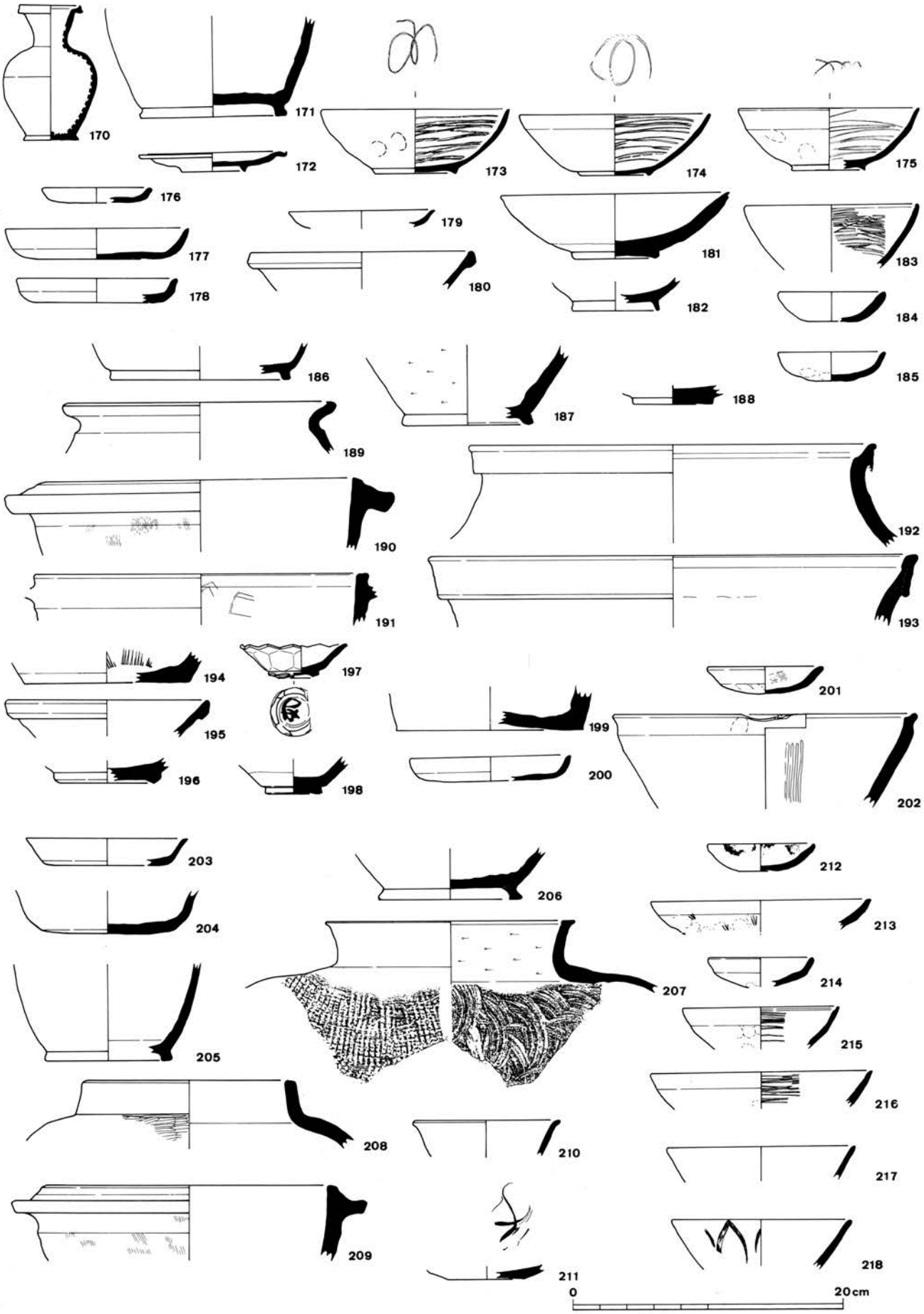


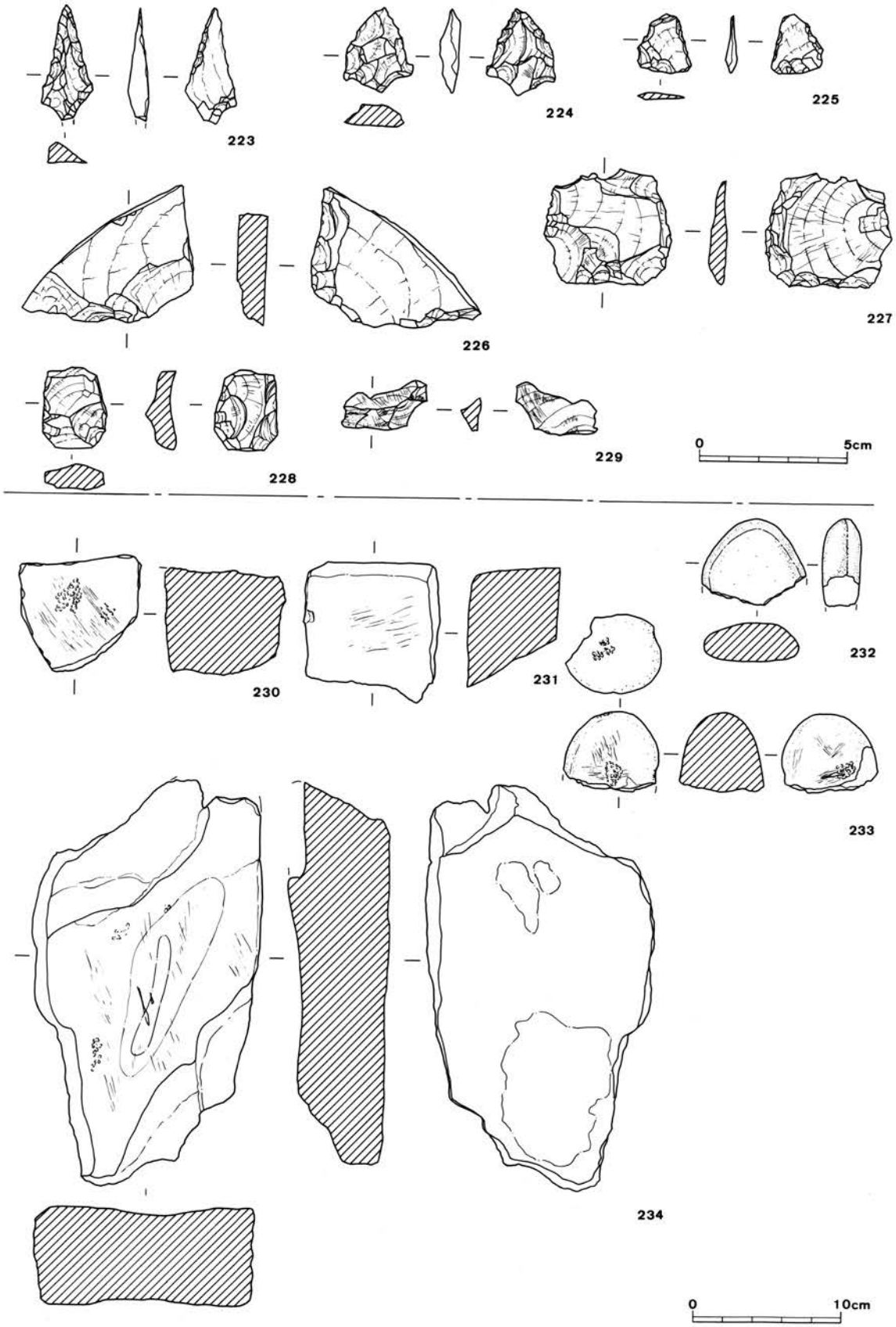

土器実測図(17)




土器実測図(18)

図版第四六


170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
0
20cm




石器・石製品実測図

235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
(復原)
259
260
261
S=1/2
0
5cm
0
20cm

出土遺物実測図

(1)遺跡遠景(南から)

(2)遺跡遠景(北から)

(3)調査地調査前全景(北から)

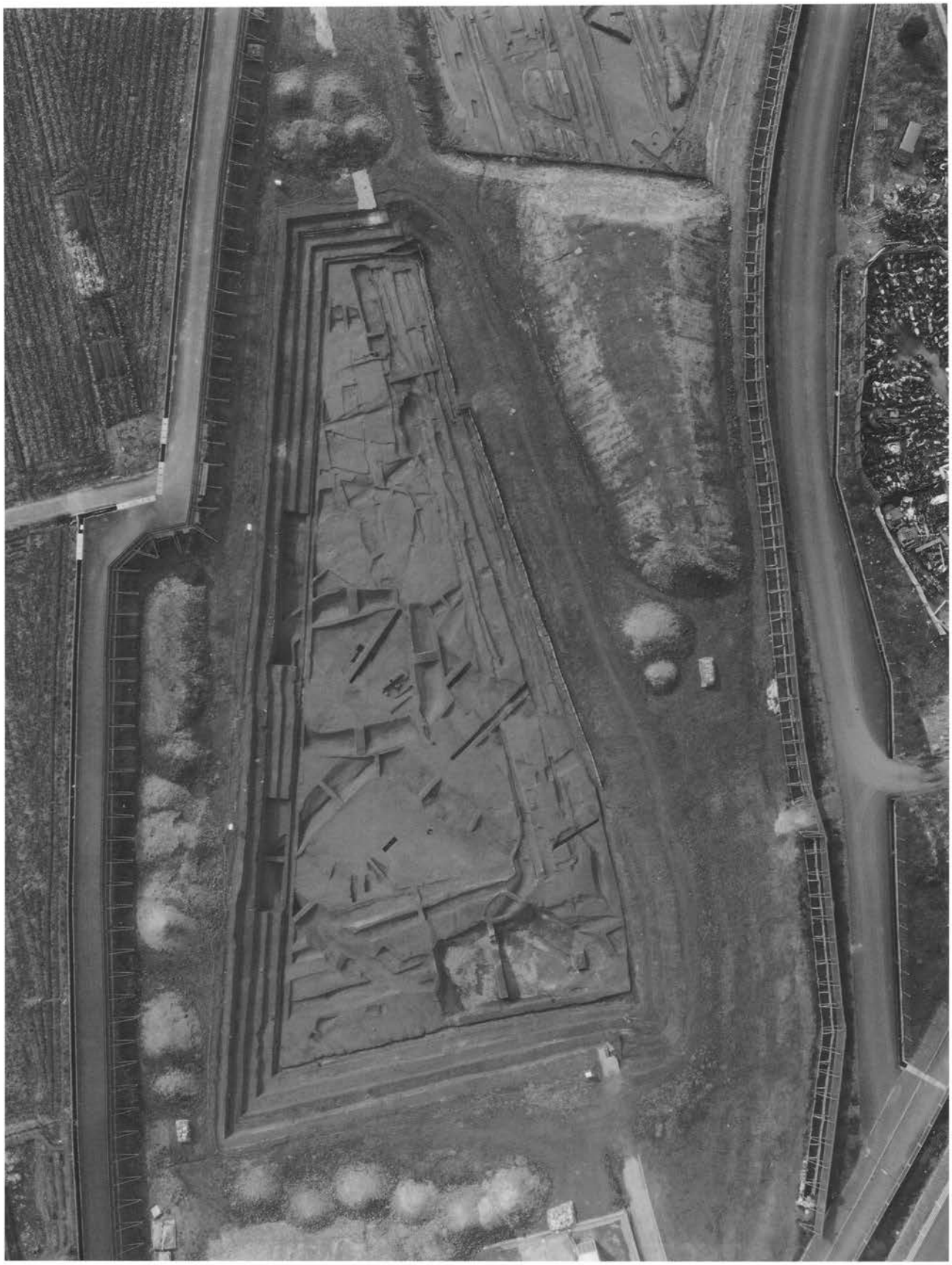
図版第五〇

(1) A地区
弥生～古墳時代遺構面
(東から)

(2) B地区
縄文時代晩期～弥生時代
遺構面(西から)

(3) B地区
南側縄文時代晩期～
弥生時代遺構面(北から)

A地区弥生～古墳時代遺構面(上が北)



B地区縄文時代晩期～弥生時代遺構面(下が北)

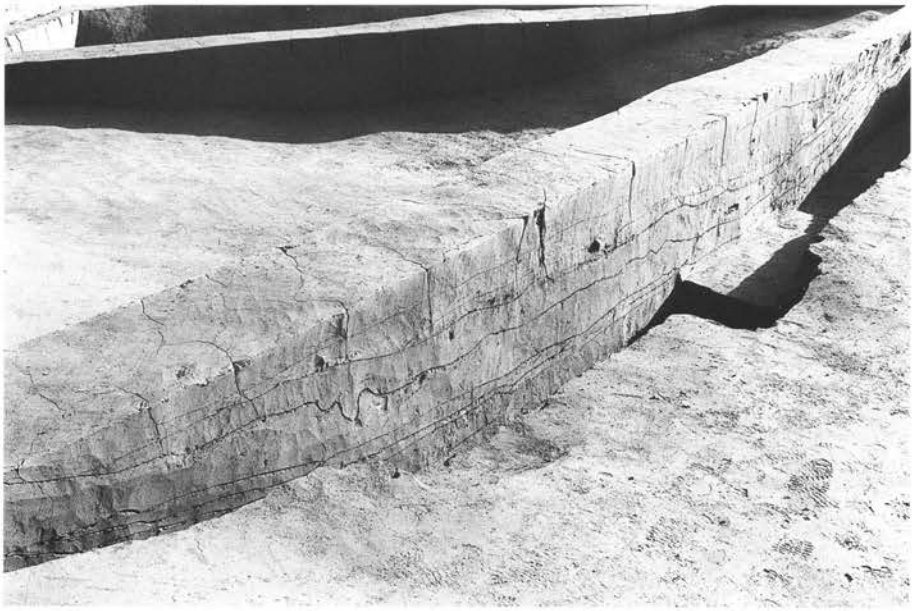
(1)溝ＳＤ229調査風景
（西北から）

(2)溝ＳＤ229（東南から）

(3)溝ＳＤ229東南部
（東北から）

(1)溝ＳＤ229東南部土器
出土状況1(東南から)

(2)溝ＳＤ229東南部土器
出土状況2(西北から)



(3)溝ＳＤ229南部土層断面
(北から)

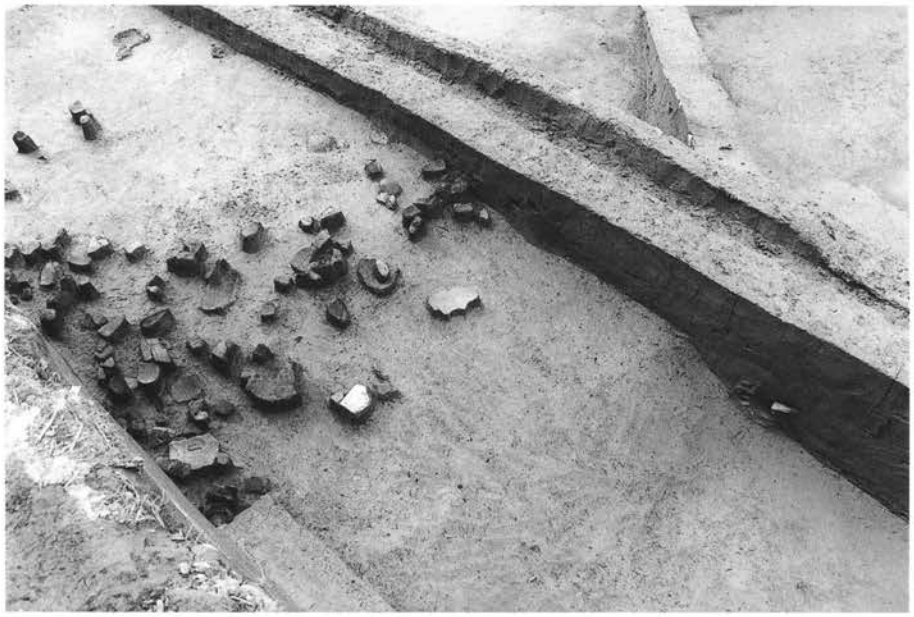
(1)溝ＳＤ229東南部土器
出土状況1(東から)

(2)溝ＳＤ229東南部土器
出土状況2(西から)

(3)溝ＳＤ229東南部土器
出土状況3(東から)

図版第五六

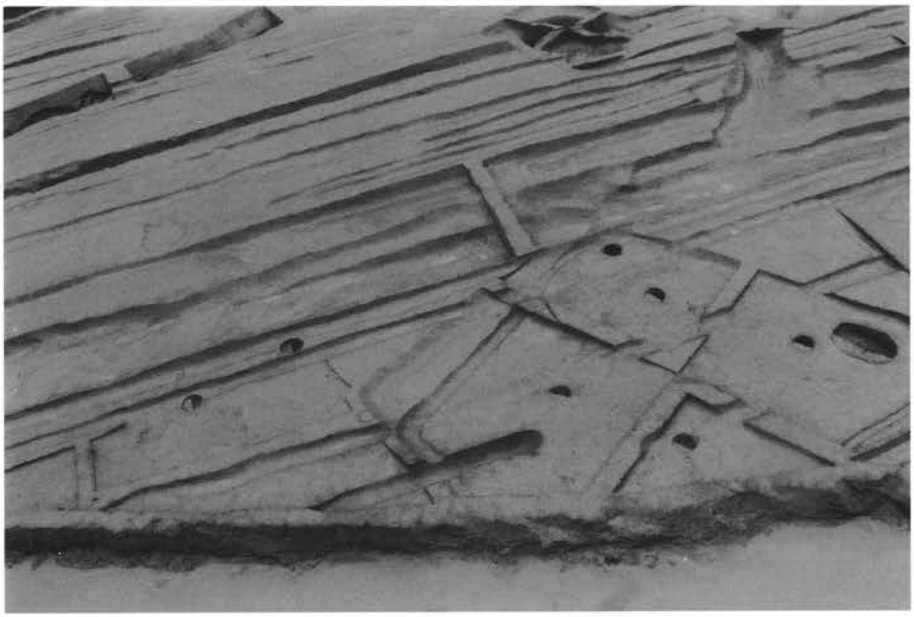
(1)溝ＳＤ229東端拡張部
土器出土状況1(東から)



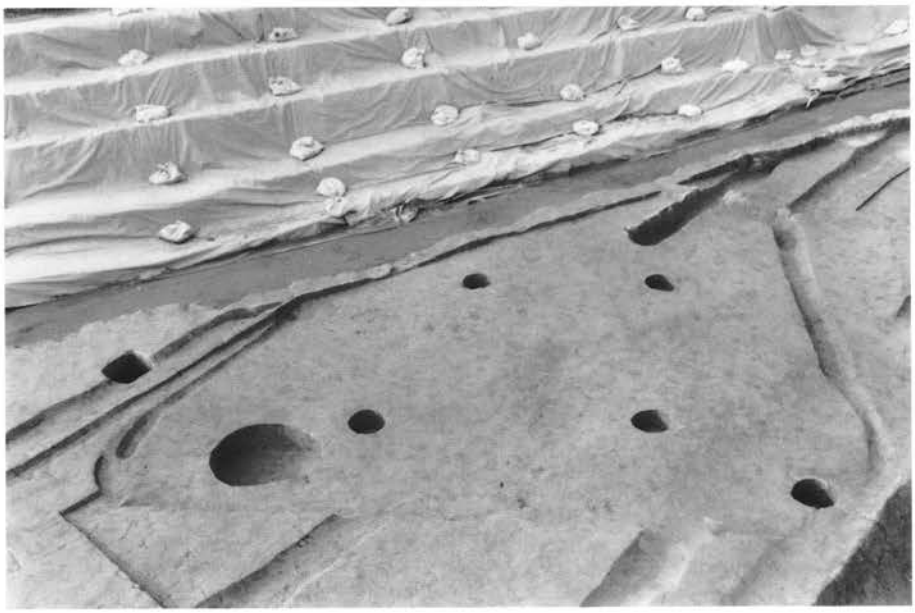
(2)溝ＳＤ229東端拡張部
土器出土状況2(東北から)

(3)溝ＳＤ229東端拡張部
土器出土状況3(東から)

(1)竪穴式住居跡ＳＨ094～096
（東北から）



(2)竪穴式住居跡ＳＨ094・095
（西から）



(3)竪穴式住居跡ＳＨ095
（東南から）

図版第五八

(1)竪穴式住居跡ＳＨ095
（西南から）

(2)竪穴式住居跡ＳＨ113
（南から）

(3)竪穴式住居跡ＳＨ094
土器出土状況（西から）

(1)方形周溝墓ＳＴ119
（東南から）

(2)方形周溝墓ＳＴ119北辺溝内
絵画土器出土状況（南から）

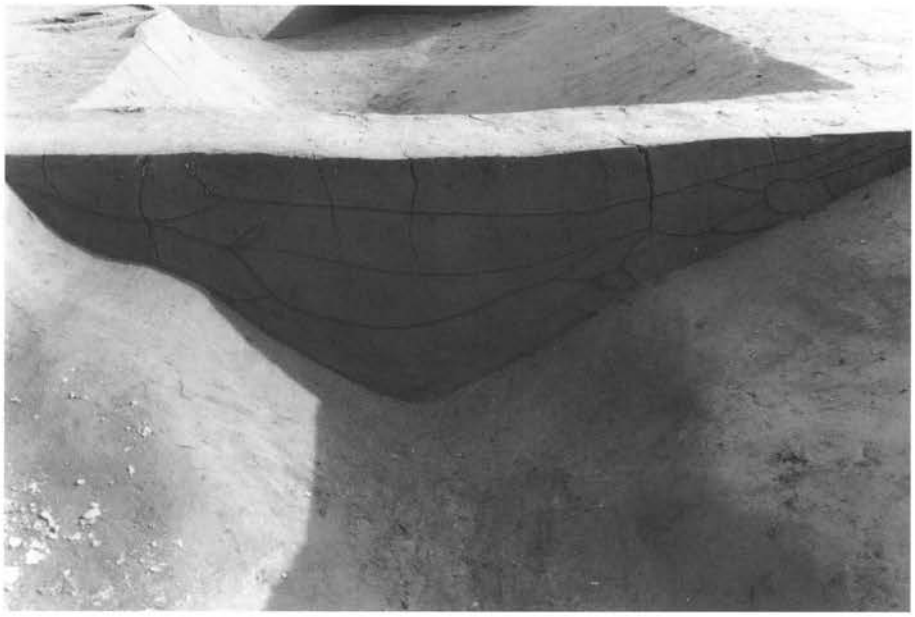
(3)方形周溝墓ＳＴ119西辺溝内
土器出土状況（西から）

(1)方形周溝墓ＳＴ119東辺溝内
土器出土状況1(北から)

(2)方形周溝墓ＳＴ119東辺溝内
土器出土状況2(東から)

(3)方形周溝墓ＳＴ119東辺溝内
土器出土状況3(東から)

(1)方形周溝墓ＳＴ228
（東南から）



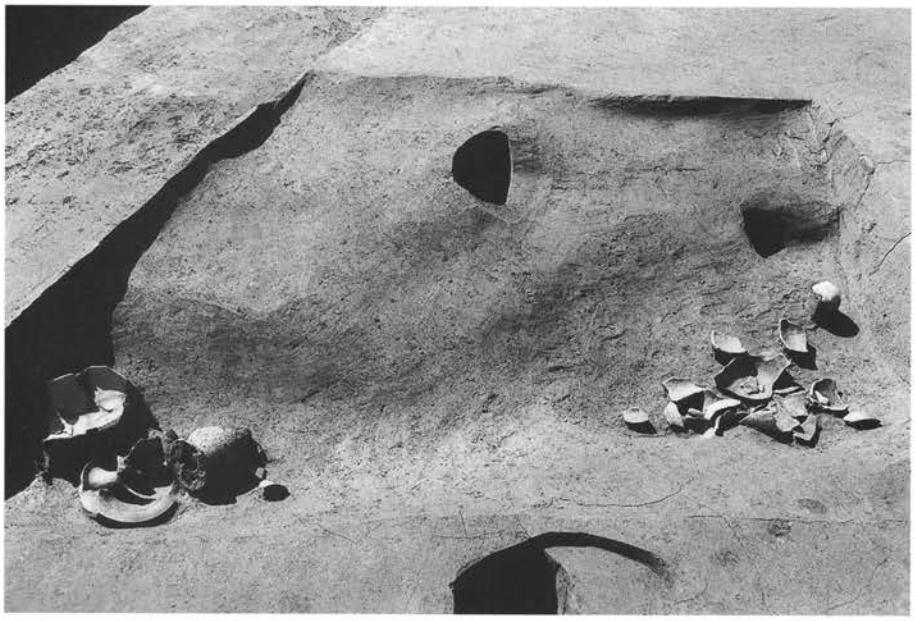
(2)方形周溝墓ＳＴ228
西辺溝埋土断面（西北から）

(3)方形周溝墓ＳＴ228
東角拡張部溝内土器
出土状況（西から）

(1)方形周溝墓ＳＴ101
（東から）

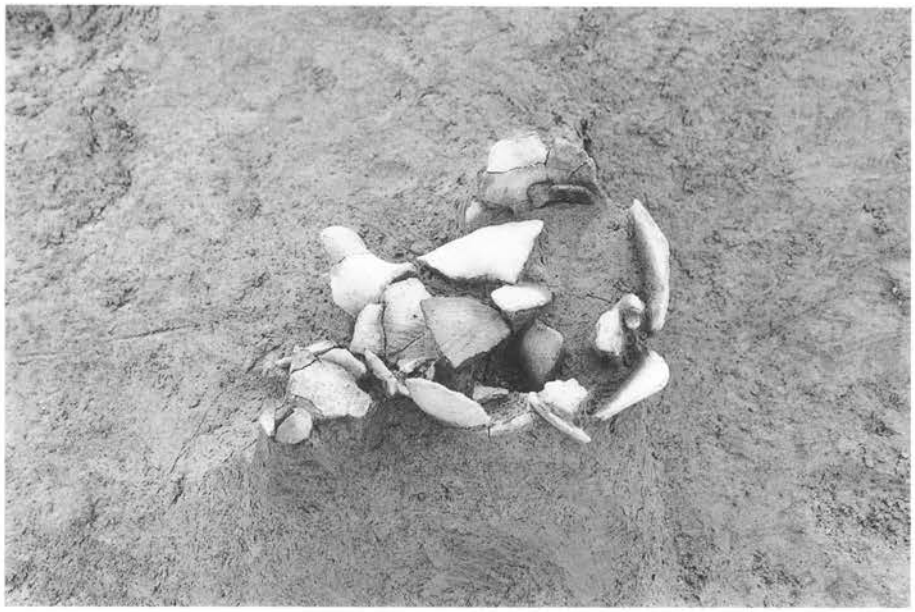
(2)方形周溝墓ＳＴ101
（東南から）

(3)方形周溝墓ＳＴ101東北辺溝内
土器出土状況1（東南から）



(1)方形周溝墓ＳＴ101
東北辺溝内
土器出土状況2(東北から)

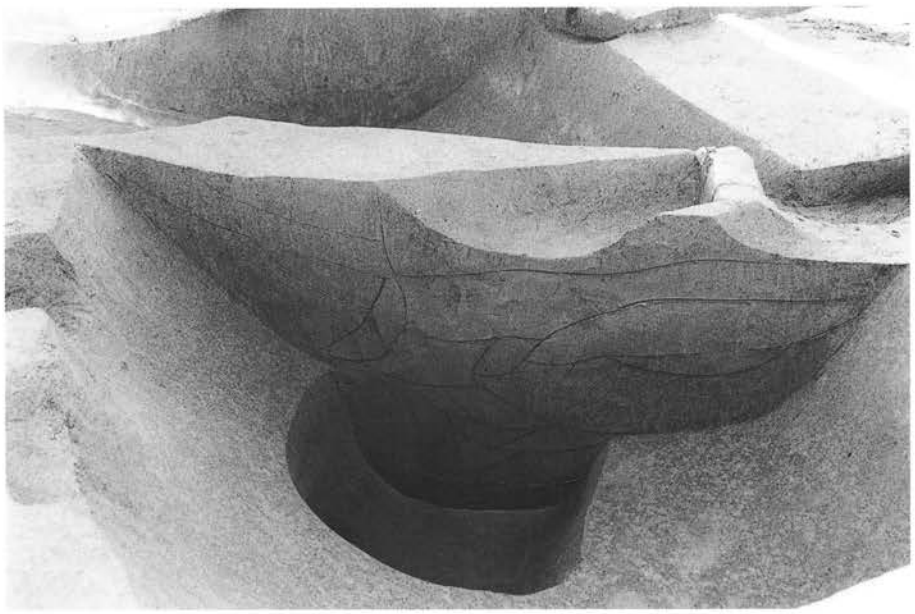
(2)方形周溝墓ＳＴ101
東北辺溝内
土器出土状況3(東北から)



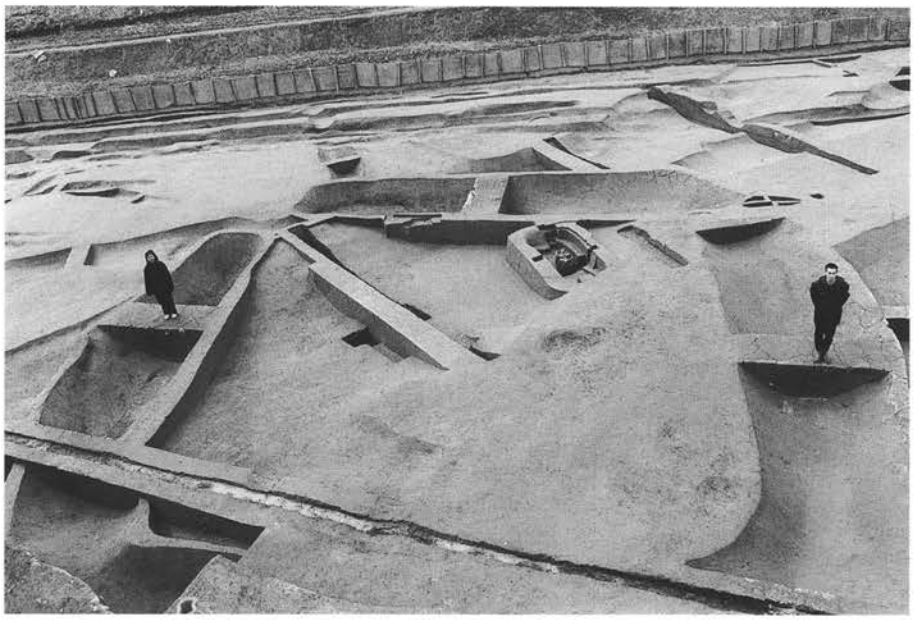
(3)方形周溝墓ＳＴ101
東北辺溝内
土器出土状況4(東北から)

(1)方形周溝墓ＳＴ114
（東北から）

(2)方形周溝墓ＳＴ114
東北辺溝内
土坑ＳＫ01・02(北から)



(3)方形周溝墓ＳＴ114南辺溝
埋土断面(ｄ－ｄ′)(西から)



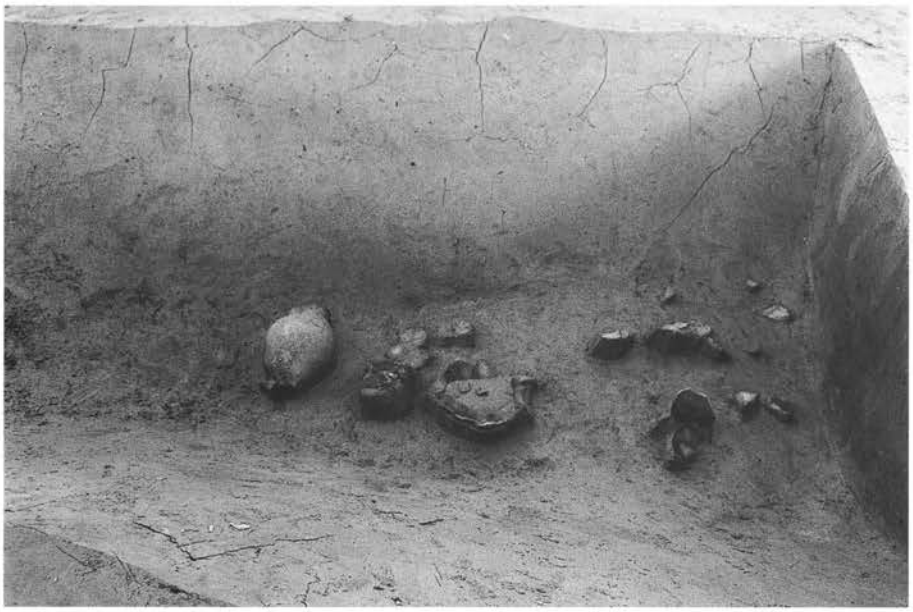
(1)方形周溝墓ＳＴ227
（東から）

(2)方形周溝墓ＳＴ227西辺溝内
土器出土状況1（北から）

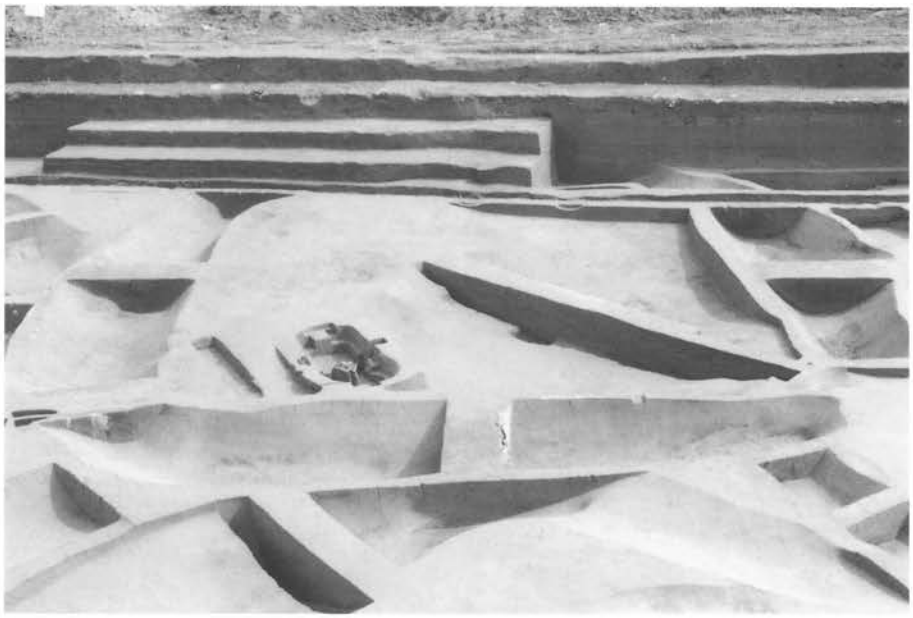
(3)方形周溝墓ＳＴ227西辺溝内
土器出土状況2（東から）

(1)方形周溝墓ＳＴ227西辺溝内
土器出土状況3(北から)

(2)方形周溝墓ＳＴ227南辺溝内
土器出土状況1(西から)



(3)方形周溝墓ＳＴ227南辺溝内
土器出土状況2(南から)

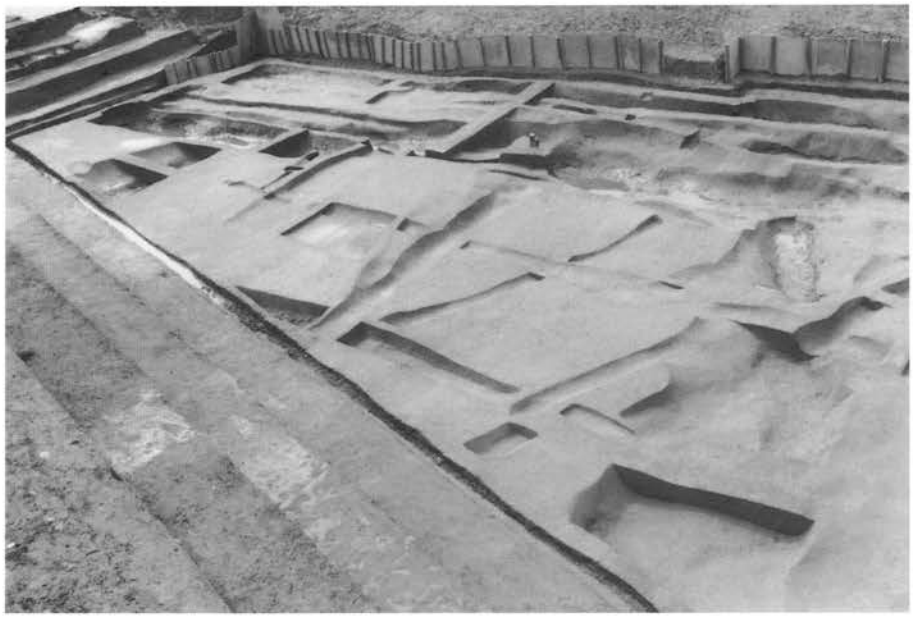


(1)方形周溝墓ＳＴ227・土坑ＳＫ239(西から)

(2)土坑ＳＫ239(東北から)

(3)土坑ＳＫ239土器出土状況(東から)

図版第六八



(1)方形周溝墓ＳＴ238
（東北から）

(2)方形周溝墓ＳＴ238
（西から）

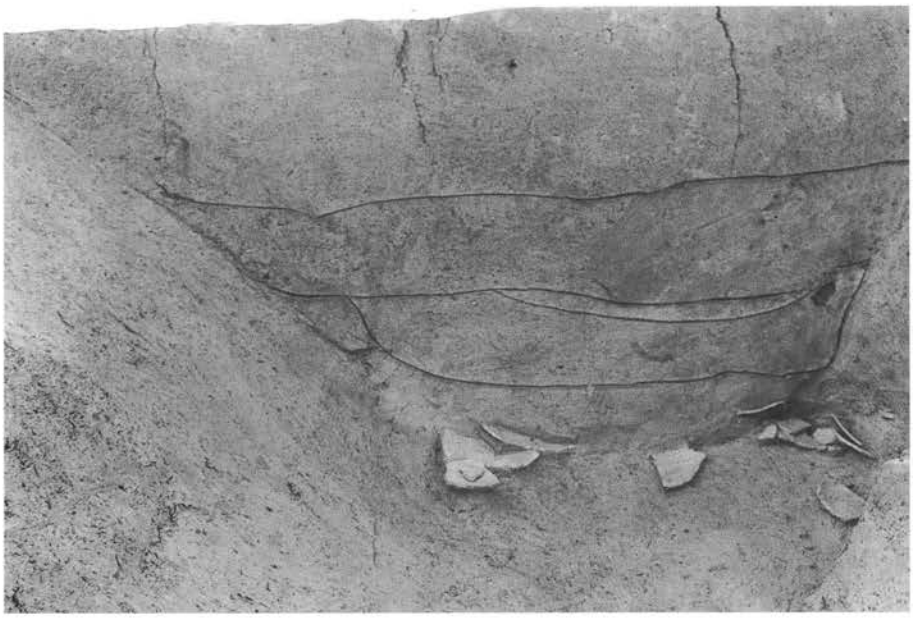
(3)方形周溝墓
ＳＴ238南辺溝埋土断面
（西から）

(1)溝ＳＤ099(東南から)

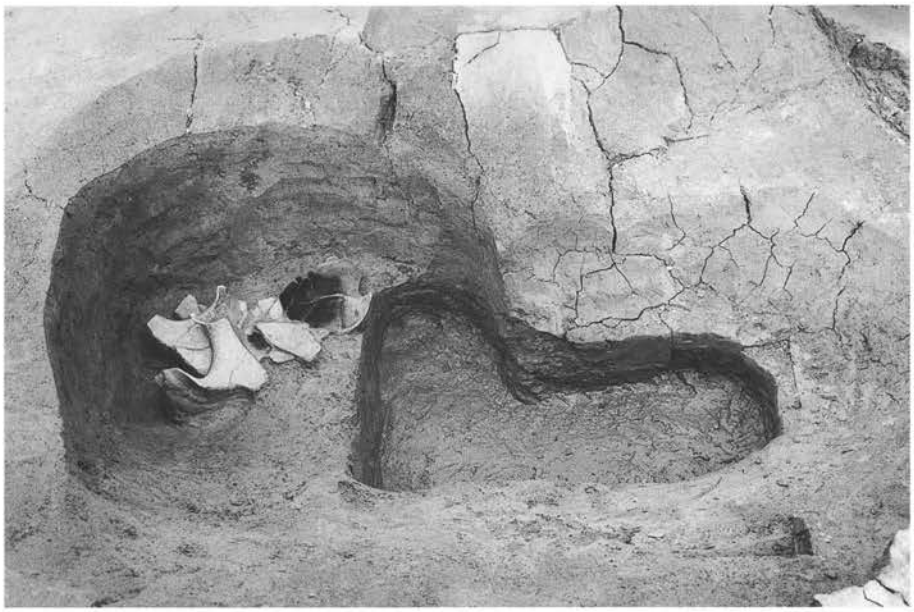
(2)溝ＳＤ099埋土断面
(e－e′)(西北から)

(3)溝ＳＤ099埋土断面
(f－f′)(東南から)

(1)土坑ＳＫ100(南から)

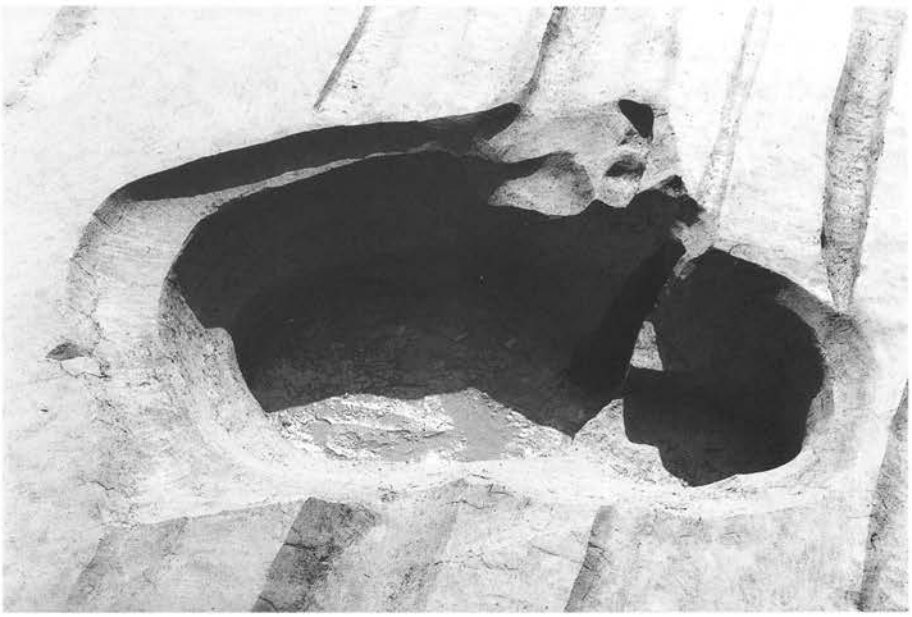


(2)土坑ＳＫ100埋土断面
(東から)



(3)土坑ＳＫ100土器出土状況
(南から)

(1)土坑ＳＫ107(東北から)

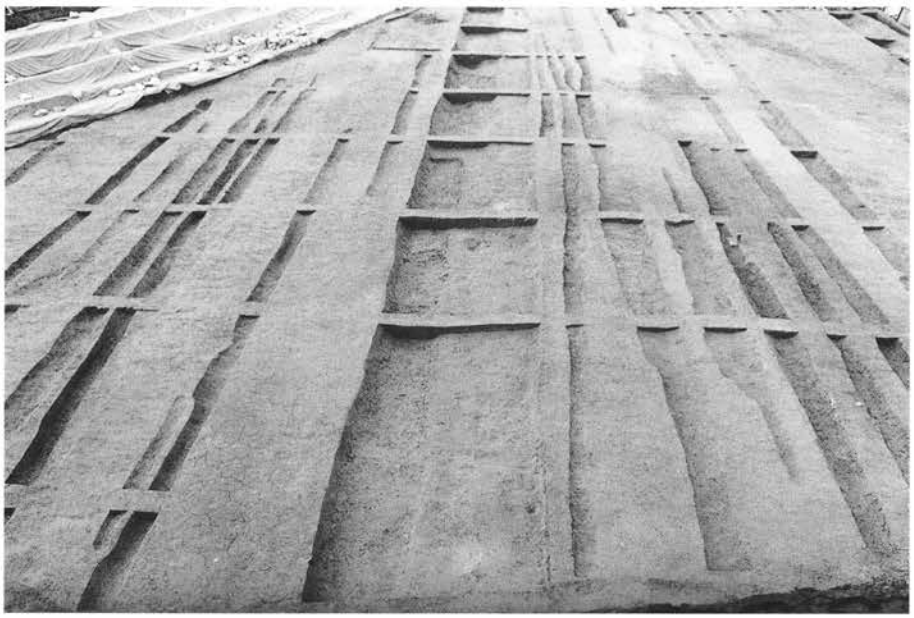


(2)土坑ＳＫ107(西北から)

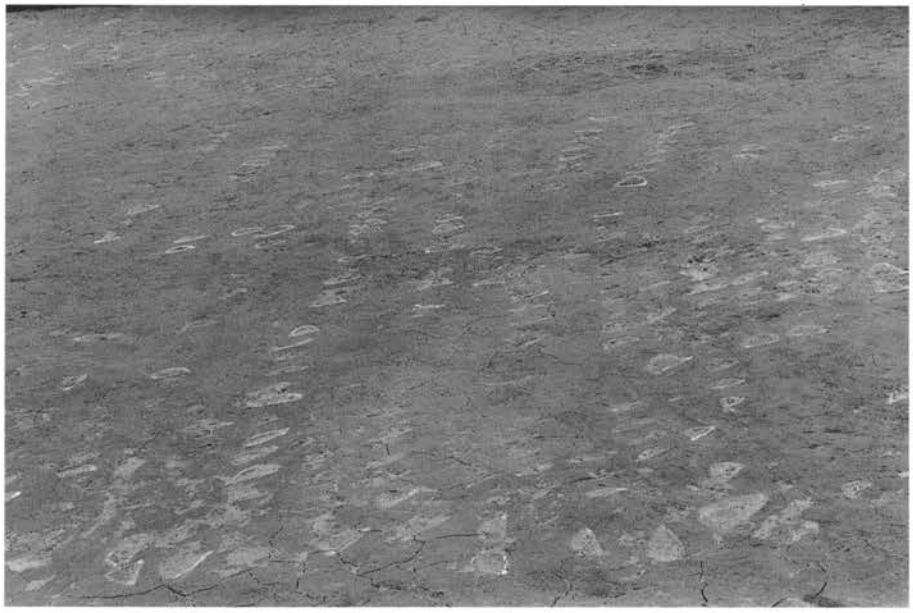
(3)土坑ＳＫ109(北から)

図版第七二

(1) A地区中世遺構面調査風景
(南から)



(2) 同中世遺構面耕作溝群
(南から)



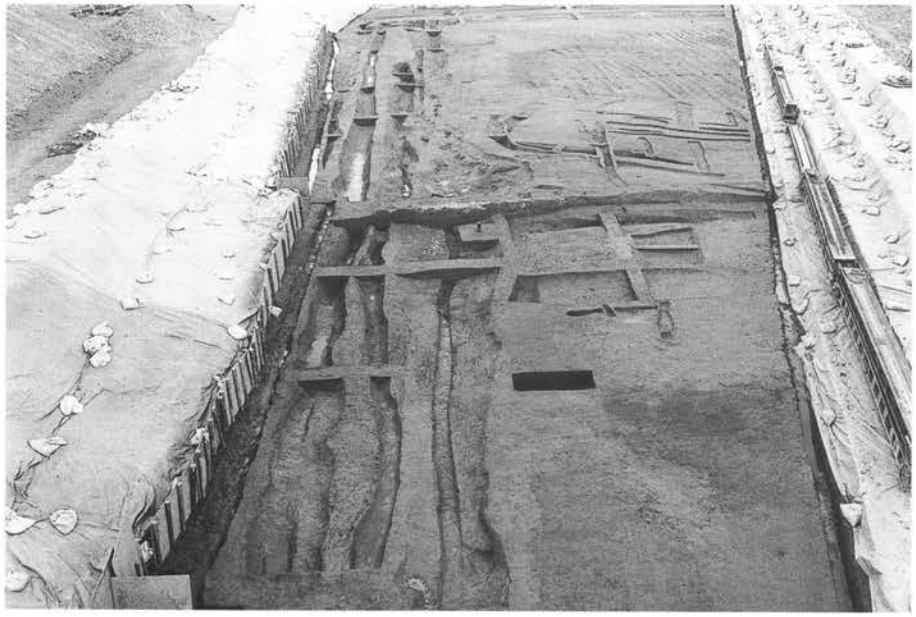
(3) 同中世遺構面鋤耕作痕跡
(東から)

(1) B地区中世遺構面
(北から)

(2) 同地割溝・道路状遺構
(北から)

(3) 同条里地割坪境道
(西から)

図版第七四



(1) B地区中世遺構面
(南から)

(2) 同南部地割溝・道路状遺構
(西北から)

(3) 同西壁面土層断面
(東から)

(1)溝ＳＤ078・085～087
（西北から）

(2)溝ＳＤ078・085～087
（東南から）

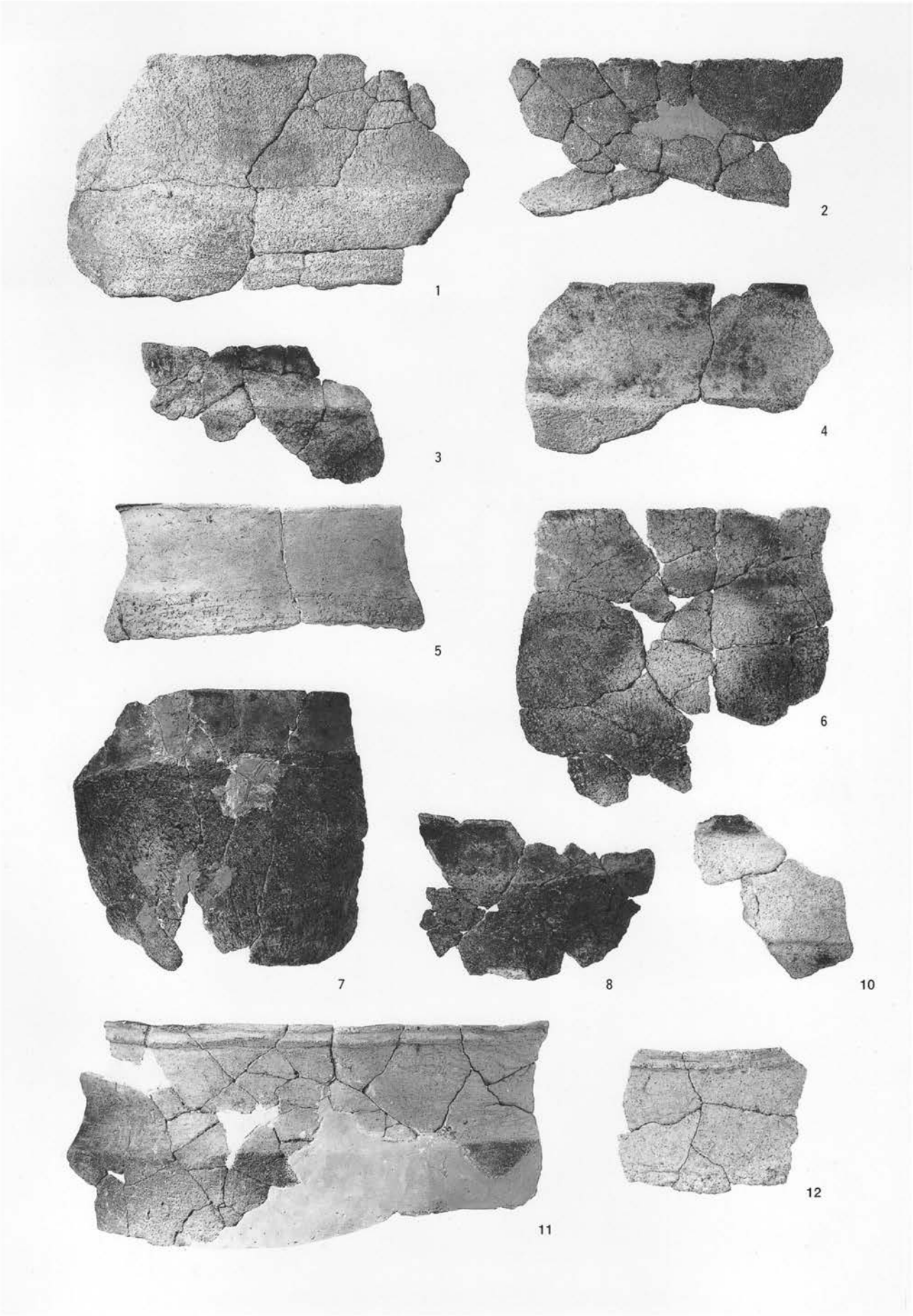
(3)溝ＳＤ078土器出土状況

図版第七六

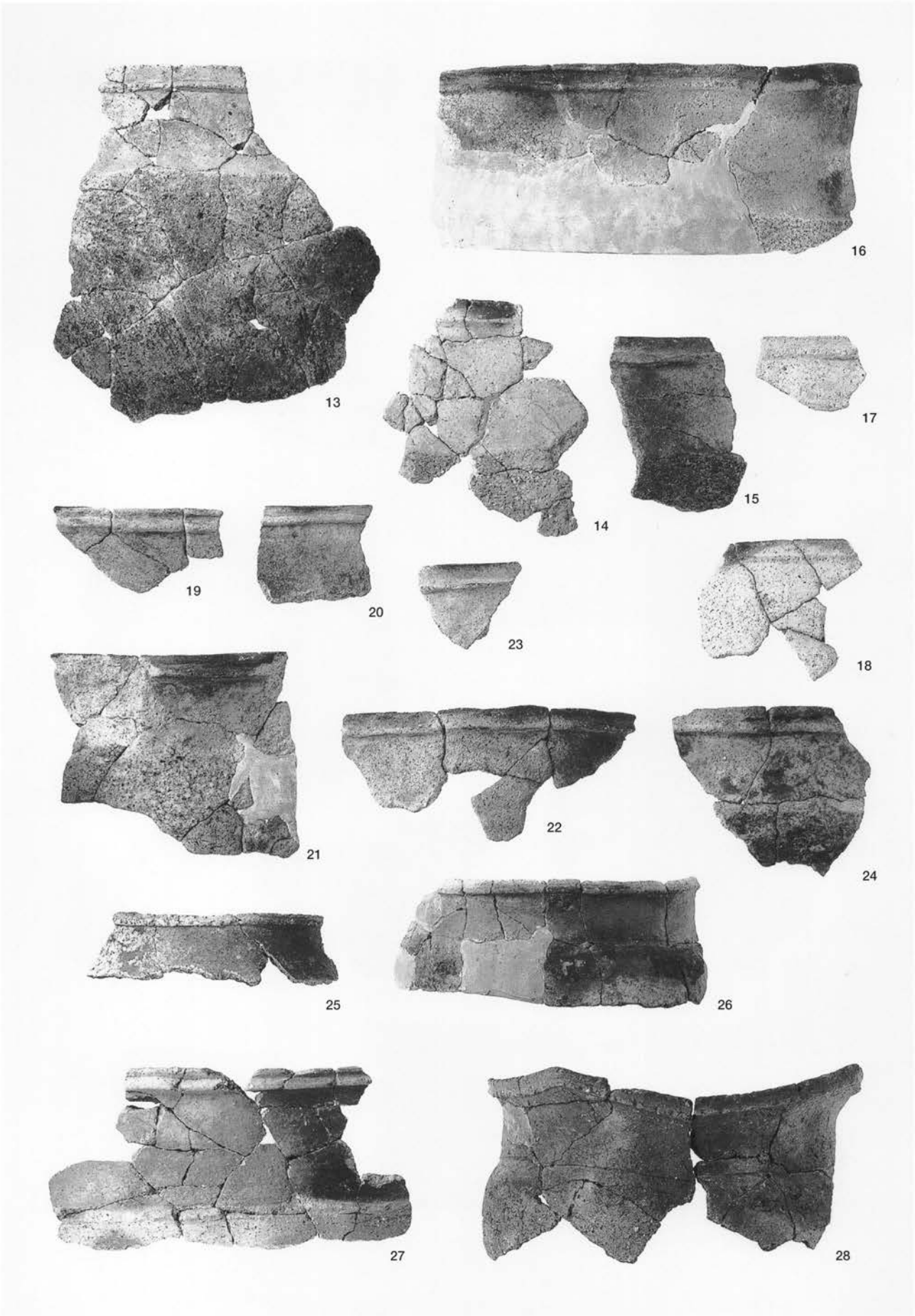
(1) S X226(西から)

(2) S X226獣骨出土状況1
(東から)

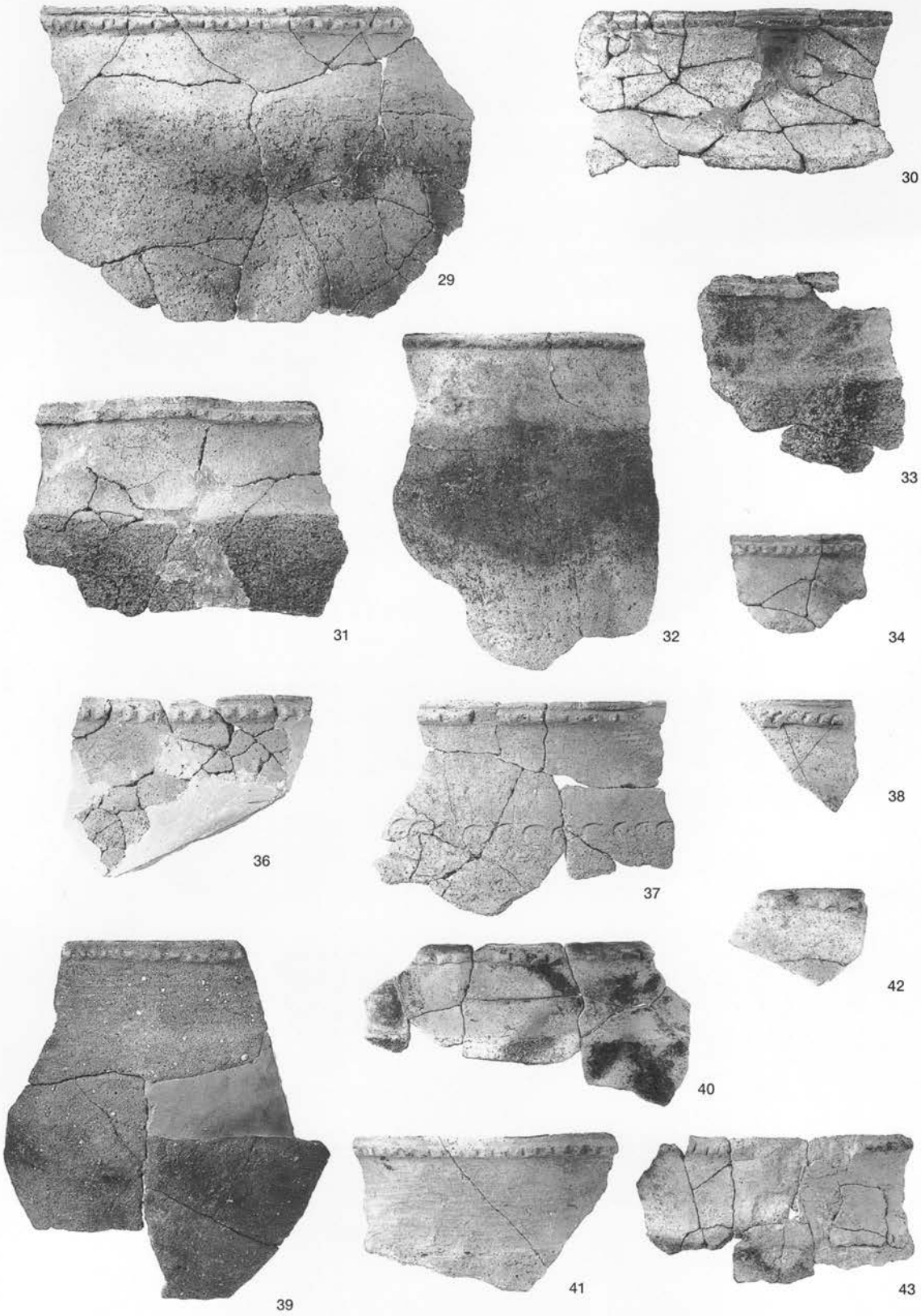
(3) S X226獣骨出土状況2
(南から)



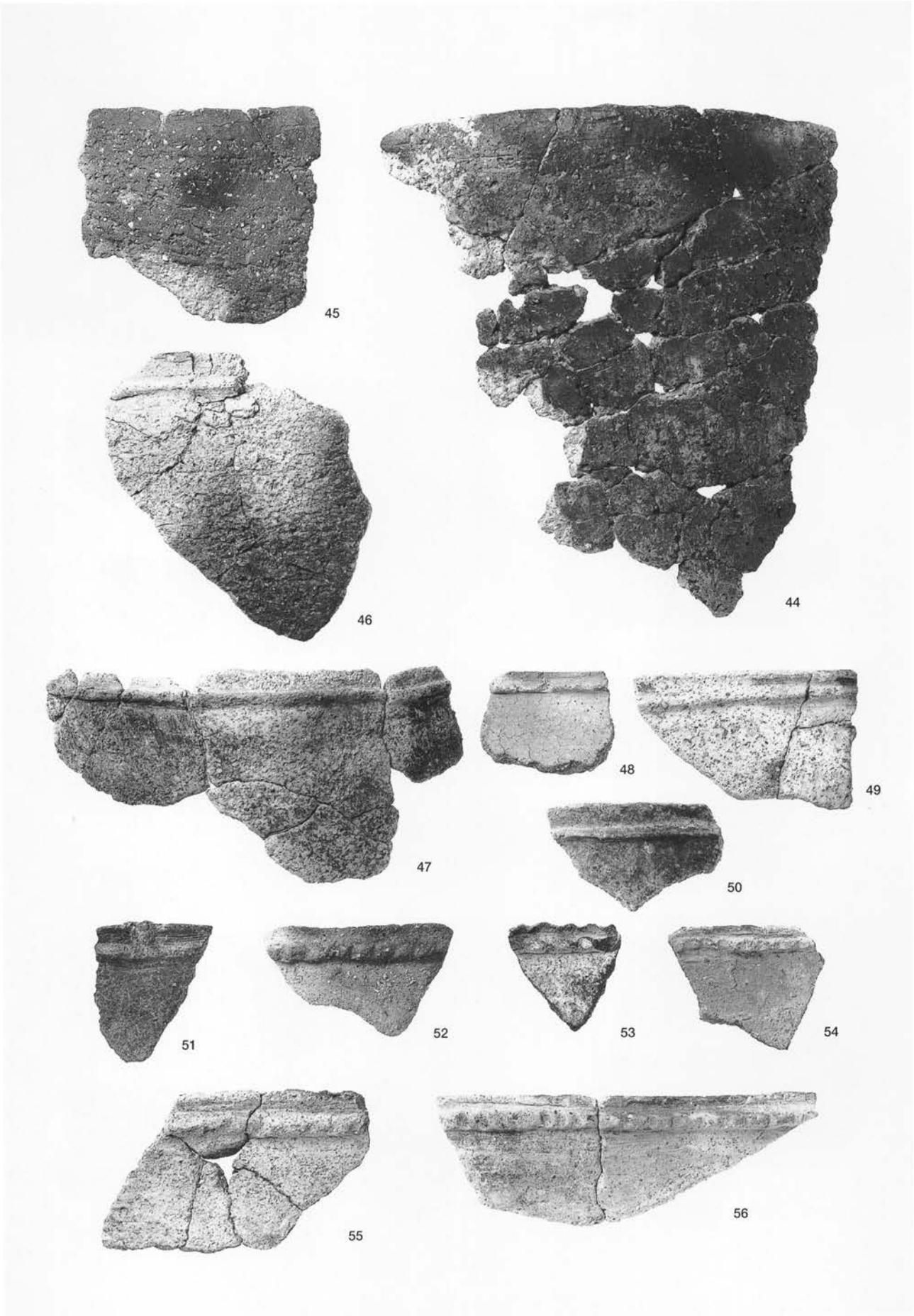

出土遺物(1)



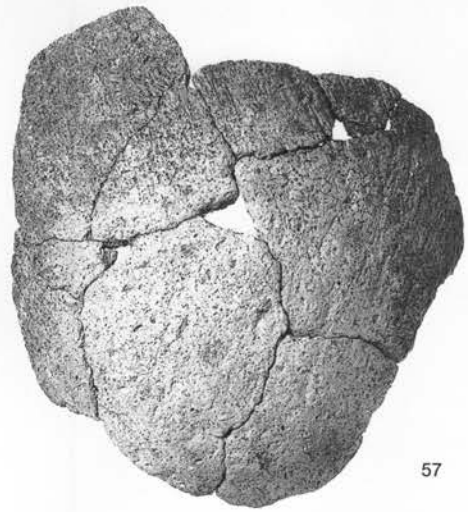

出土遺物(2)




出土遺物(3)




出土遺物(4)

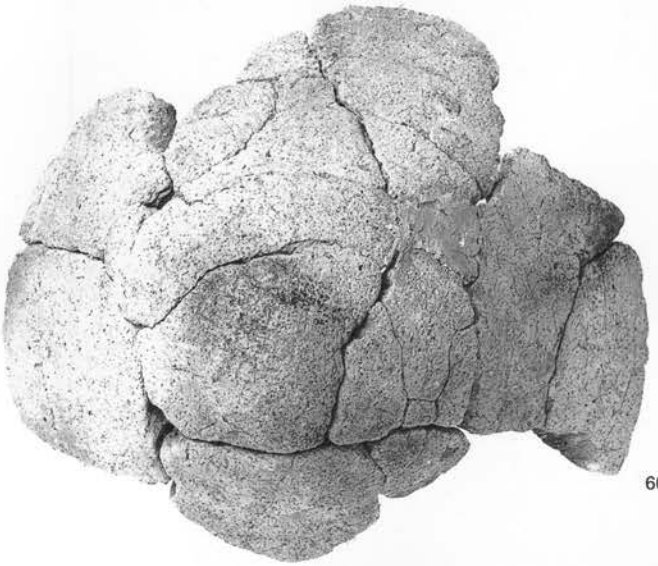

57

61

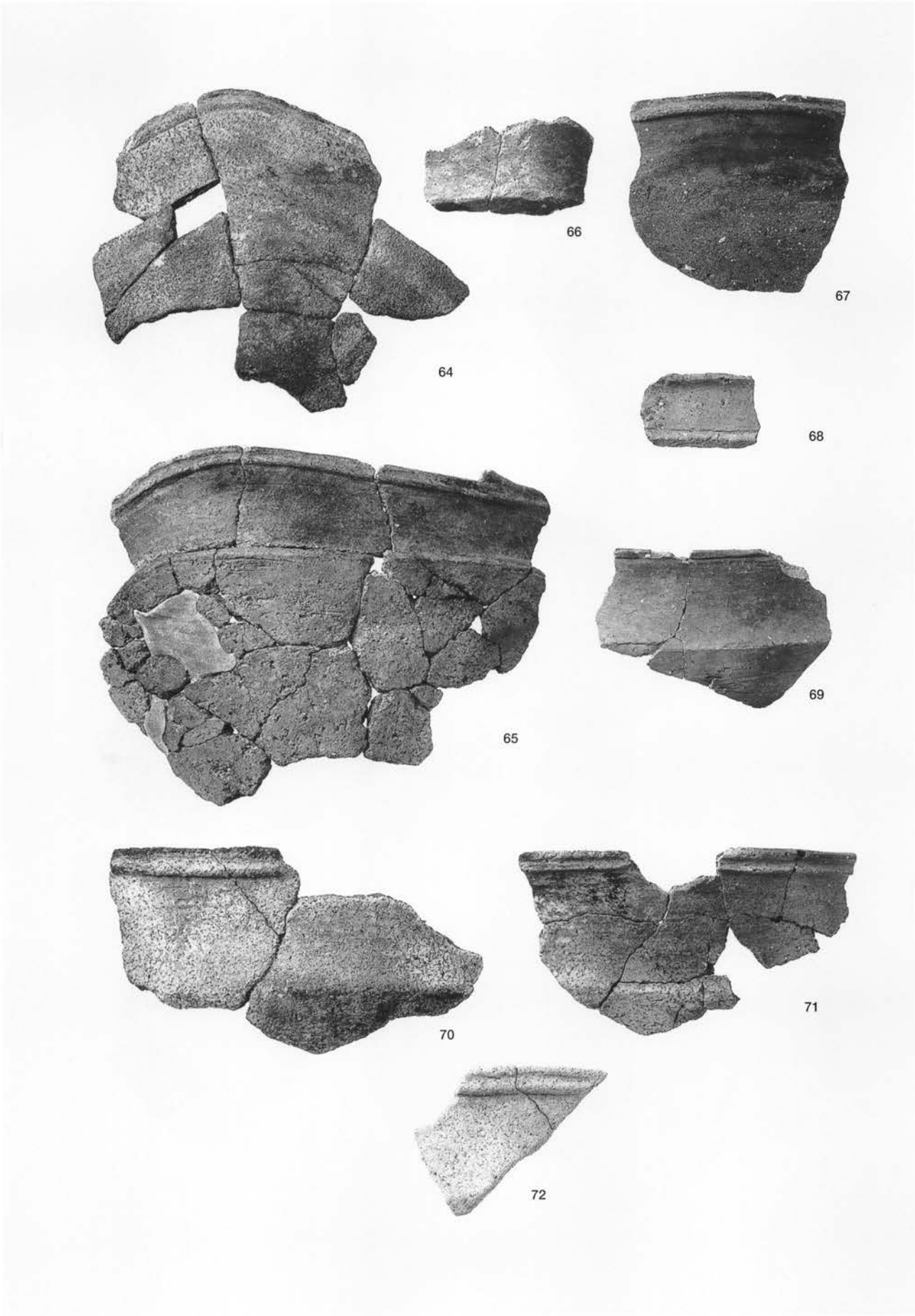
58

59

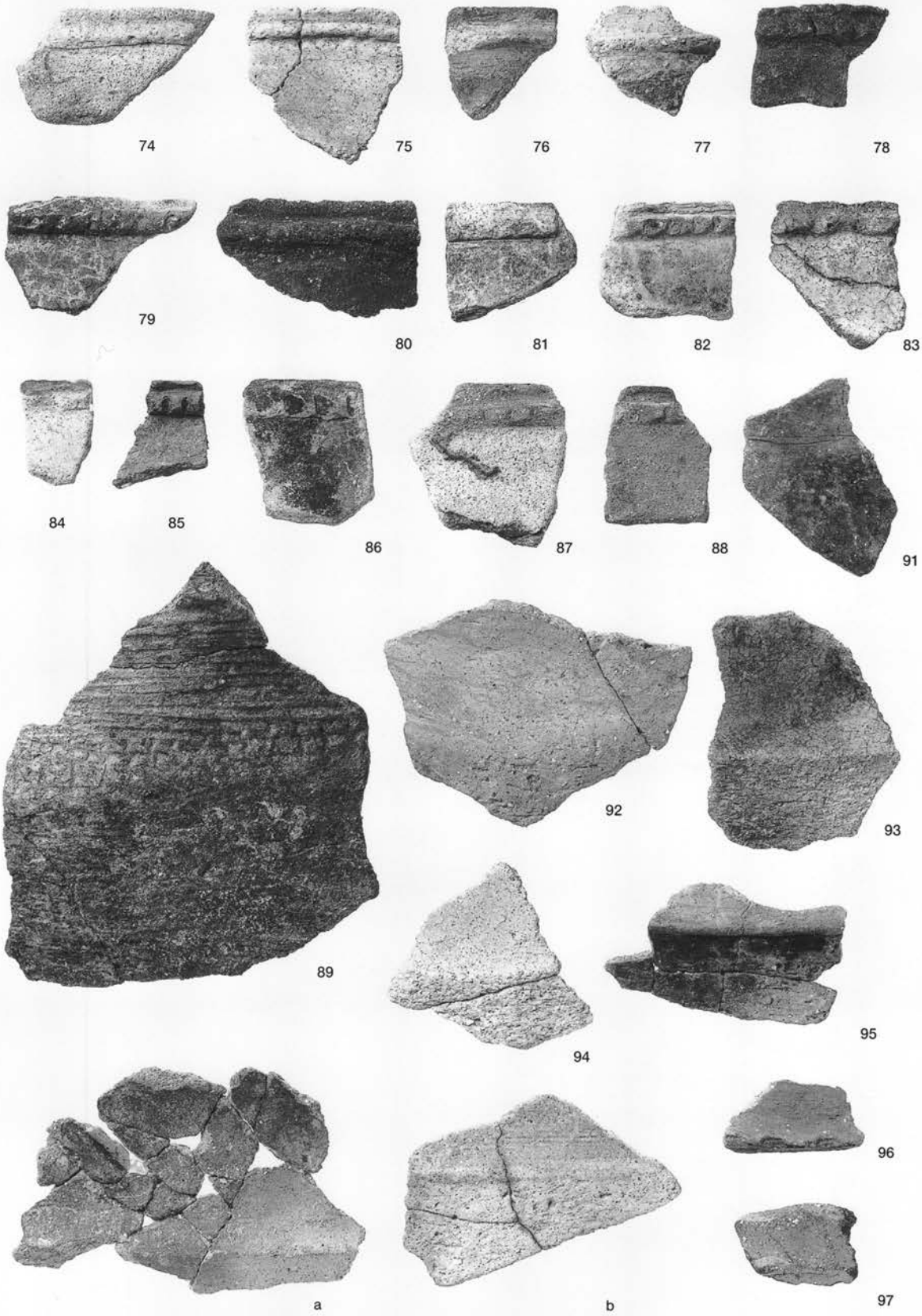
62


60

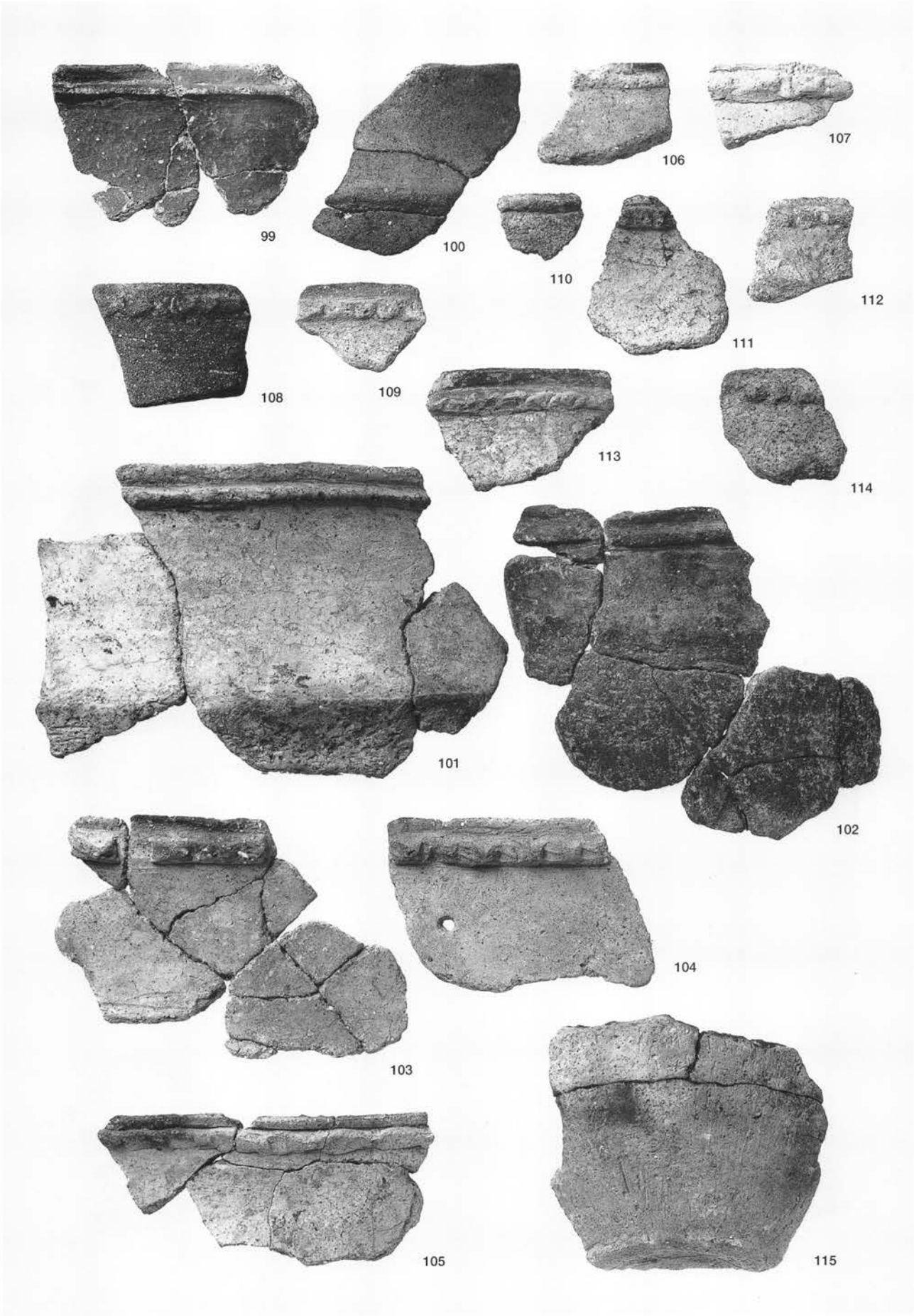
63




出土遺物(6)




出土遺物(7)


99
100
106
107
110
111
112
108
109
113
114
101
102
104
103
105
115

出土遺物(8)

119

132

133

137

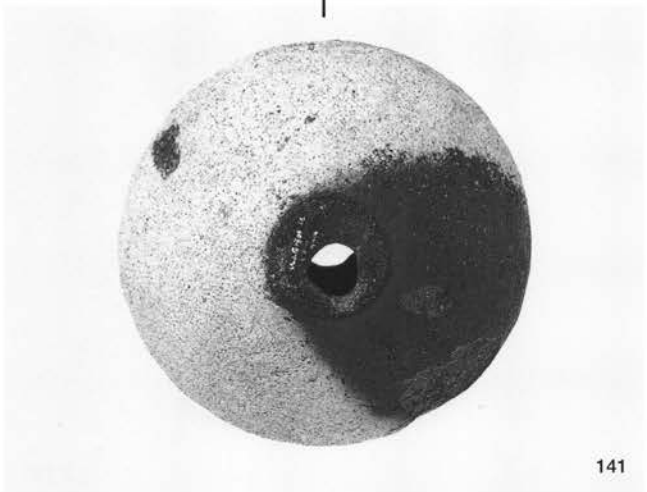
138

140

出土遺物(9)

151

142



141

156

153

158

155

159

157

161

出土遺物(11)

162

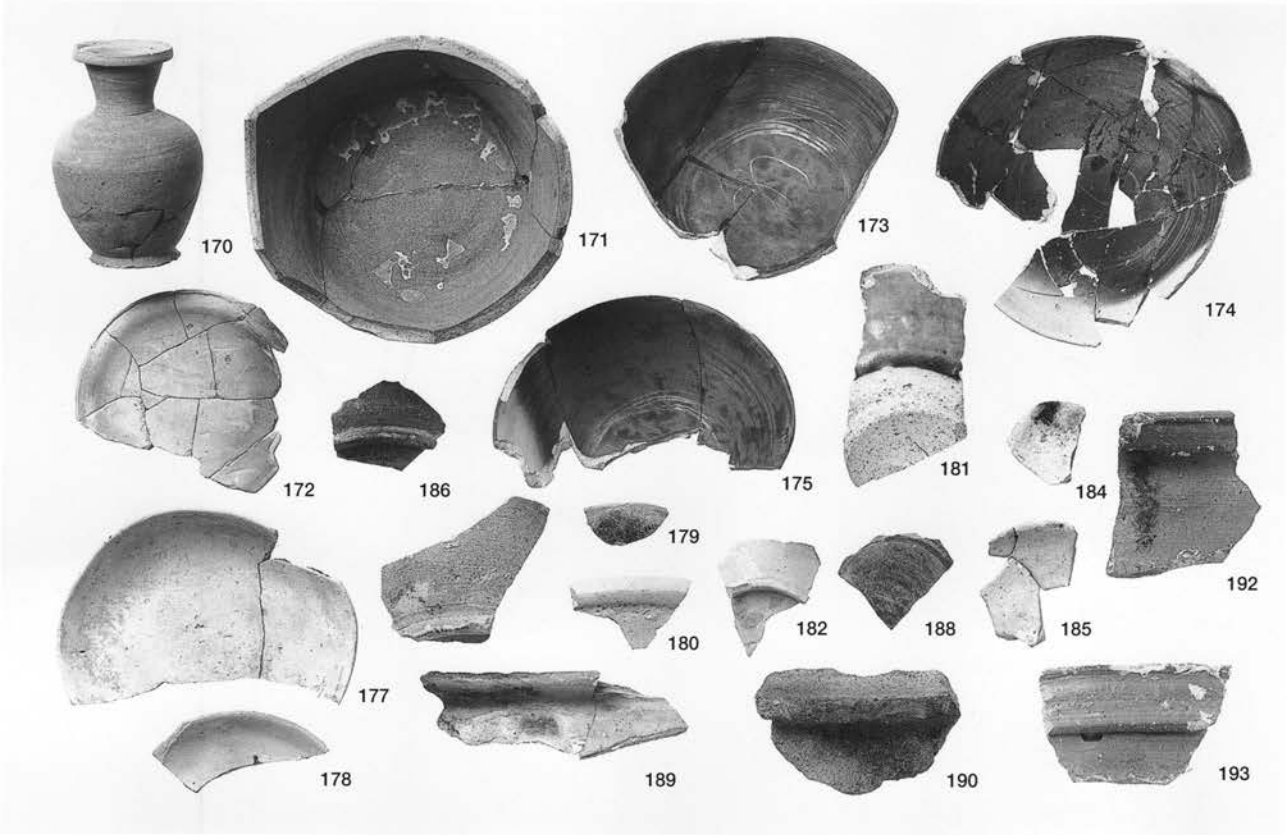
163

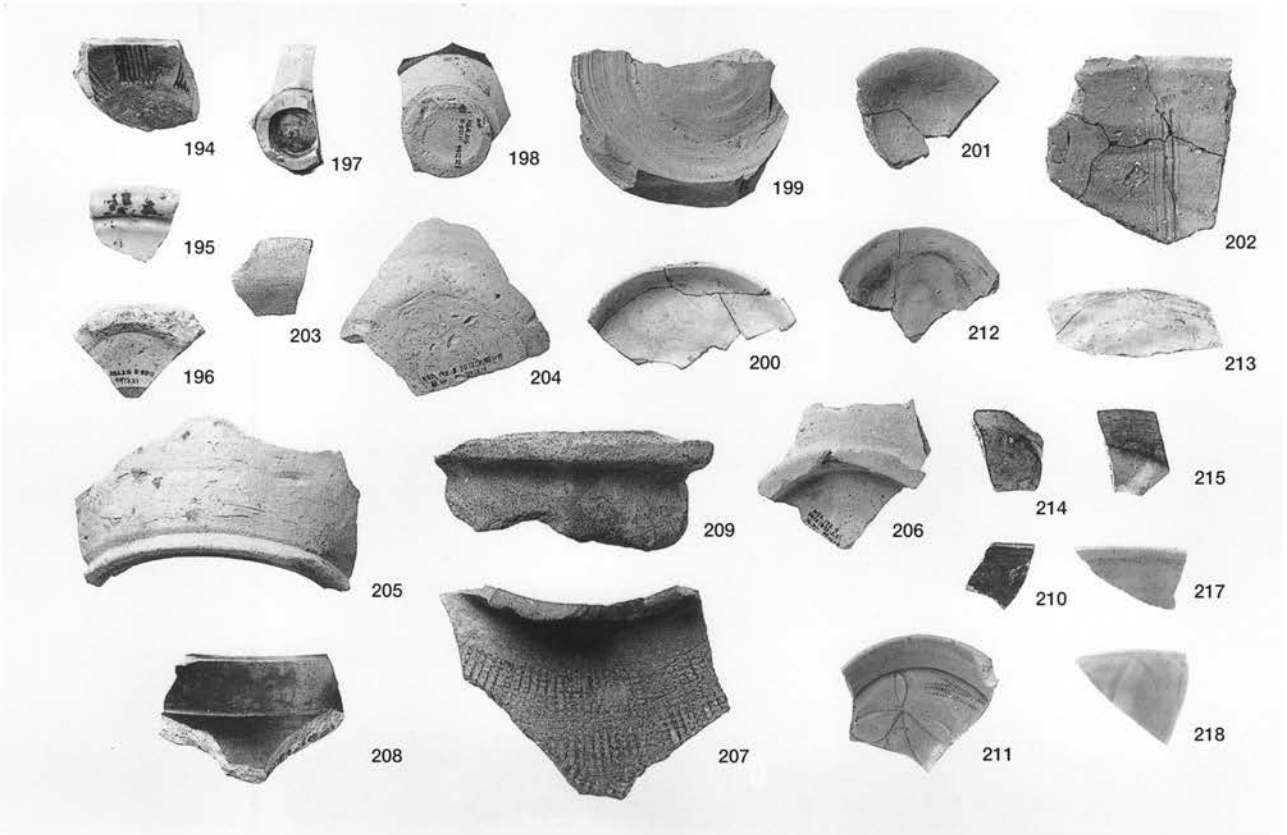
164

165

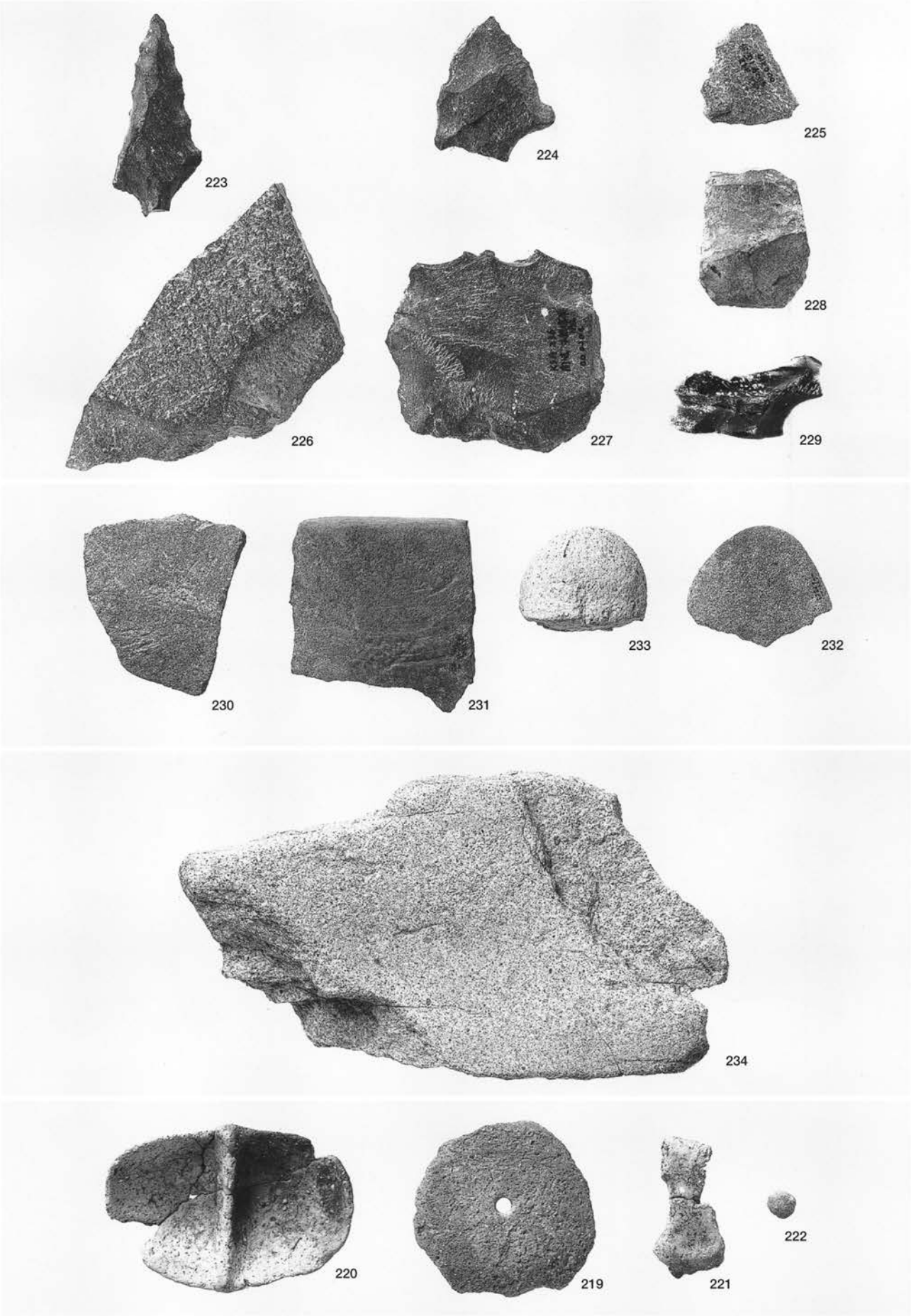
166

出土遺物(12)


170
171
173
174
172
186
175
181
184
179
192
177
180
182
188
185
178
189
190
193


194
197
198
199
201
202
195
203
204
200
212
213
196
205
209
206
214
215
210
217
208
207
211
218

出土遺物(13)




出土遺物(14)

報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | さやまあまがいといせき |
| 書　名 | 佐山尼垣外遺跡 |
| 副書名 | |
| 巻　次 | |
| シリーズ名 | 京都府遺跡調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第31冊 |
| 編著者名 | 辻本和美・竹原一彦・柴暁彦・中村周平 |
| 編集機関 | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター |
| 所在地 | 〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　Phone　075(933)3877 |
| 発行年月日 | 西暦　2001　年　12　月　26　日 |

| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | °′″ | °′″ | | m² | |
| さやまあまがいといせき<br>佐山尼垣外遺跡 | きょうとふくせぐんくみやまちょうさやまこあざあまがいと<br>京都府久世郡久御山町佐山小字尼垣外 | 26322 | | 34°52′26″ | 135°45′5″ | 19990621<br>～<br>20000303 | 5,000 | 道路建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 佐山尼垣外遺跡 | 集落・墓<br>条里 | 縄文晩期<br>弥生中・後期<br>平安・鎌倉・室町 | 溝<br>竪穴式住居跡・方形周溝墓・土坑・溝<br>溝・土坑・道路状遺構 | 縄文土器・土偶・土製品・石器<br>弥生土器・絵画土器<br>土師器・瓦器 | |


京都府遺跡調査報告書 第31冊

平成13年12月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　(株) 大 光 社
〒604-0086　京都市中京区小川通丸太町下ル中之町76
Phone (075)222-1333 (代)